修養全集
滑稽諧謔教訓集
6
大日本雄辯會講談社

安門福集

茹庵題

河鍋曉齋筆『一休和尚』

東京帝國大學文學部講師　藤懸靜也

初日うらゝかな元日の朝、『めでたい、めでたい』と初春を祝つてゐる京都の市中を、杖の先に髑髏を突きさして高く翳し、

元日は冥途の旅の一里塚

めでたくもあり目出度くもなし

と口ずさみつゝ歩いたのは一休禪師であつた。

一休和尚は後小松帝の御落胤と傳へられてゐるが、その行動は人の意表に出で、頗る奇行の多かつた僧であつた。京都紫野大德寺の住持で、文明十三年十一月二十一日、齡八十八で入寂した。

この繪の筆者河鍋曉齋は、俗稱は河鍋周三郎と云つたが、大酒家であつたので猩々曉齋とも云つた。下總國古河に生れ、歌川國芳の門に入り、また狩野洞白にも學んだ。極めて筆の達者な畫家で、縱橫無盡に揮毫する力量は、人々の驚嘆する所であつた。明治二十二年四月二十六日五十九歲で死んだが、明治の風俗畫家としては一異彩といふべきであつた。

曉齋もまた甚だ奇行に富んだ人物であつた。一休を寫すに曉齋の筆を以つてしたのは一種の皮肉とも見えるが、元旦に髑髏を持ち步いて人を驚かした一休の奇行は、曉齋が好題目として健筆を揮つた所以であらう。

一休にしても、また曉齋にしても、奇行の中に含蓄があつて、それが瓢逸ともとれれば敎訓ともとれる。否、滑稽諧謔と敎訓說示と渾然たる所に言ふに言はれぬ躍動感味がある。この人を描くにこの人を以つてしたのは、いかにもピッタリとしてゐる。

滑稽諧謔教訓集　目次

滑稽小説

喜劇・狂言

講談・落語

日記・道中記

小唄

隨筆

教訓漫畫

滑稽小說

小問題大問題

佐々木邦

津島君の子爵病は長いことだつた。一杯やると發作的に催す。遠く王政維新廢藩置縣の頃に遡つて、

「祖父がその時好機會を逸しなかつたら、僕も今頃は子爵の御前様で納まり返つてゐられるのになあ。」

と口惜しがるのを常とした。生れてもゐない昔のことを今更何と言つても仕方あるまいに、そこが酒の上だ。醉へば無暗に喧嘩を吹つかける奴さへあるのだから、五十年前の愚痴なら先づ好い酒癖の部類に屬する。

「又始まつたぜ」

と友達も安心して聞いてゐられる。

『危い〳〵』

と言つてビール壜を片付ける必要もない。

津島君の子爵病は家庭でも時々起つた。それも新婚當時は白面でゐて、

『お琴や、考へて見ると氣の毒だよ。巧く行つてゐればお前は子爵令嗣若夫人だつたのにね』

と眞向から細君に同情を寄せるのだつた。さうして嚴父逝去後は晩酌の折に觸れて、

『お祖父さんが、もう少し融通の利く人だつたら、お前も子爵夫人になつてゐるのになあ』

と當然襲爵の形で話した。

『あなたが華族さんなら、平民の私なんか迚もお嫁に來てゐませんわ』

と、もうその頃は若夫人も三十を越してゐた。

『成程。それも然うだな』

『オホヽ。感心してゐますのね？』

『して見ると華族でなくて宜かつたな』

と至極圓滿な家庭だつた。

しかし長い年月には多少險惡な雲行を見ないでもない。一兩年前に津島君は一寸した不機嫌に

委せて、

『あゝ、詰まらない〳〵。いつまでたつても平社員だ』

と歎息した。

『あなたは變な人ね。お酒を召上ると屹度不平を仰有るわ。平社員でも斯うして親子七人何不足なく暮して行ければ結構ぢやありませんか？』

と、細君は、十數年の同棲でもう疾うに對等の權利を獲得してゐるから、思つたことは何でも口に出す。時には意見めいたことまでも言ふ。

『公私ともに面白くなければ稀には不平も出ようさ』

『それでヤケ酒を召上りますの？　先づ公の方から承はりませう』

『十五年勤めて未だに平社員は腑甲斐ないぢやないか？　會社は人を遇する道を知らないから癪に障る』

『それはあなたが御無理ですわ。昇進には順番てものがございますからね。いくらあなたの腕が好くても、上の方が詰まつてゐれば仕方がないぢやありませんか？』

『それが待ち遠しいと言ふんだ』

『でも、皆さんの上る時には屹度上げて戴いてるんですもの、何にも不平を仰有ることはありませんわ』

『お前なんかに何が分るものか。公私ともに不平だ。祖父め、あの時ウンと首を縦に振つてゐてくれさへすれば、俺は少くとも子爵になつてゐらあ』

と津島君は持病を起した。

『オホヽ。又お株が始まり

ましたのね』

と、細君はもう耳朶が寄つてゐる。

『世が世なら、今頃は貴族院で幅を利かしてゐらあ』

『…………』

『それが何うだ？　出でては平社員、入つては……入つては……』

と津島君は對句に窮した。

『入つては何でございますの？』

『何でもない』

『何でもないことはありますまい。入つては同族からもつと器量の好い奥さんを迎へてゐるのにといふ意味でございませう？』

と細君は年甲斐もなく妙なところへ氣を廻した。

『然ゥまで具體的には考へてゐない』

『いけ圖々しいのね』

『氣に入らないかい？』

『公私〳〵つて、何のことかと思へば、人を馬鹿にしてゐるわ』

『世が世ならと言ふのさ。華族なら何うせ華族から貰ふから、お前よりも確かにもつと器量の好いのに有りついてゐる』

『然うでございませうとも』

『怒つたのかい？』

『いゝえ。世が世ならですもの』

『然う分つてくれゝば有難い』

『その代り、三人共始終一番で通すやうな子供は生れませんわ』

『それは然うだらう。實際の話、家の子供が皆揃つて成績の好いのはお前のお陰だよ』

『丁度三代目ですからね。あなたがお平の長芋で、奥さんも華族さんなら、低能兒が五人も出來てゐましたらうよ』

『手厳しいね』

『あなたこそ餘つ程手厳しいわ』

『何故？』

『でも、私が平民で不器量だから、成績の好い子供が生れたと仰有らないばかりぢやありませんか？』

『いや、然ういふ意味ぢやないよ。曲解しちや困る』

と津島君も無論それほどの料簡はなかつた。

『それぢや何ういふ意味でございますの？』

『子供の教育の爲めには矢つ張り中流の家庭が一番好いといふのさ』

『それなら、初めから文句はないぢやありませんか？』

『先づない。子爵はもう諦めて、早く課長になることを考へる』

『それが地道でございますよ』

と細君の方が餘程理性的だつた。津島君の子爵病は遺傳である。單獨に責任を負ふべき筋のものでない。嚴君も可なり顯著な症狀を示してゐた。

『○○伯爵や△△子爵は、その時縣令になつた連中ださうだよ。早く死んだ人は仕方がないが、大抵華族になつてゐる。親父も一諾次第で富貴榮達思ひのまゝだつたのに、惜しいことさ』

と友達を相手に時折氣焔を揚げたものだ。津島君は中學時代にそれを洩れ聞いて、未だ存命中

のお祖父さんに當つて見たことがある。すると老人も、

『今更仕方がないが、時々惜しかつたと思ふよ。合點首一つしてゐれば俺も今頃は津島子爵さ』

と來て、立派な忠者だつた。

王政維新後、津島君のお祖父さんは、藩公から或使命を受けて、東奔西走、席の溫まる暇もなかつた。その中薩長の有力者間に顏馴染が出來て、廢藩置縣になつた時、

『津島氏、貴公は縣令をやつて見る氣はないか？　今なら何うにでも計らう』

と材幹を認められた。

『やつても宜いが、今直ぐは困る。丁度藩公からのお召返しで一寸戻つて來なければならん』

『藩公は後廻しにして、一つ承知して置け。廢藩になつた上からは食ふことを先に考へても申譯が立つ。貴公は年輩だから好いところへ振り向けてやらう』

『いや、有難いが、然う現金に君命を餘所にする次第に參らん。出直して來てから改めて賴む』

と律義な津島氏は直ぐに中國筋の城下を指して發足した。

藩公お召しの御用向は何でもないことだつた。

『斯ういふ時世になつたからは今までの役目を解く。長々御苦勞だつたの』

との仰せ丈けだつたから、こんなお沙汰なら書面で間に合つたものをと重役を恨むけれども、今更喧嘩にもならない。津島氏は再び妻子に暇を告げて、

『今度は縣令になつて迎ひに來るぞ』

と勵ました。それから晝夜兼行、大急ぎで東京へ引き返して、

『漸く閑散の身柄になつて來た。ついては先頃の縣令の口をお頼み致す』

と大威張りで申入れた。

『津島氏、晩かつた。何分もう一月餘りもたつてゐるから、悉皆定つてしまつた』

といふ返答。

『當方の勝手で手間を取つたのだから、贅澤は申さん。縣令が滿員なら共宜く下役でも宜しい』

『下役も滿員だ』

『その又下役でも結構』

と津島氏はダン〳〵下げて行つたが、

『いや、眞にお氣の毒だが、役向は上から下までもう悉皆詰まつて、邏卒が殘つてゐるばかりだ。邏卒ぢや厭だらう？』

とあつた。

『さあ。少時考へさせて貰はう』

『邏卒も氣の長いことを言つてゐると滿員になる』

『それでは二三日の中に返辭をする』

と津島氏は落膽して引き取つた。

邏卒は當時の巡査である。縣知事から巡査とは餘り酷い落ちやうだから、津島氏も大分考へたが、背に腹は換へられない。結局、縣令を振り出しに子爵まで進む筈のところを、一番下の邏卒から身を起すことに肚を極めた。日暮れて道遠し、もう四十を越してゐた。舊知己も閥外のものを引き立てる餘地がな

く、身分が違へば此方も自然遠退いた。それで破格の拔擢もなく、漸く高等官の下つ端まで漕ぎつけたら、もう老朽になつてしまつた。思ひ出すと忌々しい。その怨念が息子に傳はり、孫の津島君に乘り移つて、今だに晩酌の都度祟りをするのである。

『計一や、人間の一生には一度や二度必ず大問題が起つて來る。その時巧く身を處せばドンドン出世する。やり損ねたが最後、もうナカ〳〵芽を吹かない』

と、老人はその折〳〵感想を洩らした。

『眞正に然うですね』

と津島君は眞白な鬚を見詰めたことを忘れない。

『一生の浮沈が定る。恐ろしいものだ。俺は大問題と小問題を取り違へてしまつた。廢藩になれば、國許へ歸ることなぞは小問題だ。縣令になつて國に仕へ家を興すのが大問題だつた。考へて見ると俺は殘念でならない』

『僕も殘念です。子爵は豪いものですね。學校にも子爵の子がゐますが、毎日馬に乘つて來ますよ』

『子爵になると豪く見えるのさ。人間に差異はない。運だよ。あんな詰らないことで、百何十里

のところを呼び戻した重役共も重役共だが、一刻を爭ふ時に、おいそれと言つて歸つて行つた俺も俺さ。壽一や、前車の覆るは後車の戒だ。お前にも將來必ず大問題が小問題の恰好をして來る。その時氣を落ちつけて能く見分けをつけることが肝心だよ。お祖父さんのやうにヘマな眞似をしないで巧くやつておくれ』

と老人は生きた教訓を與へた。

『必ず氣をつけて出世します』

と津島君は誓つた。

しかし老人が苦に病んだ縣令から邏卒へのガタ落ちも仔細に分析して見ると必ずしも全然的失敗でない。親としては子の出發點を少しでも容易にしてやれば、それで責任は果してゐる。生存競爭はリレーだ。一足飛びに子爵になつて妻子眷屬を決勝點まで連れ込んでしまふのは考へものである。登り詰めれば降りる外に道がない。津島氏は邏卒になつた爲め東京に定住して息子達を立派に教育することが出來た。長男、即ち津島君のお父さんは工學士で、或建築組の技師長を勤めた。建てた家は先頃の震災で大抵崩れてしまつたが、それでも華族の長男よりは遙かに多く社會に貢獻してゐる。叔父さん達も矢張り民間だが現に小成金が一人ある。津島君自身にしても、

大學を好い成績で卒業して、平社員ながらも前途を囑目されてゐる。然るに津島氏を呼び戻した舊藩の重役初め國元へ居殘つた連中は、その後士族の商法に手を出して身上を失したものが多い。子孫は大抵昔よりも成り下つてゐる。

さて、津島君はお祖父さんの教訓肝に銘じて、學校から社會へ出る早々、大問題の起るのを待ち始めたが、爾來十五年、未だ曾つて、

『津島君、君は一つ大役になつて見る氣はないか?』

と勸めてくれるものがない。然う一足飛びは無理だから、課長でも宜いと思つてゐるけれど、そのお鉢もナカ／＼廻つて來ない。有望がられる丈けに痺れを切らして、時々愚痴になる。その都度子爵病が頭を擡げる。

『四十にして惑はずといふから、可なり期待してゐたが、一向駄目なものだね』

と津島君は落膽した。

『地位にさへ目鼻がつけば、三十五でも惑はない。要するに人生は待遇の問題だよ』

と同僚は更に明快な解釋を下してゐた。

『然うさ。世が世なら初めから惑はない』

『この頃は飲まなくても出るね』
『それ丈切迫してゐるんだよ。子供がドン／＼大きくなる。始終追立てられるやうな心持だ』
と津島君は大問題の到來を待ち焦れてゐたが、年一年と平穩無事が續いた。
その中に長男が一高へ入つた。親としては無論滿足だつた。同僚達も、
『君は上が男だから樂みがある。僕のところは順々に呉れるんだから悲觀する』
『いや、男の子も津島君のところのやうなら安心だけれど、僕の家のやうぢや女の子の方がいくら增しだか知れない』
と羨んでくれた。これも異存なかつたが、長男が高等學校へ入るまでにはと、不惑この方密に第二期を劃してゐたものだから、
『一體何うしてくれるのだらうな？』
と又急に痺れが切れ始めた。
『君、この頃は滅多に不平も言へないぜ』
と入社以來机を並べてゐる同僚の曾谷君が注意してくれた。
『何故？』

『馘首があるつてことだ』

『それは聞かないでもないが、眞正か知ら？』

『眞正とも、確かな筋から出てゐる』

『あれば何時だらう？』

『斷にやると目立つから、何時つてことはない。ポツリ／＼ださうだ』

『厭だね。散々待つた上に馘首ぢや溜らない』

と津島君は氣味が惡くなつた。

重役室の給仕が脊谷君を呼びに來たのは、それから半月ばかり後のことだつた。

『專務さんが一寸お出下さいと仰有います』

『うむ？　僕かい？』

と脊谷君は意外の面持ちで確めた。平社員は重役室から一寸と來ると誰しも恐れを爲す。狂言にもある通り、汝を呼び出す餘の儀でない。香しくない事に相場が定つてゐる。精々上等のところで何か小面倒な調査を明日の今頃までになぞと言つて仰せつけられる。然もなければお小言だ。罷り間違へば一番いけないことかも知れない。昇給は庶務課から辭令を交附される丈けで專

務の手を煩はさない。曾谷君が手間を取るにつれて、親友の津島君は不安になつた。三十分ばかりして歸つて來た時、突然、

『何うだつたい？』

と訊いて見た。

『長々お世話になりましたが……』

『馬鹿を言ふなよ』

『いや、イヨ／＼今度は……』

『眞正かい？』

『冗談だよ。君、實は芽を吹いた。後から話す』

と、曾谷君は周圍を憚るやうに囁いた。

『津島さん、專務さんが一寸お出下さ

いと仰有います』

と又重役室の給仕が現れた。津島君は曾谷君と顔を見合せた。

『悪いことぢやないよ』

と曾谷君は給仕を見送りながら保證した。

例によつて葉卷を銜へて鬼瓦の從弟の樣な顔をしてゐた老專務は、津島君のお辭儀に對して、

『さあ』

と椅子を指さした。

『はあ』

と津島君は腰を下して樣子を伺つた。

『一つ君に考へて貰ひたいのだが……』

とまで言つて、專務は噎せ返つた。ゴホン〳〵と苦しさうに咳き込む。喘息が持病なのに葉卷を放さない。津島君は吉か凶か未だ分らなかつた。

『……長崎の支店が明くが、君は九州くんだりまで行く氣があるかね？ 厭なら、庶務課の方へ廻つて貰つても宜い。何方にしても後半期からのことだが、豫め意向を伺つて置きたい』

『はあ』
と首丈けは心配無用になつた。
『つまり支店次席と本店の課長さ。君には長いこと辛抱して貰つた』
とその次が誂へ向きだつた。
『いや、何う致しまして』
と津島君は輕くお辭儀をした。イヨ〳〵時節到來、大問題に繞り合つた。
『家庭の都合もあるだらうから、即答には及ばない。明日まで考へて見てくれ給へ』
と專務は氣短かで、何でも明日までだ。津島君はもう少し詳しく說明して貰ひたかつたが、相手がそれきり默つてしまつたから取りつく島もない。
『種々と御配慮有難うございます。それでは明日、いや、明日は日曜ですから、明後日御返辭申上げます』
と答へて退出した。
『早かつたね。何うだい？』
と曾谷君が待つてゐた。

『長々お世話になりましたが……』
『人の眞似をしても駄目だよ。顔の筋肉が悉皆緩んでゐる』
『矢つ張り分るかい？』
と津島君は相好を崩した。
『兎に角宜かつたね』
と二人は二十年近く待つた甲斐があつた。
その夕刻、津島君は、
『お琴や、イヨ／＼大問題が起つたよ』
と玄關で靴を脱ぎながらもう報告に及んだ。
『厭でございますよ。俸給でも落して來たんぢやなくて？』
と細君はもう悉皆見括つてゐる。折から俸給日で特に出迎へたのだつた。
『冗談ぢやないよ。眞正の大問題だ』
『あなたの大問題は二三日たつと皆小問題になるから安心ですわ』
『いや、お祖父さんで懲りてゐるから、大切を取つて何でも一應大問題と見做すことにしてゐる

が、今度といふ今度は初めから大問題だよ』

と津島君は專務から申渡された通りを傳へて、二三註解を加へた。

『嬉しうございますわ。眞正に大問題ね。次席なら、今度は支店長に決つてゐますわ』

と細君もイソ〳〵した。一流會社の支店長は二流會社の重役に當る。

『出世の道が開けたといふものさ。支店長になつてゐれば重役のお鉢が廻つて來ないとも限らない』

『子爵より宜うございませう？』

『子爵は唯でなれてゐるんだから矢つ張り惜しいよ』

『いつまでも諦めの惡い人ね』

『冗談は兎に角、長崎は遠いぜ』

『江戸長崎といつて、日本の果でございますからね』

『東京よりも上海へ近いさうだから考へさせられるよ』

と津島君は迷つてゐる。

『せめて神戸ぐらゐならばね』

『神戸へは竹谷君が廻される』
「まあ。矢つ張り次席ですの』
『然うさ。近い代りに選擇の餘地なしだ。あの方が考へる世話がなくて宜い』
『あなた、課長からは支店長になれませんこと？』
と、細君は今まで課長が目標だつたが、もう慾張り始めた。
『なれるさ。課長と支店の次席は丁度同じやうな格式だ』
『それぢや課長が宜いわ』
『しかし支店次席も惡くない。本店で定り切つた仕事をしてゐるよりも支店の方が認められ易い。課長で終るものはあるが、支店次席でお仕舞ひになるものはない』
『それぢや支店次席が宜いわ』
『しかし子供の教育つてことがある。清も一高へ入つたし、滋も再來年だらう？　長崎には高等學校がないから、皆離れ〴〵になつてしまふ。これからが大切の時だからね』
『何年ぐらゐで歸つて來られますの？』
『支店廻りを始めたら一生さ。重役にでもなれば兎に角、まさか平社員で歸つて來られまい』

と津島君はもう平社員を見限つたやうな口調だつた。

『女の子達は皆田舍の女學校を卒業するんでございますわね？』

『然うさ。縁談も田舍だ』

『あなた。矢つ張り課長の方が宜うございますわ』

と細君は定見がない。

『まあ〳〵今夜ゆつくり相談しよう。何方か選べと言ふのだから意味があるに相違な

い。氣を落ちつけて能く見分けろつてのはこゝだよ。お祖父さんのやうに取り逃しちや大變だ』

『お父さん、イヨ〳〵大問題ですか？』

と、この時長男が勉強部屋から出て來た。もう丁年に近いから、一端相談相手になる。

津島君は一晩考へて課長の方に傾いた。翌日曾谷君がやつて來て、

『僕が君なら些つとも迷はないよ。子供の教育の爲め當然東京に踏み止まる』

と言つて庶務課長を羨ましがつた。

『僕も略その方針だが、斯ういふ大問題は、將棋の手見たいに、先の先まで考へて置く必要があるからね』

『いや、平社員は兎に角、水平線から上は機會均等で、唯壽命の問題だよ』

『壽命の問題とは？』

『長生さへすれば重役になれる。西さんでも神林さんでも見給へ、老いて益々盛んな丈けで、他に何の取柄もありやしない』

『それは然うだね』

『然しそこが矢張賢いんだ。六十を越して若い者と同じに働けて而も會社の仕事を一から十迄知

つてゐるつて人は他にないからね。つまり生存競爭の勇者さ。お互もこれからは健康第一だよ』
『大いに自愛して長生を心掛けるかな』
『水準以上に出れば、特別のヘマをやらない限り壽命が問題を解決してくれる。何處にゐたつて同じことさ』
『君の說に從つて踏み留まらう』
『當り前さ。僕のやうに頭から命じられたのとは違ふ』
『昨日から隨分迷つたが、もう動かないぞ』
と津島君は決心がついた。

爾來十年、津島君はもう津島さんだ。君呼ばりをするものは社長以外に二三人しかゐない。庶務課長から支店長を經過する面倒もなく、そのまゝジリ〳〵と根を張つて、今は押しも押されもせず、平重役の班に列してゐる。妙に廻り合せ好く、上役が逐年パタリ〳〵殪れたので後の出世が速かつた。曾谷君の理論が實現した次第だけれど、本人は死んでしまつたから何にもならない。津島さん獨り巧いことをした。家庭に於ても男の子が三人とも大學を卒業し、女の子も一人片付いて、もう一人は目下緣談中である。出でては平なりと雖も重役、乘るに自動車あり、入つては

細君の丸髷が小さくなつた代りに家屋敷が大きくなつて子孫繁昌和氣靄々、子爵病も疾うの昔に忘れてしまつた。一杯やつても晏如として、決して愚痴を零さないのみならず、

『諸君に處世の秘訣を傳授しようか？　それは不平を言はないことである。不滿足といふ怪物はこれを口から外へ出すと自他ともに不愉快を感ずる。然るに胸中に監禁して置くと自然の裡に消滅する。瓦斯のやうなものさ』

と後輩を諭す。

『何うも世間一般が神經過敏になつて來たやうだね。此頃の若い連中は餘り眞劍過ぎはしなからうか？　我輩の見る處をもつてすれば、近代人の煩悶は小問題を大問題と取違へることにある』

なぞと言つて納まり返つてゐる。津島さんが會社の倶樂部へ姿を現すと後進が彼方此方から寄り群る。頗る人氣が好い。衣食足つて大悟一番してゐるから、片言隻句眞に能く凡俗に通じる。

尙この重役の訓話と、社長の義太夫を聽くものは、昇給が早いことになつてゐる。

『何うなつたね？　この間の人生問題の續きは。未だ煩悶が殘つてゐるなら、及ばずながら相談に與からうか？』

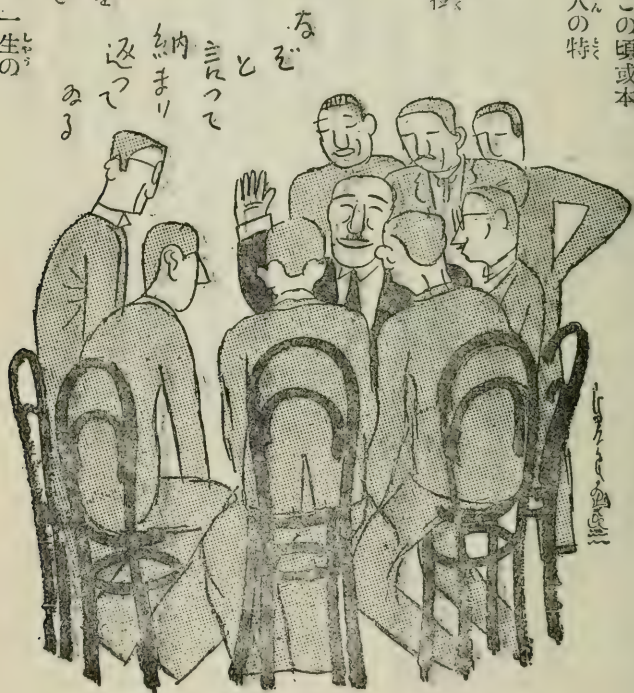
と津島さんは必ず誰か捉へる。

『煩悶は到底免れませんな。この頃或本を讀みましたら、煩悶は近代人の特權なりと書いてありました』

『要するに煩悶だらけです』

なぞと答へても、そこは重役の前だ。俸給が少くて煩悶すると具體的に言ひ切るものはないから始末が好い。

『不平煩悶、時を距てゝ顧れば皆一場の夢さ。後から虚心坦懐に考へると皆取るに足らない小問題だよ。それを君達は一々大問題と思ひ込んでヤキモキするから苦しくなる。一生の

なぞと言って納まり返ってゐる

大計に關係するやうな大問題は滅多に起りやせん』
『しかし當座は誰しも然う思ひません。私は昨日齒醫者へ行きましたが、矢つ張り痛かつたですよ。重役の御教訓を應用して小問題だ小問題だと思つてゐましたが、涙がボロ〳〵零れました』
『しかしこれから十年もたつて見給へ。何故あんなことが痛かつたらうかと不思議になるよ』
『十年後まで身に沁みるやうぢや敵ひません。高が齒一本ですもの』
『その齒一本さ。齒一本と眞正に悟れば、虛心坦懷光風霽月、拔いて貰ひながら所得稅の申告も書ける。そこまで行かなければ駄目だよ』
と、津島さんは他のことだと思つて、隨分無理な註文をする。
『理想は確かにそこでせうが、現實は明日も行かなけりやならないので今から苦にしてゐます』
『子供のやうだね。何うも我々は苦痛を想像力で擴大する傾向がある。然う〳〵、我輩はこの間寢てゐて不圖子供の時のことを思ひ出したよ。散髮に行くのが苦になつたことさ。その頃は未だバリカンてものがなかつた。今考へて見ると、絲切り鋏でチョキ〳〵やつたんだね』
『一體いつ頃ですか？』
『明治十四五年頃だつたらう。道具が惡い上に下手と來てゐるから、チクリ〳〵と痛いの長いの

つて、一種の難行苦行だつたね。これから何年生きてるのか知らないが、毎月一度づつこんな目に遇ふんぢや遣り切れないと子供心にも考へたよ』

『僕はバリカンでも厭でした』

と、切れ目〳〵に必ず然るべく相槌を打つものがある。

『然うだらう。ところが昨今は何うだね？　散髪に行つて綺麗になつて來るのが樂しみぢやないか？　我輩は老人だから諦めてゐるが、諸君は勵みがある。散髪屋へ行つた翌晩あたりはカツフエで持てるだらう？　少くとも確信があらあね』

と津島さんは穿つたことを言ふ。皆笑はざるを得ない。

『重役の處世訓は確かに御體驗から來てゐますな？』

『我輩の時代にはカツフエなんかなかつたよ。しかし矢場があつた』

『いや、眞面目な話ですよ。私は重役の處世訓を自分の經驗に照し合せて見て、思ひ半ばに過ぐるものがありました』

なぞと申出る特志家があれば、話は益〻はずむ。

『これは有難い。何ういふ工合だね？』

『この會社へ入る時のことですが、人物試驗を受けてから採用發表までの心配つたらありません。迚も駄目だと思つたです。ところが入つてしまふと斯うなるのが當然のやうで、何故あんなに煩悶したのか、自分ながら可笑しくなります。あの一週間は神社佛閣の前を通ると、必ずお辭儀をしたものです』

『萬事然うさ。要するに成る樣にしか成らないんだから、成功失敗とも後から顧みると、煩悶丈け正に持ち出しになつてゐる。それだから人事を盡して天意を俟つんだね。長い一生だもの、足搔かなくても何うにか斯うにか心掛けてゐる通になる。萬事會社に委せて勉強するさ』

と、大抵石の上にも三年へ落ちつくが、實は津島さんのやうな、都合好く先輩に死んで貰へた人は珍しい。

土曜の晩は倶樂部が賑ふ。

娛樂を通じて相互の親睦を計る樣にと申渡されてゐるから、新しい社員は、其當座勤務の一端と思つて詰掛る。

年寄株は碁將棋、若い連中は玉突と大體定つてゐる。

『おい〳〵、津島さんの戀愛談があるから來給へ』

と玉突臺のところへ態々注進に來たものがあつた。

部屋の一隅では津島さんが、

『その娘さんと我輩が互に憎からず思ひ初めたのさ』

と、二三人を相手にもう本論へ入つてゐた。

『大切のところですから、もつと詳しく願へませんかな？』

と進行係は惜しがつた。

『隣り同志だらう？　まあ〳〵、その邊は曖昧にぼかして結果丈け話さう。年甲斐もないなんて非打連中から苦情が出ると困る。此方は未だ大學へ入

つたばかり、先方はもう女學校を出てゐるんだから、何分年齢が近過ぎる。そこらの碁打のやうに、待つてくれと言ひ惡い。先方もその邊を考へたのか、間もなく餘所へ嫁に行つてしまつた」

『失戀ですな』

『悲觀したね。世の中が暗くなつたよ。實に一生の大問題だと思つた。ところが今考へて見ると、その娘は肺病だつたんだね。片付いて一年とたゝない中に血を吐いて死んでしまつた』

『ブロークン・ハートぢやなかつたですか？』

『そこは分らん。しかし隣りの奥さんが我輩に娘の死亡を傳へて、涙をポロ〳〵零したところから察すると、多少そんな傾向があつたのかも知れない。我輩も元來木石ぢやない。漫に哀れを催して、或日曜に墓詣りをする積りで出掛けた』

『小説ですな』

『ところが雨が降つて來た』

『それから何うなさいました？』

『やめたさ』

『不人情ですな』

『仕方がない。さて、我輩がこの娘さんと結婚してゐたら何うだつたらう？ それこそ大問題だ。一生不幸になつてゐるに相違ない。不幸と思つたことが却つて幸福になることもあれば、幸福と思ふことが却つて不幸になることもある。つまり現在のことは過去になつて見ないと内容の價値が分らない。そこで餘り重きを置くのは考へものだといふのさ。若し我輩の理性が弱かつたら、その娘さんの結婚の爲めに自暴自棄に陷つて、或は自殺をしてゐたかも知れない。ところが健康からいふと、その娘さんは貰つても仕方のない廢物と來てゐる。實に危い話さ』

『重役、近代人はそんな打算的な戀愛はしませんぜ』

『矢つ張り死ぬかね？』

『死なないまでも、雨が降つて來たから墓詣りを見合せるなんてことはありません。それでは戀愛でなくて商取引です』

『大分評判が惡いぞ。矢つ張り時代が違ふかな。ハッハヽヽ』

と津島さんは若いものと能く打ち解ける。何處までも後進誘導役だ。

社長も社員の訓育を一に津島さんに委せてゐる。

新採用の社員は、出勤の第一日に、先づ社長から形式的の訓辭を受ける。

それに續いて、津島重役が約二時間に亙つて長廣舌を振ふ。これが近頃年中行事になつてしまつた。

折しも學校卒業期に際し、帝大慶大を初め、專門學校、甲種商業學校の卒業生が、四十何名か採用試驗に合格して、明日からイヨ〳〵社員としての勤務を始める。

新入社員諸君は、午前九時階上會議室に集合せられたし

入社式順序

訓　辭　　小山社長

講演『小問題大問題』　津島重役

といふ掲示が玄關に出てゐる。（挿繪――田中比左良）

泥君の贈物

岡村保範

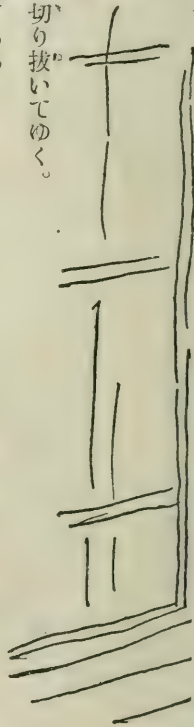
師走の夜も深く、外を吹く風の音を聞き乍ら、青木家の主人清左衛門は、床の中へ入つても寢もやらず、ぼんやり何か考へてゐた。もう正月までは幾らもない或夜のことである。コト、コト、コト、緣側を隔てた板戸に何か當る音がする。

『また鼠の奴が暴れ居るわい。子供の奴が何かこぼしてでもおいたかな。五月蠅い奴ぢや』

清左衛門はさう思ひ乍ら、何時も喧しい鼠にしては、今夜などは大人しい方だなどと、眼を細くしかかると、コト、コト、コト、ガリ、ガリと愈々音ははげしくなる。どうも氣になつて寢られない。彼は遂々起き上つて、そつと雨戸の方をすかして見た。と、雨戸の向ふから、何か黑い小さなものが動いてゐる。『おやつ』と思つて見てゐると、その黑いものに音を立て始めた。

ゴリゴリ、ゴリ、これは、てつきり向ふに人が居て、小さな鋸か何かで、薄い板戸を切り始めてゐるのだ。

他でもない泥君に異ひない、と思つた彼は、半ば好奇心で、じつと見守つてゐた。成程、向ふ側の作業の主は板戸を丸く切抜いて

そこから手を突込んで、
すぐ側の錠前を外す魂膽
らしい。薄氣味惡い小さな
鋸は、手際よくその板戸を切り拔いてゆく。
『畜生、今にどうするか見てゐろ』
彼は可笑さをしのんで、片唾を呑んで見てゐる。果して、切拔かれた丸い板がポロリと落ちると、黑い大きな手が、ぬつと、丸い闇の中から現れた。
『フフヽヽ、仲々眞劍にやりをるわい』
見てゐた清左衞門は、その大きな手が、錠前の金具を今將に、摑まうとする瞬間、矢庭に、
『こらつ、不屆者め！』
と叫ぶと同時に、その大きな手を、むんずとばかり摑んでしまつた。顏は見えぬが、泥君の仰天さ加減は想像に餘りある。大きな手は拔かうとして一生懸命にもがく。
『フフヽヽ。馬鹿な奴だ。今、出刄で、こらしめの爲此手を切りとつてやるから、さう思へ』
彼は、さう云ふと家の中に向つて叫んだ。

『おい。泥棒だ、泥棒だ、早く出刃を持つて來い。今此奴の手を切りとつてやる』
さう叫んでおいて、驚いて飛んで來た家人に、彼はそつと何事かを耳打ちした。聲を出しては分ると思つたものか、大きな手は必死にもがく。
『いくらもがいても、かうなつたら、もう駄目だぞ、そら、出刃を持つて來た。片腕だけは貰つたぞ！　觀念しろ!!　えいつ』
家人の手から彼が何を受け取つたか知らないが、此懸け聲諸共、スパリと手が落ちる代りに、おゝ、其大きな手には、一圓札が二枚握らせられた。と同時に摑まれてゐた手は放されて、大きな手は戸の向ふに引込んだ。
これで萬事は終りである。其時清左衛門の顏には快い微笑みが浮んでゐた。——
それから二三日經つてからのことである。麗かな朝日は清左衛門の庭を照して、何の變りもなかつたが、用あつて下婢が物置へ入ると、これは天から降つたか、地から湧いたか、暮れには相應しい鹽鮭が三本、梁からぶら下つてゐる。おゝ、誰からの贈物、清左衛門はそれを見た時、ハタと美しい靈感に打たれずには居られなかつた。
その贈り者の主こそ、彼の梁上の君子其人に違ひない。（挿繪——代田收一）

兄の口髭

佐々木味津三

次兄の錬太郎が、家族に内證で髭を蓄へ出したのはつい最近のことである。最近といつても、かれこれもう十日ぐらゐになるが、しかし蓄髭したからと言つて、特別それに深い理由があるわけではなかつた。強ひていへば、彼も愈〻今度は法學士になつたので、唯なんとなく口髭がほしかつたまでのことである。尤も、長兄の陽太郎も、法科を出ると、免狀をうけ取つたその夕方から今の髭を蓄へ出したことは蓄へ出したが、しかし、甚だ不幸なことには、彼の方が、より父系の影響をうけたとみえて、長兄よりは品質が少し下等で、いく分赤毛があつた。それはまだ我慢が出來たが、彼に一ばん悲しいことは、亡くなつた父親そつくりの中割髭で、眞ん中に少しみぞがあることである。

家人に内證で蓄へ出したといふのも、實はその中みぞが原因であつたが、實際眞ん中にみぞが

あつて、赤毛交じりの生えかゝりとなると、自分ながらどうしても法學士といふ威厳はみえなかつた。

で、いろいろと智恵を絞つた結果、一人前に生え揃ふまで、當分マスクをかけてゐようといふことに氣がついた。それも、家にゐる時までマスクをかけつぱなしでは怪しまれることも多いと同時に、露見の率も多いと考へたので、ちやうど就職口の問題があつたのを幸ひ、かまへて外出の口實をつくつて、なるべく家にゐないやうな方法をとつた。外出さへしてゐれば、安心しながらマスクがかけてゐられるからである。

が、さういふことがいつまでも露見しないでゐられる筈はなかつた。妹の久美子がまづ眞先に不審を持つた。久美子は、彼と同じく、ことしの四月にやつと双葉を出たばかりの妹である。尤も、彼等兄妹には珍らしい標緻よしであるが、そのためかどうか不思議に申込が多くて、まだやつと十八ではあつたが、この月末には縁づく豫定であつた。とかく年頃の妹などは、要らないとこへ氣のつきやすいものであるが、久美子がやつぱりそれである。

多分大丈夫と思ひながら、なるべく自然をよそほつてかへつて來ると、

『あら！　どこに流感がはやつてゐるの？』

ちよろちよろと毛絲みたいで
そりや滑稽よ
……

いきなり彼女は流感といつた。

『誰か風邪が流行つてるとでも言つたのかい？』

『だつて、もうセルでさへ暑いのに、ちひ兄さんは、マスクなんぞやつてらつしやるんぢやないの…………』

『女は默れ！』

仕方がないので、鐐太郎は『女は默れ！』と言つた。これは、鐐太郎が、高等學校以來常用の奥の手である。女のきやうだいと爭つて、兎角形勢非なりとみると、いつも彼はその奥の手を出すのがくせだつた。

『折角親切にきいたげたのに、ぢやもういゝわ！　ちひ兄さんなんかと金輪際話しないから…………』

その場はそれでごまかし得たが、それが、しかし結局は鐐太郎の失敗だつた。あまりに彼の狼狽が目に立ちすぎたので、却つて久美子の疑ひを深めたのである。

そのため久美子は、あくる日から、彼がうちにゐると不思議にあとをつけて、ことにマスクから目をはなさなかつた。彼も無論注意を拂つて、めつたにすきは見せないでゐた。が、しかした

つた一つ困つた場合があつた。食事をしたためる時である。まさかに食事中までマスクを用ひてもゐられなかつた。
　で、それをふせぐために、なるべく鐐太郎は家人たちと別々に單獨で食卓につく方法をとつてゐたが、しかしその翌々日のお夕飯の時であつた。もう家人はみんな濟んだらうと思つて、つい氣をゆるしながらひとりで彼が食卓についてゐると、そこへ突然妹の久美子がひよつくりと入つて來たのである。しかも意地わるく彼のまん前の席についた。しまつた、と思つたがもうおそかつた。
『あら！』
　言ふと一緒に、ぷう、とやつて、久美子は袖でこみあげる笑をおしかくしながら、いきなり、ばたばたとかけ出した。
　そして、すぐ茶の間へとんでゆくと、
『ね、お母さん！　ね、お母さん！』
　聞えよがしに、わざと大聲で報告し出したのである。
『馬鹿！　女は默れ！』

襖ごしに例の奧の手を出してはみたが、しかし久美子はすでにもう奔馬の勢ひだつた。
『ね、ね、ちひ兄さんのマスクやつと原因がわかつたのよ！　どうも、こなひだから、をかしいをかしいと思つてたら、ちひ兄さんおひげを立ててらつしやるのよ！』
『まあさう！　どんなおひげ？』
それをまた、母が老人のたしなみもなく、『どんなおひげ』と言つた。
『ね、ちよろちよろつと毛絲みたいで、そりや滑稽なのよ！』
だから彼女も調子に乘つて、勢ひそんな扮飾までしなければならなかつたのである。そればかりなら無事であつたが、運のわるいといふものは仕方がなかつた。そこへひよつくり、長兄がお役所から歸つて來て、すばやくその會話をきいたとみえて、
『なに？　錬君お髭をはやしたつて？　そいつあ近頃めつけものだ。早速おひげ拜見とまかり出よう！』
言ひながら、どんどんとこちらへやつて來る氣配だつた。
無論、彼はまだ食事半ばであつたが、それをきいては、もう一刻も猶豫出來なかつた。うろたへながらマスクをかけると、なに喰はぬ顏で口をぬぐつた。

いさぎよく
そのひげを
そり落した。
……

『どれどれ、どんな生え工合だい？』

そこへ長兄が顔を見せた。それをまたおせつかひに久美子が横から口を出した。――

『ね、ね、あの烏天狗の下が怪しいのよ！』

『烏天狗？』

『マスクのことよ！』

『成程ね、マスクとは苦心したもんだな。この塩梅ぢや、餘程のびが悪かりさうだね……』

『え、さうよ！　ちひ兄さんもう十日も前からマスクやつてらつしやるのに、いまだにちよろちよろつと毛絲みたいよ！』

『よしツ。毛絲毛絲つてそんなに言ふならみせてやらあ！　さあみろ！　よつくみろ！』

と言ふと、彼はへんにむきになつて、いきなりマスクをかなぐりすてると、ぐいつと久美子をひきよせながら、矢庭に、その鼻の先へ顔ごと髭をつき出した。

『あら！　ね、お母さん！　早く早く！』

久美子は處女そのもののやうに、今を盛りと熟れきつた肉體をけんめいにおがきながら、くつくと腹をよつた。

『どれどれ……』
そこへ母も顔をみせた。が彼はもう慌てなかつた。みんなにかく露見した以上慌てても仕方がなかつた。
『あんたの家庭教育がわるいから、こんな妹が出來るんです』
わけもなく八つ當りながら、
『お前の御主人になる人だつて、毛絲ぢやないか！』
にくまれ口を言ひ放つて、もう一度久美子の方へぬうと髭をつき出した。
『あらいいことよ！』
よほどそれが利いたとみえて、久美子はぱつと赤くなつた。
『ようよう御兩人！』
それを、はたから、長兄が高等官七等のお身分さへ打忘れながら、ようようとはやしたてた。
その半疊がとどめをさしたか、久美子は一層赤くなつて、つひにその場を逃げのびた。
事件はそれつきりで形がついたが、しかし久美子はその翌日も彼の顔をちらりとみると、きまつてくつくと笑ひこけた。のみならず、いつのまにか彼のことをじよじよいいいい兄さんと言ひ出した。

じいよじいよ兄さんは言ふまでもなく、どぜう兄さんのなまりである。

『そんなに笑ふくせつけておくと、およめにいつてから叱られるぞ！』

其度にさう言つて、彼は少しづつ久美子をからかつた。が、妹は些かも辟易しなかつた。

『ずゐ分ね、そんな意地わるおつしやればもつと言ふわ！　もつと言ふわ！』

言ひながら、聲をあげて、何度も何度も『じいよじいよ兄さん！』をくり返へした。其間に、然し結婚の日は日一日と迫つていつた。が、どうしたものか彼の髭は、以後少しも整はなかつた。次第に溝は深まるばかりで、妹の批評通りに毛絲のやうなちりちり赤毛が、益々ふえるばかりだつた。つひに我慢が出來なくなつたか、ある夜こつそり久美子が言つた。

『こまるわ私、式の時にそのおひげをみてをかしくなると……』

『女は默れ！』

奥の手を出して、一言のもとに彼は叱りつけた。

が、しかしよく考へた末、彼はその翌早朝こつそりと、いさぎよくそのひげを剃りおとした。たつたひとりの妹が、一生一度の大切な盛儀に、髭ゆゑぷッと噴き出して、折角の良緣を打ちこはしてはならないと思ひついたからである。（挿畫――中島六郎）

親・親・親

中村六三郎

弟は人間の滓

眞太郎は金持である。青山の高臺に素晴しい邸宅を構へて、邸の奥からはチロリン、ポルン、パルンと、いつも冴え冴えしい洋琴が鳴り響いてゐる。何不足のない暮し向きであるが、只一つ充たされないのは、次男に生れたといふ不運から、父親を兄貴の源作に獨占されて、思ふ存分に親孝行が出來ないことだつた。

『ね、兄さん』

『何だい』

『物は相談だが、偶にはお父さんを家に寄越してもいゝでせう。貴方はこれまで、飽きるほど一

人で孝行をして来た筈ですからね』

『中々、どうして、孝行と米の飯には飽きないよ。せめてモウ三人も親爺がほしいと思つてゐる位だ』

『そんな意怙地を云はないで、一年でも半年でもいゝですから貸して下さい。お互に子である以上、親孝行は貴方の專賣ではない筈です。貴方一人がいゝ兒になつてゐるのは押が太いです』

『馬鹿を云ふな。親を見るのは總領たる俺の特權だ。弟なんてものは豆腐の滓見たいなもので、世の中にゐてもゐなくてもいゝやうなものだ』

『では、什うしても駄目ですか』

『くどいよ』一體お前は子供のときから物事にくどくていかん。惡い性分だ』

『私の性分は惡いか知れませんが、兄さんも亦、飛び切り一番の意地惡ですよ。何も一生涯貸してくれと云ふのではないです。しかも自分はその日暮らしの貧乏人のくせに――』

『馬鹿野郎！ 金持ちが何だと云ふんだ。家貧うして孝子ありといふことを知らんのか。親孝行に貧乏はつきもののだ』

『しかし、何も側にレツキとした金持の弟がゐるに拘らず、無理にお父さんを貧乏な家において

苦勞させることもないではありませんか』

『何と云つても駄目の皮だ。外のことなら兎も角も、こればかりはあきらめろよ。弟の分際では手も足も出せない。蚯蚓が鰻に化けようと思ふやうなものだ』

——と云つたやうな次第で、什うしても兄の源作は承知しなかつた。彼は深川で親讓りの米屋をしてゐる。生活は可なり苦しいが、然し、昔の武士が餓ゑ死にしても日本刀だけは手放なさないと云つたやうな覺悟だから堪らない。所が、幾ら意怙地でも瘦我慢でものつ引きならぬことが源作の身に降りかゝつて來た。それは例の四年前の大震災で、彼の住居が影も形もなく燒けつぶれてしまつたことで『丸裸結構！』と、自分だけは思ふとしても、同じ市内で弟の家が面當てのやうに堂々と燒け殘つてゐる以上、年をとつた親爺を野宿もさせられない。旁々、弟の眞太郎は千載一遇の機會とばかり、馬力をかけて父親引とりの談判を強めて來た。

『お父さん行きますか弟の馬鹿野郎の家に——』と訊くと、

『私はどうでもいゝんだよ。行つてもいいよ』

と、父親も行きたさうである。

『行くも行かぬもない、場合が場合です。親を野天にさらしては先祖に對しても申譯がないです』

と、眞太郎は鋭く彼の弱身に突込んで來た。
『では仕方がない。一時預けることにするが、然し長くは駄目だぞ。一と月か二た月の間といふことを承知の上なら貸してやらう』
『いゝですよ。兄さんのバラックが建つたなら有難うございましたと云つて返しに參りますよ』
『よし、そんなら持つて行け』
眞太郎は喜んだ。永年の願望がやつと充された譯であるが、さて、さうなつて見ると、兄貴のバラックが出來上つた後になつても、父親を返す氣にはなれなかつた。味はつても味はつても味はひきれない親子同棲の和樂さが、無花果の實よりも甘く、義理にも人情にも、何としても手放しが出來ないのだつた。
『お前はペテン師だ。まるで火事泥見たいな奴だ』
と、今度はアベコベに、源作の方がセツセと青山に通ひつめて、親爺とり戻しの談判をせねばならなくなつた。
『まア、まア、一杯やりながら、ゆつくり相談をしませう。バラックでは碌にうまい酒もやれないでせうからね』

『俺は酒のみに來たのではないよ』

『それはさうでせうが、折角ですから、まア一杯――時に何ですか、兄さんも今度は丸裸になつて嘸お困りでせうが、幾らか資本を出しませうか。銀行が拂出しを停止しても、一萬や二萬のはした金ならば什うにでもなりますがね』

『馬鹿を云ふな。金なんか糞喰へだ。そんなことで誤魔化さうとしても駄目だ。金は金、親爺は親爺だ。ウのスの云はずに、早速今日は親爺を返して貰はう』

『もちろん、金は金、お父さんはお父さんですが、然し金の方から片をつけて行つた方が兄さんのために都合がいゝと思ひますがね』

『それは什う云ふ意味だ』

『と云ふのは、貴方がどんなにあせつても、お父さんは、生憎今邸にはゐませんよ』

『ゐない？　一體、何處に隱したんだ』

『隱しやしません。四五日前から、家內や書生にお伴をさせて、伊香保に保養にやりましたよ。東京の空が險惡ですからね』

『何で東京が險惡だ――き、きさまは、そんなことまでして、俺に親爺を逢はせまいとするのだ

な。親爺を橫領するつもりだな。よし、さう云ふつもりなら、俺には覺悟があるぞッ』

『き、きさまをぶん毆るんだ』

源作は、プリ／＼しながら握り拳を堅めたが、眞太郎は落付拂つてゐた。

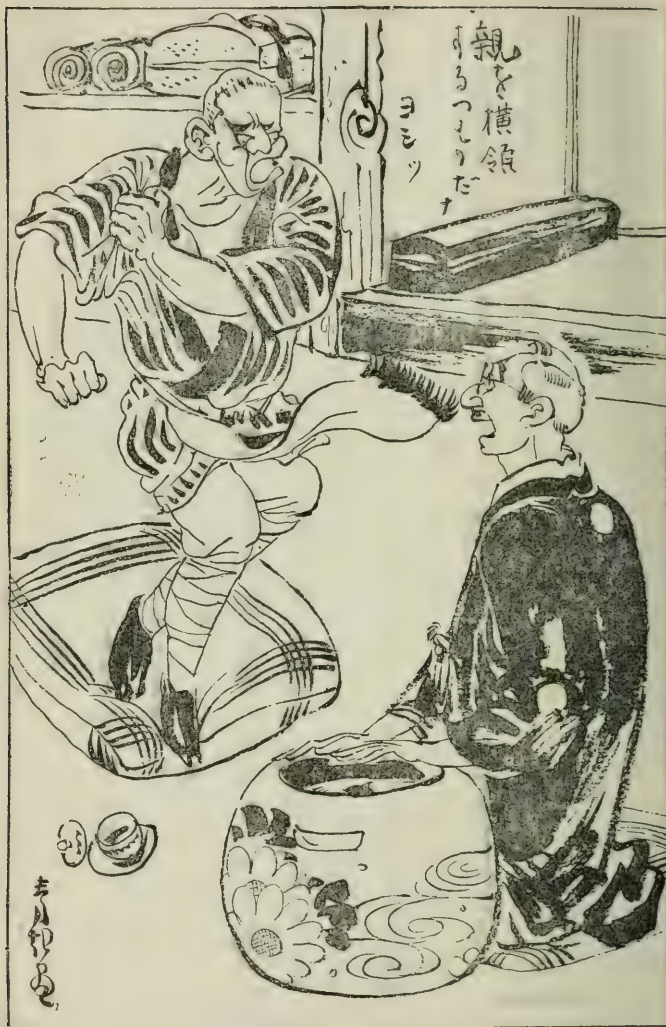
『腕力ですか。相變らず兄さんは野蠻ですな。だが、考へて見ると、子供の頃には兄さんのその拳固が恐ろしくて、よく逃げ廻つたものでしたね。なつかしい拳固ですよ。ハッハッ』

猿芝居のとのさま

然うして眞太郎は兄に對して防禦線をはりながら、一面には心ゆくまで父親に孝養をつくした。まるで女の兒が桐の小箱にしまつてある京人形をたのしむやうな氣持で父親を大切にした。

父親は、從前の裏町の貧乏米屋のおやぢとはちがつて、着物は上から下までぞろりとした柔かものづくめ、熊手のやうに太くてガサガサした手が小袖に引かゝつて糸を引いたりした。『御隱居さま、御隱居さま』と皆からかしづかれて、便所に行くにまで美しい小間使がついて來て面喰つた。まるで猿芝居のお殿樣同樣。

『これがホントの娑婆かしら』と明け暮れ、どぎまぎせねばならなかつた。

親を横領
するつもりだナ
ヨシッ

新時代の空氣を吸つてゐる細君も、舅に仕へる道は完全に心得てゐた。父親が退屈だらうと云ふ所から、例のチロリン、カロリンを彈いて聞かせたりした。

『お父さま、お氣にめしまして――今のはショパンのノクタンと云ふのですわ』

『へえ、食パンの六段――チンプンカンプンな六段でござんすな』

と云つたやうな經緯で、髣髴乎として夢まぼろしの如くであつた。

一方、源作は氣が氣ではなかつた。親爺は震災で死んでしまつたと思つちまへ、とも思つて見たが、迚も中々、さうアツサリとあきらめられるものではなかつた。然し眞太郎はどうしても引渡しを背んじない。

『お前さんはいゝ弟御をもつて結構だよ。何しろ會社の重役で、えらい働きの人だからな親爺さんも果報者だ。』

と、近所の人たちにほめられるにつけても、源作は面白くないことおびたゞしかつた。

『あの馬鹿野郎の、どこが偉いんだ』

と、思はざるを得なかつた。

恁うして二ケ年たつた。

眞太郎は父親の『還暦』の祝をすると云ふので、親類知己に案内狀を出し、一と月も前から準備にかゝつてゐたが、わざと兄貴にだけは知らせなかつた。少し人間が悪いやうに見えるが、案内なんかして親爺を引逢はせたが最後、根こそぎ親爺を略奪される不安がピシ〳〵と感ぜられるからであつた。

然し、それからそれと傳はつて、源作の耳にもそれが這入らずにはおかない。その日になると彼はカン〳〵になつて怒鳴り込んで行つた。

『一體全體、誰に斷つて親爺の本卦返りなどをやらかすのだ。總領たる俺に何の挨拶もなく不埒千萬！』

と意氣まいたが、その日の眞太郎は、何日と違つて案外打しをれて、

『案内をしなかつたのは悪かつたです、あやまります』

と、大人しく下手に出た。

『あ、あやまる。あやまれば物事が濟むと思ふか、この馬鹿野郎！』

『さうは思ひませんが、然し今日の本卦返りの祝はやめました』

『何、やめた。どうしてやめたんだ』

源作は眼を丸くした。實際彼は今、やめて貰つてはギヤフンと參ることがあるのだつた。案内はなくとも總領の俺だ。フイに祝の場に乘込んで散々に管を卷いた上で、兄の威力を示してやらうと思つて、四面九面の末、わざ／＼三越に注文し、出來上つたのが飛切り上等の紋羽二重の赤羽織と赤頭巾だつた。そして、それは携へて來た風呂敷包の中に收まつてゐるのであるが、祝がお流れとなつてしまつては、雨合羽の代用にもなりさうでない。

『どうして止めたんだ』

『お父さんが病氣になつたんです』

『病氣、何の病氣だ』

『何と云ふことはないのですが、醫者は老衰だと云ふのです。總ての機能がいけなくなつたのです』

源作は、息づまるほど吃驚を重ねゝばならなかつた。赤羽織や本卦返りのことなんか考へてはならない。

『き、きさまが不注意だからだ。然も老衰とは何だ、人間は鐵ぢやない。年をとつても老衰なんかするもんか』

『そんな滅茶なことを』
「滅茶でも何でもかまはぬ。早速親爺に逢はせろ。病室に案内しろ。き、きさまは親爺を不法監禁をして、なぶり殺しにする氣だらう。さうでなければ俺に逢はせろ。逢はせない所を見ると、やつぱり監禁してゐるのだな。親を見殺しにする氣だなア』
立てつゞけの不穏な言葉に、眞太郎の心は、熱をもつ體に水をぶつかけられた以上にゾクゾクした。
『逢はせますよ。逢はせますよ。逢つてやつて下さい。奥の離れがお父さんの病室です』
と、眉をしかめて云つた。
『よし、それでは逢つてくる。お前はそこに待つてをれ』
源作は、氣もそゞろに廊下を幾曲りして、父親の病室にかけ込んだ。父親は可なり痩せ衰へてドンスの蒲團の上に横たはつてゐた。
『お父さん、ど、どうしたんです』
『誰だい、源作かい』と、父親は頭を擡げた。
『病氣だつて云ふが、容體はどんなです？』

と、源作は枕元に坐つて靜かにきいた。

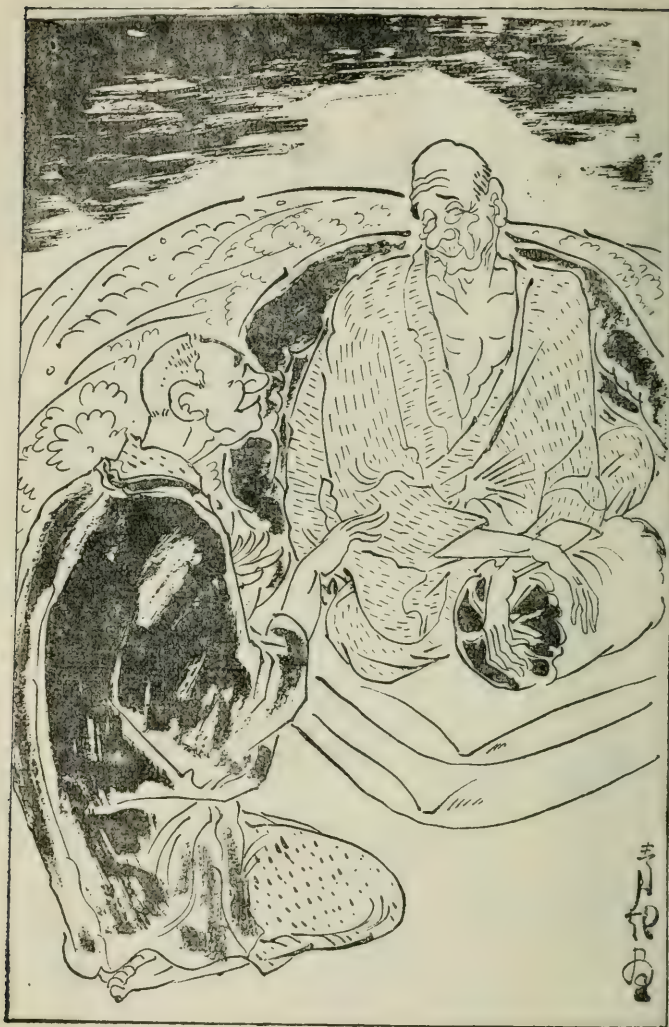
『どうもないんだよ』

『どうもないつて、起き上つちやいけませんよ。寢てお出なさい。顏色がよくないですよ』

『ほんとに什うもしないんだよ。病氣でも何でもないんだよ。近頃飯が一寸もうまくないものだから、眞太が心配をして醫者に診せると、醫者は毎日やつて來て苦がい藥をのませるんだよ。そして眞太が、寢てろ寢てろと云ふものだから、我慢してモウ一週間も寢てゐるけれど、この分ぢやホンとうの病人になりさうだよ』

『え、それは本統ですか、お父さん』

『本統だよ、コンナにピン／＼してゐるよ』

『冗、冗談ぢやない、散々人に心配をさせやがつて、もし之れが本統なら馬鹿な奴は眞太です。彼奴アどうかしてますよ。氣が狂つてゐるか知れませんよ、それにしても又、お父さんも不可ない。こんな御殿のやうな家にゐるから、魔がさしてそんな眼に逢ふのです。深川にお歸りなさい、深川に―― 帝都復興で迚も賑やかですよ。お父さんの好きな梅坊主ね、震災で死にもせずに、今だに盛んに踊つてゐますよ』

『さうかい、深川踊はいゝね』

『いゝですとも。迚もいゝんですよ。だから一緒に深川にお歸りなさい。歩けるでせう。電車まで――歩けなければ私がおぶつて行つてもいゝですよ』

『だけど、さうすれば眞太が氣を惡くしはしまいかな』

『大丈夫ですよ。眞太には私がいゝやうに云ひます』

赤羽織赤頭巾

『何しろえらい病氣だ。あんなになるまで放抛かしておく馬鹿者はないよ。兎に角、俺は一刻も早く親爺を病院にかつぎ込むつもりだ。お前のやうな不親切な奴にまかせてはおけない』

源作は、客室に戻るや否や聲を尖らせて云つた。

『さう大した病人とも思はれませんが、然し入院させた方がいいといふ兄さんの御意見なら、私の手で病院へは入れます。私のおちどですから――』

恁う云つて兄を見上げた眞太郎の眼には、あやしくも涙が一杯たまつてゐた。

『おや、お前、泣いてゐるな』

あんまり
お父さんよ
困らせちゃ

『…………』
『なぜ泣く』
『ね、兄さん。私はこれまで、貴方から馬鹿と云はれてもチョンと云はれても、口惜しいとも悲しいとも思ひませんでしたが、今日といふ今日、兄さんの本統の心持がわかつて見ると、泣かずにはをられません。私は今、何の氣もなく、この、この、風呂敷の中をあけて見たのです』
『な、なにを——』
『そして、しみ〴〵と兄さんの暖かい心持が考へられたのです。貧しい兄さんがこんな立派なものをお拵へになるまでには、どんなに苦しい思ひをなすつたことかと思ふと、兄さんをさし措いて、私一人で父親を見て行かうとしたことが恥かしくなりました。あんまり勝手すぎたことだと恐ろしくなりました。今、改めておわびをすると共に、今日かぎりお父さんは兄さんの手にお返しを致します』
『く、くだらぬことに泣くな。この赤羽織が何だと云ふんだ』
『しかし、ね兄さん。お父さんも年ですからモウ長いことはありませんよ。假令、親孝行のためとは云へ、兄さんに楯突いてゐたのは、決してお父さんの心を樂しましむる所以ではなかつたん

です。これからは、私も兄さんに背くやうなことはしないつもりですから、お互に力を協せて、仲よくお父さんを慰めてあげようぢやありませんか』

『泣くな馬鹿！　いゝ年をしてメソ〳〵泣く奴があるか――然し、お前がさう折れて出ると、俺だつて親爺を一人で獨占しようとは思はない。これからは、深川で一年、青山に一年と云ふやうにして、兎に角、今日から向ふ一年の間は俺の方に交替させてくれ。實は、おれはこの頃孝行にかゝつゝれてゐるんだ。殘念ながら白狀するよ』

『病院に入れるのではないですか』

『いや、はや、これは俺が惡かつた。本統を云ふと、あれはお前をペテンに引かけようと企らんだんで、かうなるとお耻かしい譯だ。然し心配するな、親爺の病氣は大したことではないよ』

『どうも、私もさつきから、兄さんの態度があまり大袈裟過ぎるとは思つてゐましたよ』

兄弟の血は同じである。すぐ笑ひに打解けて、その日源作は父親を連れて戻ることにした。電車よりもと云ふので、眞太郎は自動車で送り屆けた。

然し、物語はこれだけでは盡きない。

その後の父親は、青山にゐた頃のやうな悠長な氣で取澄ましてはをられなかつた。たつた二室

しかないバラックの中、源作夫婦が目の廻るやうに立働いてゐるのを傍觀してはゐられない。
又、源作も遊ばせておくことを欲しなかつた。
『お父さん、佐野屋さんまでお米を屆けて頂きたいです。——自轉車は危いですよ。擔いでお出なさい。一斗位譯はないです』
と、いふこともあれば、
『裏の物置を掃除して、序に空き俵をつみ込んで下さい。長い着物をきてゐては駄目だ。私の半纏があるから、あれと着かへるがいゝですよ』
と、云つたやうな調子で、可なり父親をこき使つた。
『あんまりお父さんに用をさせちや不可ませんよ。世間態だつて見つともないぢやありませんか』
と、女房も見かねて云ふこともあるが、
『何アに、あれでいゝんだ』
と源作は澄ましたものだつた。そしてそれが一二ケ月たつと父親は可なり健康になつて、
『おい、源作や、晝飯はまだかい』

と、裏口から聲をかけることさへあるやうになつた。
「さうですね。御飯にしますかね、おい飯だよ。飯櫃を緣側の方に廻してくれ」女房に命じて、親子は差向いで緣に腰かけたまゝ茶つけを掻き込むのだつた。
『お父さんも齒が弱つたですね。澤庵をしやぶつてゐるやうぢやありませんか』
『奥齒が三本殘つてゐるだけだよ。それも、一本はぐらぐらしてゐるよ』
『何しろ齒がなくちや澤庵はおいしくないでせう。明日からはお父さんのためにはジヤガ芋でも煮ておくやうに云ひませう。然し、かうして働いて腹を空かして食ふ飯はうまいでせう』
『ウム、さうだよ』『今日は朔日ですから、晩には酒の二合も買ひますかな。そして醉つてお父さんの得意な一中節でも聞かせて下さい』
『一中もいゝが、この頃は聲が惡くなつて駄目だよ』
『昔だつて、お父さんの聲は、さう自慢する程の聲ぢやなかつたですよ』
『さうでもないよ。ハツハツ』父親は齒のない口を開けつ放しに、我れを忘れて笑ふのだつた。

働くものゝ幸福

更らに四月ばかりたつたある日、父親は裏でこぬかまるけになつて米搗きをしてゐた。米搗きと云つても電力でつくのだから、さう力の入る仕事ではないが、それでも始終つきつきりで、一斗桝で機械の上の漏斗に玄米をつぎ込み、精白されて蓆の上に流れ積む山を崩しては側の大桶に移し入れねばならなかつた。

父親はセツセと働いてゐた。そこへ、表に自動車がパツタリ止まつて降り立つたのは眞太郎だつた。

『眞太か、お上り』と、源作は快く帳場格子の中で迎へた。

『御無沙汰しました。お父さんは』

『裏にゐるよ』

狹まいバラックだ、表から裏は見徹しだつた。父親は向ふ鉢巻で、精米を桶の中に移し込んでゐた。

『兄さん。あ、あんな亂暴な眞似をさせちやいかんぢやありませんか』

眞太郎は顏色をかへて、緣先までかけて行つて、

『お父さん、そ、そんなことをするのはやめて下さい』

おれはあんまり
氣持ちが
よろしぎる
よ

『お、お、眞太、來たのかい』父親は振かへつて會釋をした。

『そんな馬鹿なことはおやめなさい』

『源作やめてもいゝかい』

『さうですな。まア、折角弟が來たのですから、今日はそれだけにして、一緒にお茶でものみませう』

源作は落付拂つて云つた。

『そんなら、モウ少しで一きりつくから、それだけ濟ましてやめにしよう』

『いや、お父さん、スグおやめなさい』

眞太郎の聲は甲高く響いた。一分間でも、さうした勞働姿の父親を見てゐるに忍びないのだつた。が、親爺はスグには止めなかつた。

『實に、實に、どうもけしからぬ』

眞太郎は顏面神經をビリビリさせながら、ひどく昂奮して兄の前に戻つて來た。

『全く兄さんひどいですよ。虐待も甚だしいと云ふものです』

『虐待？』

『虐待ぢやないですか。あれが虐待でなくて何です。年を老つたお父さんをあゝしてコキ使つて、之で子として濟みますか』

『人間が働くことを、お前たち社會では虐待と云ふのか』

『然し大事なお父さんです。僕の身分として、あんなことをさせては置けませんよ。世間に申譯がないですよ。子として、これ位恥かしいことはないですよ』

『米屋の親爺が米屋の手傳をするのに何が恥かしい。お父さんは、十三の時から米屋の小僧に行つて、一生米屋で送つて來たんだ。米を搗くのは當り前のことで、途轍もない殿様見たいな眞似なんかさせるから、體が面喰つて病氣になるんだ』

『然し、昔は昔、今は今です。兄さんは米屋でも、私の現在の地位、身分を考へると、親を働かしてはおけませんよ』

『お前はよく身分、身分と云ふが、お前のみえや體裁のために親を犠牲にはさせられぬよ。論より證據、あのお父さんの向ふ鉢卷の元氣を見ろ。あれが僅か三月か四月前まではお前の家でヒネヒネして干物のやうに痩せ衰へてゐた體だ。――幾ら俺が貧乏だからと云つても、たつた一人の親だ。遊ばせて置かうと思へば、石にかじりついても遊ばせておくが、遊ばせて欠伸をさせるこ

とは、お父さんの壽命をちぢめるやうなものだから、俺には、お前のやうな馬鹿な眞似は出來ないのだ』

『さう云へば、それにも一理ありますが、然し物には程度と云ふものがありますよ』

『あれで、丁度いゝ程度なんだ。お前のやうな薄馬鹿にはわかるまいが――』

『馬鹿、馬鹿つてひどいですな』

眞太郎は苦笑ひをして頭を掻いた。そんな所へ、父親は鉢卷の手拭をはづして肩のぬか埃をはたき乍ら、

『又、兄弟喧嘩かい。もう喧嘩は大抵にしてよせよ。俺はあんまり氣持がよすぎるよ』

と、ニコ／＼し乍ら這入つて來た。

『き、氣持がいゝ？　お父さん』と源作が眼を丸くした。

『さうだよ。これがお前、外のいさかひならいざ知らず、親を大切にするための喧嘩なんて、開闢以來あまりきいたことはないよ。迚もおれは嬉しくて、擽つたい』

『フツ』と兄弟は思はず失笑した。

二人は隔てなくお茶をすゝり乍ら樂しく談らうた。

『なるほど兄貴が云つたやうに、父親は見違へるほど健康になつた』
と眞太郎は思つた。親爺は茶うけに出したクズ饅頭を甘さうに頬ばりながら眞太郎を見て、
『昨夜は源作につれられて、水天宮前の寄席に出かけて深川踊を見たよ。年はとつても梅坊主は相變らず腰がかるくて達者だ。大した藝人だよ。お前も暇があつたら見に行くがいゝよ』
『然し深川踊なんか下品ですよ。それよりも、今日は帝劇で露國の有名な歌ひ手の演奏がありますから、その方にお伴しませう。兄さんも一緒にいかゞです』
源作は急いでお茶を一口にガブリと呑み込んで、むせるやうに咳を二つ三つしてから、
『そ、それがお前の薄馬鹿な證據だ。今のお前に面白いことが誰にでも面白いと思ふのが大間違だ。いいおれやお父さんは、露西亞の唄なんか聞くよりも、犬の吠えるのでもきいた方がよつぽど面白いよ。ね、お父さん。帝劇なんか行くよりも、今夜もつゞけうちに梅坊主を見に行きませう』
『梅坊主なんか何です。下らないぢやないですか』
『下らないのは帝劇だよ。何を云ふ』
『迚も、おれは嬉しいよ。大抵にして喧嘩をやめてくれ、俺は息の根がとまるほど嬉しいよ』
父親は頬ばつたクズ饅頭が喉につかへて眼を白黑させて云つた。（挿繪——細木原靑起）

武内大臣

平山蘆江

大日本帝國印刷局の沿革錄に、かういふ事が書いてある。

明治八年一月十四日、伊國熱那美術大學校名譽員エドアルド・キヨソネヲ彫刻師トシテ雇ヒ入ル。

同人ノ職ニ就クヤ、圖按及ビ版面ノ彫刻法ヲ一新シ、又電胎及ビ製版等諸般ノ計劃ヲ爲シ、大ニ業務ヲ改善スルヲ得タリ。

當時の印刷局は、明治七年一月に、時の司法少丞得能良介が澁澤榮一に代つて紙幣頭に任ぜられると同時に、諸紙幣を外國で造つてもらふ事はいけないといふことになり、内地に紙幣製造の設備をしてから一年の後であつた。

得能良介の雅量と太腹とを戴いて、伊太利人キヨソネは、自由に奔放に、その非凡な技能を働

かして、日本帝國の紙幣を造り始めた。
水夫の姿を描いた一圓紙幣、鍛冶屋の姿を描いた五圓紙幣……それは、キヨソネが始めて自分の頭から編み出して造つた最初の日本紙幣である。キヨソネは、水夫の姿によつて海國日本を表徵し、鍛冶屋の姿を以て、長い長い間、農本主義で立つて來た此國に、今後は工業によつて立脚せよといふ暗示を與へてゐる。

が、當時の日本人は、まだ〳〵日本が海を舞臺にして立たねばならぬ國である事も、工業を土臺にして進まねばならぬ國である事も、感じ得る人はなかつたらしい。僅か一二年の後にキヨソネの暗示は打消されて、神功皇后を描いた一圓の新紙幣が發行された。それが明治十一年十月十八日である。それから十四年の七月に同じ神功皇后の五圓札、十月に同じ繪の十圓札が發行になつた。その次はぐつと世話に碎けて、大黑天のお姿をかいた十圓札が出來、菅原道眞公の五圓札が出來た。

我が武内大臣が紙幣の刷ものになつたのは明治二十一年十二月で一圓紙幣の表面の繪としてであつた。以來日本の紙幣はいろ〳〵に變遷して行つたが、この時の一圓紙幣だけは今に到るまで十餘年來、歴然として天下の通寶になつてゐる。天壽三百餘歲と云はれてゐるだけに、紙幣に

印刷された武内大臣も、今後更に二百七十年の通用を續けるかも知れない。果然、今では五圓紙幣の面にさへ描かれるやうになつた。

さて、私は今こゝに、武内大臣紙幣の由來を書かうとしてゐるのではない。沒後千九百年を過ぎた現代に、紙幣の表に肖像を畫かれるほどの有德人武内大臣の傳記を書かうとしてゐるのでもない。我瀨沼文藏老人の悲劇に箔をつけようために、又此の物語に勿體をつける爲に、大日本印刷局沿革錄を引合ひに出したまでである。

兎に角、閑話休題として、瀨沼老人の物語に入らうと思ふ。

◇

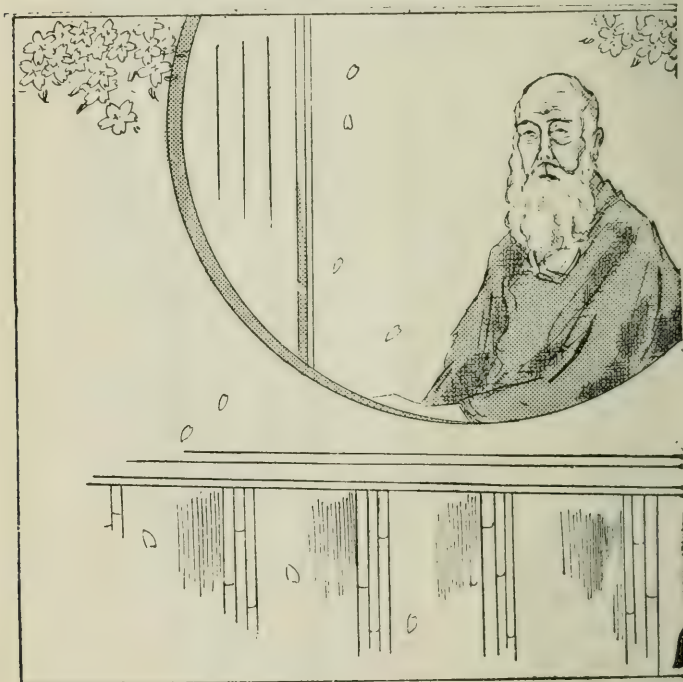
瀨沼文藏老人の家は東京の近郊にある、そして、可成り廣い地面に百數十本の古木の櫻が植わつてゐる。其の櫻が開く時分になると、老人は胸一杯に戰いでゐる白髯をしご

きながら、窓から悠々と花見をしてゐる。

或年の春、老人の獨り息子が大學を出た。而も銀時計恩賜といふ肩書のついた優等で卒業した、そして同時に日本銀行に奉職する事になつた。

『何とかして祝つてやらなければならない』

と老人は刀自に相談した、刀自が即座の思ひつきで、

『丁度邸内の花も眞盛りですから、お花見がてら、村の人を御招待したらどうです』

と云つた。

『なるほど、至極の思ひ付きだ、早速招待状を出しませう』

と、老人は村内は勿論、東京の知人へも招待状を發した。

此の催しは、殊の外好い思ひつきであつた。村人は、滿開の櫻の下に、思ひ〳〵の席を設けて花を眺めては盃を持つて廻りながら、

『いや　これほどの花があるのに、今まで一度も見せて頂けなかつたのは勿體ない話だ。今年を手始めとして、來年から花時には、此お庭を一週間だけ開放してもらふ事にしようではないか』

と口々に云つた。

『何のお構ひもして頂かなくてもよいから、花時だけは庭を開放しては下さるまいか』

といふ申込みを、村人等が四五人、總代を立てゝ瀨沼老人に賴み込んで來た。

老人は笑壺に入つた。

『なるほど、尤もなお賴みぢや、皆の衆が見て下されば、私の家の櫻としても光榮の至りぢや。第一咲榮えがするといふものぢや、喜んで開放しませう。それに丁度きつかけが頗るよい、伜の卒業と就職祝ひに、庭びらきの例を造るといふのだから、つまり伜の運がひらけるといふ事にも

なる、何よりぢや、是非開放しませう』

と上機嫌で髯を撫でた。

◇

さうでなくても、次の年の春には、是非此の櫻花園を開放しなければならぬ事が出來上つてゐた。それは老人自慢の伜に嫁が出來たからである。

去年の花見の時に呼ばれた瀬沼家の東京の知合の一人が、瀬沼第二世の人柄を見て、滅法氣に入つたさうで、是非自分の娘を嫁にもらつてはくれまいかと云ひ出したのに緣があつて、至つて順調に話が運んだ、そして年の暮れに無事輿入れをして來たので、今年の花見は此の花嫁の披露をも兼ねての賑ひといふ事になつた。

櫻の下に想ひ〳〵の席を設けた村人の間を、愛想よく斡旋してまはる花嫁の姿は、花の色香を見る程美しいものであつた。彼方からも此方からも御新造々々と褒めそやされた。

そして一口二口と勸められる儘に、花嫁は、いつかほんのりと頬を染めて、心も浮き〳〵と見えてゐた。

『これで私の自慢が四つになつた』

と老人は刀自に云つた。

『左樣ぢやな、第一は庭の櫻、第二は貴下の髯、第三は日本銀行に勤めてゐる出來のよい伜、第四は美しい伜の嫁、なるほど四つとも好い自慢ぢや』

と、刀自は目を細くして數へ上げた。

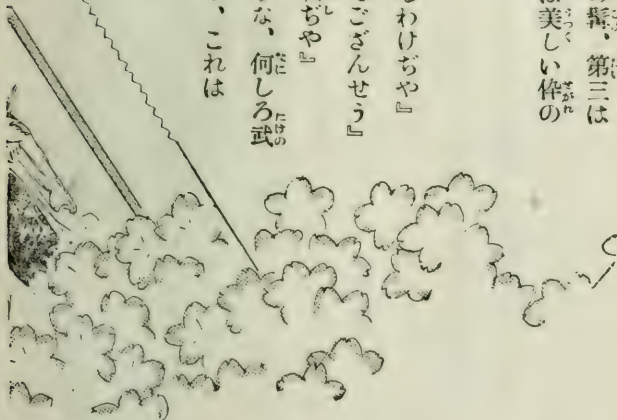
『いや、さう數へる日には自慢が五つになるわけぢや』

『五つになりますか、もう一つの自慢は何でござんせう』

『外でもない、天下の通寶の見本となつた私ぢや』

『なるほど、これは第一の自慢でございますな、何しろ武内大臣のモデルとやらになつたお前さまぢや、これは自慢の中でも大きな自慢でござりますな』

『天下の通寶のモデルになつたお庇で、一生涯二度と寫眞をうつしてはならぬ

といふのが自慢ぢやから、まづ、

私の一代を賭けての自慢と云はねばなるまい』

と二人は嬉しさうに顔を見合した。

夕方になると、庭一杯に陣取つて振舞酒に興じてゐた村の人々もちらほらと引上げて行つた。老人夫婦は其の村人たちに、かねて用意してあつた土産を一々嫁の手から渡さしてやつた。

『毎年、こんな事をしてゐては、瀬沼さんも、大抵やそつとの物入りぢやあるまい』

と村の人は肝を潰した顔をして思ひ〳〵に滿足氣に立去つた。

その翌日は普通のお花見として人々は自由に出入りをした。花を見るのに便宜なやうにと、老人の家では塀の中央に切戸を開けた。そして花の下に敷きつめるだけの緋毛氈を買ひととのへた。去年とても、花七日の間に次から次といろ〳〵のお花見設備を整へたが、今年は又更にいろいろの準備が出來た。去年の花が散つた時に、刀自は、

『貴郎、お花見だけに丁度三百五十圓要りました』

と云つたが、今年は花の第一日に既に三百圓を越した費用が刀自の帳面に書上げられてゐた。

銀行家だけに伜の瀨沼武夫君は、

『こんな事をしてゐたら、瀨沼家の財産は、この百數十株の花のこやしになつて了ひさうだ』

と呟いた。

七日の花が殆ど散り盡したある日、村の人もすつかり歸つて、家内だけが殘つた時、花嫁は老人の目の前に寫眞帖を持つて來て、

『お父さま、好い寫眞の材料が澤山出來ましたわ』

と云ひながら第一頁から繰つて見せた。

お團子を頬張つてゐる村長の顏もあれば、肌ぬぎになつて踊つてゐる助役の姿もある。櫻の下で寢そべつてゐる村會議員もあれば、三味線を彈いてゐる收入役夫人もあるといふ風に、何れも村の人に見せたら、びつくりする程の珍寫眞が幾つも〳〵撮られてゐた。

『これは誰れが寫したのぢやな』

と老人が聞くと、花嫁は目を輝やかして、

『私が撮りまして、私が現像しましたの』

と少しは得意らしい顏色も見えた。

『ほう、お前は寫眞も寫しなさるか、中々器用なもんぢや、これでは村の寫眞屋よりは餘程旨いやうだの』

と、刀自はニコニコして眼鏡をかけ直して、

『寫眞は僕もやりましたが、僕よりも花子の方が遙かに旨いやうです』

と、伜も女房の自慢をした。

親子四人が一冊の寫眞帖に顏をあつめて、ニコやかに笑ひさざめいてゐる一間の中に、意外にも突風が悄然として襲來した。

『これは何ぢや！』
と大喝一聲、瀬沼老人が目を怒らして怒鳴つた。老人の目の前に展開されてゐるのは、老人夫婦が、窓際から花見の群衆を眺めてゐる寫眞である。
『まア、これを寫したのかえ』
と刀自が目を丸くした。
『ハイ』
と嫁は尻ごみをしながら良人の顔色を見た。
『知らなかつたのだらう』
と武夫君はとりなし顔に云つたが、老人の怒は決して止まなかつた。
『いや知らないとは云はせん、結婚の約束がきまる時に、私は第一に仲人へさう云つた筈ぢや、花子が家へ來た時には直ぐに私の口から花子へ又くりかへして云つた。私は紙幣の武内大臣のモデルだから、一生涯寫眞をとつてはならぬ身體ぢや、とさう云つた筈ぢや。私の寫眞を一枚でも撮つた爲に、それを材料にして贋造紙幣をこしらへる人でも出ようものなら、お上へ對して申わけがない、ぢやから、如何なる事があらうとも私は寫眞を一生涯とらぬ事にきめてゐる、お上か

らも云ひ渡されてゐるといふ話を第一番にして置いた筈ぢや。どういふわけで、お前は私の云ひつけに背いたのぢや』

と老人はきつぱりとなつて叱りつけた。

『飛んでもない事をしておくれだね』

と刀自も老人を宥めようとはしなかつた。

『私がわるうございました、つい氣がつきませんでしたものですから、早速フイルムを燒き捨てて了ひますから』

と花子はおど〳〵しながら謝つた。

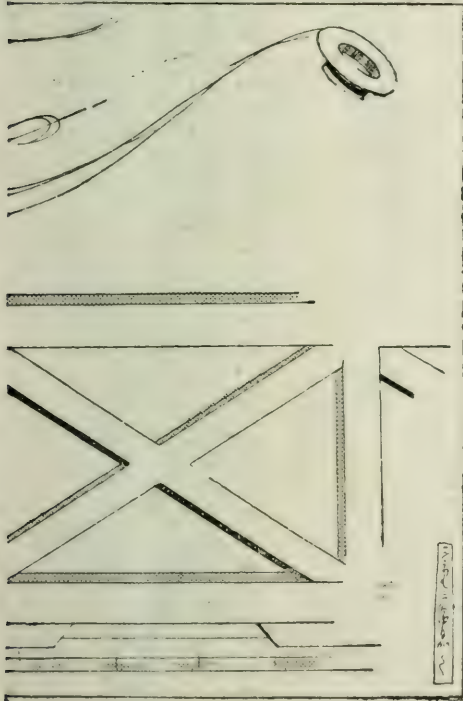
『燒き捨てる、飛んでもない、私たちの顏を燒き捨てるなんて、緣起でもない事を』

別の意味で刀自は怒り出した。

寫眞を撮ると壽命がちぢまる。さういふ事を老人も刀自も平生から信じてゐる。その寫眞を撮つたのさへ不都合なのに、燒き捨てるといふに到つては、老人夫婦の頭には、紛れもない調伏の意味より外とりやうがなかつた。老人夫婦は益々怒り出した。最早武夫君が如何に口を酢つぱくして辯明しても、花子が泣いて詫びても、聞く事ではなかつた。

『そんな恐ろしい嫁は、もう此の家に置くわけには行かない』の一點張りで、到頭、覆水盆にかへらぬ事件が持上つて了つた。かうして、きのふまで瀬沼老人自慢の一つであつた花嫁花子は仲人へ引渡されて了つた。

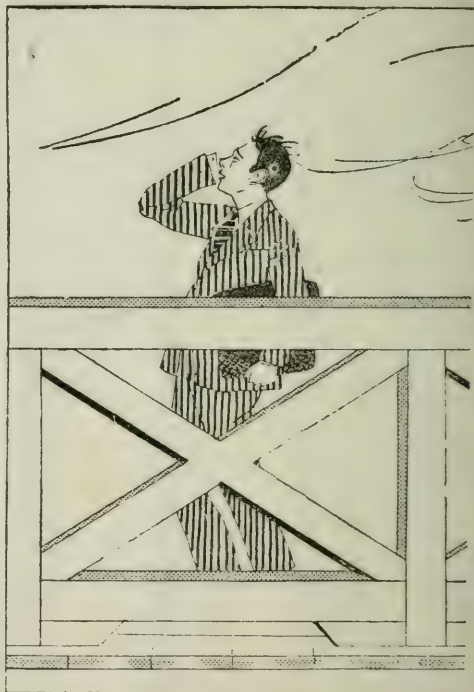
◇

老人夫婦に氣に入られてゐた以上に、武夫君には氣に入つた嫁であつた。その嫁が格別咎らしい咎もなくて、老人夫婦の偏見から專斷に去られたのだから、武夫君としては一層面白くない。快々として樂まない日を半月、一月、二月と暮した。武夫君は自分自身の心を持ち直さうとして、

いくら努めたか知れない。けれども、武夫君の心持は、父の胸に戰ぐ美髯を見る毎に不快を增すばかりであつた。

初夏の日光が五月晴れの靑葉の露をきらきらと照りかへしてゐる日、武夫君は面白くない心を抱いて銀行へ通勤した。

心のいらだちと共に、陽氣の蒸し暑さは武夫君の額に汗となつてにじみ出た。

丁度唐物屋の前を通る時、武夫君は、夏帽子を買はなければなるまいと思ひついた。冬帽を脱いで夏帽にかぶりかへたら、少しは心持が直るかも知れないと思つた。

唐物屋の店へ入ると、武夫君の目にすぐ見つかつた帽子がある。藁の編み工合、リボンの幅、

山の高さ、一文字鍔の幅など、すつかり氣に入つたので、少しは番が大ぶりではあつたが、早速二圓なにがしを投じて頭に戴いた。

唐物屋を出るとすぐに道は大きな橋の上にかゝる。すが〳〵しい心持に川水を渡つて來る初夏の風を背廣の胸一杯に受けて、武夫君は一寸の間、胸のもや〳〵を忘れさうになつた。

丁度武夫君の身體が橋の中程まで來た時、さつと吹き起した風は、武夫君の頭上を横に拂つて、新調の帽子をだしぬけに奪ひ去つた。

『アツ』

といふ間に、帽子は橋の外へ落ちて川水へふわりと冠さる樣になつて、ゆら〳〵と流れた。

『アツ、しまつた』

と云ひながら、武夫君は流れる帽子を見た。

丁度其處へ下肥を積んだ船が川を下りかけた。船頭は流れる帽子と武夫君とを七分三分に見て無言で水竿を伸した。帽子は造作もなく船頭の竿にかかつて、船の小べりへ引上げられた。

『橋のたもとへ廻つておくんなさい、舟を其の方へ廻しますべえ』

と船頭に云つた。

買つたばかりとは云へ水に落ちた帽子、半分あきらめてはゐたものの、取つて呉れるといふのなら、それを要らないとも云ひにくい、船頭の好意に對しても橋の袂までは行かなければなるまいと思ひついて、折角渡つた橋を元へ戻り始めた。

さて戻りながらポケットを探つた。いくらか船頭に骨折賃をやらなければならない。

『二十錢ぐらゐかな』

と思つてポケットを探つたが、生憎小錢は今帽子の爲に出し盡して、ポケットには一圓紙幣があるばかり、元より多すぎるからと云つて船頭の手から釣錢を請求する性質の心付ではない。況して船頭を待たして一圓紙幣を兩替して來るのも事々しい。

一圓紙幣を手にかけた儘、武夫君はもぢもぢしながら橋の袂まで來て了つた。

『好え鹽梅に、この儘乾かしやかぶれるだよ。さあ手を伸ばしなせえ。下が濡れたばかりで上は何ともなつてるねえだ、好え帽子だ、さあ好えかね』

と、船頭は岸に片足をかけて、自分の手をぐつと伸した。

それを受け取ると武夫君の手の内の一圓紙幣はもうちやんと船頭の目の前に擴げられてゐた。

『これはホンの志だ、受けとつてくれたまへ』

と武夫君は云つた。

『いや、滅相もねえ、そんなお禮を貰ふンぢやねえ』

とは云つたが、兎角東京近在の百姓は、決してかういふ事に對して心から遠慮する氣遣ひはなかつた。

『さうかね、折角だから、貰つとくべえか、これはオウ澤山に』

と云つて無造作に受取つた一圓紙幣の表からは、例の武内大臣がけろりとして、武夫君に一瞥を與へた。

武夫君はものも云はずに帽子を受けとると、そつと兩手に捧げ持つた。天日はその帽

子にきら〳〵と照りつけた。

二三丁の道を捧げ持つてゐたが、どうせ捧げ持つくらゐなら、頭の上で乾かしても同じ理窟と考へた武夫君は、帽子の鍔兩側に手をかけて、そつと冠つた。

すつぽりと頭へかぶせて、鍔をぐつと下へ引いたはずみに充分川水で濡らされてゐた鍔は糊の力が急に戻つて、鍔と山との閉合せ目からバクリと外れ、鍔だけはペロリと武夫君の鼻の下へ落ちて了つて、山だけが頭の上へ殘つた。

途端にこの光景を見た往來の人々はプツと吹き出して笑つた。武夫君は憤然として帽子を地面へ叩きつけた。

叩きつけられた帽子の上へ、例の武内大臣の風丰がけろりと見えたやうな氣がした。

『畜生、畜生、俺は決してもう、一生涯うしろを見ないといふ事を俺の心に誓ふ』
と武夫君は此の時きつぱりと自分の心に云つた。

◇

銀行が退けてかへりがけ、どうしても帽子を買はないわけには行かない。又一つ麥藁帽子を買つた。今度は少し細い目のを買つて、頭のはちへぐつと冠せた。
市内電車の終點まで來て市外電車に乘りうつらうとする時、道が急にひらけてゐた、そのひらけた道の兩側をぐるぐると捲くやうにして又しても突風が起つた。武夫君の帽子は前からさつと吹き付けた風にとられて、うしろへ飛ばされた。『又か』と思ひながら武夫君は思はず帽子の飛んだ方へ向き直らうとしたが、待てしばし、俺は一生うしろを向くまいと決心したのだつけ……。うしろを向くまいといふ是れが小手しらべだ。
『向かぬぞ〳〵』
と口に云つて、二歩三歩と素頭の儘で歩いた。側を通る人が、
『貴郎、帽子が飛びましたよ』
と注意してくれた。が、武夫君はこの注意を聞き流して、一直線に歩いた。

『帽子が飛びましたよ』

と側の人は又注意した、が、振向かうともしなかつた。無論、憤りに燃えてゐる武夫君は返事さへもしなかつた。

注意した人は、わざ〳〵足を早めて武夫君の前へ立塞がるやうにしながら、武夫君の頭を真向から見込んで、

『此の人は馬鹿だな』

と云つた。

武夫君の怒りは前後を忘却するほどであつた。握り拳は其男の横面へぐわんと見舞つた。

『うしろを見るものか〳〵』

と、武夫君は云ひつゞけにして我が家にかへつた。

『武夫か?、お前帽子もかぶらずに歸つておいでかえ』

と刀自が出迎へた、それには默つて居間へ通らうとすると、廊下でばつたり神主のやうな老人に逢つた。

よく見ると、神主ではない、寛衣を着、冠のやうなものを冠つて一圓紙幣の武內大臣をその儘、

に裝うた父親の文藏老人であつた。

『あゝ武夫、早かつたの、どうぢや、これですつかり武內大臣が出來たらう。はツはツはツ、私は今日からかういふ風俗をした方がよからうと村長がいふのでな、村に取つては天下通寶のモデルがゐるといふ事も名譽の一つぢやと云うてくれるので』

云ひわけと自慢とをちやんぽんにして、父親はくど〳〵と云つた。

『さうですか』

と云ひ捨てた儘、武夫は例によつて振向きもしなかつた。

『これ、よく見てくれ、似合ふかの』

『あしたでも見直すとしませう、私は今日限り、一生涯うしろを振向くまいといふ誓ひを自分自身に立てましたから』

と云ひ切つてさつさと足を早めた。

そして、到頭翌日は、銀行へ向つて父の宅を出たきり父の宅さへも振向いてかへらうとはしなかつた。

夕刻になつても、夜に入つても、夜半になつても、武夫が戾らないので、文藏老人と刀自とは

俄かに慌て出した。そして武夫の居間に一通の書殘しを見付け、肝を潰すばかりに驚いた。

『一生を通じて、うしろばかり振りかへりつつ、それを自慢にして暮らす父上と、その自慢の爲に前途を闇にされた私は、どうしても合致する點を見出だす事が出來ません。私は再び父上の家にはかへりますまい。同時に父上の思ひ出の物を造つてゐる銀行へも足を向けません、私の前途を新たに求めます、さよなら。』

とそれだけの文句が書殘されてあつた。

『馬鹿な奴だ。自分の歷史を尊重する事を知らぬ奴は、どれほど不仕合せか知れたものぢやない。過去があつて始めて前途が造られるといふ位の事さへ知らぬ馬鹿ものめ！』

と、文藏老人は憤怒の目を見ひらいて、伜の書置を睨みつけた。

◇

父に書置を殘した武夫は、日本銀行へも、一通の書面で辭表を提出した。

そして、其の日から下宿住居をしながら、新らしい職を求めたけれども、銀時計の餘光を持つてでさへも中々新らしい職は武夫の前へ飛びついて來なかつた。

武夫君は、疲勞と困憊に面やつれをしながら、朝寒の秋に頭の重たさをおぼえて起きかねた。

『まだ寢てゐなさるの、お客樣ですよ』

と、無遠慮な女中ががらりと障子をあけた。

『誰れだ、何といふ人だ』

武夫が問ひかへした時には、もうちやんと部屋の入口に案内されて、美しい婦人が立つて部屋の中を覗き込んでゐた。

『お入んなさいまし、どうぞ御ゆつくり』
と、女中は殊更らしく云つて、客を部屋へ押入れながら、あとをピツシヤリと閉めた。
『誰れだ！』
と、武夫はまだ寢た儘で呼んだ。が今度は返事がなかつた。
『うるさい奴だな、人をからかつて行きやあがる』
と捨臺詞を云つて、武夫は又其の儘寢ようとする。
『あなた』
といふ細い優しい聲が、部屋の一隅から起つた、武夫は自分の耳を疑つた。
『あなた』と又一言。
武夫はごろりと起きた。そして部屋の隅に、絕えて久しい花子の姿を見つけると共に、
『おう』と云つて立上つた。女も、
『あなた』
と三度云つて立上つた。
二人の身體は一つに固まつて、泣きじやくりの聲は、暫らくの間この鬱陶しい部屋に漲つた。

『どうして來たんだ。どうして僕の居どころが判つたんだ。よく來てくれたね』

と、武夫は花子の顏を穴のあくほど見つめた。花子は一言ものが云へない。美しい顏は涙に洗ひ流されるばかりであつた。

『ゆるしておくれ、下らない事でお前に苦勞をかけて濟まない』

『いゝえ、私が惡かつたんです』

『あれからどうしてゐた。』

『內にずつと居ました、ですけどね……』

『僕が家出をした事を、いつ誰れに聞いたんだ』

『仲人に聞いたんですの、貴方が家出をなさると、すぐに、それから私はね』

『それから？』

『それから私はね、貴方が屹度私にたよりをして下さるんだと思つてゐましたわ。ですけれど何のおたよりもありませんから、貴方の銀行へ人をやつて見ましたの、そしていろ／＼に探して漸く此の下宿を探し當てたんですの』

『よく尋ねてくれたね、逢ひたかつたよ』

『貴方お痩せになりましたわね』

『お前も痩せたね、けふここへ來た事を、お前の家では知つてゐるのかえ』

『いいえ、一寸散歩に出かけるやうにして出て來たんですの』

『それぢや早くかへらなければあ、家がやかましいだらう』

『いゝえ、貴方のところへ伺つたと云へば、家では屹度喜んでくれるだらうと思ひますわ。父も母も私の心をよく汲んでゐてくれますから』

『お前は好い兩親を持つて仕合せだね、それに引かへ僕は……』

『いゝえ、さうぢやないんです、あの事なら全く私が不注意だつたんですの、それにお父さんがお怒りになつたのも、あの時のはずみで、何れおゆるし下さる時があるやうな氣がしてますわ、それを樂しみに私、待つてますのよ』

『駄目だ〳〵。死ぬまで待つてゐたつて、あの頑迷な父親の心が解ける時が來るものか、この頃では一層激しくなつてゐる。僕が家を出る時などは、武内宿禰のやうな服裝をさへ仕始めたくらゐだ、實に馬鹿々々しくてお話にもならない』

『まア、貴方が家出をなすつてさへ其樣ですの』

『うむ。あれは一生夢を見る爲に生れて來たんだ。そして人におだてられて調子に乘せられる爲に生れて來た人なんだ』

『お父さまは、あんな調子でお話をなさるので、私全く冗談かと思つて伺つてゐたんですの。ですから本當に氣に止めてゐなかつたんですのに』

『さうさ、氣にとめる必要のない事なんだ。內の親父が武內大臣のモデルだなんて、親父の妄想に過ぎないんだ、あとかたもない事だよ』

『あとかたもないつて』

『紙幣を造る前に、紙幣局の伊太利人でキヨソネといふ人が方々巡歷して步いた事がある、其の時あの村へもやつて來たんだ。そして僕の家にしばらく休んで、村の樣子を見たり何かした事はある、たしか製紙工場を造る地所を探す爲だと思はれるんだが、只それだけだ。それから、何年か經つて武內大臣の紙幣が發行になつたらう、これが偶然にも內の親父とそつくりの顏をしてゐるので、村の人が云ひだしたんだ、あの武內大臣は瀨沼の老人をモデルにしたに違ひないつて』

『まア、本當の話ですか』

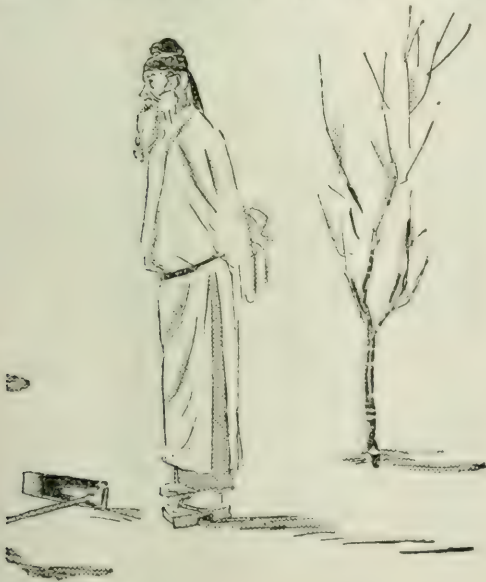
『本當だとも、村の人にさう云はれたので、おだてに乘つた內の親父め、すつかり好い心持になつて了つたまでの事さ』

『でも一生涯寫眞を寫してはならないつて、政府から止められてゐなさるんですつて』

『嘘だよ、寫眞を寫すと壽命がちぢまるといふ迷信を信じて寫さないまでの事さ、只それだけの

理由では迷信だと云はれるのが辛さに、それもついでに武内大臣の方へ冠せかけて了つたんだ。一種の老人式虚榮心だよ』

『まア、随分馬鹿々々しい話ですわね』

『氣の毒ながら、あの親父はあゝして武内大臣と庭の櫻とで討死をして了ふだらう。僕は出來る事なら、日本政府に頼んで、武内大臣の紙幣を廢して了つてもらひたいと思つてるが、それは僕の力でどうする事も出來ない。だけど、親父のも一つの病根の櫻の木だけは、家出をする前夜にすつかり根だやしにして來てやつた。あの親父は五つの自慢を見せびらかす爲に、一年一年と自滅の道を歩んでゐるんだ。その

五つの自慢の中に、お前と僕とはなくなつたから、あと三つだ、三つの中の櫻の木は僕が根だやしにして置いたから、來年になつたつて花を持ちやしない。あとの二つは親父の髯と、武内大臣のモデルだ、この二つは僕の力でどうする事も出來ないが、いくらおだて好きの村の人でも、あんな親父の髯を見ながら酒を飲まうとはしないだらう。況して一圓札を一々持つて來て、親父と見くらべるやうな閑人もなからうからね、かうして置けば瀬沼の家に大して物入りもないから、まづ〳〵老人夫婦が食べて通るだけの財産はあるといふものさ。考へて見れば。僕は家出に際して、大きな親孝行をして來たといふものさね」

『櫻の木をどうなすつたんですの』

『家出の前夜に、あの百二十五本の櫻の根方へ全部切口をつけて來たんだ、それでその切口へ鰹節のかけらを嵌め込んで來てやつたのさ。これは植木屋が植木を枯らす秘傳だ』

『まあ、勿體ない』

『花子、櫻の木も勿體ないが、僕にとつては親父の方がもつと勿體ないんだからね』

と武夫は兩手を顏に當てて泣いた。花子も一緒になつて泣いた。しばらくしてから武夫が、

『あんまり落付いてゐて、内で叱られゝしないか、一旦かへつて又出直して來る事にしたらどうだね』といふと、

『貴方、私はこの儘、此方に居たいんですの、好いでせう、貴方が好いと仰しやれば、今から直ぐに母を呼びますわ』

『さうか、さうしても好いけれど、何だかお母さんに濟まないやうだね』

『そんな事はありませんわ、私の身體が元の鞘に納まるのでしたら、母はどんなに喜ぶか知れませんわ』

武夫はこの言葉を聞いてハッと思つた。

『いけない〳〵、元の鞘へ納めるなんて事は僕の心が許さない、元の鞘へ納めるなんて事は、うしろを振りかへる事の尤も大きな事だ。花子、何にも云はずに、この儘引取つてくれ』

と、呆氣にとられてゐた花子を振りはらつて立上つた。花子が出てゆかないといへば自分の方から飛び出しさうな勢で……。

◇

丁度その時分、瀬沼老人の家には植木屋が呼び込まれてゐた。そして、今まで青葉の繁つてゐた櫻の木は悉く斬り倒されて了つた。平地になつた庭を老人は踏みしめ〳〵、

『苗から育てあげるのは中々待ち遠しいから、少しは高くかゝつても、好い木を交ぜて、差當り百本ばかり新規に櫻を植ゑるやうにしておくれ』と云ひつけた。

『へい、畏まりました、併し御隠居さん、此れだけのお庭に百本ぢや少し淋しうござんすね、百五十本あれば充分ですが』

地面を掘りかへしながら云つた。

『西五十本、うん、それでも好い、まア好いやうにして置くさ、去年までの庭と見劣りのないやうにな』と髯をゆら〳〵と撫で下した。（挿繪――清水三重三）

とかげ物語

佐々木味津三

一

朝の七時と言へば、無論、彼はまだ夢の中ではあつたが、とにかく、頬へ、何かひやり――と冷いものがおちかゝつたやうな感じをうけたので、彼は、あけるともなく、ぼんやりと眼をあけた。

と、ほとんど同時だつた。

『ごめんなさい……ごめんなさい……』

慌てゝ、妻が彼の顔の上からからだをひくと、見せまいとするやうに眼をふいた。

『米か？

それだけではつきり分つたので、彼はしづかに言つた。

『えゝ……まだあるつもりでゐたんですけれど……ごめんなさいね。ごめんなさいね』
『いゝよ。いゝよ。俺にだつて罪があるさ。一枚だつて畫は賣れないんだからね』

二

結局、仕方がなかつたのである。
彼は、代々木の父のところへでも出かけるよりほかなかつた。父のところへ行くのは、身を切られるほどの苦痛だつたが。
――では決して御厄介にもなりません！　鐚一文だつて合力はうけません！　その代り私の勝手を通します！
――妻と戀におちて家を去るとき、立派にさう言ひ切つた手前、今さら父のところへやつてゆくのは、身を切られるほど苦しかつたが、結局、賣るものを賣りつくし、入れるものを入れつくした今となつては、父よりほかに『米のなる木』をもつてゐるところは外になかつた。
彼は、仕方がなかつたのである。
立ち上ると、歎かせまいとして、景氣よく妻に言つた。
『行軍するのは十年ぶりだな。勇ましいね』

——聞いてみるまでもなく、妻の財布の中には、新宿からそこまでやつてゆくたつたそれだけのものさへもないことが明かだつたので、郊外の道を一里半、彼は、自分の長すねを電車の代りにするつもりだつた。

『ごめんなさい……ごめんなさい……』

聲の下に、妻のまなこがいつぱいにうるんだのをみると、彼はもう一度元氣さうに言つた。

『お前からもよろしくと言つたつて、お母さんにさう言つたげようね。』

三

さて、出るには出たが、一里半のみちのりは、おろそかな距離ではなかつた。

それに、やつと六月に這入つたばかりだと言ふのに、代々木の原は砂漠のやうなむし暑さだつた。

彼は、何べんもはだしになつて、なんべんも足の裏の油を青草の上でぬぐひとつた。歩くにつれて、彼の腰を護つてゐる形ばかりの三尺帶は、次第々々にゆるんでいつた。ゆるむにつれて、精神がまた次第々々にもうろうと異狀を呈していつた。

もうろうと精神が異狀を呈してゆけば、彼のまなこだつてくらまないわけにはいかなかつた。

かう言ふ時こそ！
――彼は思つた。かう言ふ時こそ、高尚なことを考へんといかん！
そこで彼はギリシヤの哲學者たちのことを考へようと思つた。彼は心の中へ高らかに言つた。
むかし、ソクラテスは――腹がへつたとは言はなかつたか！
いかん！　彼は頭をふつて言つた。――いかん！　さう言ふいやしいことを哲學者に結びつけて冒瀆してはいかん！　で、彼はもう一度心の中で高らかに言つた。
むかし、ギリシヤの哲學者ソクラテスは――きびだんごでもいゝから、たべたいとは言はなかつたか！
いかん！　彼は叱るやうに自分に言つた。もつと上等なことを考へんといかん！
けれども、代々木の原は歩いてもつきなかつた。
それならば――彼は心に言つた。それならば、もつとうるはしいことを考へよう！
彼は、そこで久米の仙人のことを想つた。――仙人はきつと川端へ落ちて來たとき、もう通力なんかはなくなつたつていゝと思つたらう。
天女よりか、人女の方がセンチメンタルに違ひなかつたらうから――

それからまた、仙人はきつともう二度と上天することがいやになつたらう。雲を吸つてゐるよりか八方飯の方が、どんなにおいしいかわからないから——八方飯の方がどんなに、どんなに——馬鹿！　彼はあわてゝまた自分を叱つた。馬鹿！　と叱つた。

けれども——うれしかつた。叱つてゐるうちにもう向ふは森だつた。

四

森を通れば、父が判事をやめて餘生を送つてゐる代々木の家はすぐだつた。南にだら〳〵とゆるくひらけた丘の上に、剪定だけは申し分なく施されてゐるが、しかし實はまだ一度もつけたことのない天津水蜜の桃林がなつかしく彼の心を打つた。

それからつゞいて右手に梅林が——

梅林の中には、昔ながらに吸上げポンプの井戸桁が、朽ちるにまかせたまゝだつた。戀ゆゑに家をすてゝからあしかけ七ケ月！

彼は心にしみるなつかしさの情に、じわりと目がしらがあつくなつた。

けれども、彼の足はにぶらないではゐられなかつた。たとへ、飢ゑ死することがあつても、二度と父には屈伏すまい！　あの時心に誓つて去つた家である。思ひあまつて來るには來たが……

マアといひながら
いつぱいまつ毛を
うるほした。

しかし、その時、彼の心の下を妻の姿がよぎつて通つた。一度も貧のためには涙をみせなかつたのに、今朝ばかりは涙をみせた妻の姿が、彼の逡巡を鞭撻し乍らよぎつて通つた。
　彼は勇氣をつけると、だが、ふるへる指さきで音を立てずに木戸をあけた。
　あけ乍らふるへる足をふみしめて、梅林の中をなん度も生つばを呑み乍ら、くゞつてぬけると、不意に地の下から現はれて出たやうに、勝手口へ立ちふさがつた。
『まあ！』
　ほどよく白いエプロンを、程よく整つたからだにつけてふりむき乍ら妹が聲を立てた。
――久しぶりで會つた激動よりも、久しぶりで會つた兄の姿の、みじめにやつれた姿に、妹は堤が切れたのだらう。まあ、と言ひ乍ら、いつぱいまつ毛をうるほした。
『ゐるか？』
　と言ふやうに、彼は默つて親指を妹の目の前にさし出して父の在否をたしかめた。
　妹は、答へるかはりに、エプロンで眼をおさへると、なにより母にと思つたのだらう。すぐ奥へかけ入つた。
『ほんとかい？……』

と言ひたげな顔つきで、母も不意のしらせにおどろいたのだらう。たしかめるやうに、すぐ茶の間から姿をみせた。

あんなに言ひ切つて去るには去つたが、やつぱり母の顔は心の故郷だつた。いつときに感情がこみあげて、彼は思はず面をふせた。じわ〳〵とにじみかゝつたみじめな眼元を母にみせまいとしながら……

母も、妹も、彼も、そのまゝしばらく物が言へなかつた。けれども、任務は默つてゐたのでは果されなかつた。

彼は顔をあげると、――なんとしかしそれは母たちにみじめに見えたことであらうぞ！――顔をあげると、彼は丁度そこにあつたお米櫃を指さし乍ら、思ひ切つて言つた。

『あいつがなくなつて了つたんです。めぐんで下さいとは言ひません！　決してめぐんで下さいとは口がさけたつて私も言ひませんが、あつたら十圓ばかり借りるんです！　貸してくれませんか！』

「ぢや、おいで」

案外にも、『ぢやおいで』と、こだはりもなく言つてくれたので、こだはりなく彼も上らうとす

ると、つけ加へて母が言つた。

『父さんにきいてあげようからね。一緒においでよ！』

仕方がなかつた。さうなつたからには彼も決心して、あとからついてゆくより仕方がなかつた。

五

天氣さへよければ、父のゐるところは、十年前から、無論畠である。——その日の朝も勿論天氣がよかつた。だが、その日の朝は、父は乃木大將を少し痩せ形にしたやうな顔のうへに、朝鮮帽子をあみだにかぶつて、せつせと伊勢芋の蔓に手をやつてゐるところだつた。

彼はさすがにからだがふるへた。けれども、味方ではないが敵でない母が、萬一の場合の安全瓣としてつきそつてゐたので、それほど彼は近づいてゆく事をおそれなかつた。

『もし』

母は古風にもし——と言つた。

『なんぢやい』

ふりかへつたとき、——なんと言ふむづかしい表情だつたらうぞ！——そこには意外にも戀ゆゑとは言ひ乍ら、ともかくも圓滿でない別れかたで、背いて去つた長男の彼が、雨にぬれそぼけ

て結局元の主家へ、まはりまはつてかへつて來た犬のやうに、人生に疲れた姿で立つてゐたので、おどろき――憎惡――怒り――それから愛！　父はすべての感情をいちどきに表してじろり彼を上から下へ見おろした。彼は勿論用意して待ちかまへた。屹度、『馬鹿！』と言ふだらうと。『何しにかへつたんだ！』と言ふだらうと』けれども、父は一言も言はなかつた。くるりと向きかへつて、そのまゝ腰をかゞめると、もつくりと藁をしいたうねの中をゐざつて歩き乍ら、茶褐にひよろ／＼と伸びてゐる芋の蔓を見つけ出しては、手でこきあげるやうに引つ張りあげて、準備していつた古竹の手に結びつけた。

　それきりだつた。いつまでたつても父はひとことも言はなかつた。ふりむきもしなかつた。たとへあの時はあゝであつても、血を分けた子供ではないか！　その子供がこんなにもみじめな姿で、態度には見せなかつたにしても、心に尾をふりながらかへつて來たといふに――父はあまりにも冷たい厳しい態度だつたので、いつときに、悲しさと口惜しさがこみあげて、彼は危ふくぽろりとおとしかゝつた。

　見かねたとみえて、そばから母が代つて言つた。

『健がお寶が少し借りたいと言ふんですけれどね……十圓……十圓ばかりでいゝと言ふんですけ

れどね……』

『どむならん！』

言下だつた。言ひやうもあるのに、あまりにもかんたんすぎたので、たうとう彼はこらへ情を失つてぽろりとおとした。おとすあとからしん〳〵と、口惜しさ、悲しさ、さびしさがこみあげて、さそはれるやうにぽろ〳〵と頬を流れた。と、しかし、その時だつた。にじみあふれた涙を通して、みるともなしに父の手元に視線をやると、今し父は藁の中から、茶褐にひよろ〳〵と伸び上つてゐる蔓をみつけて、ふと指をふれたやうであつたが、途端、何と不思議な芋の蔓だつたらう、おやと思つたあひだに、するりと藁の中へなくなつた。

『おい！　この芋の蔓生きてゐるぞ！』

言ひながらおさへようとすると、二三寸藁先へいつて、ちよろりと芽を出したので、ふたゝびおさへようとして、指をふれたかふれないかの時だつた。

『ふヘツ！』

父は、従六位前の仙臺控訴院判事であることも忘れて『ふヘツ！』と言ふ珍奇な聲をあげて飛び上つた。――芋の蔓と見えたのは、とかげのおつぽだつたのである。彼は滑稽ともなんとも言

ふへッ！・といふ
珍奇な声を
あげて
飛び上つた

ひやうのない出來ごとに、いつぱい眼に涙をにじましたまゝで思はず破顔一笑、笑はないではゐられなかつた。

それから――あゝ、人生は實に時々はとかげのおつぽと芋の蔓とを間違ふべきである。不淨なものにでもふれたやうに、しばらく父は指先をみつめてゐたが、あまりにも大きかつた驚きに、武裝することをつい度忘れしたのだらう――ふと、ふりかへるとぽくりと言つた。

『お前いつ來たんか！』

『え？』

『まめだつたか』

變りかたが急すぎたので、とまどつてゐると、父はごく虚心に言つた。

『さう〱。金とか言つたな。もつておいきよ！』

さうでしたか！　本當は、本當はやつぱりさうでしたか！　と思ふと今度こそはいつときにうれし涙がこみあげて、思はず心から笑ひかけないではゐられなかつた。

『ね。この秋あたりですが、名前を、いゝ名前を、一つ二つ考へといて下さいませんか？　男なら何右衞門といふやうなのをね。女ならごく古風なところをね』　（挿繪――中島六郎）

この鳥よい鳥

川上三太郎

◇鐵瓶とアルミ鍋

『あら、あら！　何て憎らしい十姉妹でせう！　再た、餌を斯んなに喰べ散らかしてしまつて！これぢや、幾ら掃除をしたつて遣り切れやしない。本當に、今日こそ何とか始末をして頂かなけりや、ねえ淸や！』

『奥様、全くで御座ェますよ』

階下の細君の大きな聲で、登志雄はフト眼がさめた。さうして、やゝともすると、直ぐ附着きさうになる兩の瞼を無理に押し開けて、枕元に、先刻から退屈し切つて居る目覺時計を見ると、おやおやもう十時半だ！　硝子越しに太陽が笑つて居る。だが一寸起きる氣になれない。彼は再た、膃肭臍のやうに夜着の中へ潜り込んだ。途端に空の彼方で、

『ひよろ、ひよろ！』

と鳶が啼いた。

彼は此の聲を聞くと、今更のやうに、こりや大分寢坊をしたな――と思つた。これが何時もなら、既に細君が手拭を姉さん被りにして、箒を疊にトンと許り、恰も長刀抱込んだ御臺樣といふ形で、凛然として彼の枕元に突つ立つのだ。

『貴郎！　もうお起きにならないと出勤に遲れますわよ』

『…………』

『ねえ、貴郎！』

『おいよ』

『眼がさめて被居やるなら、お起きになつたら如何？』

『知つて居るよ』

『知つて居るならお起き遊ばせ！』

『解つて居るよ』

『解つて居るならお起きなさいましな！』

『チョツ、五月蠅なあ』

遂には一喝するやうなものゝ、戰ひは明らかに此方が負けで、散々蒲團に未練を殘した揚句澁澁起き出すのだ。ところが今日は日曜だ！　然かも天氣晴朗、實に理想的な日曜なのだ。その上明日は大祭日、二日續けて休めるのだ。かるが故に彼は思ふさま公然と寢坊をしたのである……全く素敵な日曜だ！

さて、階下ではお祖母さんが、何時まで經つても彼が一向二階から下りて來ないので、味噌汁が冷めてしまふので氣が氣ではない。先刻から、アルミ鍋と鐵瓶とを、交る〴〵火鉢の上へ乘せたり下したりしながら、切りに天井ばかり見上げて居る。やがて漸く狸のやうな顏をして登志雄が茶の間へ現はれた。

『まあ〳〵、よう黑瞳が流れンこツちやの！』

上方から此の東京へ來てから、もう半年以上になるのだが、お祖母さんの關西訛りは迚も頑强だ。

『お祖母さん、今日は素敵な日曜ですね』

だが、何が素敵なのだかお祖母さんには一向解らない。

『ほウ、そないに今日は素敵かいな』

と言ひながら、鍋の蓋を取つて覗き込んだ。鍋の中では味噌汁の葱が、餘り女學校の料理法以上に煮くとらかされたので、からもう他愛なくなつて居た。

力抜けがした登志雄は、その儘齒刷子で、ゴシゴシやりながら縁側へ蹲踞んだ。そこには大きな鳥の籠があつて、コドモ靴のやうな十姉妹が一、二、三、四——恰度十三羽、お互に柔かい靜かな陽を浴びながら、無邪氣に、快活に、さうして又細君に彈劾されて居るとも知らずに、暢氣に飛んだり跳ねたりして居る。

『やれ〳〵可哀さうに。あとでみンな逃がしてやるぞ。さうしたら

何處へでも好きな所へ飛んで行くがいゝ……』

やがて彼は裏の井戸端へ出た。そこには細君の眞砂子が、女中の清やを相手にして、きりりと襷がけの肉づきのいゝ白い二の腕も露はに、せつせと張物をして居るところだつた。近頃珍らしい氣溫の高さに、彼女はぽうツと上氣して、ほんのり頰を染めて居た。

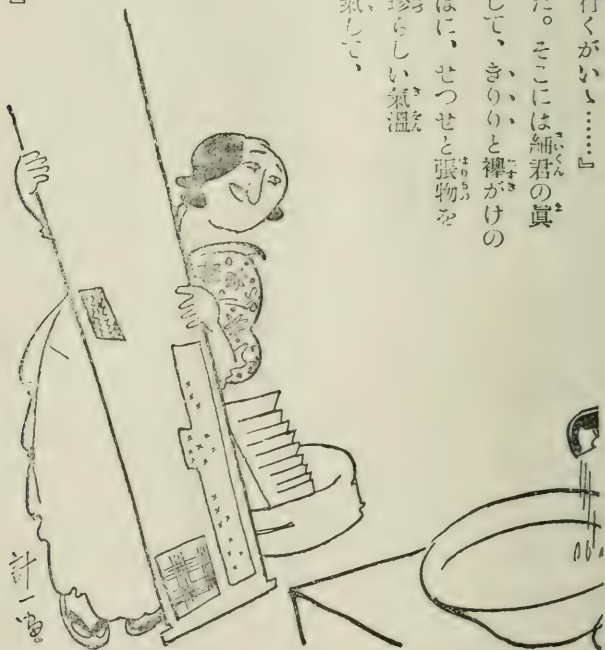
『あら貴郞！　いまやつとお目ざめ？』

『今日は日曜だよ』

『隨分嬉しさうですこと』

『その上明日は旗日だ』

『でも少し寢坊が過ぎますわ』

『腹が減つたので眼がさめた』

『可厭な人！』
すると傍に居た淸やが、
『エヘエヘエヘ』
と相好を崩した。
登志雄は早速顏を洗ひ出した。さうして、
シユツ！　シユツ〳〵シユツ！
と、魚屋のやうな懸聲で、ポンプの水を汲み上げた。頗る壯觀である。
『まあ、大した勢ひね』
『エ？』
『まるで、自動車でも洗つて居るやうよ。迚も猛烈ね』
『何だ、詰らない！』
それから今度は深呼吸だ。彼は左右の手をグイと伸して鼻の穴を一杯に膨らませた。然し折角の深呼吸も午前十一時では少しも見榮がしない。
濡れた手の儘始終の樣子を呆氣に取られて眺めて居た細君は、此の時フト思ひ出したやうに、

『さう／＼、ねえ貴郎、今日こそ本當にあの十姉妹を何とかして下さいましなね』
『心得て居るよ、一週間も前から君に責められて居るンだ。然し元來あれは君の主唱で飼ふ事になつたンだぜ。もう可厭になつたのかい。君も割合に倦つぽいね』
『いゝえ、妾、そりや二羽か三羽の中は妾だつて可愛かつたンですけれ共、何しろ今のやうに、あゝ二十羽も三十羽も……』
『おい／＼まだ十三羽だよ』
『將來に直ぐさうなりますわ。兎に角、あゝどん／＼殖えられたのでは迚も經濟が立ちません』
『話が大袈裟だね』
『全くですよ。あの分で行くと、やがて、お祖母さんの食費より、十姉妹の餌代の方が餘計費ります』
『お祖母さんと十姉妹を一緒にしては可哀さうだよ』
『それはいゝにしたところで、第一、迚も此の頃は手數がかゝりますの。せめて貴郎がもう少し早く起きて、毎朝箱の掃除でもして下さるといゝンだけれど、妾だつて淸やだつて、一日動き通しに動いても未だ仕事が殘る位なンですもの、その上鳥の世話までは焼き切れませんわ』

『然し……』

『いえ〳〵、それよりも先決問題があるンです。それは、肝心の妾に鳥が一寸も馴染まないンですの。妾が一寸でも籠の傍へ寄ると、まるで惡魔かドラ猫でも來たやうに、みンな眼の色を變へて騷ぐンですもの、妾、それが何より氣に入りません！』

『奧樣、わしにもさうで御座エますよ』

『あら清や、お前にまでさうかい。まあ何て憎らしいンだらう。ねえ貴郎、何よりも事實が雄辯よ。ですから今日こそ屹度何とかして下さい』

『よろしい、解つた。では、友達にみンな遣つて終ふとか、逃がして終ふとか、何とか處分の方法を考へよう』

『何うぞお願ひします』

だが、それから二十分許り經つた頃、突如、只ならぬ悲鳴が彼の耳を衝裂いた。

◇絹を裂く叫び！

『あッ！　一寸!!　誰か來て、誰か來て下さいッ!!!』

『あッ！　一寸!!　誰か來て、誰か來て下さいッ!!!』

彼はハツとして思はず立ち上つた。さうして夢中で階下へ駈け降りた。見ると、縁先で、細君の眞砂子が尻餅をついた儘、網へ掬はれた緋鯉のやうに、口をパク／＼させて居るのだ。

『おい眞砂子！　何うした、何うした!!』

『あ、あ……』

『確かりしなくつちや不可ない。おい眞砂子！　眞砂子!!』

だが、彼女は、左右の手を交る／＼突き出しては鳥の箱を指差して居る許りだ。

『何うした、え、眞砂子！』

『十姉妹が……十姉妹が……』

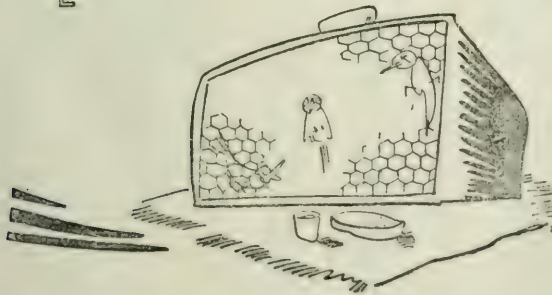
『十姉妹が何うした？　エ、エ？』

『十姉妹が……十姉妹が……』

『だから十姉妹が何うしたんだよ、もつと氣を落ちつけて、さうして悠然話して御覽！　おい淸！　何だつてお前ぼンやりして居るンだ。早く水を持つて來い！』

すると、今まで木菟のやうな顏をして呆然と見物して居た淸やは、慌てゝ臺所へ駈け出した。

『さあ眞砂子、水を飲んで落ちつくンだ！』

彼女は漸く息をついた。さうして途切れ〳〵に話し出した。
『妾、止せばよかつたンですけれど、此處を通る時、フト鳥箱の金網を開けて、中へ手を入れたンですの……』
『何だつて又そンな詰らない事をするンだ』
『すると、みンな總立ちになつてバタ〳〵大騷動……その中妾の指をコツリ！　と突ついたンです』
登志雄は笑ひ出した。
『はゝはゝ。それで痛かつたのか、弱虫だな、大きな聲なンか出して……』
『いゝえ、それ位の事なら幾ら妾だつて――』
と言ひかけて、彼女は見る〳〵泣き出しさうな顏をした。
『その時です、その時ですわ。十姉妹が喰べてしまつたンです！』
『喰べてしまつた？　何を?!』
『ダイヤを！　妾の指輪のダイヤモンドを!!』

『エ、?』
『妾の大切な〳〵ダイヤを、あの十姉妹が喰べてしまつたンです!』
これには、流石の登志雄も唖然とした。
『こりや驚いた! 然し、何だつて君は又そのダイヤなンか喰べさせてしまつたンだい?!』
『いゝえ妾が喰べさせたのではありません。十姉妹の方が勝手に喰べてしまつたンです。妾、指を突つかれたので、吃驚して飛び退いて、ヒヨイと此の指輪を見ると何うでせう! 貴郎、大切な〳〵ダイヤが、何時の間にか失くなつて居るぢやありませんか!』
見ると、なるほど彼女の指輪の眞中がポカリと抜けて居て、細い〳〵黄金の爪は空しく日曜の空氣を摑んで居る。
『それまでは確かに有つたンだね』

『えゝ、それまでは確かに有つたンです』

彼女は、はつきりと鸚鵡のやうに答へた。さうして情ない指輪の抜殻を眺めた。やがて、その圓らな眼から涙の玉が危ふく轉がり落ちさうだ。登志雄は少し狼狽へて、

『何しろ何うも厄介な事になつたもんだな。然し一體何奴が……何の十姉妹のやつがそのダイヤを食つちやつたンだらう！』

と改めて鳥の箱を忌々しさうに睨んだ。だが彼等は一向無表情だ。依然としてお互ひに無邪氣に、快活に、暢氣に、飛んだり跳ねたりして居る。中には、此方を横眼でジロ〳〵見て居るやつもあつた。それをいち〳〵彼は指差して、

『眞砂子、一體どれだい。君のダイヤを食つたやつは?!　彼奴かい？　此奴かい？』

『エ？』

『だからさ、どの十姉妹だか言ひたまへ。さうすればそいつを掴み出して……』

だが、彼女にはどれもみンな同じ十姉妹に見えた。みンな小さく白ツぽくつて、みンな同じ赤い嘴で、みンな同じ十姉妹だ。

『妾……解りませんわ――どれがどれだか……』

と彼女は途方に暮れて、

『斯うゴチャ〳〵になつてしまつては……』

『そりや困つたな。一羽か二羽なら僕だつて君の爲めだ。大切なダイヤには代へられないから、思ひ切つて犠牲にするンだが……』

『あれは貴郎からの最初の贈物よ。妾たちの大切な〳〵記念品よ』

『だから猶更だ。然し、何しろ十三羽を一羽残らず……』

『では鳥屋に頼みませうか。何しろあれは妾の生命から二番目の大切な〳〵ダイヤです。たつた一つきりしかない妾の寳石！　妾、あれが無くつては——』

此の時、突然に二人の背後からお念佛の聲が聞えた。

『南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛!!』

◇大阪へ歸ります

『あらお祖母さま！』

『何うしたンですお祖母さん！』

見ると、それはお祖母さんだ。

『南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛!!』

キチンと坐つて、背を丸くして、一生懸命珠數を繰つて居る。登志雄も眞砂子も、これには眼を丸くした。やがてお祖母さんは涙聲で、

『淺間しや〳〵。あンたがたはまあ〳〵、何たら淺間しい事を談合するこつちやわいの!』

『淺間しい?』

『何ぼそのダイナ……ダイナ……ダイナマイト——』

『ダイヤモンドよ』

眞砂子が傍から訂正した。

『そや〳〵、そのダイヤ……モンドや。一體それは何ぢやい、たかが石やないか。土塊やないか。それに引替へて片方のこれは、たとへ小鳥にせい立派な生きものや。生きとし生けるものや。その貴い生きものを、たかゞ粟粒一粒の土塊の爲めに絞め殺さうとは、いえ〳〵、ほンにあンたがたは

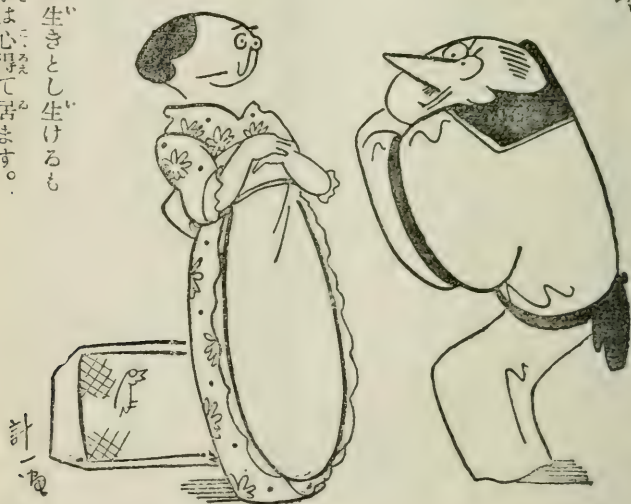
鬼かいな、蛇かいな。あゝ！　南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛!!』

『まあ、ま、待つて下さいお祖母さん。まだ何もさう決めた譯でも何でもないンですよ』

『いや〳〵、あンたがたは、そないにもそのダイナ……ダイナ……ダイナマイト――』

『ダイヤモンドよ、お祖母さま』

『そや〳〵、それが貰いのかいな。わしや、既う情けなうて〳〵、いつそ大阪へ戻ります。大阪へ歸ります』

『まあ〳〵お祖母さん。それは僕等も、その生きとし生けるもの……ですか、つまりその生きものゝ貰い事は心得て居ます。

おい眞砂子、困つたな、何うしよう』

元來眞砂子はお祖母さん子だ。お祖母さんなしでは居られないのだ。それが斯う頑強に力説されて見ると、迚もそれを押し切るだけの勇氣はない。

『妾だつて困りますわ』

『わしや大阪へ去ぬ。歸ります〱』

到頭登志雄は最後の智惠を絞つた。

『では斯ういふ事にしよう。兎に角此の儘二三日經過を見る事にしようぢやないか。十姉妹のやつ、屹度餌と間違へて食つてしまつたンだ。何しろそんなに偉大なダイヤではなかつたからね』

『えゝ、全く粟粒みたいな貧弱なのよ』

『暴露戰術は少し皮肉だね。然し、たとへ何んなに小さなダイヤだつてダイヤはダイヤだ。決して鳥の胃袋の中で消化してしまふ氣遣ひはないから、二三日中には屹度その儘出て來るだらうと思ふンだ』

『ですけれども……』

『だつてそれより他に方法はないよ。全くお祖母さんの言ふ通りだ。假にも生きものだ。人間の

生命だつて、小鳥の生命だつて、生命に變りはないンだ。ねえお祖母さん』

『そや〳〵、その通りや』

『それはさうね……矢張り何うも、それより外に仕様がありませんわねえ』

『二三日、糞掃除の時充分注意して居れば、屹度再び此方の手へ戻る』

『ではさうしませうか。ねえお祖母さま、それならいゝでせう』

『あい結構や〳〵、何うぞさういふ事にしてお呉れ。その慈悲心こそ何よりの寶や。錢金で買はれぬ貴い寶や。何のダイナマイトの一つや二つ……』

『はゝはゝは、解りましたよお祖母さん。何うもさうダイナマイトを粗雜に扱はれては物騒で不可ません。さあ〳〵安心してお座敷の方へいらつしやい』

と、やつとお祖母さんを敬遠した。

『やれ〳〵、兎に角何うも飛んだ事になつたものだね。逃がすどころか、友だちにも遣れなくなつてしまつた』

『勿論ですわ貴郎』

『だが一體此の中の何奴だらうなあ。これが人間のやうに一つ〳〵顔の造作が違つて居ると甚だ

簡単なンだが、何しろ、十姉妹だの鰻なンてものは、大概同じやうな顔をして居るからね』
『全くねえ！』
二人は十姉妹の箱を前にして暫く膝を揃へて嘆息した。

◇十姉妹の見物人

斯ういふ日曜の𦤶くる日は幾ら大祭日でも、餘り面白くない。登志雄も眞砂子も朝から十姉妹に附きつきりだ。
『だけどねえ貴郎、二三日で都合よく出て來るでせうかしら?!』
『それだよ。實は、僕も昨日はお祖母さんがあんなに昂奮して居るから、それであゝは言つたものゝ、好い鹽梅にあのダイヤを呑み込んでしまつたやつが、腹でも壞して下痢でも起して呉れると

いゝンだが、運惡くそいつが常習便秘か何かで……』
『まあ、妾冗談ではありませんわ。眞面目に相談して居るのですよ』
『僕だつて眞面目だよ。何しろ僕が心を籠めて贈つた最初の品だ。記念すべき貴重品です。兎に角二十日經過を見よう。然し何が幸福になるか解らないものだね』
『幸福？』
『さうさ、たつた一羽が、勇敢にあのダイヤを食つちまつたお蔭で、あとの十二羽まで昨日の朝とは正反對、食ひ物にも寢る所にも不自由をしないで居られる。見たまへ、氣の故だか今朝はみんな何だか急に元氣がよくなつたやうだぜ』
『貴郎は本當に氣樂ねえ。そんな暢氣な事を言つて居る場合ではありませんわ。本當に可厭な人！』

眞砂子は、何だかムシヤクシヤして來たので、思ふさま登志雄をグイと肱で突いてやつた。

『ア、痛、痛々、おい〳〵、緣側から落ちるぢやないか。止せやい〳〵』

その途端、庭先からぞろ〳〵と五六人這入つて來た。見ると何れも近所の細君たちだ。丸髷、七三、耳隱し、長い顏、丸い顏――それが各自に喋舌り出した。

『おや旦那樣、お早う御座います』

『何うも失禮致します。あら、では何で御座いますか、これが奧樣のダイヤを喰べちまつた十姉妹で御座いますか、へ、エ?!』

『まあ〳〵何て憎らしいやつで御座いませうねえ。けれど、どの十姉妹でせう?!』

『これかも知れませんわ』

『此方の十姉妹も隨分眼つきが惡う御座いますわ』

『おれでせうか?』

『これですかしら!』

さては、淸やが逸早く近所中宣傳して歩いたと見える。相手は構はず雄辯に喋り續けた。

『本當に、まあねえ。十姉妹も今では全然廢つてしまつて、緣日や夜店なんぞでは貴君、タバで

貰つて居るンですよ。けれ共、斯うなると却々何うして大した十姉妹で御座いますわ』
『全くですわね。然し奥様本當に飛んだ御災難で御座いましたこと。何でも大層大きなダイヤで、小豆位あつたと申すではありませんか』
『いゝえ、蠶豆位なのですつて！』
『まあ、蠶豆位?!』
『えゝ、蠶豆位！』
眞砂子は慌てゝ左の手へ右の手を乘せた。さうして泣き出しさうな顔をして登志雄の顔を眺めた。そこで彼は大きな聲を出した。
『失禮ですが庭を掃いて水を撒きます。おい、おい清！　箒とバケツを持つて來い！』
それから二日經つた。夕方登志雄が勤め先から歸つて來るや眞砂子は、
『ねえ貴郎、何うしたンでせう』
『まだかい?』
『えゝ』
それから又二日經つた。

『今日は何うだい？』

彼女は泣きさうな顔をした。

『駄目！』

『君、掃除する時見落しやしないかい？』

『妾、誰の手にもかけず自分で全然洗ふンですもの、アラスカで砂金を漁るにしたつてあれ以上細心の注意は拂へませんわ』

『弱つたね』

その中に、最初は頗る婉曲だつた彼女の愚痴がだん／＼不平に變つて來た。

『ねえ貴郎　何しろ毎日公設市場へ清やを連れて買ひ物に行くにしたつて、指輪一ツなしでは、ねえ』

『さうさなあ』

遂に不平は要求となつて現はれた。

『妾、矢張り新しく指輪を買つて頂きますわ』

『然し、君、却々ダイヤ入は……』

『アレキサンドリアで結構ですわ。何しろ此の頃では近所の人たちがみンな知つて居て、お風呂へ行つても、みンなジロ／＼妾の指を見るンですもの、氣が退けて／＼――』

『然し君……』

『兎に角明日の日曜、貴郎にお留守番をして頂いて、妾、銀座へ行つて見て來たいと思ひますの、よろしいでせう？』

『然し、君……』

『不可ませんこと？　だつて妾、全く――』

『いゝよ。いゝから行つておいで』

『有難う。その代り今年はもうこれで何にも要りませんわ。あと肩掛だけ買つて頂けば』

『エ？　だつて肩掛は去年の春確か買つた許りだぜ？』

『えゝ、でも今年はもう流行なくなつてしまつたンですもの。その代り指輪の方はアレキサンドリアで我慢しますわ』

その夜、彼は悉く十姉妹を呪つた。さてその翌くる日の今日である。眞砂子はお祖母さんと淸やを連れていそいそと出掛けた。

『お祖母さんに氣をつけるンだぜ』

『では行つて參ります』

◇登志雄の贈り物

『チヨッ！』

さて眞砂子とその一黨を送り出した登志雄は、暫く二階へ上つて寢轉んで、雑誌なぞを引繰り返して居たが、

お蔭で去年の暮から心がけて居た春の外套がフイになつてしまつた忌々しさに思はず舌打をした。さうして時計を見るとまだ二時だ。眞砂子が銀座へ買物に出たら日が暮れなければ決して歸つて來ない事は、彼女と結婚以來彼の屢々體驗して居るところである。

『今夜も福神漬にコンビーフか！』

　それにしてもまだ陽は高い。彼は氣が拔けたやうに起き上つて大きな欠伸を二つした。それからノシ〳〵と階下へ下りたが、不圖緣側の例の十姉妹の箱の前へ蹲踞み込んだ。

『考へて見ると十三羽といふ――此の十三と言ふ數からして緣起がよくない』

　一、二、三、四――幾度數へても十三羽だ。

『お蔭で俺の春の外套がフイだ。おい、何うだい、もう好い加減にダイヤを放り出して呉れ。

賴むよ』

だが、相變らず彼等は暢氣だ。

『と言つて見たところで今更……』

彼は愚痴を言ひながら立ち上つた。いや立ち上らうとしたその時、フト緣の下に轉つて居る朝顏の土鉢の脇でピカリ！　と南京玉が一粒光つた。それは眞砂子が此の頃講習會で覺えて來たビーズの手藝に使ふもので、每朝掃除をする時必ず一粒か二粒出て來るのだ。何うかすると登志雄の机の上にも落ちて居る事がある。彼は思はず苦笑した。

『何うも僕も淺間しくなつたものだな。こいつがピカリと今光つた時に、おや若しかしたら……と思はずハツとしたらうぢやないか。主婦の手藝もいゝが、斯う家中南京玉だらけにされたのでは……』

と、手を伸ばして摘み上げながら、

『全くやり切れないよ。はゝはゝ……』

と笑はうとしたが、忽ち今度は本當にハツとした。何故かと言へば、それは實に例のダイヤモンドだつたのだ！

『や、や、や！』

彼は思はず眼を擦つた。さうして掌を日向へ突き出して、改めて氣をウンと落ちつけて、もう一度つく〴〵と眺め直した。

『あ、さうだ。矢張りさうだ！　ダイヤだ！　あのダイヤだ！』

それは全く正眞正銘、燦として蒼白く高貴な光を放つて居る。

『はゝア、眞砂子は感違ひをして居るのだ。十姉妹に突つかれて慌てて指を引込めた途端に　何かの拍子で指輪からポロリと抜けて、斯んな處へ落込んで了つたンだ。さうだ。それに違ひない。成程これでは幾ら十姉妹を穴のあく程氣をつけて居たつて、出て來つこなしだ。はゝはゝ』

此の時玄關の方で人聲がした。彼は手早くそれを紙に包んで懷中へ仕舞ひ込んで、それから玄關へ飛び出した。見ると意外にも眞砂子とその一黨だ！

『おや何うしたンだい。もう買物を濟ませて歸つて來たのか』

登志雄は眼を丸くした。だが眞砂子は頗る元氣がない。

『妾、家を出るなり直ぐお祖母さまにお叱言を言はれましたの。全く妾もつく〴〵考へました。貴郎の外套を犧牲にして妾が指輪を穿めて見たところで、少しも愉快でも嬉しくもありません

わ。本當に貴郎、我儘ばかり申し上げて、妾……全く濟みません！』

『それで――銀座へは行かなかつたのかい？』

『いゝえ、行つて來ました。さうして貴郎の春の外套を買つて來ましたの。若し色が氣に入らなければ取り替へて貰ふ約束で買つて來ましたの。でもこれ、今年の流行ですつて！』

おい、眞砂子！　安心しろ！　お前のダイヤは俺が見つけたぞ！　――登志雄は斯う出ようとした自分の言葉を、慌てゝ口の中で嚙み潰して、

『それは有難う。こりや迚もハイカラな型だね。立派なモボになれる。はゝはゝ、では眞砂子、僕も君がそんなに僕の事を考へて呉れたお禮として、二三日中に改めていゝ物を君へ贈らう！』

『いゝ物？』

『うん、指輪を一つ贈らう――と言つたつて勿論大した物ではないよ。此前と同じ樣な貧弱なものさ。さうさねえ、尠く共まづ……同じ樣な物だよ。だがそれで當分我慢をして貰ひたいンだ』

『いゝえ、飛んでもない貴郎！　貴郎の、そのお心持だけで結構ですわ。それより、今年は貴郎の合着をお作り遊ばせ　割合にお安いやうですわ』

『なアに合着は今ので澤山だ。それより君に指輪を贈るよ。改めて贈ります』

『いえ、そンな……』
『その代り僕、少し君にお願ひがあるンだ』
登志雄は少し改まつて、
『それは今度僕が改めて上げる指輪に就いてだがね。僕は君にもつと無關心であつて貰ひ度いンだ。無頓着であつて貰ひ度いンだ』
と、その儘言葉を續けた。
『つまりだね。そンな指輪なンてものなンか眼中に置かず、持つて居る事すら忘れてしまつて吳れないか。公設市場へ買ひ物に行く時、お風呂に行く時なぞは勿論の事、銀ブラや芝居を見に出かける時でも、ヒヨイと指輪なンか穿めるのを忘れて出掛ける……といふ、さういふ暢氣な、拘泥らない、フワリとした眞砂子になつて貰ひ度いンだ。それで笑ふ人があつたら此方でも笑へばいゝぢやないか。兩方で笑つて居ればどつちが笑はれて居るンだか他目には解らない……』
眞砂子は見る／＼眼が熱くなつた。
『あゝ、妾……』
『おつとその邊で結構。君の眼の中が洪水になつては大變だ。あとは何にも言はずに、その儘、

その儘。ねえお祖母さん！』

彼は今夜一切の事實を說明してやらうと思つた。お祖母さんは先刻から眼を赤くさせて居る。

『そや〳〵、その通りや、その通りや』

× × ×

凡そ月曜日の靴は大概光つて居る。登志雄の赤い靴も今朝はピカ〳〵瓢簞のやうだ。

『ところで今日歸つたら、早速あの十姉妹を何とか處分をしようね』

『まあ意地の悪い！　昨夜のお話であの十姉妹には何の罪もない事がよく解りましたわ』

『だからもう要らなくなつたぢやないか』

『飛んでもない、要らないどころか、あれは妾にいゝ事を敎へて吳れた大切な〳〵鳥たちですわ。もう何處へもやる事ではありません』

『ホヽウ形勢が一變したね』

『まあ可厭な人』

『では行つて來るよ』

『お早くお歸り遊ばせ』（挿繪――須山計一）

首席と末席

佐々木邦

思ひ出すと隔世の感がある。當時、私達の學校の卒業生は、中學校の教諭心得として二十五圓で賣れた。大學卒業生は五十圓六十圓で、並等は教頭。成績の好いのは直ぐ校長になれた。大學は未だ東京の帝大丈けだつたから學士が貴かつた。恐らく昨今の博士以上だつたらう。私の郷里では、從兄が初めて大學を卒業した時、町民有志が旗を立てゝ三里ある停車場まで迎ひに出かけた。そればかりでない。町の學務委員の發起で祝賀會が催された。『文學士田中謙一郎君慰勞會』といつたやうに覺えてゐる。それくらゐ學問は苦しいものと思はれてゐた。謙一郎君は、町會の慰勞に値するほど勉強した所以か、間もなく肺病で斃れてしまつた。餘談はさて措き、今から四分の一世紀ばかり前のことである。

さもしい話だが、當時私達は二十五圓の月給を目標として學問に精進してゐた。今に二十五圓

取れると思ふと、そこに安心立命があつた。理想が低いと言つて笑ふ人があるかも知れないが、私達は大抵月九圓で賄つてゐたのだから、二十五圓といへば、その三倍に當る。今日の學生は少くとも月五十圓の學資を要する。しかし、卒業してその三倍の百五十圓取れるか？　二十歳そこそこの青年に、月二十五圓は當時決して薄給ではなかつた。巡査は十二圓ぐらゐで妻子を養つてゐたのである。

思へば、青年時代は空想を逞うして大きな野心を持つ方が宜い。私達は悟り方が早過ぎた。神田邊の法律書生が未來の總理大臣を夢みてゐる間に、私達は二十五圓の中等教員以外を頭に描けなかつた。

『何を食ひ、何を飲まんと思ひ患ふ勿れさ』

『人若し全世界を得るとも、その魂を失はゞ何の益するところかあらんやだよ』

妙に消極的な教訓ばかり頭に沁み込んでゐた。それといふのも、私達の學校はアメリカの宣教師の經營による基督教學校で、教育方針が實社會の榮達に適してゐなかつた。宗教と相容れないと思つてゐるのか、科學には一向重きを置いてくれない。社會科學にしても、宣教師が教へるから眞の間に合はせだ。宗教家の講じる經濟學に權威はない。聖書の講義丈けはお手のものだつ

たが、そんな知識を持つて實世間へ出たところで飯の種にならない。自然、一番强みのある英語を利用して身を立てるから、教員になる外仕方なかつた。

その頃、私達の學校は稍認められて來た。今までは年々の卒業生が三人か四人、時によつては一人も出ないことがあつたが、私達の前年は八人で、私達は十三人だつた。校長のジョーンズ博士は、

「學校の發展は喜ぶべきことですが、神さまは、同時に意味深長な御警告を與へてゐられます。今年は本校始まつて以來高等科の上級生の數が多いと思つてゐましたら、十三といふ不吉數に達してゐます。すべて、急速の進歩には危險が伴ひます。私達は大いに自ら省るところがなければなりません」

と言つて案じてゐた。これによつても、如何に消極的な學校か察しがつく。中等科は、相應生徒の數があつたが、高等科は、各級とも先生より生徒の方が少い。それが今急に世間並になつたので、校長さんは心配を始めたのである。

「學校が神の國へ向けて發展して行くなら眞に結構です。しかし若し世俗的隆盛に進むのなら寒心すべきことです。私は上級生が十三人といふ嘗つてない多數に達したのを不思議に思ひ

ます』

『先生、十三といふ數は何故いけないんですか？』

とその折一人が尋ねた。知つてゐるけれど、訊いて見て會話の練習をする。

『十三は致命的です』

『この中からユダが一人出るんでせうか？』

と質問するものもあつた。

『いや、十三を不吉とするのは、遠く基督以前からで、基督教國

に限りません。トルコ人は十三といふ字を辭書から殆んど驅逐してゐます。スカンヂナビヤの神話には、十三人の神人が一緒の食卓に坐つて、その中ボールダーといふのが殺されます。諸君はカーライルの英雄崇拜論を讀んでゐるでせう？』

『はい、去年讀みました』

『カーライルはオヂンを神人として論じてゐます。ボールダーはあのオヂンの子です。後から復活しますが、惡魔のロキイが割り込んで食卓を十三人にした爲めに禍を蒙つたのです。基督の最後の晩餐が十三人だつたことは諸君も能く御存知でせう。何うも十三といふ數はいけません。巴里では、昔から、町の番地や室の番號から十三を省いてゐます。アメリカにも然うしてゐるところがあります。諸君の教室や寄宿舍の室がＡ室Ｂ室Ｃ室になつてゐるのも、不吉な數を避ける苦心に外なりません。十三は確かに致命數です。そこで、私は諸君の將來の爲め、又學校の前途の爲めに、十三人の卒業生は出したくないと思つてゐます』

『おや〳〵、變なことを言ふぜ』

と一同は驚いて、

『しかし、しかし先生、十三人ゐれば、何うしたつて十三人卒業するぢやありませんか』

と伺ひを立てた。

『いや、一人を原級に留めます』

『點數のあるものに、見す〳〵落第をさせるんですか？』

『いや、一番末席の方に犧牲になつて戴きます。私は神さまの思召と信じるところを行はなければなりません。十三人卒業して一人死ぬよりは宜いでせう？』

と、ジョーンズ博士は眞面目だつた。

『ノウ、ノウ、ノウ〳〵……』

と末席の寺島君は十ばかり否定を連發したが、後が出なかつた。この男は、每學期定つて殿を承はるくらゐだから、會話は特に不調法だつた。皆大笑ひをした。

ジョーンズ校長は親切な先生だつたが、信仰の方面は迚も手に負へない凝り固まりだつた。日曜には運動を一切許さない。神さまの日だから、肉體は精々のところ散步ぐらゐにして、精神的に暮せと敎へた。無論敎會へ出たり聖書を讀んだりしろといふ謎である。私達が校庭の隅で相撲を取つてゐると、先生、直ぐに出て來て小言を云ふ。校內に居を構へてゐるから監督が行屆く。博士夫人が又やかましい。いたづら盛りの中學生は日曜にボールをやつて屢〻叱られた。それで

も聽かないと捉へて舍監の所へ引摺つて行く。大女だから子供は敵はない。
『それ、鬼婆が來たぞ！』
と言つて、皆蜘蛛の子を散らすやうに逃げたものだ。
或日のこと、ジョーンズ博士は授業時間中に、
『諸君、日本でカニバ、といふのは何のことですか？』
と訊いた。
『カニバ、？』
と私達は首を傾げた。赤ん坊が生後初めて排泄する大便をカニバ、といふ。しかしそんな込み入つたことは英語で説明出來ない。斯ういふ場合私達は、
『知りません』
と答へる。知つてゐても、言へない時は面倒だから知らないで押し通す。
『太陽は東から昇るか、西から昇るか？』
と問はれても、一年生なら當然、
『知りません』

と答へる。この故に、西洋人は日本人を頗る無智なものと思ひ込む傾向がある。ところでジョーンズ博士は、

『しかし、ミセス・ジョーンズのことを、中學の小さい生徒がカニバヽと呼びます』

と手がかりを與へてくれた。

『あゝ、それは鬼婆ですよ』

『オニバヽ？　何ういふ意味ですか？』

『謹嚴な淑女といふ意味です』

と私達は誤魔化した。

二十五圓の先輩は、時稀上京すると母校を訪れることを忘れなかつた。私達は卒業が迫つてゐるから、彼等の經驗によつて裨益しようと思つて、種々と當つて見る。皆相應得意でメートルを上げて行く。

『僕は就任の挨拶を英語でやつたぜ。田舍もの吃驚してゐやがつた』

と川崎君が言つた。

『君は行く前から稽古をしてゐたね？』

『然うさ、ハリスさんに直して貰つた通りにやつたから受けたよ。しかし教室へ出ると早速ひやりとした』

『何うして？』

『朝の中は、一年生と二年生で無事だつたが、晝前の時間は五年生さ』

『五年生なんか教へるのかい？』

『初任は三年生までだが、手不足

だものだから二時間持たせられたのさ。喋つてゐる中に午砲が鳴つたんだよ。僕はそのまゝ授業をやめれば宜かつたのに、「田舎の午砲は大きいね」と冗談を言つた。すると一人の生徒が、「先生、午砲は英語で何といひますか？」と訊いた。一寸面喰つたね』

『何といふんだい？　午砲は』

『知らなかつたんだよ。しかしそこは先生だ。「毎日聞いてゐる午砲を知らないんですか？　午砲です。正午の鐵砲です。ヌーン・ガンです」と直譯してやつた。「出來る〳〵」といふ聲がした。知つてゐることを訊いて試めすんだね。教員室へ歸つて辭書を引いて見たら、矢つ張りヌーン・ガンさ。安心した』

『うまくやつたね』

『教科書以外の質問は困る。何が出るかも知れないから、この頃は、教科書以外のことを訊いて時間を潰さないやうにと、豫め注意して置く』

『狡いんだね』

と私達は感心すると同時に手心を學ぶ。

『持てるぜ、實に』

と菊地君は元來風采の好い男だつたが、フロックコートにカイゼル髭嚴めしい紳士になつて立ち寄つた。當時は重々しい容姿が流行つたのである。この教諭はもう心得でなかつた。前々年に卒業して去年檢定を取つたから一躍三十五圓に昇給してゐた。

『君は特別だらう？ 成績が好いんだもの』

と、私達は早速油をかけた。

『そんなこともないが、前任者がひどかつたからね。教頭から話を聞いて驚いた。This pencil is for my brother とあるのを「この鉛筆は私の弟の方を向いてゐる」と譯したさうだ』

『豪い英學者だね』

『それだから一年生二年生しか教へてゐなかつた。鉛筆が弟の方を向いてゐると譯してゐるところへ、教頭が視學官を連れて參觀に來たから耐まらない。困つたさうだよ。教頭は理學士だけれど、それぐらゐの英語は分る。後から早速、「君、氣の毒だが、やめてくれ給へ」とやつたんだね。すると未練な男で、月給を少しへらしても宜いから置いてくれと言つて泣きついたさうだ』

『それから何うしたね？』

『しかし生徒の爲めだから、そんなことを取り上げちやゐられない。首さ。その後へ僕が行つた

のさ』

『英語の教師は大勢ゐるかい？』

『高師が三人、檢定が一人、それに僕だ』

『出來るかね、皆？』

『檢定は出來るが、獨學だから發音が惡い。高師は教授法が巧いばかりだよ。矢つ張り斯ういふ學校で本式にやつたものに限る。僕は校長を二三人知つてゐるから、極力君達を推薦してやる』

と菊地君は大いに私達の意を強くしてくれた。

『菊地さん、卒業しなくても使つて貰へますか？』

とこの時寺島君が訊いた。

『卒業しなくちや困るね。急ぐことはない。もう半年ぢやないか？』

『いや、僕は卒業覺束ないんです』

『何故？』

『僕達の級は十三人で僕が末席です。十三人は不吉數だから、末席のものを落して十二人卒

業させるとジョーンズさんが言つてゐます』

『そんな馬鹿なことはないよ』

『いや、僕は心配になりますから、訊きに行つたんです。あの老爺は頑固ですよ。果して君が末席になるやうなら、君が一年後れるのは神さまの意志で仕方がないと言ひましたぜ』

『驚いたなあ。まさかと思ふけれど、萬一

そんなことになつたら、教務の今井さんに相談して見給へ。試験には規定があるんだから、いくら校長の意思だつて、點數のあるものを落す次第に行くまい』
と菊池君は慰めた。私達も、まさかの場合にはジョーンズ博士のところへ談判に行つてやる積りだつた。
半年たつて卒業試験が來た。寺島君は隨分勉強してゐたが、時折、
『迚も駄目だ』
と弱音を吹いた。
『そんな馬鹿なことはないよ　末席だつて點數さへあれば必ず卒業する』
と私は親しい間柄だから絶えず激勵してゐた。寺島君もその氣になつて試験を受けたが、成績發表の朝、
『駄目だつたよ』
と言つて私のところへ駆けつけた。
『冗談ぢやないぜ』
と私は掲示板を睨んで憤慨して、早速有志數名と共にジョーンズ校長を訪れた。文明の紳士が

これほどまで迷信に左右されるとは沙汰の限りである。しかしジョーンズ博士は、
『仕方がないです。私も考へましたが、寺島君は點數が足らないんです』
と説明した。如何にも氣の毒さうな語調だつたから、矢張り自然の成り行きかとも思つた。次いで教務の今井さんのところへ押しかけたら、
『寺島君は、この通り點數が足りません』
と言つて、成績表を見せてくれた。
『しかし、これぐらゐなら、今までは假及第が相場ぢやありませんか？』
『卒業試驗に假及第はありません。追加及第でせう。惡い學科が一科目きりですから、從來の慣例に從へば再試驗を受けられます。それにしても卒業式の間には合ひませんよ』
『それは仕方ありませんが、ジョーンズさんの點丈けこんなに足りないのは變ですな』
と私達は再び疑問を起した。しかし喧嘩をしてしまつては話にならない。私はその足で再びジョーンズ博士を訪れて再試驗のことを頼み入つた。
『宜いです。卒業式が濟み次第に私の宅でやりませう』
と博士は快く應じてくれた。

私達は十二名で卒業式に列した。これはジョーンズ校長の目論見通りだつた。來賓は大抵英米の紳士淑女だから、矢張り晴れの席に不吉な數を避ける爲め寺島君を犠牲にしたのである。好い面の皮だと思つた。その證據には翌日寺島君は眞の形式丈けの再試驗を受けて即座に卒業した。しかしそればかりでなく、同時に横濱のジョーンズ・アンド・ジョーンズといふ商館へ口が定つたのは、昨日までの同情者の目を見張らせた。土つかずで卒業した連中でも然う右から左へ二十五圓で賣れない。田舍の校長は氣が長いから取引はこれからである。然るに追加卒業生の寺島君は、同じく二十五圓で東京と同じことの横濱へもう約束が出來たのである。

『ジョーンズさんは何か言つたかい？』

と私は探りを入れて見た。

『君は矢張り教員志望かと訊いたから、イエスと答へたら、教員の口は心當りがないが、商館なら横濱にあるから行く氣はないかと訊いた。又イエスとやつたよ。「月給、二十圓」「ノウノウ」「二十五圓？」「イエス〱、教師値段」先生オールライトと來た』

『教師値段はひどいね』

『何うも僕はイエスとノウ以外を言ふと直ぐに間違ふ』

と寺島君は笑つてゐた。

私達は、

『變だね』

『何うも不思議だ』

と小首を傾げた。

『ジョーンズさんは矢つ張り氣が咎めて償ひをしたんだよ。ジョーンズ・アンド・ジョーンズといふのは、ジョーンズさんの親類がやつてゐる商館だぜ』

『然うさ。豫定の行動だつたんだよ』

『同じ俸給なら田舍よりも横濱の方が好い』

『學校より商館の方が見込みがある』

『斯うと分つてゐたら、おれも追加卒業になるんだつたになあ』

と私達は寺島君を羨んだ。

今更耻を言ふ樣だが、私は首席で全校切つての秀才だつた。ジョーンズ博士初め諸先生に望みを囑されてゐた。多少天狗になつてゐたものだから、同級生がボツ〳〵都落ちを始めても、自分

丈けは東京に踏み留まれる積りだつた。しかし間もなく東京は不可能と覺つたので、東京から三四時間のところと條件をつけた。當時は若かつた。官立へ割り當てた餘りの口が私立へ廻つて來ることを知らなかつたのである。尤もこれは迚も駄目と丈けは薄々氣がついたから、横濱の寺島君のところへ相談に行つた。

『面白いかい?』

と訊いたら、

『面白いことはないが、イエスとノウ丈けで片付く仕事だから極く樂だ』

とあつた。そこで私は或日ジョーンズ博士を訪れて、

『先生、私を横濱の商館へ世話願へませんでせうか?』

と頼み込んだ。

『勿體ないです。君は金を扱ふ人でないです。矢張り青年を扱つて同胞に仕へるのが神さまの思召です。迷つちやいけません』

と博士は敎へてくれた。神さまの意志と信じたら、この先生は梃でも動かない。私はもう取りつく島がなかつたから、又少時待つた後、翌年の正月に土佐へ赴任することに決めた。既に同

こんな鉄道の一寸も

斯卒業生は四國九州北海道へ散つてゐた。彼等は皆、
『こんな遠いところへ來るくらゐなら、追加卒業生になつて横濱へ行けば宜かつた』
といふ意味の手紙を寄せた。私も土佐の國へ上陸した當座、
『成程、こんな鐵道の一寸もないところへ來るくらゐなら、末席になつて追加卒業にして貰ひたかつた』
と痛切に感じた。
爾來二十有餘年、私は教諭心得、教諭、教頭として田舎廻りを續けてゐる。愚痴になるから言ふまい。同窓も皆似たり寄つたりだと思つて諦めをつける。但し商館の支配人丈けは違ふ。私は初めの中横濱を通る機會のある毎に訪れたが、寺島君はその都度大きな家へ移つて工面が好くなつてゐた。殊に歐洲戰爭中に巨利を博して、その後又損をしたさうだけれど、先頃震災後母校の復興資金に一萬圓寄附したくらゐだから、同窓中の成功者だらう。若しジョーンズ博士が生きてゐたら、矢張り神さまの意思だつたと鼻を高くしたに相違ない。昔は親友でも今は貧富の懸隔が大分廣くなつて來た。その所爲か此方からは自然足遠くなると思つてゐたところへ、最近先方から旅行の途中寄つてくれた。その折子供の話が出た。

『帝大も高等學校もこゝで間に合ふのは結構だね』

『それで好い口があつても此處は動けないのさ』

『長男はもう出るのかい？』

『いや〳〵、未だ二年ある。僕も、此奴が卒業すると少しは肩が拔けるんだが。』

『次男が高等學校か？』

『それから中學校に女學校に小學校が二人さ。有らゆる學校へ行つてゐる。大變だよ』

『しかし教師値段もその後大いに騰貴したらうね？』

と寺島君は昔のことを覺えてゐた。

『二十四五年かゝつて二十五圓から百六十六圓六十六錢に上つたよ』

『それつきりかい？』

『それつきりさ』

『ひどい虐待だね』

『いや、これで優遇だよ。教頭の上は校長ばかりだ』

『龜川や林もそれぐらゐのところかい？』

『大同小異だ。林は平教員だから未だひどからうよ。僕の方の平教員には子供を中學校へ入れないで小僧に出すのがある』

『ノウ〳〵〳〵だね』

と寺島君は再び昔を思ひ出して笑つたが、

『驚いたよ。人の子を教育して自分の子の教育が出來ないのは悲慘な矛盾ぢやないか？』

と眞面目になつた。

『しかし背に腹は換へられないんだらうさ』

『君は何うだい？　斯う見ると年が寄つたぜ。白髪のことを灰色といつたが、正に灰色だね。ナカ／＼苦しいんだらう？』

『それは決して樂ぢやない。その中に恩給を利用して、私立へでも出なければ追つ着かなくなる』

と私は告白した。

『君』

『何だい？』

『惡く取るなよ』

と寺島君は稍躊躇した後、

『長男と次男を僕が引き受けようぢやないか？　僕も運が好いと君のやうになつてゐるんだ。他人ごととは思へない』

と言つた。

實際、卒業成績の好いこと必ずしも仕合せにならない。（挿繪——田中比左良）

毛皮の褌

大泉黒石

『自然に還れ！』

宏壯な邸にすまひ、華美な衣服を纏ひ、食べたいものを食べるだけ食べ、飲みたいものは飲むだけ飲み、聞きたいものを聞くだけ聞き、見たいものを見るだけ見、爲たいことを爲るだけすることの出來る上流社會の安逸生活に少しばかり飽き氣味の折から、ふいとしたことで手に取つて見たジヤン・ジヤツク・ルウソウの書物が、青年男爵戸田行麿氏の眠れる頭へ大鐵槌を喰はせたのは怪しむに足らぬことだ。もと／＼馬鹿ではなかつたので、一たび愕然として目が覺めて、今までの生活が間違つてゐたことに氣がつくと、男爵はソファの上に立ち上り、嘗て迦毘羅王城を立ちいでんとする時のお釋迦樣の大悟心をもつて『自然に還れ！』と劇的の聲をふるつた。

『おれは今日までの間違つた生活を棄てよう！　こんな邸！　こんな部屋！　男爵、召使、自動

車、金庫、夜會服、金時計、ダイヤモンド、葉卷、美顏術、香水、ココア、ビフテキ、チキンライス、ポークソテイ、シヤンペン、マンハツタン・コクテール、芝居、キネマ、ラヂオ、音樂會、慈善バザール、ソシアル、ダンス！、こいつら文明の惡物が、おれの社會の人間を、虛僞と虛飾と虛禮のほかに何もない生活に導いてるんだ。おれは、こんな馬鹿げた代物をみんな放擲して、人間本然の姿に立ち還らねばならんのだ！』

お釋迦樣が家出のときも、大ぶん王城の内に波紋が起つたし、クロポトキン公爵やトルストイ伯爵が、財産も權利もいらないといひ出したときも、やはり一族一門のあひだに、大悶着が起つたやうだ。わが戸田男爵家にも、泣くやら怒るやらの狼狽騷ぎが持ち上つたことはいふまでもない。

『いやはや。どうも怪しからんことでござる！　貴族ともあらうものが、えたいの知れぬ毛唐らの危險な書物などに手を觸れるから、氣が違ふのでござる。一體全體さやうなペストが、いつ何處から戸田家に侵入したのでござらう？』

親族會議がひらかれ『もう一度正氣に還つて冷靜熟考の上、途方もない了簡は斷然撤廢しても らはなければ困る』といふ決議になつたが、男爵の決心はひるがへらなかつた。正氣に還る代り

に自然に還ることを飽くまで主張したものだから、みんな呆れ返つて匙を投げた。

そこで男爵夫人——貞淑從順の譽高い美しき千枝子夫人——袖に涙をおさへていつた。

『それでは何う遊ばすお積りでございますか？』

『此邸を倅にゆづり、一切の家務は執事に賴んで、おれは人間のゐない處で、自然に親しい單純素朴剛健の生活を營まうと思ふんだ』

『わたくしは何うすればいゝんでせう？』

『お前もついて來るがいゝ』

『御一緒に參つても、いゝのでございますか』

『あゝ。いゝとも。來る勇氣があるかね？』

『ありませいでか。何處までも御供をさせて戴きたうございますわ』

『さうかい。さすがはおれの妻だ。偉いよ』

お釋迦樣に置いてけぼりをくつた夫人の耶輸陀羅姫は、こんなことになるはずで嫁入りしたのではなかつたと思つて、御亭主の聖者ぶりを喜ばなかつたのは勿論、猛烈に嘆いたが、戸田男爵の方は、噓だらけの人間の世界とお別れをするだけで、聖人賢者の修行をつむための家出ではないから、夫人携帶でも差支へないと聞いて、あきらめと呑み込みのいゝ千枝子夫人は涙を引つ込めた。

　かうなると、もう此の素晴し

い計畫に異議をとなへたところで始まる氣遣ひはないと思つて、誰も反對しない。問題は何處へ行けばいゝか？ 男爵は地圖を持出して捜しまはつた揚句、八丈島と青島とのまん中に、誰もゐないやうに思はれる小さい島を見つけたので、郵船會社へ問合はせると案内書を送つて來た。

其島には果して人がゐなかつた『おゝ。麗はしくも妙なるかな憧憬の小島よ！ 緑衣を纏ひ紅簪かざせる山――奇鳥囀り小獸戯れ遊ぶ谷！ 甘露湧く泉――目も絢爛に咲く椿の森！ 微風わたる椰子の葉蔭に魚躍る海濱！ 炎熱も知らず寒冷もない常春の悦樂に滿ちた繪と詩の花園！ 山に海に天産饒かなる樂土！ 人の生活、今や苦しく惱ましき灼熱黄塵に蔽はれ、醜き争闘に汚れつゝある時、人はこの爽凉の海氣と潑剌たる山靈とに何故抱かれようとはしないのであるか？ 味美きパインアップル、甘き西瓜、パパイア、バナヽ、マンゴオ、レモン、オレンヂは、常に〳〵地に滿ちてゐる。行け、行け、蓬萊の孤島へ！ 天然の理想郷へ！』

といふのが、案内書の冒頭文句であつた。

男爵は、子どものやうに眼を輝かしながら、ソフアの上に飛びあがつて勇み立つた。

『こゝだ！ こゝだ！ ふむ。味美きパインアップル！ 甘き西瓜か！ ふむ。パパイアにバナナ、愉快々々、どうだ、明日にでも出發しては！』

『でも、あなた、仕度が大變でございますもの』

と夫人は狼狽へていつた。

『いや仕度は何もいらん！　皮つきの木の枝で、弓と矢と槍を造らすりやいゝ』

『そ、そんなものを』

と夫人は驚いていつた。

『どう遊ばすんでございますか？』

『弓では山狩をする。木槍では魚を突くのだよ。海には魚類多く、鯖、鰹、大蝦、正覺坊、鮪、鱶などは最も夥しく漁れるとこゝに書いてある。釣竿も必要だ。それから熊の毛皮の褌を二人分、大急ぎで拵へるやうに、銀座の山崎洋裝店に電話で註文してくれ』

『熊の毛皮の褌？』

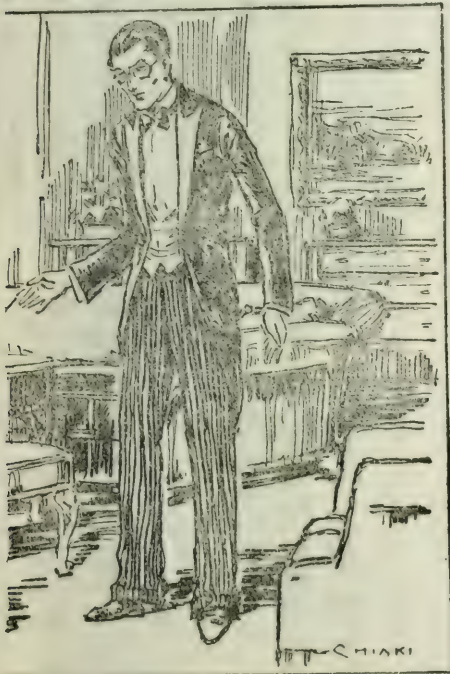
『む！　彼島では、おれもお前も年中素つ裸さ。一番暑い夏の日が九十何度かで、一等寒い冬の日が六十何度とかいふから、こんな窮屈な着物なんぞに用はない。褌一つで澤山だ。しかし木綿やメリヤスだと破れた場合に替りを買ふわけに行かんから、丈夫な毛皮で作つて置く必要がある。第一、毛皮の褌といふものは、われ〳〵太古の祖先が締めてをつたもんで、原始的な剛健の

氣象と、天地間に飾るところなき質朴な精神の象徴だからね。小鹿を追ひまはしたり、バナナ、の實をもぎ取つて、美味さうに食べたりしてゐるインカ族やアズテック族の繪を見たこともあるだらう。あゝいふ風に、善良無邪氣な山羊や野兎どもと一緒に生活する自然の兒は、やはり毛皮の褌でも締めないことには、恰好がつかないからね』

『それでは、あの……』

と夫人は恐怖の色を浮かべて聲をふるはした。

『わたくしも、その褌を締めるんでございますか？』

『さうさ。おれ達は、このやくざな文明の風俗習慣や思想や規則や、虚榮心の強い奴が拵へた厄介千萬な禮儀作法や不自然極まる虚飾や、洋食の食ひ方なん

て愚劣な束縛から自分を解放して、三千年前の石器時代に還つて、身も心も輕くなることが肝腎だ。交際する人が誰もゐなければ、風俗習慣も禮儀作法も、外見も飾りもないぢやないか。さうだらう。まさかその綺羅々々した裾の長いお洒落なドレッスを引き摺りながら、踵の高いエナメル塗りの纖細な靴の上に乘つかつて、音樂會も帝國ホテルも三越も帝劇もないのに、オペラ・バッグを提げて、日除けにもならぬパラソルなんぞ片手に、野山や海邊を驅けづりまはる譯にも行くまいぢやないか』

何しろ世間なみはづれに、外觀を飾り、デリケートな禮儀作法を守らねば、家門の恥になつたり無禮になつたりする社會に飼ひ慣らされて來た夫人なので、それを根柢から打ち壞さうといふ

歡迎の實行は、彼女にとつて、思ひもよらぬ大事件であり、且つ、何よりも困難な大事業といはねばならぬ。

千枝子夫人は驚きと怖れのあまり、もう少しで氣を失ふところだつたが、幸ひに、それほど氣の小さい性ではなかつたので、呆れもしたし、悲觀もしたが、これも宿世の因緣とあきらめ、かうなつたら、もう何處までも亭主まかせの、成るやうに成れと觀念して、愚痴の一つも、苦情の半分もいはなかつた。そんな狂人じみた眞似は死んでも厭だから、望んでしたいなら、一人で勝手にするがいゝといつたつて不都合ではないのに、苦勞がなくて呑氣で長壽はするかも知れないが、一めん、寔に心細い賴りない島流しの度胸をきめるなんて、物ずきにも出來ることではない、やはりこの社會には、珍らしい貞淑と、從順の心掛けと、亭主を亭主と思ふ愛情の賜とはいふものゝ、實際偉いといはねばならぬ。

『よろしうございますわ』

と賢夫人はキッパリ答へた。

『貴郎とならば、いづくの涯で何をしようと厭やいたしません。貴郎が狩人にお成り遊ばすなら、わたくしは海女にでも成つて、鮑の一つも獲ることを稽古いたしませうよ』

『やつ』と熱情家は妻に飛びつかんばかり感動した。

『よくいつてくれたたツ。その覺悟でなくつちや、折角「自然に還つて」も平和は得られないといふものだ。さあ。それでは仕度に掛らうぢやないか』

凡てが右の主義筆法だから、一日で仕度は出來上るほど簡略なものであつた。船の切符は買はれた。

贅澤な邸、高價な骨董、柔かい寢臺、乘り心地のいゝ自動車、便利な電話、綺羅びやかな衣裳、彈き馴れたピアノ、化粧の列んだ大鏡臺と、すべての文明に目をつぶりながら、潔く別れを告げた男爵夫婦は、靈岸島の波止場から、芝罘丸といふ二千噸の汽船に乘つた。出帆の時刻となつて汽笛が鳴つた。ヘルメツト帽に背廣といふ扮裝、弓矢と木槍と釣竿と山刀を天幕に卷いて肩に擔ぎ、ニコ〳〵笑ひながら甲板に立つてゐる男爵の手前、見送りの老執事や、書生や、子どもを抱いてゐる女中達は、泣きたいのを怺へて、

『お邸のことを御心配なく、お身體にお氣をつけ遊ばせ』

といひながら一齊にお辭儀をした。熊の毛皮の褌や鍋や火打石などを、風呂敷に包んでぶら下げてゐる粗末な風采の千枝子夫人は、眼に一ぱいの涙をためて、可愛い兒どもへ甲板の上から、

別れのハンカチを振りながら、

『お母様がゐないつて泣くんぢやありませんよ。お母様は遠方から、ちやんと見てゐますからね。坊や。それでは、皆さん、さやうなら、留守を頼みますよ』

と鼻聲でいつた。

船は出た。八丈島を後に、目的の小島へ着いたのは、翌々日の朝であつた。特別の頼みで短艇をおろしてくれた快活な船長は、男爵夫婦と握手を交しながら、

『お氣をつけなさらんと、この島には蛇がゐますよ』

と、案内書には書き落されたものらしい注意を與へてくれた。

『さやうなら』

と旅を續けて小笠原の方へ行く船客達は、かうして此の人無き島の砂濱に下り立つた男爵夫婦の姿を、波のかなたに小さくなつて消ゆるまで、甲板の上から不思議さうに見てゐた。

案内書の文句よりも遙に美しく明るい太陽の光につゝまれた緑と藍のいろ鮮やかに滴り耀く四邊の景色に、うつとり見惚れながら、男爵は有頂天の喜びをもつて叫んだ。

『素敵滅法だ！　こんな處に誰もやつて來ないとは何うした迂濶だ。やあ、あの岬に信天翁が群

つてゐる。あの岩蔭に大きな魚が跳ねたぞ。やあ、あの椰子の森に栗鼠が驅け込んだ。やあ、あの芭蕉の樹にバナヽが鈴なりだ！　ほゝツ。有り難いなツ』

『まるで夢のやうで御座いますのね』

と千枝子夫人も胸を躍らせる。

『まあ、あそこにパパイアがありますわ。溪川が流れてゐる！　あそこにテントを張りませうよ』

『うむ！　それから洞窟を見つけて引越すか。自然に還る第一歩だ。さあ行かう』

といふやうな調子で、石器時代の生活の段取りに掛つた。

天幕を張つて、脫帽、脫衣、脫靴し、熊の毛皮の褌一つになると、千枝子夫人は身を縮めて極り惡さうにいつた。

『體色が白すぎますのね』

『今に日に燒けて原始人らしくなるさ。おれは食ひ物を獲つて來るから、お前は留守をしてゝくれ』

と、男爵は山刀を引つさげて森の中へ入つて行つた。が、しばらくすると、バナヽにパパイア

に夏蜜柑を山程抱へて、ニコ／＼笑ひながら戻つて來た。

「いや實に豐富にある！　しかも瓦斯の力で熟らした都會の果實とは、どだい風味が違ふんだから素晴らしいよ。おれもこんなのははじめてなんだから、うんと食べて來た。さあ。足を投げ出すなり、あぐらを搔くなり、好きなやうにして、みんなお上り。食卓も茶碗も、箸もナイフも、匙も肉叉もいらないし、ナフキンを胸に掛ける手數もないし、口をつぼめて御飯を一粒づつ運ぶお體裁もいらんから、氣樂なもんぢやないか。はツは、長壽する譯だよ。これも自然に還つた得だね」

「ほんとに、まあ何んてソレツシュな香氣でせう！」

といひながら口を一ぱいに

開けたら、どんなに大きくあくらのかといふことを生れてはじめて知つて驚いたやうな顔つきで、夫人は片つぱしから貪り食つた。さうして、日が暮れぬうちに、天幕の中へ羊歯の葉を積み重ね、肘を枕に夫婦列んで、ぐつすり疲れ眠つたのは天晴れ石器時代的であつたが、猿人に近い三千年前の人間が腹の中に持つてゐた代物とは、もう大ぶん趣の異つた胃袋と腸の持主達は、翌朝、目が醒めてから、見事にひどい下痢をしてオツ魂消たのみならず、バナヽや、パパイアや、夏蜜柑を見ると、嘔吐いて、どだい食ふ氣がしないのである。

『こりや不可！　これぢや仕樣がない！　矢張り肉を食べなくちや、果物ばかりではいけないん

だ。よろしい！』

男爵は弓矢を持つて山狩に出掛けた。殆ど一日がかりで森や谷を歩きまはり、獲物を見つけ次第に射つくしたが兎一匹とれず、へと〳〵になつて歸つて來た。

『文明の兇器はおれの主義に反するから持つて來なかつたが、やつぱり鐵砲でなくちや命中しないよ。それで木の上の栗鼠を追ひまはして見るが、彼奴らの素敏つこいのには迚も敵はん。どうも野蠻人のやうに巧な木登りは出來ないね。おまけに蝙蝠には顔を引つぱたかれる。蝮には睨まれる。烏蛇には追つかけられる。手は掻ツ疵だらけ。足の裏は豆一ぱい蹈み出しちやつて、這ふ這ふ逃げて來たんだが、おや、お前の眼の上の赤い瘤は何うした？』

『やられました。椰子の梢から、ゐもりが落ちて來て、いきなり噛みつきましたから、アツといひさま跳び上つた拍子に、草の中に隱れてゐた百足を踏みつけて、こんなに螫されましたわ』

と、腫れ上つた素足の踵を上げて見せた。

『不可。不可。こんなことでは仕樣がない！』

男爵は、翌日から木槍を持つて、岬へ魚突きに通つたが、これも矢つ張り三千年前の男の手際でなければ蛸一匹獲れないことに氣がつくと、木槍を廢して釣竿に替へたが、これとても昔取ら

ぬ杵づかとあつて、肴屋に電話で註文するほど易くはない。

『馬鹿にしてやがる。畜生！　こんなことなら、罐詰でもウンと仕入れて來りやよかつた。ピタミン何とかで骨ばなれしさうだ！』

男爵はすつかり悲觀しながら、頭の上に悠長な輪を描いて高く低く群がり舞ふ信天翁へ目を向ける。とさうだ、もうかうなつたら、こいつでも捉へてやらうかといふ氣になつて、石をひろひ上げ、狙ひ定めてボン〳〵投げつけた。が、矢張りこれも南アメリカ土人のやうに、巧くは行かない。男爵の礫はなか〳〵當つてくれなかつた。そこで今度は、蚯蚓のついた釣絲を砂の上に遠く投げやつたところが、こいつは圖に當つて、まつしぐらに一羽舞ひ降りて來るや否や、パクリと餌を嚥み込んだ。メたツ！　糸のはしを引つぱると、釣針が咽喉に引つ掛つて、パタ〳〵暴れ出したので、轉がるやうに飛んで行つた策士は、この間拔けな海鳥と、砂だらけになつてすつたもんだの格鬪の末に、やツと押へつけて首をねぢ折つた。信天翁はグウといつてへたばつた。

『畜生！　骨を折らせやがつて、たうとう參つたなツ』

……男爵は、額の汗と砂とを四方八面に振りとばしながら、愛情こまやかなる夫人の許へ、この喜びと勝利の誇りを分つべく、韋駄天に凱旋した。

もういゝ加減、御亭主の腕前に絶望してゐる夫人が、この運の悪い海鳥を見て驚嘆したことはいふまでもない。

『まあ！　貴郎。よくお獲り遊ばしたわねェ』

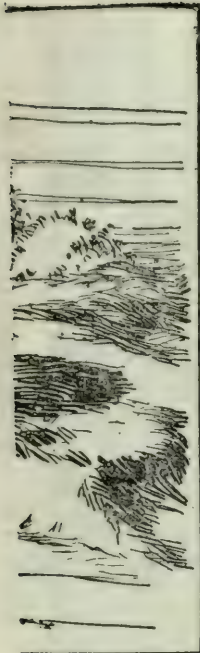
『うむ。しかし此奴め信天翁とはいつたもんだねッ。とても阿呆さ。どうして食はうか？』

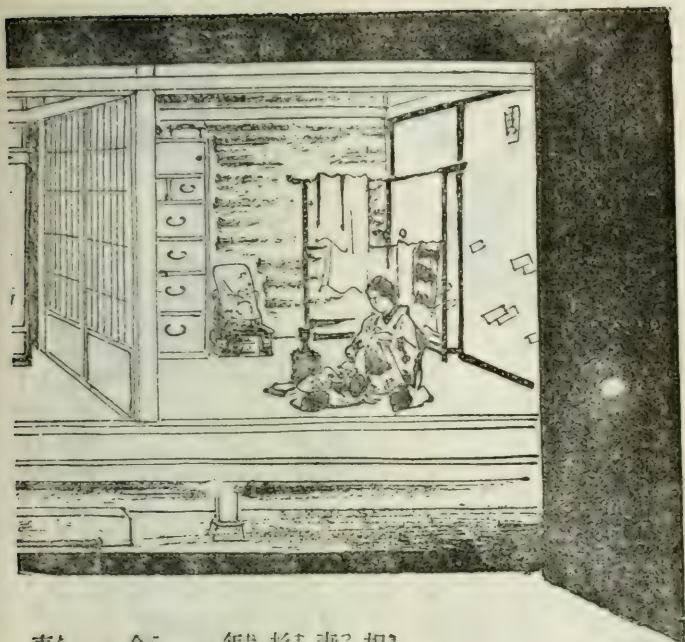
『焼いては何う？』

『よからう！』

だが、羽根をもぎ取り、毛を挘り去つて見ると、鳩ほどの目方もない代物だ。苦心慘憺。千枝子夫人が燧石でおこした火に焙ると、焼鳥のやうな香ばしい匂ひを放つて、さも美味さうだから、もつと早く獲つて食へばよかつたといひながら小さく引裂いて口へ入れることは入れたものゝ、

さて、いかなる空腹にも、これが納まつたものであらうか？　二人は顔を顰め合つて一時に吐き出した。

『こりや不味い！　ペッペッ』

『食べられやしない。こんなものは！　あゝ驚いた！』
　と夫人は、燧石で打つ潰した兩手の指を怨めしげに見遣りながらべソを掻く。男爵は燒きかけの鳥肉を地べたへ叩きつけた。
『畜生！　なんてえ惡魔だ。貴樣は！』
『ほんたうに、まあ何んて厭な海鳥でせう！　昔の人逹はこんなものを食べたんでせうか？　それとも、わたくし逹が食べ馴れないせゐかしら？』
『さあ、せめて、ソースかマヨネ

ーズか』
『胡椒か味の素でもあれば、何とか食べる方法もないことはありますまいにね』
『うむ。食へる物は獲れず。獲れる物は食へず。體力消衰、元氣沈滅。いや全く殖えるつもりの體量は日に日に減る一方だし、赤銅色になる豫定の顏は日に日に蒼くなつて頰骨さへ飛び出して情ない姿になつたものさ。こんなことなら、來るんぢやなかつたよ。こいつは何うでも考へ直さなくちやなるまいて。おれは毎晩ホテルでビフテキを食つてコクテルを飮む夢を見るんだよ。ほんとに食ひたいな、おれ達の體はバナヽでは耐てないんだ。殘念ながら東京に還らう』
『わたくしだつて』
夫人は淚ぐんでいつた。
『歸りたうございますわ、毎晩のやうに、パリ院でお化粧する夢ばかり見るんですもの！』
バナヽと信天翁の前に兜を脫いで降參した夫婦は、かくて、人間といふものは、もはや自然に還る資格を失つてゐるものであるといふ發見を只一つの貧弱な土產に、熊の毛皮の褌を脫いでしまつたのである。（挿畫――富田千秋）

喜劇
狂言
COME
K.T

時の氏神

菊池寛

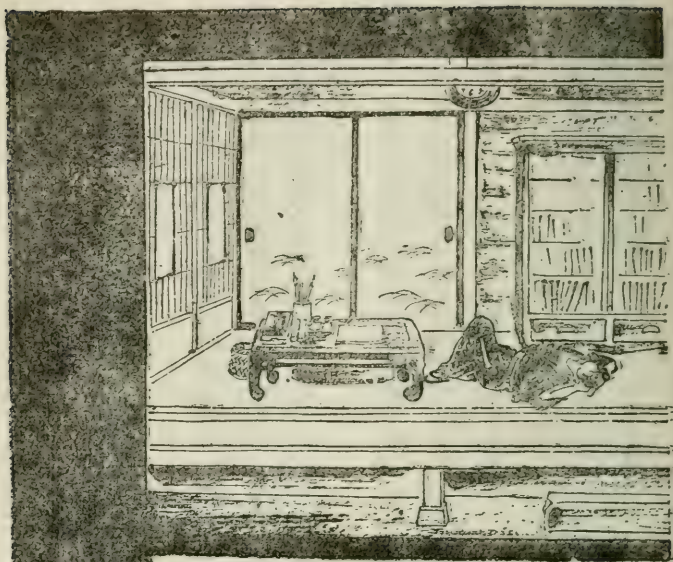
人物

相良英作　年三十位、貧しき小說家

妻ぬい子　二十四、五

杉木芳子　ぬい子の從妹、ぬい子と同年位

時　今日

所　東京の郊外

情景

相良英作の家。若葉の茂れる森を背景とした三間ばかりの家。玄關が二疊、その次ぎが六疊。二疊の玄關は見えない。六疊の奥の壁には、大きい書棚があり、洋書と和書とが、半分づつ位並べられてゐる。緣側近く机を出してある。机は、商賣柄紫檀である。主人の相良英作は、机の横に、座蒲團を四つに折つて枕とし、ねそべつてゐる。

四疊半は、細君の居間である。奥の壁に三つ重ねの簞笥が一つ立てかけてある。簞笥の右に衣架があり、二三枚の着物と、色のあせた夏外套などがかけてあ

る。ぬい子、自分の着物らしい冬物をほどいてゐる。時々、障子越しに六疊間の方を氣にしてゐる。英作は、いつまで經つても寢てゐる。

ぬい子　（獨言のやうに、その實は夫に聞かせるやうに）今日が、二十八日、あすが二十九日、もう四日しかないわねえ。

（ぬい子、夫の方から何か云ひやしないかと耳を傾けてゐる）

ぬい子　あゝ、いつが來たら月末の心配をしなくつてもよくなるのかしら。家賃が、四月もたまつてゐるところへ、また一月溜めてしまふんだもの、いやになつてしまふわねえ。

（夫は、何とも云はない）

ぬい子　米屋だつて、月末には十圓や十五圓は、何うしても入れてやらなきや、もう持つて來なくなるわ。全く親切ないゝお米屋さんだのに。此方が、わるいんだわ、ほんたうに。

（だん〳〵聲が高くなる。英作寢がへりを打つ）

ぬい子　ちよいと、ねえ貴君。

（英作、だまつて返事しない）

ぬい子　ねえ、もし、起きていらつしやるの。

（まだ返事をしない）

ぬい子　もし、起きていらつしやるの。もし、起きていらつしやるのつたら。

（ぬい子、いら〳〵して來て、障子をはげしく開けろ）

英作　馬鹿！（突拍子もない聲で叫ぶ）

ぬい子　びつくりするわねえ。そんな大きな聲を出して。

英作　だつて、原稿を書いてしまふまでは、此の障子を絶對に開けてはいけないと云つたぢやないか。

（仰向けに寢ながら怒鳴る）

ぬい子　でも、原稿を書く〳〵と仰しやつて、朝から寢てばかりいらつしやるぢやないの。

英作　だつて、仕方がないよ。考へがまとまらない時は、どんなにあせつたつて、一行だつて書けやしないよ。

ぬい子　考へをまとめるなんて仰しやつて、先刻なんか、いびきをかいて、ぐう〳〵寢ていらつしやるのですもの。妾、いやになつてしまふわ。

英作　いやになつたら、勝手にしやがれ。

ぬい子　えゝ、するわ。昨夕なんか、何處へ行つていらつしやつたの。

英　作　大きなお世話だ。

ぬい子　えゝ、大きなお世話でもねえ、貴君のするまゝに委して置いたら、どんな目に會ふか、分らないんですものねえ。昨夕なんか、きつとさうよ。××新聞社へ行つて此間の原稿料を取つて、プランタンへいらつしやつたのだわ。

英　作　下品な邪推をするのはおよしよ。

ぬい子　いつも、貴君の缺點をつかまへると、屹度下品な邪推だとおつしやるのねえ。

英　作　さうぢやないか。さうに違ひないよ。

ぬい子　へえ、下品な邪推でせうか。ぢや、貴君の袂に在つた五圓札は、何處でお貰ひになつたの。

英　作　（半ば身體を起し）なんだ。お前は俺の袂まで探すのかい。

ぬい子　探したら惡い。

英　作　惡いとも。いくら夫婦だつて、人の袂まで探す奴があるかい。

ぬい子　だつて、少しでもお金がは入ると、直ぐ外へいらつしやるんだもの。それぢや、たまら

ないわ、貴君のは、樂は外で苦が内ですもの。それぢや、妾がやり切れないわ。貴君のは、お金があるときは外を歩き廻つて、お金がなくなると、家へ休息に歸つて來るんですもの。それぢや、妾が何處に立つ瀨があるの。

英作　お前と、顏を見合はせてゐたつて、面白くないからね。

ぬい子　え、どうせさうですよ。プランタンへ行つて、貴君の好きな女給とでも話していらしつた方が、よつぽどいゝでせうね。

英作　ふゝむ。

ぬい子　ふゝむぢやないわよ。此間の晩なんか、何處へ、いらしつたの。川瀨さんの處でかるたをして遲くなつたなんて、ウソでせう。

英作　馬鹿！

ぬい子　何が馬鹿です。妾だつて、貴君が外の女へ心を移しかけてゐるか居ないか位は、分つてよ。

英作　外の女、そんなものがあれば、俺はもつと幸福な筈だよ。

ぬい子　えゝないの。なくつてよく毎晩遲くまで、お歸りになりませんわねえ。

英作　俺の自由だよ。

ぬい子　まあ、大變な自由ですね。

英作　あゝ、いやだ〳〵。いつだつて、かうなんだからな。俺が書けないで、むしやくしやして居ると、きつとお前がぐづ

ぐづ云つて、
俺の心を二倍
にも三倍にも
荒ませてしま
ふんだからな。
あゝ、いやだ〳〵。
何處かへ行きたい。

ぬい子　えゝ、それより
か、妾が何處かへ出て
行つて上げますよ。貴君は、どうせ妾が鼻についてゐるのですよ。どうせお互に戀愛がなくて
結婚したんですものねえ。貴君に、新しい戀愛が出來れば、妾が捨てられるのに定まつてゐる
のですものねえ。今の裡に、妾出て行くわ。出て行つて、職業婦人にでもなつた方が、どれ丈
氣樂だか分らないわ。

英作　あゝ、うるさい〳〵。頭ががん〳〵してくらあ。

ぬい子　えゝどうせさうでせうよ。いやになつた妾に、話しかけられるんですものねえ。だつてさ、昨夕だつて夜二時に歸つて來るんですもの。それで書けないと、妾の故にするんですもの。おゝ、口惜しい。

英作　えゝ、うるさい。お前とは口を利かない！　玆を開けたら、承知しないぞ。

（障子を、ぴつしやり閉める）

ぬい子　えゝ、開けるわよ。

（ぬい子、がらりと開ける。英作やゝ蒼くなる）

英作　よし、もう一度開けて見ろ。ぶん毆る。

（また障子をぴつしやりと閉める）

ぬい子　何度でもあけるわよ。

（ぬい子、障子を手荒く開ける。英作、火のやうに怒る。四疊半の方へ飛び込んで行つて、ぬい子の頰をぴしやりと叩く）

ぬい子　口惜しい。（泣く）

英作　もう一度開けて見ろ。

（英作また障子を閉める）

英作　さあ、開けて見ろ。

ぬい子　開けるわよ。死んだつて、開けるわよ。

（ぬい子障子に飛びつく、障子はづれる。英作、ぬい子に飛びつき、三つ四つ頬を叩く。ぬい子わつと泣き伏す）

英作　ざまを見ろ。

（障子を閉め切り、また机の横に寝そべる。ぬい子、可なり泣きつゞける。それから起き上る。箪笥の引き出しを開け、着物を三四枚取り出し、風呂敷につつむ。箪笥の小さい引出しから、財布を出す。鏡臺の前に行つて、一寸顔をなほす。そして、夫に知られないやうに、外へ出ようとする）

英作　（障子越しに）おい、お前。何處かへ出るのかい。

ぬい子　出たら悪い？

英作　悪くはないさ。

ぬい子　ぢや、大きにお世話ですね。

英作　うむ、先づさうかも知れない。だが、何處へ行くんだい。

ぬい子　外に行くところはないわ。姉さんの處へ。
英作　さうか。
ぬい子　えゝ、さうよ。
英作　姉さんは、俺達の關係を何う思つてゐるか知つてゐるか。
ぬい子　えゝ、知つてゐるわ。姉さんは、妾に、貴君と別れろ〳〵と口癖に云つてゐますわ。
英作　さうだらう。その姉さんの處へお前が頼つて行けば、お前と俺の關係は、これきりになるかも知れないよ。
ぬい子　えゝさうよ。その位なこと知つてゐるわ。
英作　知つてゐれば、それでいゝんだ。俺は、お前が無意識に動いてゐやしないかと思つて一寸警告したんだ。
ぬい子　そんなこと、御心配御無用よ。
英作　さうか。ぢや、お行きよ。
ぬい子　えゝ、行きますとも。
（出かゝつてから、ふと氣が付いたやうに）

ぬい子　さう〳〵、瓦斯を點けたまゝにしておいた。

（ぬい子、臺所の方へは入る。その時、玄關に女の聲がする）

××　御免下さい。御免下さい。

（英作、ぬい子が出て來るかと待つてゐるが出て來ない）

××　御免下さい！　御免下さい！

（ぬい子、まだ出て來ない。英作、一寸臺所をのぞいたが、ぬい子の姿が見えないらしいので、玄關へ出る）

英作　あゝ、何方ですか。

××　あの、此方は相良英作さんのお宅ですか、小說家の？

英作　えゝ、さうです。

××　あの、ぬい子さんいらつしやいますか。妾、杉本芳子です。

英作　あゝ、さうですか。あの、横濱にいらつしやる？

芳子　えゝ、さうです。

英作　あゝ、さうですか、一寸、お待ち下さい。

（英作、四疊半へ歸つて來、臺所をのぞき込みながら、叫ぶ）

英作　おい／＼。お客さまだぞ。

（ぬい子あわてゝ出て來る）

ぬい子　どなた？

英作　横濱の芳子さん。

ぬい子　（當惑と駭きとの表情で）

まあ、芳子さん！

（あわてゝ風呂敷包みを押入れにかくし、玄關へ出る）

ぬい子　まあ。

芳子　まあ。

ぬい子　よくいらつしやいました。妾、駭いてしまつたわ。

芳子　隨分、しばらくでしたわねえ。もう、三年位になりますわ。

ぬい子　さあ、どうぞ。

芳子　失禮をさせていたゞくわ。

（芳子上つて來る。見ると、ぬい子が作つたのと同じ位の風呂敷包みを持つてゐる）

ぬい子　ほんたうにしばらくでしたわねえ。御機嫌よろしう。いつも御無沙汰ばかりで。

芳子　いゝえ、妾こそ。お變りなくて結構ですわ。

（英作モヂ〳〵してゐたが、挨拶する）

英作　僕が相良です。初めまして。

芳子　初めまして。お名前は、兼々承つてゐました。

ぬい子　ほんたうに、一度尋ねて來て下さればいゝと思つてゐましたの。

芳子　今年の正月にも、一度東京へ參りましたのですよ。宅と一緒に。でも、銀座から此方へ參るのは、大變でございますからね。

ぬい子　ほんたうですわ。銀座から此方へいらつしやる方が、横濱から銀座へいらつしやるより時間がかゝるでせう。

芳子　ほんたうですわ。

ぬい子　地震のときは、お手紙をありがたう。もう、横濱の方は、バラック立ちまして？

芳子　東京ほど、はか〴〵しくございませんわ。

英作　貴女の方は、火事は大丈夫だつたさうですが、壁なんか落ちたでせう。

芳子　壁なんか隨分落ちましたわ。

ぬい子　御主人は、やつぱり商會へ出ていらつしやるんですか。

芳子　（一寸憂鬱になる）えゝ。

ぬい子　今日は、御一緒ぢやなかつたのですか。

芳子　えゝ。

ぬい子　お一人で。

芳子　えゝ。

ぬい子　何か東京に御用でも。

芳子　あの妾、家を出て來ましたの。

ぬい子　家を出ていらつしやつたつて?

芳子　もう家へ歸るまいと思つてゐますの。

ぬい子　まあ、どうなすつたのです。

英作　御主人と喧嘩なすつたんですか。

芳子　えゝ、まあ。

ぬい子　ほんたうですか。

芳子　えゝ、ほんたうですの。

ぬい子　御主人は、たいへん親切な方だと云ふ事を承つてゐましたがね。

芳　子　それは、さうなんですけれども。

ぬい子　それに、なぜ、喧嘩なすつたの。

芳　子　でも、あまり理解がなさ過ぎるのですもの。

ぬい子　さうですかね。

英　作　直接には、どんな理由で喧嘩なすつたんです。

芳　子　（恥しさうにうつむき）お恥しくて申上げられません。

英　作　そりやさうでせう。あはゝゝゝ。

ぬい子　でも、お歸りにならないなんて、本當ですか。

芳　子　えゝ、歸りませんつもりです。

ぬい子　ぢや、これから何うなさるおつもりです。

芳　子　東京に何か職業はございませんでせうか。

（ぬい子默つてゐる）

英　作　（ぬい子に）お前、何か心當りがありさうだね。よく、職業婦人になると云つてゐるぢやないか。

ぬい子　（苦笑しながら）心當りなんかないわ。

芳　子　妾、何でもして行きたいと思ひますの。女中でも何でもいゝのです。

ぬい子　よく新聞の案内欄などに、いろ〳〵廣告が出てゐるやうですけれど、いざとなると仲々いゝのがございませんやうですわね。

芳　子　雜誌の編輯の手傳と云ふやうなものはございませんでせうか。妾、此方へ伺へばそんな口があるかと思ひましたの。

英　作　（苦笑しながら）そんな口は、なかなか希望者が多いんですからね。

ぬい子　職業婦人、職業婦人などとよく云ひますが、いざとなるといゝ口はございませんわ。

芳　子　でも、妾根よく探せば、ないことはないと思ひますの。そして、どんな口でも見つかつたら、それにかじり付いて、一生懸命に自分の生活を切り拓いて行かうと思ひますの。

ぬい子　そりやねえ。何でも一心におやりになると……（氣のないやうに、中途で云ひ止む）

英　作　だが、御主人は、そんなにいけない方なんですか。

芳　子　いけないいつて。

英　作　つまり問題は、貴女を愛してゐるかゐないかの問題ですね。貴女を愛してゐないんで

すか。

芳子　（誇を傷けられた如くに昂然として）いゝえ、そんなことはございませんわ。

英作　貴女を愛していらつしやるなら、問題ないぢやありませんか。

芳子　でも、今日なんか、随分ひどいことを云ふんですもの。出て行くんなら出て行け、勝手にしろなど云ふんですもの。妾口惜しくつて。

（英作とぬい子、顔見合して苦笑する）

英作　でも、それは、貴女が何か云つたからぢやありませんか。

芳子　えゝ、それはさうですわ。

英作　それ御覧なさい。男と云ふものは、やつぱり、男としての意地がありますからね、女房から何か云はれると、男の意地として、つい心にもなく過激なことを云つてしまふのです。

僕なども、さうですよ。原稿が書けなくつてむしやくしやしてゐる時、此奴が傍から何か云ふと、癪に觸つて毆つたりなんかするんですよ。出て行け、勝手にしやがれなんてよく云ふんですよ。そんな時は云はずに居られないんですよ。だが、それで女房の方が、飛び出すとするでせう。普通ならば、二三日も經てば歸つて來るですね。だが、人生と云ふものは、偶然と云ふものが惡戯をやりますからね。貴女の場合を例に取りますがね、一時の感情からいがみ合つて、お家を出るでせう。心の底では別れる氣は少しもない……。

芳子　あら、少しもないことありませんわ。

英作　まあ、ある程度あるとしてもいゝですよ。亭主が血眼になつて探してゐるのが分つたら歸つて來よう。そんな氣で、家を出るとしますよ。だが、貴女の場合は、茲まで無事に來られたからいゝやうなものゝ、若し途中の電車の中位で、親切さうな男からでも話しかけられるでせう。家を出て、むしやくしやしてゐるし、寂しいし、つい甘い言葉をかけられると、その男に賴る氣が起るでせう。

芳子　あら、そんな事ないわ。そんな浮ついてゐるのとは違ふわ。

英作　そんなに違ふんなら、家を飛び出さなけりやいゝぢやありませんか。

芳子　まあ。おほゝゝゝ。

ぬい子　おほゝゝゝ。

英作　とにかく、結婚した以上、容易に別れるものぢやありませんよ。夫婦と云ふものが、人生の中で一番大きい宿命ですからねえ。しかも、同棲して五六年も經てば、感覺的には鼻についてゐても、どこか心の底に離れられない愛があるのです。一寸した感情の衝突で飛び出してそれから間違が起つて、心の底では別れたくない夫婦が、別れる場合がいくらもありますよ。たとへば、貴女方の場合です。貴女は、電車の中で、親切な男に會はなかつたからいゝやうな

ものゝ、貴女の御主人の方です。いつもカフェへなんかいらつしやいませんか。

芳子　そんな所へは、ちつとも參りません。

英作　ところが、貴女に家出されたむしやくしやで、きつとカフェへ行かれるでせう。それとも、待合へでも行かれるかしら。

芳子　まあ穢らはしい。妾の主人に限つて待合なんかへは、足踏みもした事ございませんわ。

英作　ぢやカフェへ行かれるとするでせう。貴女の御主人は失禮ですがまだお若いのでせう。

芳子　二十八でございます。

英作　お若いですね。商會へ出ていらつしやるとすれば、ハイカラな好男子でせう。

芳子　あら、冗談おつしやつちやいやだわ。でも……。あら恥しい！

英作　でも、いゝ男でせう。

芳子　恥しいわ。そんなことおつしやつちやいやだわ。

英作　それ、御覧なさい！　カフェへなんか行くと、女給の方で、わい／＼騷ぐでせう。貴女の御主人だつて、家へ歸つたつてつまらないから、自然腰を落着ける。女給の中では、一番背の高い感じのいゝ、眼の下に小さいほくろがあるので、却つて色がくつきり白く見える娘が、

貴女の御主人の傍へ來て坐るでせう。

ぬい子　まあ、貴君、女給の描寫、いやに精しいのね。

英作　なあに、空想して話してゐるんだよ。

ぬい子　何うですかね、そんな女給が何處かにゐるんでせう。

英作　（ぬい子に）まあ、お前默つておいで。とにかく、その女給に二言三言話をすると、この女給は、案外話が分る。貴女の御主人は、文學がお好きですか。

芳子　えゝ、大好きなのです。

英作　文學の話をして見ると、案外話が出來る。女給に似合はず敎養がある。感じが明るくて、ハキハキしてゐる。新時代の女と云ふ氣がする。あくる日になつても、貴女が歸つて來ないから同じカフエへ行く。だん〳〵この女給が好きになる。初めは、貴女の行方を探すつもりでゐたのが、この女給に氣を取られてゐるので、探す氣がなくなる。貴女は貴女で、茲の家にでもゐて、御主人が迎ひに來たら、歸つてやらうと思つてゐたのが、こんな譯で迎ひが來ないものだから、えゝそんな亭主ならと云ふ氣になつて、いよ〳〵別れる氣になる。御主人の方もこの女給と結婚する氣か何かになつて、貴女のことを思ひ切る。それ御覽なさい！　最初は、

別れる氣で飛び出したのではなくて、おしまひには別れなければならなくなるでせう。
ぬい子　（感動したる如く）さうね。
英作　（ぬい子に）お前にも分つたかい。
ぬい子　（反撥的に）分らないわよ。
英作　何うです。芳子さん、何うしてゞも、お歸りにならないのですか。
芳子　（ふさぎ込んでゐる）でも、妾決して歸つて來ないと云つて來たのですもの。
英作　でもそれは、喧嘩の意地張りでせう。意地は女の方から捨てなけりや。
芳子　でも、妾東京で新しい生活を……。
英作　貴女の結婚生活が不滿で、新しい生活を望んでいらつしやるのでしたら大間違ですよ。田舍に居れば、東京の生活は、何だかいゝやうな氣がするのですよ。だが、それは夜目遠目ですよ。僕は、一昨日近所の戸山ケ原へ行きました。そして、腰を下さうと思つて、足下の芝生を見ますと、芝生が薄くて汚いのです。二三間向うを見ると其處の芝生が、いかにもよく茂つてキレイなのです。で、其處まで歩いて行つて腰をおろさうとすると、其處も其上から見ると、前と同じ樣に薄くて汚いのです。所が、其處から前にゐた所を見ると、今度は前にゐる

た處の方が、よく茂つてゐて、キレイに見えるのです。人生もさうです。遠方から見ると、美しくキレイに見えるのです。だが、その生活の中に立つと、薄くて汚いのです。薄くて汚くつても、其處へ滿足して、腰を下すのが人生です。

（芳子、ぬい子、默つてゐる）

英作　どうです。お歸りになる氣はありませんかね。

芳子　でも、妾、ほんたうに決心して參つたのですもの。

英作　さうですかね。僕の云つてゐることに、間違はないつもりですがね。

芳子　それは、よく分つてゐます。

英作　さうですか。ぢや、まあよくお考へなさい。

芳子　あの、職業が見つかるまで、四五日お邪魔になつてもよろしいでせうか。

英作 （あまり元氣なく） それは、どうぞ。

ぬい子 御ゆつくり。

芳子 ぬい子さん、この近所に、郵便局ありませんか。

ぬい子 えゝ、ありますよ。でも、妾使に行つてあげませうか。

芳子 いゝえ、結構なの。自分で行きますわ。

ぬい子 あのね、家を出て左へずつと行つて、突き當つて、少し右へ行つて、直ぐ左へ折れて、二丁ばかり行くとありますわ。

芳子 左へ行つて、右へ行つて、左へですね。

ぬい子 さう。

芳子 ぢや、妾一寸行つて來ますわ。

ぬい子　ぢや、妾その間に、御飯の支度にかゝりますわ。

芳子　すみませんが、これ、一寸何處かへおしまひ下さいませな。

（風呂敷包みをぬい子受取つて、押入の中へ入れる）

芳子　ぢや、行つて來ますわ。

ぬい子　行つていらつしやい。

（芳子出てゆく。ぬい子と英作と顔見合はせる）

ぬい子　困つたわねえ。

英作　うむ、困つた。あんな人に居られちや、何も書けやしない。

ぬい子　それよりも、寝る蒲團がないわ。

英作　こんな狹い家に、他人が居られちや、氣になつて何も出來やしない。

ぬい子　ほんたうに、歸らないつもりなのかしら。

英作　どうだかね。先刻亭主ののろけを云つてゐたぢやないか。俺が、好男子だらうと云つてやつたら、嬉しがつてゐたぢやないか。

ぬい子　あれぢや、未練があるんでせうね。

英作　あるだらうどころか、大有りだよ。別れる氣なんか、ちつともないんだよ。つまり、痴話喧嘩の延長だよ。

ぬい子　延長もいゝけれど、こんな所へ來て宿られちや迷惑ですわ。

英作　迷惑だとも。俺の家なんか、お客様どころか、家族の者を容れる設備だつてないんだからな。

ぬい子　どうしませう。

英作　だが、明日は歸るだらう。亭主に知らせてから、つまり自分の有難味を亭主に知らせてから、ゆつくり歸るつもりだらう。

ぬい子　だつて、ゆつくりなんか歸られちや、此方が困るわ。

英作　今晩徹夜してでも書かうと思つてゐたが、これぢや、駄目だ。

ぬい子　貴君、もつと云はない。先刻の貴君の話、筋道がよく立つてゐるわ。貴君は、あんな話させると上手ね。

英作　おだてるない。お前にも半分聞かせるのだ。

ぬい子　妾もさう思つて聞いてゐたの。

英　作　お前。やつぱり、姉さんの處へ行くか。

ぬい子　それよりか、芳子さんの問題が、大問題だわ。

英　作　兄弟牆にせめげども、外侮を禦ぐか……あはゝゝゝ。

ぬい子　貴君。何うかして下さいよ。

英　作　だつて、追ひ出す譯にも行かないだらう。

ぬい子　ねえ、かうしない。先刻の貴君の話で、芳子さん、隨分里心がついてゐるでせう。

英　作　ついて居るとも。俺は家へ電報を打ちに行つたのだらうと、睨んでゐるんだよ。

ぬい子　さうだわ。きつとさうだわ。妾もさう思つたのよ、ねえ、貴君。妾、もつと芳子さんに里心を付けようと思ふわ。

英　作　何うするんだい。

ぬい子　あのね。

英　作　なんだい。

ぬい子　一寸恥しいことよ。

英　作　何うするんだい。

ぬい子　貴君と妾とがね、芳子さんの前で、うんと仲よくするの。

英作　そんなこと出來ないよ。だつて、お前、先刻俺と喧嘩したぢやないか。

ぬい子　だから、表面丈でいゝのよ。なるべく仲よくして、芳子さんを當てゝあげるのよ。さうすれば、芳子さん、きつと堪らなくなつし歸るわ。

英作　名案だね。やつて見るかね。

ぬい子　えゝ、やりませうよ。妾、御飯をこさへるからね。芳子さんが歸つて來たら、東京中で一番仲のいゝ夫婦のやうに行動するのよ。

英作　少し面倒くさいが、やらう。

ぬい子　やつてくれる。嬉しいわ。

ぬい子、臺所へ行く。英作、机の横でまた寢そべる所にて舞臺を一時くらくする。そして、時間が四時間ばかり經つたことにする。

舞臺再び明るくなると、四疊半の方に蒲團が敷かれてゐる。それに芳子が寢てゐる。六疊との間の障子は閉められ、英作は、机に向つてゐる。ぬい子、横で着物などほどいてゐる。英作とぬい子と、顔を見合して苦笑する。

英作　ぬい子（非常に優しく）

ぬい子　はい。（非常に甘えたやうに）

英作　お前。この原稿を清書してくれないか。

ぬい子　えゝ、するわ。妾、少しでも貴君のお仕事の手傳ひが出來るのが、一番嬉しいの。

（ぬい子、原稿紙を受取り、それが白紙であるのを、危く吹き出さうとする）

英作　お前、そのペンぢや書き惡いことない。これをお使ひ。

（英作、硯箱の中から、錐を出してぬい子に渡さうとする。ぬい子、ぷつと笑はうとするのを堪へて）

ぬい子　ありがたう。ぢや、この萬年筆借りるわ。妾が使つちや癖がつかないこと。

英作　大丈夫だよ。

（芳子は寝られないと見えて、寝がへりを打つ）

ぬい子　ねえ、貴君。

英作　何だい。

ぬい子　今度暇になつたら、

玉川へ連れて行つてくれない。

英作　あゝ、行かう。

ぬい子　（芝居をしてゐるのを忘れて）ほんたう？

英作　何がさ。

ぬい子　ウソぢやない？

英作　ほんたうだとも。

（ぬい子、眼で、實際にほんたうかどうかを確めようとする。）

英作　馬鹿！……

（二人笑ふ。芳子寝られないと見えて、

又寢がへりを打つ。

ぬい子　ねえ、貴君。

英作　何だい。

ぬい子　妾、銘仙が一つほしいの。

英作　銘仙位、いつだつて買つてやるよ。

ぬい子　この頃、銘仙が隨分變つてゐるわねえ。銘仙でお召のやうな飛白や、錦紗と同じ小紋なんかあるのよ。

英作　ぢや今度松坂屋へでも行つて買はう。だが、買ふならいつそお召の方がいゝぢやないか。

ぬい子　（ウソだと云ふことを忘れて、本當にうれしがる）そらさうよ。そらお召の方が、いくらいゝか分らないわ。お召買つてくれる。

英作　よし、よし。

ぬい子　本當？　うれしいわ。

英作　（あまり本當らしいことを話しては、アトで困ると思つたらしく）お前。いつか翡翠の帯留がほしいと云つてゐたね。

ぬい子　いや、そんな事云つてゐやしないわ。

英　作　（苦笑して）さうだつたかな。何だか云つてゐたやうな氣　するがね。

ぬい子　さう、ぢや買つてくれる？

英　作　今度陽文社から本が出るから、その印稅で買つてやらうかと思つたのだ。

ぬい子　うれしいわ。買つて頂戴な。

（芳子、先刻から輾轉してゐたが、堪らなくなつたやうに、うつむけに起き直り、顏を蒲團から出す）

ぬい子　妾、これで子供があれば、もう足りないところはないんだけれどもねえ。

英　作　何がさ。

ぬい子　だつて、貴君が愛して下さるでせう。（英作、あまりに露骨なので、笑ひ出さんとしてやつと堪へる）妾、常々さう思つてゐるの。貴君が愛して下さるし、これで子供でもあれば、東京中で一番幸福な妾だと思ふ位だわ。

（英作、少しくてれて、合槌が打てない。芳子、堪らなくなつて、咳ばらひをする）

芳　子　えへん／＼。

ぬい子　（夫に云ふともなく芳子に云ふともなく）惡かつたわねえ。まだ起きていらつしやつたの。

芳　子　えゝ、もう何時でせうかしら。

（芳子、上半身を起す）

ぬい子　まだ、九時四十分ですわ。

芳　子　新宿から品川までは、何時間かゝるでせう。

ぬい子　（ぬい子夫の腰のところをつゝきながら、笑ひをこらへて）四十分もかゝらないでせう。

芳　子　茲から新宿までは、俥がありませうね。

ぬい子　えゝ、ありますとも。

芳　子　妾、やつぱり歸ることにしますわ。

（英作と、ぬい子、一生懸命に笑ひをこらへる）

英　作　さうですか、それは結構ですな。僕は大賛成です。

ぬい子　おほゝゝ、結構ですわ。

芳　子　えゝ、歸りますわ。だつて、宅だつて、妾を隨分愛してゐてくれるんですもの。

（英作とぬい子、また笑ひの衝動をこらへる）

英　作　そりや、僕も信じてゐますよ。かうしてゐれば、御主人が迎ひに來られるのに定まつて

ゐますけれども、早くお歸りになつた方が、どれ丈けいゝか分りませんよ。

ぬい子　（隔ての障子をあけて）ぢや妾、俥を呼んで來ますわ。

芳子　えゝ、どうぞ。

（ぬい子、戸外へ行く。芳子、急いで着物をきかへる）

英作　どうか御主人に宜しく御傳へ下さい。夫といふものは、妻が或程度以上善良である場合愛してゐないわけはありませんよ。同じ家に毎日一緒に居るのですもの、人間同志としてだつて、何うにもならない親しみが出來てゐるものですよ。一時お互に感情を荒ませたつて、心底の愛はお互に消えるものですか。どうぞ、もう二度とこんなことのないやうにお暮し下さい。

芳子　どうもありがたう。半日でもかうしてゐますと、主人のいゝ所が分りますわ。

英作　さうでせうとも。さうでせうとも。

（ぬい子、歸つて來る）

英作　俥あつた？

ぬい子　一緒に來ましたわ。

英作　ぢや、早くお乘りなさい。一晩でも家をあけると言ふことは、いけない事ですね。

芳子　ぢや、妾直ぐ失禮しますわ。

ぬい子　ぢや、どうぞ。

英作　今度は、御主人と御一緒に。

芳子　ぜひ今度のお禮に伺ひますわ。主人もぜひ一度上ると申してゐましたの。

（芳子、玄關へ出ようとして）

芳子　先刻、おあづけした風呂敷包み。

ぬい子　さう〳〵、忘れてゐましたわ。

（ぬい子取り出して渡す。芳子去る。引き出す俥の音。『左樣なら』『御機嫌よう』の挨拶。ぬい子と英作と玄關から歸つて來る。ぬい子腹をかゝへて笑ふ）

英作　何が可笑しいんだ。

ぬい子　だつて、あんまりうまく行つたのだもの。

英作　馬鹿！　芳子さんが來なかつたら、お前が出て行つてゐるところぢやないか。

ぬい子　そら、さうだわ。

英作　仲裁は時の氏神つて、芳子さんは氏神さまだよ。

ぬい子　だつて、此方だつて仲裁をしてあげたのぢやないの。芳子さんから云へば、此方が氏神さまだわ。

英作　そら、さうだね。だが、見ろ。芳子さんだつて、夫の家を出ると、従妹の家へ來たつて、直ぐ邪魔にされるぢやないか。

ぬい子　さうだわね。

英作　だが、芳子と云ふ人もいゝ人だよ。此方の狂言に乘つて、直ぐ歸るなんて。女は、素直でなけりやいけないねえ。

ぬい子　御主人と云ふ方も、きつと可愛がつてゐるんですよ。喧嘩して出たくせに、御主人のの

わけを云つてゐるぢやないの。

英作　とにかく、可笑しかつたね。

ぬい子　可笑しかつたわねえ。

（突然、ガラリと云ふ音がして、二人びつくりする）

××　俥屋です。あの風呂敷包みが變つてゐるさうです。

（ぬい子、騒いで玄關へ行く）

ぬい子　大變だ。妾がこさへたのと間違つたのよ。

（慌てゝ押入をあけて、風呂敷包みを換へ、俥屋に渡す。英作笑つてゐる。ぬい子、英作の傍に來る）

ぬい子　まあ、驚いた。横濱まで持つて行かれちや、とんだ恥をかくところだつた。

英作　それ御覽！　家を飛出すなんて騒いでゐるから、そんな間違が起るんだ。風呂敷包の間違ひだからいゝやうなものゝ、もつと大きい取返しのつかない間違だつたら、何うするんだい。

ぬい子　さうね、これからしないわ。

英作　どんなに喧嘩したつて、くつ付いてゐなきやウソだよ。

ぬい子　でも、貴君がちつとも愛してくれないんだもの。

英作　愛してやるよ。

ぬい子　さう、これから先刻のやうに、仲よくしてくれる。

英作　まあ、ある程度まではねえ。

ぬい子　貴君。先刻お召買つてくれると云つたの本當？

英作　馬鹿、あれは芝居ぢやないか。

ぬい子　いやよ。妾そんなつもりぢやないのよ。

英作　ぢや、銘仙を買つてやらう。

ぬい子　だつてお召の方が、やつぱりいゝと云つたぢやない？

英作　だつて、お前は銘仙にだつて、お召と同じやうな柄があると云つたぢやないか。

ぬい子　いやな人。つまらないことを覺えてゐるのねえ。ぢや、銘仙でもいゝわ。

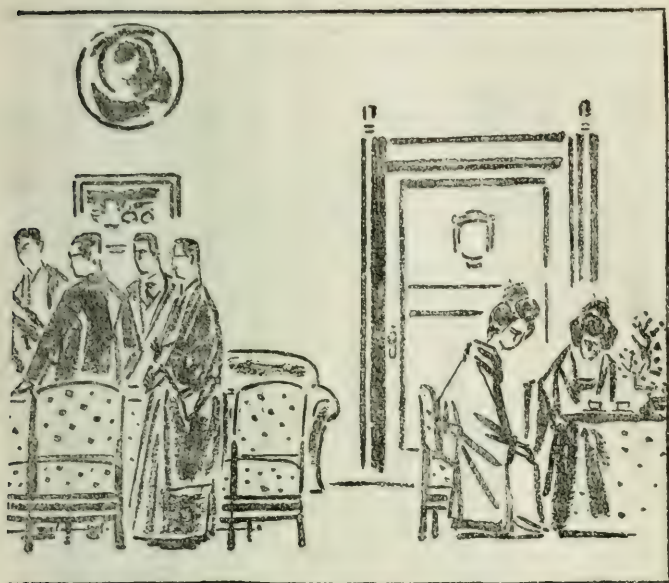
英作　何だか、氣がせい〳〵した。原稿が書けさうだ。

ぬい子　かいて頂戴な。

英作　うむ。　（英作六疊の方へ行き、机の前へ坐る。ぬい子、自分のこさへた風呂敷包みたときかける所にて——幕）　（挿繪——山川秀峰）

友情

川上三太郎

人

神山欣之助（理學博士）四十一才

本田忠三　四十三才

妻　よし子　三十二才

小村久雄（よし子の弟）二十八才

その他――放送局員、給仕、放送者、博士の從者、博士の舊門下生自動車運轉手等。

所

ＪＯＢＫ放送局控室

大阪郊外、小村久雄の家

梅田驛構内歩廊

時

現代——冬。

第一場

ＪＯＢＫ放送局の控室

美しく落ちついた大きな洋室。暖爐が熾に燃えてゐる。中央と上手に卓子が二つ。その周圍に椅子。上手、下手の二ケ所に扉。中央の壁を中心に油繪、名士の放送記念に署名した額等が、そ

れぞれ配置よく掲げてある。壁に沿うて安樂椅子、小卓、盛花等。

部屋の上手寄りに大きな擴聲機がある。

上手の卓子には、これから琴の放送をする美しい高島田の娘が二人。女中が一人附添つて、つゝましく控へてゐる。

中央のやゝ大きな卓子を圍んで、神山博士の舊門下生五六人。何れも、今母校の教授たる神山欣之助博士の講演を聞いてゐる、みんな、官吏又は會社員といつたやうな若い紳士である。

これ等二つの卓子へ、給仕一二名、それぞれ紅茶等を運んで來る。

開幕――いよ〳〵神山欣之助博士の講演が、部屋の隅の擴聲機に依つて、はつきり此の部屋へ――講演はもう終りに近い。

神山博士の聲（擴聲機から）……それで私は、今でも尚、只今申し上げましたその舊友の事が、始終心にかゝつて居るので御座います――いや、これは飛んだ私事に亙りまして申譯がありません、以上母國を去る早々の間、一向取り止まりのない事ばかりを申し上げました事を、謹んで皆さまにお詫び致しまして、私の此の話を終ります。さやうなら。

（間）

アナウンサーの聲（擴聲機から）……『日本を出發するに際して』と題するお話は、これで終わりました。講演なされた方は理學博士神山欣之助氏でありました。次は只今より約二十分の後、今晩の演藝放送に移ります。J、O、B、K……

A（門下生の一人）相變らず神山博士の聲は確かりしたものだな。

B 我々が學校に居た時分と少しも變らないね。

此の間に、理學博士神山欣之助、放送局員の先導で放送室から歸つて來る。

放送局員（歩きながら）何うぞ此方へ……（とそれから立止つて正しく）何うも色々御苦勞樣で御座いました。

神山博士（微笑）いや一向纏りませんで……

放送局員（恭しく）何う致しまして、大變結構で御座いました。

博士（みんなを見つけて）やあ、諸君！これは何うも御忙しいところを態々有難う。（と近寄る）

A（立上つてこれを迎へ）先生、何うも御苦勞樣でした。大變結構に拜聽しました。

B 全く結構で御座いました。

一同口々に挨拶をしながら、博士の爲めに席を作る。給仕恭しく紅茶を運んで來る。

博士　（腰を下して）何しろ何うも初めてだものだから、勝手が全然解らないので、大分面喰つたよ。はゝはゝは。（と煙草をつける）

C　我々は久振りで、學校で先生の講義を伺つて居る時の氣分を味はふ事が出來ました。

博士　それぢや、みンな、さぞ居眠りが出た事だらう。はゝはゝは。

みんなも一緒に笑ふ。

D　（少し改まつて）それはさうと先生、此の度は御目出度う御座います。けれども、隨分急で御座いましたね。

博士　有難う、全く突然でね。支度も何もそこ〳〵で飛び出して來た譯さ。これも面喰つた一つでしたよ。はゝはゝは。

B　然し、此の方なら幾ら面喰つても結構です。

みンな笑ふ。

此の話の間に、上手の島田の娘等、放送局員に案内されて放送室に去る。

C　（外の友達に向ひ）目的地は確か獨逸だつたね。

A　さうだ。（博士の方を向いて）ですが先生、彼地には何年位御滯在の御豫定ですか？

博士　政府の命令は三年といふのですがね。事に依つたら五年位かゝるかも知れん。（語を變へて）だから出發前に是非諸君に一度お目にかゝり度いと考へて居たのだよ。ところが何分にも時間がないので、實は甚だ殘念だと思つて居たのさ。それが意外にも斯うやつて諸君に會へたのだ。私は大變嬉しい。

A　いえ、實は今朝の新聞で、先生が、今夜此の大阪で放送なさる事を知つたのです。それから急に慌てゝ、みンなの所へ電話をかけたり、電報を打つたりして、一層の事此處で落ち合はうといふ事にしたンです。もつともその以前から、先生が今度官命で、獨逸へおいでになるといふ事は、矢張り新聞で見て居たンですが、眞逆、斯んな急な事とは夢にも思つて居ませんでしたから……

C　明日未明神戸出帆といふと、今夜から本船へ乘り込んで居なければ不可ないのですね。

博士　それに神戸で何うしても御免蒙れない送別會を私の爲めにやつて呉れる者があるので、實は梅田を八時に立たうと思つて居る。

B　（時計を出して見て）おや〳〵、それではもう一時間と少ししかないぜ。弱つたな……、

博士　いやもう、諸君のその御好意だけで結構だよ。それに、斯うやつて諸君にお目にかゝれ

たのだから、私はもう充分だ。

アナウンサーの聲（擴聲機から）J、O、B、K——お待たせ致しました。では只今から演藝放送に移ります。最初は生田流の琴千鳥で演奏なさる方は飯塚友子さん、矢野清子さんであります。では只今から生田流の琴、千鳥の曲——

やがて靜かに琴の音が流れる。

博士　琴だね。（しんみりと）これも當分は聞かれないと思ふと懐かしい。

D　（フト思ひ出したやうに）時に先生は、今の放送で、何誰かお友達の事を仰言つてでのやうでしたが……

C　さう〳〵。先生、あれは一體何

ういふ理由なのですか？

B　實は、僕も先刻からその事を先生に伺はうと思つて居たンだ。

　みンなその理由を聞き度がる。

博士　あれかね、（微笑）あれはね、先刻マイクロホンの前に立つて、切りにお喋舌りをして居る中フト旅愁とでもいふのかね、妙に昔の古い友だちの事を思ひ出してしまつたのさ。それで何の氣もなくツイその儘口へ出してしまつたのだよ。

B　……何だか斯う懐かしむといつたやうなお話でしたね。

博士　さうなんだ。（と過ぎし日を顧みるやうに）餘り詳しい話もして居られないが、何うだ諸君、聞いて呉れるかね。

皆々　（口々に）え、伺ひませう。（と膝を乗り出す）

博士　と言つて、別段大した事でも何でもないンだ。實はその昔の古い友だちといふのはね私の中學校時代の同窓なンだよ。何でも僕より一つか二つ年上だつたがね、その男は純粹の都會生れ、僕は御承知の通りの田舍者。だから趣味も嗜好も全然違つてゐたンだが、何ういふものか妙に氣が合つてね、始終一緒になつて居たのさ。ところが、扨て愈々僕たちが卒業間際になつた時、何か商賣上の手違ひから、その男の家が突然破産、家資分産といふ事になつてしまつて、奴は高等學校へ行くどころか、直ぐ世の中へ出て金を取らなければならない始末さ。二人の境遇がそんな具合で馬鹿に違つてしまつたものだから、自然何時かお互ひに御無沙汰勝ちになり、疎遠になり、到頭音信不通、終ひには僕の方でも全然忘れてしまつたンだ。

此の間各自返事をする。

博士　その中、例の關東大震災さ。幸ひ僕の家は山の手だつたので格別の被害もなくて濟んだが、或る晩の事、ブラ／＼神樂坂をブラついたンだ。すると突然その友達にパツタリ出會したのさ。見るとでつぷりと肥つてね、昔は意氣な若旦那だツたのが、いやもう堂々たる體格で、何う見たつて會社の重役なンだ——やあ久濶く、僕は最初の豫定通り學問の切賣りをして居るが、君はあれから何うしたね……と聞いて見ると、いや見ると聞くとは大違ひとでも言ふのか

ね、何うして震災で丸燒けに燒け出されてしまつて、今では妻君と二人每日々々就職口を探して居るといふ有樣なンだ。それが偉大な體格だけに妙に哀れつぽく悄然と見えて、僕も氣の毒になつたから——それではまあ好い勤め口があるまで僕の家へ來て居たまへ——とね、遠慮するのを無理に二人共引取つてやつたのさ。ところが、その妻君といふのが迚も夫思ひの好い妻君でね、その上夫婦とも自家の家內や子供たちと大變よく馴染んでしまつて、あれでも三四箇月も居たかなあ……その中一寸した口が見つかつたので、夫婦は何處か二階を借りる事になつた。子供も何もない二人限りの生活だからその邊は簡單さ。然し人間といふものは妙な事が、意外な幸福をもたらしたり、又は思はぬ不幸を招いたりするものだね。

B　すると何うかしたのですか。

博士　いや以前にも言つた通り、その男は實に偉大な堂々たる體軀なンだ。知らない者が見たら何うしたツて高等官三等、大會社の重役といふ風采なのさ。ところが又始末の惡い事には、萬事が手取り早く行かないンだ。肥つて居るので物事が恐ろしく億劫に見えるンだ。勿論當人はそんな氣は微塵もないンだが、さてこれが使ふ方の身になつて見ると、かなり困るらしい、感情的にもよくないンだね。たとへば、君、一寸これを斯うやつて吳れたまへ、と言つても直

ぐ、ハイツ！　といふ返事が出ないンだ。何……で……すか？　と言つた調子だから印象が頗る面白くない。何でも二年許りの間に三四箇所勤め先が變つたといふ始末さ。

C　なるほど、さういふ事もありませうかねえ。お氣の毒ですなあ。

博士　（頷きながら）ところがそれがだね、その男が此の三四年前からフッと火を吹き消したやうに音信不通になつてしまつたンだ。僕の家の者はみんな心配して、それこそ子供までが、叔父さん、何うしたンだらう、なンて氣にかけるのだ。全く無邪氣な氣の好い男だつたからね。そンな風で家中で案じて居る中、あれは確か去年の正月だつた、突然大阪の消印でその男から年賀狀が來たのさ。

B　大阪からですか？

博士　大阪の消印なンだ。だが、何うだらう肝心な住所が書いてないンだ。

C　住所が？　へ、エ、粗々かしい人だな。

（みンな笑ふ）

博士　だからこれぢや何うも仕方がない。此方から手紙を出すにも出しやうがない。何て慌て者なンだらうと私も家内と笑つたンだが、それ以來今年までずうッと引續いて年賀狀と暑中見

舞は必ずやつて來るンだ。それは必ず來るンだが、依然として住所がない。書いてないのだ。だから、つまり故意に態と書いて寄越さないのだね。

D　へゝエ、妙ですね。

博士　然かも消印はずつと大阪なンだ。だから先生引續いて此の大阪の何處かに居るには違ひないンだが、何か僕に遠慮か氣兼ねをして居るンだね。それで住所を知らせないンだよ。元來僕は友達の尠い男だから一人でも自分で許した友達は失ひ度くない。殊に懷かしい中學時代の友達だ、猶更失ひ度くない。眞逆新聞へ友達を探す廣告を出す譯にも行かず、あの夫婦たちは實に好い人達なンだから、大阪へ行つたら是非何とかして探し出して、舊交を溫めたいものだと始終心に思つて居たのさ。それを先刻放送して居る中フト思ひ出して、ツイ場所が大阪だけに、事に依つたら今何處かで僕の此の放送を聞いて居はしないかと、柄にもなく妙に感傷的になつてね、思はずフラ〳〵とあンな事を喋舌つてしまつたのだよ。（と語り終つて紅茶を飲む）

みンな感慨深く聞いて居る。

A　（フト態と快活に）おい、お互ひに身體のデブ〳〵肥つて居る連中は、精々怠けずに、後生大事に仕事に勉强する事だぜ。

博士　（しんみりとしてゐたが）本當だよ。はゝゝは。

これに釣り込まれてみんな笑ひ出す、賑やかになる。

此の時、博士の從者、自動車の運轉手、下手から出て來る。

從者　先生、もうお買ひ物の方はよろしう御座いますが……

博士　あ、さうかね。みンな揃つたかね。

從者　はい。

博士　それでは、そろ〳〵出掛けるとしようか。（と立ち上がる）

B　では、我々も驛までお見送り致しませう。さあみンな！（みンな立ち上がる）

博士　（手を振つて）いや〳〵、そりや不可ンよ。諸君はみンな忙しい身體なのだから、何うか遠慮なく引取つて呉れたまへ。

C　なアに先生、何れも、日が暮れて電燈がつくと、如何にして此の良夜を過さん――なぞとロクでもない計畫を繞らすのに忙しい連中許りなンですから、その邊は、何うか一切御斟酌なく……

みンな笑ふ。

博　士　はゝはゝ。さうかね。それでは一つ御足勞を願はうか。（と出掛ける）

放送局員、慌てゝ出て來る。

放送局員　どうぞ自動車へ

博　士　大變お邪魔をしました。あゝ、私はあるのですが、諸君（とみんなへ振り向いて）では、諸君乘つて吳れ給へ。

一同、喋舌りながら出て行く。局員それを前後して送り出す。

舞臺空虛、やゝ間。

やがて、突然艶かしい笑ひ聲。それと同時に、次の演藝放送をする藝者五六人、舞妓二三人、ドヤドヤと這入つて來る。

藝者一　あら！　隨分立派なこと！

同　二　てンと病院だすな。

同　三　何言うてンのや、此の妓は！

同　四　なア一寸、此室で放送するのだッか？

同　三　放送室は彼方や、あこやがナ……。此の部屋は次の放送する者の控へて居る所やがナ。

同　四　先づ待合室だンな。

舞妓　甲　まあ姐ちやんたら、停車場のやうに言ふわ！

藝者　三　なンせラヂオはどだいが西洋の物やさかい。何うしても萬事ハイカラやなあ。モダンだわ。

藝者　一　けど西洋のラヂオはみンな西洋人が聞いて居るのかいなアと思ふと、わて何やらけつたいな氣がしてならンわ！

藝者　二　何のけつたいな事があるもンかいな。當り前やがな。

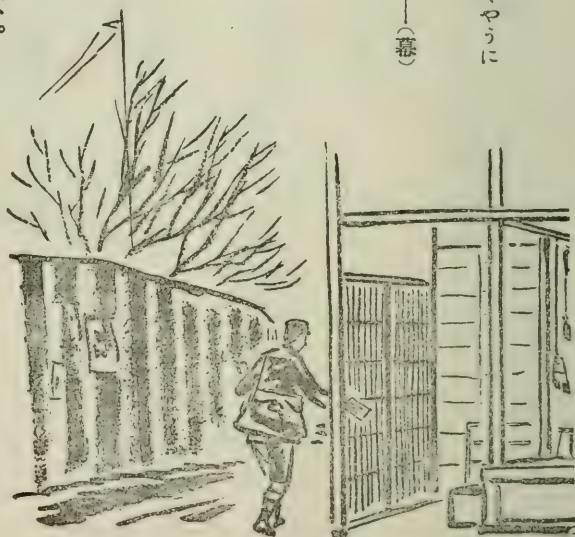
藝者　三　西洋のラヂオも矢張り日本のと同じかいな。

藝者　二　そらさうや、まあ大槪同じやろ……

舞妓　二　（突然大きな聲で）なあ、姐ちやん、ほンなら西洋にも、あの安來節がおまツか？　はゝアさよか！（と一人で合點する）

一同、一寸啞然とする。
やがて、みンな吹き出す。
それから一時に、ガヤ〳〵蜂の巣を突くやうに喋舌り出す。
局員、給仕、その間を右往左往する。——（幕）

第二場

大阪郊外、小村久雄の家。
下手淋しい往還。それから格子があつて久雄の家。上手障子が閉つて居る。そこが本田夫婦の部屋。正面押入、襖。臺所へ續く障子。狹くて古い家。机が一つ、瀨戸火鉢が一つ。その外何もない。
下手の方に勝手道具が少し許り。造作の粗末な、總べてが寒さうな感じがする部屋。

その部屋に本田と妻のよし子が相對して坐つて居る。二人の間に貧弱な鑛石受信機が置いてある。
そこからレシーバーを二人で片耳づゝ一箇。耳にあてがつて聞いて居る。
開幕……時間は再び戻つて、恰も神山博士の講演が終る頃である。
外は空ッ風の音が鋭い。
下手から、郵便配達夫が寒さうに出て來る。

郵便配達夫　（一寸小村の家を覗いて）郵便！（と粗雜に聲をかけて、端書を格子の中へ投げ入れ、その儘立ち去つてしまふ）

本田も、妻のよし子も、それに氣がつかない。それ程一心になつてラヂオに聞き入つて居る。
やがて放送が終る。忠三は受話器を耳から離して疊の上へ置く。よし子も續いて置く。二人顔を見合はせる。やゝ間。

本　田　（暫くして）おい、聞いたかい。

よし子　えゝ。（力がない）

本　田　あゝ、久濶振りで神山君の聲を聞いた。一寸も以前と違はないね。

よし子　えゝ、矢張り何時もの親しみ深いお聲でしたわ。（ほろりとする）

本　田　何うした、おい、よし子！

よし子（泣く）

木田　何うしたンだい。腹でも急に痛くなつたのかい？

よし子（顔を上げて）いゝえ……それより、それより、貴郎も聞いたでせう？

木田　？（默つて、よし子の顔を見る）

よし子　いま、神山様が仰言つた最後の言葉です。

木田（頷くばかりである）

よし子　あれは貴郎、確かに妾たちの事を仰言つたのですよ。

木田　お前も氣がついたか。

よし子　えゝ、妾は直ぐさうだと思ひました。

木田（神山の放送した言葉の通りに言ふ）私に一人の友だちがある。三四年以來住所を知らせない、その舊友は、何でも此の大阪に住んで居るらしい。私はいま日本を出發するに際し、その昔の友だちに會ひ度い心で胸が充滿です。私は今夜八時に大阪を立つ……

よし子　さうです。神山様は時間までちやんと仰言つてゞした。

木田（よし子に）神山君はまだ俺たちの事を思つて居て呉れるのだ。それを思ふと俺は嬉しい。

よし子　本當に親切な方ですわね。震災當時もあんなに御厄介になつて……

本田　それから後もずつと世話のかけ通しだつた。

よし子　（突然）貴郎。神山様に會ひ度いでせう?!

本田　え？

よし子　（決然と）如何？　今から直ぐ驛へおいでになつたら――

本田　（狼狽へて）何を言ふのだ。冗談言つちや不可ない。驛へ行ける位なら、何も今夜斯うやつて家に居てラヂォで聲だけ聞いてなンか居やしない。第一最初から直接放送局へ會ひに行くぢやないか。

よし子　それはさうですけれど……

本田　勿論さうさ。だから今朝もお前に言つた通り、若し神山君に會つて、神山君から、やあ本田久し振りだな、時に今何をして居るンだ。と斯う聞かれたら何うする？　うん、まだ相變らず勤め口を探して居るとは俺には言へない。まして、先方はこれから外國へ行かうといふ、言はば出世の門出だ。何でそンな事が言へるもんか。

よし子　それはさうですわ。けれ共、何處かへ勤めて居るとか何とか言つて……

本　田　駄目だよ。そんな迂濶な神山君ではない事はお前だつて知つて居るぢやないか。それに又第一そンな嘘がスラ〳〵言へる俺なら、今日失職なンかして、まご〳〵とお前の弟に厄介をかけては居ないのだ。

よし子　それでも……

本　田　餘りさう苦しめないで呉れ。俺の此の口は本當の事すら滿足に言へないのだ。まして親友に嘘が何うつけるものか。

よし子　（溫和しく）それもさうですわね。けれ共、貴郎が何んなにか神山樣に會ひ度いだらうと思ふと……（と俯向く）

本　田　それに、見送りの人も多勢來て居るに違ひない。その多勢の中で、神山の古い友だちがあんな見すぼらしい風姿をして、トボ〳〵會ひに來たなンて言はれては、俺は何うでも好いとしても、それぢや神山君に申譯がない。

よし子　（術なげに）本當にねえ。

本　田　（愁然と）だがよし子。斯んな時、せめて何んな職業にでもありついて居さへすれば、俺は神山君にも安心して會つて貰へるンだがなあ！

よし子　それを思ふと胸が充滿です。（泣く）

木田　（直ぐ氣を變へて）いゝよ、いゝよ。なアに、だから斯うやつてラヂオで神山君の聲を聞いたンだ。これでもう氣が濟んだ。相變らず神山君の確かりした頭のいゝ筋の立つた話を聞いたンで、俺も何うやら元氣がついたやうだよ。

よし子　（淋しく微笑んで）それも神山樣のお蔭ですわね。

木田　だから、それでもういゝンだ。結構だよ。

（と言ひながら、テレ隱しに受話器を取り上げて）

何だ！　琴か……（と再び疊の上へ置く）

よし子、につと思案をしてゐる。

木田　よし子、まだお前何か考へて居るのかい？

よし子　（氣を變へて）いゝえ、さあ、では御飯の支度でもしませう。（と立上る）

木田　いや、まだ喰べたくないよ。それにもう久雄

君が歸つて來る時分だ。歸つて來てから一緒に頂かう。久雄君は工場へ行つて朝早くから終日勞働して、へト〳〵になつて歸つて來るんだ。ブラ〳〵して居る者が先へ喰べては働いて居る人に濟まない。

よし子　いゝえ、そんな氣兼は決して要りませんわ。それに貴郎だつて、毎日毎日外へ出て居るぢやありませんか。

本　田　俺が履歴書を懷ろにして毎日歩いて居る事かい？（笑ふ）今の世の中は勤め口を探すので草疲れるのは、働いて居る部には這入らないんだよ。

よし子　（淋しく）それでも、草疲れる味は同じ事ですわ。

本　田　兎に角まだいゝよ。それに、まだ腹も減らないンだ。

よし子　（元の座へ戻つて來て）ねえ。貴郎！

本田　？（よし子の顔を見る）

よし子　今の神山樣の事ですがねえ。

本田　？

よし子　神山樣は、何でも隨分長く外國へ行つて居らつしやるらしいぢやありませんか。

本田　さうらしい事を言つて居たね。

よし子　ですから、貴郎だつて、もう當分お會ひする事は出來ませんわ——ねえ、何うでせう、貴郎。せめて蔭ながらでもお見送りなすつたら……

本田　蔭ながら？……

よし子（熱心に）何うせ停車場は見送りの人たちで充滿でせうから、その後の方で多勢の見送人の背中に隱れて、せめて神山樣の御無事なお顏を見ておいでになつたら如何？　さうしてその儘御挨拶も何もせずに歸れば、神山樣は一寸も知らない事で、周圍の人たちにも悟られず、貴郎は貴郎でお心が濟むではありませんか。妾何だか、あの方の今度の門途をお見送りしないのが心にかゝつて仕樣がないのです。

本田（悄くして）さうだ。そりやさうだ。何事も眞心だ。たとへ向ふが知つて居ようが居まい

が、此方は此方で、蔭ながら親友の門途を密と見送るのが或は本當の事かもしれない……

よし子　(熱心に) 妾、さう思ひますわ。何と言つても貴郎のたつた一人のお友だちの目出度い門途を、知らない顔で濟ませたのでは、これから將來々々寢覺めが惡くつて仕樣がありません。

木　田　(焦慮する) 何だか氣になるなあ。(然し思ひ切つて) では、お前の言ふ通り、せめて、蔭ながら歩廊の背後の方で、こつそり見送りだけして來ようか。

よし子　(悦ぶ) さうして下さい！　さうして下さい。妾からもお願ひします。

木　田　(全く決心して) さうだ！　さうしよう。それでは直ぐ出掛けよう。(と立上りながら) 時間はまだ大丈夫だらうな。

よし子　(いそ〱して) 大丈夫ですわ。神山樣、八時と仰言つてゞしたもの。

木　田　さうだね。それぢや一寸外套を……

よし子　(ハツとして) 貴郎、久雄から小遣ひまで貰ふ譯にはいかないものですから……

木　田　(氣がつく) あ、さうか。なアに、いゝよ、いゝよ。今夜は何時もより暖かいから。それに、何うせ向ふへ行つたツて、何うといふ譯ぢやないンだから——ぢや、羽織だけ引つかけて行かう。

よし子　（涙を拭いて）濟みません。（上手の障子を開けて、奥から本田の羽織を持つて來て着せる）

本田　では、行つて來るよ。

よし子　貴郎、電車賃を……

本田　あるよ、まだあるよ。今日は一寸も使はなかつたからね。

よし子　でもこれを持つていらつしやい。（帶の間の蟇口から幾らか出して渡す）それから、停車場では、背後の方でそつとお見送りして下さいね。うつかり言葉をかけたり顏を見られたりしないやうにね。

本田　大丈夫だよ。柱の蔭へ隱れて、汽車が出たら直ぐ歸つて來るよ。

よし子　では行つてらツしやいまし。

本田　久雄君に御飯の支度をして上げて置くがいゝよ。（と往還へ出る）

風が鋭く彼を丸くさせる。やがて去る。

よし子戻つて暫く考へて居る。そして涙を拭ふ。

やゝ間、やがて臺所の方で久雄の聲がする。

久雄　（まだ出て來ない）姉さん、姉さん！

よし子　（氣がついて）おや久雄さん？　久雄さんぢやないの？　まあ何うして臺所からなンぞ歸つて來たの？

久　雄　いまね、靴を全然汚してしまつたンですよ。彼方の泥溝板が外れて居たもンですからね…………

と言ひながら、臺所の障子を開けて久雄が這入つて來る。工場服で足をむき出しにして居る。

よし子　（出迎へて）まあ御歸りなさい。

久　雄　只今、（大きな聲で）何うも、あの泥溝は實に危險ですね。お蔭で、靴も靴下もドロ〳〵にしちまつた。

よし子　まあ〳〵、それは危なかつたわね。何處も怪我はしなくつて？　靴や何かは妾が今直ぐ洗つて置くから……

久　雄　（笑ひながら）なアに、もう僕がいま井戸端でザアザツとやつてしまひましたよ。だからいゝンです。（と手をこするやうにして火鉢へしがみつく）ところで義兄さんは？

よし子　あゝ。いま一寸出掛けましたよ。

久　雄　ホウ、あの寒がり屋の義兄さんが、よく此の寒いのに思ひ切つて出掛けましたね。

よし子　外面はそんなに寒いこと？
久　雄　寒いの何のつて、耳も鼻も千切れさうです。近来稀れですね、今夜の寒さは！
よし子　（夫の影を追ひ、暗然とする）
久　雄　（それには頓着なく）然し、義兄さんにそンな元氣があるのは何よりだ。何處へ行つたンです。活動ですか？
よし子　いゝえ、そんな暢氣な……それより久雄さん、御飯は？　今夜は大變遲かつたのね。
久　雄　殘りを片づけてしまはうと思つてね。それで遲くなつたンです。濟みませんが直ぐ飯の支度をして下さい。實は腹がペコ〳〵なンです。
よし子　まあ、それでは今直ぐ。（と立ち上つて、隅の方で膳ごしらへをする）
久　雄　（それへ話しかける）實は今夜は餘り寒いから義兄さんと一緒に牛肉でも食はうと思つて歸つて來たンだが、義兄さんが出掛けたンぢや仕樣がないな。（と言ひながら、フト格子の傍の暗い所に落ちて居るハガキを見つける）オヤ、何處からか郵便が來て居ますよ。（と立ち上つて拾ふ）
よし子　（背を向けながら）何處からだらうねえ。
久　雄　市川さんから、義兄さんへ宛てゞすよ。

よし子（初めて振り返つて）市川さんから？

久　雄　えゝ、讀みませうか――エヽと……豫て御依頼の就職口の件、目下會社には社員の缺員とては之れなく候へ共、小使の口なれば一人これ有り候。月給は三十五圓なれど一時間に合はせに御勤に相成る中には小生必ず盡力して忽ち社員の方に推薦仕る考へに御座候。暫くの辛棒故我慢なされた方が利益と存じ候。よろしければ明日より早速御出勤相成度、委細はその節御面會の上萬々申し上げ候――やあ。こりや義兄さんの口が定つたハガキだ！　小使だつて何だつて少しの間の辛抱ですもの、ねえ姉さん、義兄さんは屹度承知するでせう？

よし子（悦んで）承知するどころぢやない、大悦びですよ。兄さん本當に何ンなに悦ぶ事だらう。お前さんにも色々骨を折らせたねえ。

久　雄　何のそンな事……それより義兄さん早く歸つて來ればいゝのにな。

よし子（フト氣がついて）あ、さうだ、さうだ。妾は斯うしては居られない。

（とハガキを受取つて立ち上る）

久　雄（驚いて）姉さん、何うしたンです。

よし子（獨り言のやうに）此ハガキを先刻讀んでから出掛けたのだつたら、あの人は何んなに感

張つて、他の人たちと一緒に元氣にお見送りをした事だらう、久し振りで汽車の窓へつかまつて積る話も何んなにかあつたらう。（涙を流す）妾は先刻あつ人が、しよんぼり出て行つた姿が、いまだにはつきり浮んで來る！

久　雄（譯が解らず）姉さん、何うしたンです。

よし子（それには答へず）久雄さん、いま何時？

久　雄（腕時計を見て）八時十五分前です。

よし子　十五分前？　それではまだ間に合ふかも知れない。

（とづか〳〵外へ行きかける）

久　雄（驚いてあとを追ふ）姉さん、姉さん！

よし子（振り返つて優しく）大丈夫、大丈夫よ、久雄さん。たゞね、妾は兄さんにね、此の事を少しも早く知らせて上げたいの。いえ、何んな事をしてだつて八時までに此の事を知らせて上げな

ければならないの！　久雄さん、御飯は暫く待つて下さい！

久　雄　そんな事は何うだつて……

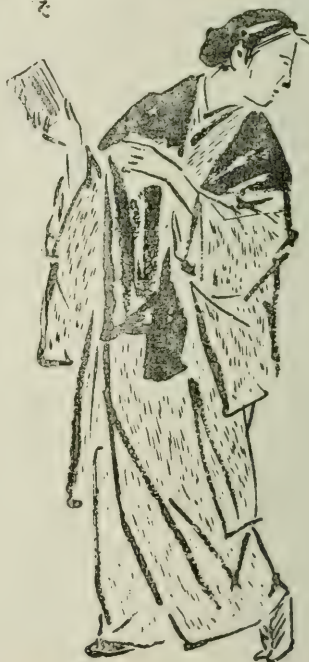
よし子　あと十五分ね——

よし子、呆然たる久雄をその儘、夫のあとを追ふ。

——（幕）——

第三場

梅田驛構内の歩廊。

中央、待合室の入口、上手に、神戸行急行列車が、今まさに發車せんとして居る。但し、見物席からは見えず。

驛夫の聲、見送り人の聲、下駄の音等で騒然として居る。
舞臺は見送り人で充滿。その中に神山博士を送る一團がある。先刻の門下生たちも交つて居る。
開幕――雜然たる物音、響き。舞臺の人物何れも右往左往する。その騒ぎ目まぐるしい許り。
上手に神山博士が居る。

見送人の聲　萬歲！　萬歲！

神山博士を見送る人々　神山博士萬歲！

A　（づか〳〵と進んで）先生、もう間もなく發車します。

博士　（先刻から、切りに見送り人の中に何者かを求めて居る）あ、さうかね。

B　もう直ぐです。何うぞ、お召し下さい！

博士　（漸く諦めたらしく）では諸君、何うも色々有難う。

博士の見送人　神山博士萬歲！

博士　（手を振つて）有難う！　（乘車する爲めに上手へ影を隱す）

見送人　萬歲！　萬歲！

本田忠三、此の押し返すやうな雜沓の背後から、密かに神山博士を見送つて居る。やがて、

こつそり帽子を振る。

見送人　神山博士萬歳！

同　萬歳！　萬歳！！

此の時、本田の妻よし子、片手に例のハガキを持つた儘、下手から出て來る。さうして、やつと本田を探し出す。

よし子　貴郎！

本田　何だ、お前！

よし子　これを、これを讀んで下さい、これを讀んで下さい。

本田　（受取つて讀む）

此の時車掌の呼笛鳴る。歩廊は萬歳の聲で搖がん許りである。

本田　（狂喜して）よし子、俺は……

よし子　さ、早く、早く神山さんに……

本田　さうだ！

本田、見送り人を掻き分けて、やう〳〵上手の突端へ出る。

汽笛一聲、列車の音……

見送人の首は、上手より漸次觀客席の方へ向き直る。つまり列車は觀客席の方を通過する意。故に舞臺の人々の首は、右よりだん〳〵に左へ向いて動いて行く。

見送人　萬歲!!　萬歲!!

（本田、上手よりだん〳〵に歩き出す。列車に向つて話しかける意。即ち觀客へ向つて走りながら話しかける）

本田（手の舞ひ足の踏むところを知らず、全く昂奮）神山君、神山君！僕だ、僕です、本田です！解りましたか？えゝ本田です！（驅け足にて）お目出度う！お見送りに來ました。安心して下さい。今僕は或る會社の支配人

をやつて居ます。支配人！　支配人ですよ！　月給は三十五圓！　や、さうぢやない、小使です、小使なンです、月給三百五十圓！　いや、兎に角、神山君！　神山君！　悦んで呉れたまへ。僕は無事です。働いて居ます。働いて居ます。悦んで……御無事に、御機嫌よう！

神山君！　御機嫌よう！（今は全く感極まつて泣く。涙が頬を傳ふ）あゝ笑つて居るね、神山君！　御機嫌よう、御機嫌よう！（彼は全く狂喜して居る。此の間よし子、も泣いて居る。）

見送人　神山博士萬歳！

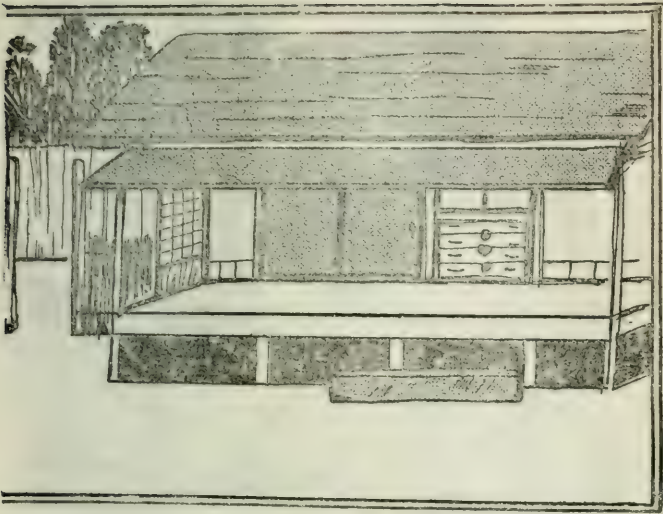
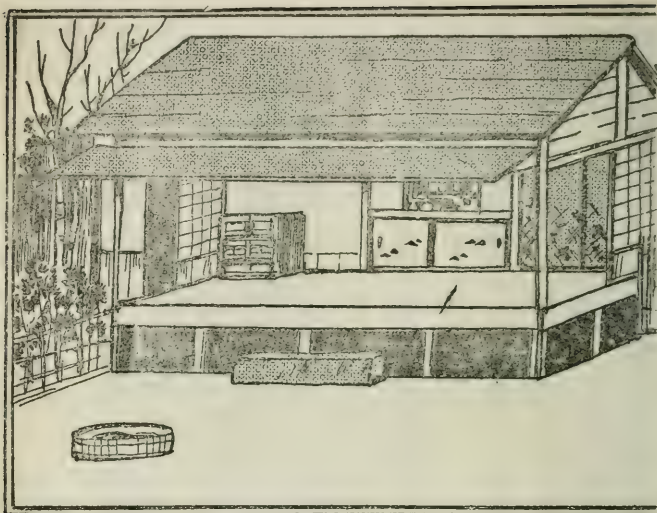
本田　御機嫌よう！　御機嫌よう!!（萬歳聲裡に――やゝ急激に）――（幕）

（挿繪――松野奏風）

五兵衛と六兵衛

曾我廼家五郎

人物

車力 熊野六兵衛
女房 おらく
職工 岸本五兵衛
女房 おたつ
米屋 山崎屋十助
村娘 おこま
僧 圓福寺一念
村長 岩村豐松
小使 田村伊助

公證人　土井喜助
辯護士　中川順一
角力　ふれ太鼓

時　現代
所　葛の葉在の二軒家

舞臺上手六兵衛の宅、下手五兵衛の宅、中央生垣になつて出入口あり、兩家の間はへだてなく庭續きになつてゐる、幕あく。

と、下手五兵衛の宅、佛壇の前に僧一念拜んでゐる。女房おらくは洗濯をしてゐる。女房おたつは針仕事をしてゐる。角力のふれ太鼓が通りすぎると村娘のおこま出來り、

おこま　今日は、仕事かいな？

おらく　オヽ、お入り。

おこま　よく精が出るな、此れ家の父さんが釣つて來た魚や、をぢさんに上げて……。

おらく　何時も濟まんな。

おこま　あの此間も宿替への時世話かけて、お父さんも喜んでゐて、それに錢も取つて呉れずに濟まぬ故、ホンのお禮だけにと云うてたぜ。

おらく　車力は商賣やし、賃を取らぬのも何時も借がある故ぢやがな、おゝさう／＼折惡しう家の今日は精進ぢや、氣惡うせぬ樣禮云うておいてや。

おこま　間の惡い日に持つて來たな、して誰の命日ぢや？

おらく　隣家の五兵衞さんとこのお父さんの命日でな。

おこま　隣家の命日にお前とこ精進するのか？

おらく　近所の付合ぢやでな。

おたつ　（おたつ此時立上り）おらくさんは、家の命日に精進して呉れるのか？

おらく　聞いてたのか、家の人にだまつてゝや、お前とこに知らさずに精進すると云うてゐたのや。

おたつ　氣の毒に、その樣な事止めていな。

おらく　水臭い事云ひないな。根は他人でも、うちとお前さんとこの五兵衞さんとは兄弟の樣に氣が合うて、今では親類同樣の仲、去年の、うちのおやぢの大病の時にも夜通しの看病、他人で出來る世話やない。心丈けでもせめて精進位せねばと、今日は朝から梅干つめて辨當持つて行つたがな。

おたつ　氣の毒に。うちこそ世話の成りづめ、その樣な事して呉れては、うちがわたいに叱るがな。

おらく　それ故うちも內證でする精進、恩に着せがましい此の樣な事云うては、夫れこそ私の方が叱られる、云うてなや。

一念　實に美しい話ぢや、他人の事なら高見で見物する世の中に、親しいとは云へ隣の命日に精進……ア、進める功德共に成佛、感心致しましたな。

おらく　何時も世話かけるお隣家、當り前でござりますがな。

おたつ　なんの、うちこそ世話の掛け通しぢや。

一念　僅の事でも恩に着せる世の中に、お二人の美しいお心、濁り江にりんと咲いたる花一輪、白蓮の樣な美しさぢやな。

おこま　べんちや云ひなはんな、六十近い二人が何が美いかいな。
一念　姿形ぢやない、お心ぢや、親類縁者にまさる美しいお仲ぢや。
おこま　それは村中の評判ぢや、村で喧嘩する奴があれば、直ぐ六兵衛さんと五兵衛さんを見習へと云ふわいな。
一念　一村一郡の美談ぢや、私も早速お住持に話しませう。
おたつ　御苦勞様でござります。
おこま　それでは私も持つて歸るわ。
おらく　お志はようお禮云うて置いてや。
おこま　上げもせんのに禮がいるかいな。
おらく　いや、呉れる志に禮云ふのぢや。
おこま　つまりうちのお父さんの心も美しいからぢやな。
一念　何云ふのぢや。
おたつ　コレおこまちやん、お使ちん。
おらく　これおたつさん、うちに來た度におちん遣つて呉れるのか。

おたつ　他人の様に云ひないな。

おこま　二人の美しい事、りんと咲いたる花一輪、白蓮の様な美しさぢや。

一　念　これ大人なぶりしなさんな。

皆　ハヽ、左様なら。

トおこまと一念は歸つて行く。
夕の汽笛。

おらく　モウ四時ぢや、五兵衛さんも歸るぢやろ。

おたつ　日が短くて何する間もないな、これからごぜん焚きぢや。

おらく　まゝならうちにあるぜ。

おたつ　大きに。

此時米屋十助出で、

十　助　家に居るか？

おらく　お出やす。

十　助　納まりないな、昨日持つて來る筈の米代取りに來たのや。子供の使やないぜ。

おらく　すみまへん。此頃は、うちの人も仕事にあぶれ通しで……

十　助　そんな事聞きに來ぬで、又昨日もだましたのかいな。

おらく　イエ、だます譯やないが、車力の樣な仕事は、まゝ働きのない日が出來て……

十　助　そんな事はお前とこの内輪の事ぢや、何の拘はりもないわ。

おたつ　（大聲に）モシ、山崎屋さん！

十　助　びツくりした、何ぢや？　オヽ、五兵衛とこの嬶か、何ぞ用かい？

おたつ　そないボン／＼云ひたさんな、モウ、

六兵衛さんも歸ろぢやろ、夕方まで待つたげいな。

十　助　晩にはキット拂ふと云ふ事、お前が引受けるのか？

おらく　コレ十さん、何も隣りが知つた事やないがな、何を云ふのぢや。

十　助　知らねば默つてい、甲斐性もない癖に！

おたつ　口出してすまんな、晩に成れば拂ふで、金高は幾何位ぢや？

十　助　五圓八十錢ぢや、無からうがな。

おたつ　云うてな、憚ながらうちは紡績の職工や、月給取りぢや、極つた錢は入るのぢや。

十　助　朝から晩まで眞黑になつて油さし、人間やら油蟲やら判らん立派な月給取りやな。

おらく　五兵衛さんが油蟲なら、米屋のお前は米の蟲ぢやい！

十助　何吐すのぢやい。掛取りに來て蟲と云はれたら此方も意地ぢや。油蟲、晩には耳を揃へて拂へよ。

おたつ　心配しいなや。蟲にも五分の魂ぢや。

十助　吐したな、忘れなや、逃げ足の早い油蟲、逃さぬやうお前とこのヒキ蛙にも云うて置け。

おらく　ヒキ蛙とは誰の事や。

十助　永年つれそつてるお前の親父や。

おらく　十さん、チトロがすぎんか。

十助　目の前に居る俺の事を米の蟲と吐したからには、これ位の事を云はして貰はねば蟲がをさまらん。

と、怒りながら入る

おらく　おたつさん、濟まんな。

おたつ　癪の障る奴やな。

おらく　あすこで買ふまいと思ひながら、ツイ貸して呉れると背に腹は代へられず、モウ／＼貧

乏はいやゝな。

おたつ　キナ〳〵思ひなや、世間は廻り持ち、うちが歸れば五六圓位はあるわいな。

おらく　大きに、今日はうちも少しは持つて歸る、エライ災難かけたな、油蟲なんて吐して、五兵衛さんに内證にしてや。

おたつ　云ふかいな、六兵衛さんにもヒキ蛙は内々でな。

　と、此時六兵衛下手で立聞く。

おらく　まさか云はれるかいな、それでも、うちの人の顏、一寸ひき蛙に似てゐるなア。

おたつ　あんな優しいヒキ蛙あるかいな。

おらく　氣は優しいが、顏がな。

　と、此時六兵衛前に出て、

六兵衛　何に似て居るのや？

おらく
おたつ　お歸り。

六兵衛　只今、五兵衛さんまだか？。

おたつ　モウ歸る時分ぢやわいな。
六兵衛　ゆつくりやな。
おらく　今日はえらかつたやろ、酒もおかずも拵へてある、菜は油揚と大根ぢやぜ、此包は何ぢやな？
六兵衛　大福餅や、隣家の五兵衛さん好きやでな。
おらく　左樣か、おたつさん、うちの人が五兵衛さんに大福餅買うて來たのやと。
おたつ　何時も濟まんな。
六兵衛　此の間喰ひ度いと云うてたで、堺まで行つたついでに持つて歸つたのや。
おたつ　それは大きに。
六兵衛　それから此の藥は赤蛙の黑燒や。
おたつ　え丶、ヒキ蛙？
六兵衛　ヒキ蛙やない、赤蛙の黑燒は疲の藥に一番よいとの事、五兵衛さんに上げてお呉れ。
おたつ　御親切に、うちの人のあの病氣はあきらめてゐるのぢやがな。
六兵衛　まあお試しに吞まして見とくれ。

おらく　さうとも。西洋の藥よりもこの方が又利くかも判らん、別につらい病氣でもないが、一寸腹の立つ時は、顏も腕も引つけて妙な顏するな。
六兵衞　おたつさんの前で妙な事いひないな、お前かて一寸した事で直ぐ癪を起すがな。
おらく　左樣や、一寸びつくりしたりすると直ぐ癪が起つてな、それでも鹽水一杯で直ぐ治るがな。
おたつ　そや〳〵、うちの人は若い時からの病で合藥もなしあの顏する時はいやな氣がするで……
おらく　それ故何が合藥になるか判らぬで、これ煎じて呑まして上げいな。
おたつ　いろ〳〵と大きに。
と、此時五兵衞出で話を立聞してゐる。
おらく　あんた衣服着かへいな。
六兵衞　よしや、そして下駄買うて來てやつたぜ。
おらく　大きに。
六兵衞　今日は一寸よい仕事で五圓儲けたのや、それ故、餅や藥や下駄を買うたのや。
おらく　皆使うたのかいな？

六兵衛　心配するな、明日は明日の風が吹くわい。

おらく　呑氣な人やな。山崎屋へ五圓八十錢拂ひあるやないか。

六兵衛　アツ忘れてた、明日又働くで持つて歸るわ。

おらく　呑氣な事云うてられへんがな、例のつむじ曲りの十助め、毒口對手の催促に聞きかねて晩迄に拂ふと引受けたがな。

六兵衛　えらい事した。

おらく　あんたは若い時からあつた所使ひで私も困つたわ、少し位後先を考へて錢使ひなはれ、貧乏の癖に氣の大きい。

六兵衛　仕樣がないな。

とおらくの下駄を取上げる。

おらく　何、するのや。

六兵衛　下駄屋へ返しに行くのや。

おらく　ぬか喜びさしなはんな。

おたつ　コレ六さん、折角買うて來て上げたのやないか。別に惡い事に使うたのやなし、あんた

を思へばこその土産物、親切なてんさんにおらくさんも怒つて上げなはんな。

おらく　聞いてたのか。うちの人は算盤の持てぬ人やわ、親切は嬉しいが、さしづめ米屋の口あるやろ。

おたつ　よいがな、うちの人が歸つたら、五六圓位あるわいな。

おらく　でもまさか氣の毒に……

おたつ　水臭い事云ひないな、その下駄を返しに遣つては、うちの人に私が又叱られるがな、又癇が出て……

と顔の眞似をする。

五兵衛　（五兵衛前へ出て來て）ヤイ、何さらすのぢやい?!

おらく　オヽお歸り。

五兵衛　六兵衛さん、早かつたな。

六兵衛　やア、お先へ。

おたつ　お歸り。

五兵衛　今何してたのぢやい、モ一ペン遣つて見い阿呆め。

六兵衛　そこがおたつさんのよい處ちや、實は今な、米屋の……

五兵衛　知つてゐる、聞いてゐた、六圓位の金心配しな、氣の合うた兄弟同樣の仲、水臭い事云うてなや、此のへだての垣まで取つて、二軒の家が一軒の家同樣、へだてのない樣に暮さうと約束した仲に、今の樣な事云うて呉れては、又變な顏が起るがな。

六兵衛　すまん〳〵、五圓八十錢丈け立替へてんか？

五兵衛　よいとも〳〵！

おたつ　コレあるかいな、お前の懷中に？

五兵衛　此處にないが、岸和田の竹公に貸した金が六圓、今日くれる約束、お前一走り行つて、來て呉れ。

と、内證で金時計をおたつに渡す。

おたつ　よし〳〵。

五兵衛　早く歸れよ。

おたつ　すぐ戻つて來る。

と、手まねで質屋へ走れと云ふ。

おらく　五兵衛さんおたつさん濟まんなア。

五兵衛　姉さんそれ云うてな、世話しても恩に着せず、着

もせず、二軒の仲ほど仕合せはないと、何日も思うてるのや。

おらく　うちの人、何とか云ひんか、涙ぐんで……

五兵衛　エライ陰氣な話になつたな。すまん、貧乏はお互のこつちやい　オ、丁度氣直しに酒の肴に鮭の片身買うて來た、これおらくさん燒いて遣つて……

おたつ　折角やが六兵衛さんとこは精進やぜ。

五兵衛　誰ぞの命日かい？

おたつ　うちの命日に精進して呉れてるのぢやがな。

五兵衛　俺の親の命日にかい？

おらく　イエ、それも心の恩返し、内々でうちだけでしたのを、妙なはずみで聞かしてな。

五兵衛　嬉しや〳〵、現在の親の精進さへ出來ぬ人のあるのに、他人の六さんが……ア、死んだ親父が喜びます、六兵衛さん、禮云ひますぜ、然し俺とても日暮までの精進や。夕方これで一杯呑んどくれ。

おらく　大きに。

おたつ　うちの人、今日は六兵衛さんが堺に仕事に行つたのでお前に大福餅買うて來て呉れたの

く
やぜ。それにこれはお前の疳薬の黒焼やと、早う禮云てや。何ぢやいな、うつむいて泣いてゐるわ。

おらく　これうちの人、あんたがふさぐ故五兵衛さんまでふさいでるがな。

六兵衛　五兵衛さん、貧乏は互ぢや、ふさぎないな。

五兵衛　決してふさいではせんが、お前の親切が嬉しいので、つい涙が出るのぢや。二人は先の世で、一體何の因縁があつたのやろ、俺死んだらお前の手で骨だけ拾うてや。

六兵衛　俺とてその通りや、頼むぜ。

五兵衛　人の手借るかい、生れる時は別でも、骨は一所の土に埋めような。

　とおらくおたつも泣く。

六兵衛　おう、二人にまでうつつてるがな。

五兵衛　妙に陰氣になつたな、ハヽヽヽヽ、オイ岸和田へ行つて來ぬかい。

六兵衛　お前も飯の仕度せぬかい。

おらく　餘り嬉しい二人の話で忘れて聞いて居た、今日は大根たいて五兵衛さんと二人のお菜にしような、一寸裏の流れへ洗ひに行つて來るわ。

おたつ　何時も濟さぬな、

おらく　水臭い、何禮を云ふのやいな、二人も死んだら同じ穴に埋めて貰ふな？

おたつ　大きに、何うぞ一緒に入れておくなはれ。

五兵衞　阿呆め、風呂へ行く樣に吐してるがな。

と　おらくは裏手へ、おたつは下手へ入る。

六兵衞　五兵衞はん。

五兵衞　エヽ？

六兵衞　お前時計ないな。

五兵衞　エヽ、知つてるか。

六兵衞　知つてる、濟まん〳〵がこみ上げて、淚が止まらんのぢや。

五兵衞　目の早いお前に見られたのなら仕方ない、然し俺には時計は不用のものぢや。

六兵衞　時間仕事のお前の時計、明日の晩までには受けて返すぜ。

五兵衞　水臭い事云うてな。親類や子の無い二人は、親類同樣と思うてるのや、お前がたよりぢや。

六兵衞　役にも立たぬ俺ぢやでな。

五兵衛　お前には何時か妾腹の妹があると云うてたな？

六兵衛　ウン親父の妾腹で、云はゞ其奴に少しの財産も取られた様な物ぢや。

五兵衛　お前相續人やないのか？

六兵衛　左樣やがな、極道であつた爲めに俺は投り出されたのぢや、和歌山では大きな材木屋であつたのやがな。

五兵衛　その妹と會はずかい？

六兵衛　十七八年前一ぺん會うたが、物も云はずぢや、貧乏してゐると親類もおかん。

五兵衛　そや〳〵、親兄弟でも此方が多少生活が樂であればともかく、モウ親類なんぞ忘れて仕舞へ、忘れて仕舞へ。

六兵衛　お前が思ひ出さしたのぢやがな。

此時小使伊助出で、

伊助　六兵衛さん、居るか？

六兵衛　役場の伊助さんか。

伊助　おゝ居たか、六さん、えらい事出來たぜ、村長さんが見えるぞ。

六兵衛　ハテ、何ぢやろ？

五兵衛　伊助はん、何が出來たのや。

伊助　六さん、ふんどし〆めて置きや？

六兵衛　氣味の惡い事云ふない。

五兵衛　氣の小さい男をびツくりさしないな。

此時村長岩村、辯護士中川、公證人土井出で來る。

村長　六さん、居るかな。

六兵衛　オヽ、村長さん。

村長　サア此方へ。

中川　御免。

土井　御免。

と上手床に腰かける。

村長　六さん、ウロ〳〵せずに火でも持つておいで。

中川　イヤ捨てゝ置いて下さい、此方は？

村長　ハイ、お話の熊野六兵衛でございます。」

中川　私は斯う云ふ者です。

と、名刺を出す。

六兵衛　辯？……辯士？……活動の人かいな？

村長　何を云ふのや、中に一字抜けてるがな。」

六兵衛　中の字は讀めませんので……

村長　おぼらな人ぢやな、辯護士さんや。

六兵衛　エヽ辯護士さん？

中川　ハイ、私は辯護士中川順一です。

土井　私は公證人土井喜之助と云ふ者です。」

六兵衛　公證人と云ふと？

伊助　お役人さんぢや。

六兵衛　五兵衛さん。

五兵衛　何んぢや。

六兵衞　居てゝや。

村　長　何も五兵衞を呼ばいでもよい。

六兵衞　五兵衞さんが居ぬと心細いでな。

五兵衞　村長さん、今日は。

中　川　此方は？

村　長　ハイ、隣家の關西紡績の職工で五兵衞と云ふ男でございます。

中　川　無關係の人ですか？

六兵衞　なか〳〵。死ねば一緒に骨埋める仲です。

中　川　つまり親類ぢやないでせう。

六兵衞　共親類よりまだ上で……

中　川　では御兄弟ですか。

六兵衞　いゝえ、それは他人でムいます。

土　井　下らぬ事を云はずに置いて下さい。取調べの上に複雜になりますから。

五兵衞　モシ〳〵、此男は氣のあかん男でムりますで、叱らずに置いて下さいますやう、村長さ

ん、六さんに變つた事でも出來ましたのか。

村長　えらい事ぢや、實は……

中川　若村さん私から申上げます。

村長　はい。

中川　貴方のお生れは？

六兵衛　和歌山で……

中川　和歌山の何處ですか。

六兵衛　西濱の今うなぎ屋のある隣りで

中川　町名番地は？

六兵衛　五兵衛さん知らんか。

五兵衛　俺知るかいな。

中川　現在の本籍は西濱町二五番地ですな？

六兵衛　其處で生れてますか。

中川　左様。明治四年二月十日生れです。

六兵衛　私が忘れてるのによう知つてをりますな。

中川　戸籍謄本にチヤンとのつて居ます。母御のクメと云ふ人は明治十二年十月二日死亡同年十一月本田花入籍。

六兵衛　それがつまり妾だす。

中川　戸籍面では妻になつて居ります。父の熊野七兵衛は明治二十五年九月廿日死亡……

六兵衛　その時だす。妾がうちに入つて俺をいぢめよつてな、やけで極道したのや。

伊助　えらい家の息子さんぢやな、六さんは。

土井　横から下らぬ事を云うては困ります。

中川　其年十二月貴下は別家したのですね。

六兵衛　いえ、投り出されたので。

伊助　ナニ投り出されたのか。

土井　お黙りなさい！

中　川　相續人は異母妹の熊野つねと云ふ人になつてゐます。明治卅八年長男幸一と云ふのが養子山田清三との中に出生、明治四十五年二月廿日山田清三死亡。

六兵衞　おつねの聟は四十五年に死にましたか、實は此養子が。」

五兵衞　默れツ。

六兵衞　ヘイ。

中　川　大正十一年十一月五日熊野つね死亡となつてゐます。

六兵衞　妹の奴死にましたか、どうや五兵衞さん、俺に葉書一枚の便りもせぬのぢや。」

五兵衞　矢張貧乏してるからぢや……默れツ……ヘイ。

中　川　アハヽヽヽヽ、よろしい〳〵。

五兵衞　大事ありませんか。これ六さん、假令知らさず共お前の爲に義理の妹、線香の一本位立てゝ遣り度いな。

六兵衞　あんな奴に何で線香立てんならんのや？

五兵衞　サア共處が親は泣き寄りぢや、他人は喰ひ寄りぢや。

村　長　さうとも〳〵。殊におつねさんの財產十萬圓から受取手がないので、お上樣で調べられ

たら、お前の手に渡る事になつたのぢや。

六兵衞　ほんまかいな。ほんまかいな。

中川　事實です。それ故我々が當村に來たのです。

六兵衞　ヘーン、どうぞうちへお入り／＼。

中川　イヤ、これで宜しい。實は法律上熊野つねと云ふ人の動產不動產は其人の長男幸一と云ふ人の物ですが、大正十三年失踪屆が出てゐます、目下行方生死共不明、其人の現はれない以上、當然貴方のものになる譯です。

五兵衞　六兵衞さん、ぼんやりせずとお禮申上げんか。

土井　イヤ禮には及びません。民法上貴方の權利に屬して居るものですから、本公證人は其財產の相續履行する爲め同行した譯です。

中川　明日午前九時に、今の名刺の私の事務所まで來て貰へば、直ちに裁判所へ同行して、初めて法律上の決定を見る譯です。實印携帶の上で來て下さい。

六兵衞　五兵衞さん、水一杯お呉れ。

五兵衞　オイショツ。

伊助　六さん、氣を確かに持ちや。
村長　いや無理ない〳〵。丸で夢に牡丹餅ぢやでな。
伊助　俺の親父も妾置いて、義理の妹こさいて置いて呉れるとよかつたになア、其處へ行く
　と村長さんはお妾の二人も……
村長　コレ〳〵、シイ〳〵ツ。
中川　アハヽヽヽ、土井さん失禮しませう。
土井　では御面倒ながら、モウ一度役場まで御同行願ひます。
中川　ハイ、熊野さん、明早朝來て下さい。
五兵衛　六さん、何とか云はんかい。
六兵衛　南無阿彌陀佛々々。
村長　禮云はず念佛云ふ人があるかい。
中川　無理のない事です。
五兵衛　氣狂に成る樣な事おますまいか。
中川　大丈夫ですよ、ハヽヽヽ。

と村長と土井、中川、小使去る、此時おらく入り來り、

おらく　うちの人！

六兵衞　聞えてたか。

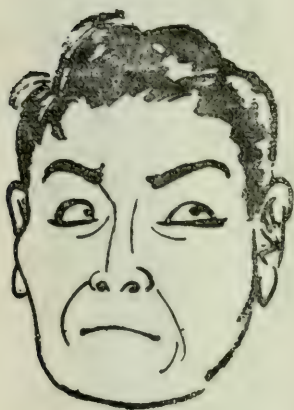
おらく　餘り嬉しいのでふるへが來てな。

五兵衞　無理ない〱、然し結構な事やな。

おらく　結構も何も氣がボーとなつてしもた、うちの人、お前十萬圓からの財産が入るいやがな、

六兵衞　起きてるか、俺は？

おらく　起きてるとも。

六兵衞　夢の様やがな。

五兵衞　無理ない無理ない。五圓の＊米代に困つてるお前が、十萬圓の財産に一足飛び、矢張り金持の家に生れなアあかんな、俺なぞ先祖からの貧乏神にたゝり受けてるのやな。

六兵衞　五兵衞さん、心配しいな。モウ今日からお前を油さしなぞさゝいぜ。

おらく　さうともさうとも、私の家も車力やめて一番先にうちの人、宿替へせんならんな。

六兵衞　當り前ぢや豚小屋の樣な家に居られるかい、矢張り門構への家に入らんならん。

おらく　昨日見た濱通りによい貸別莊あつたぜ、風呂まであるとの事や。

六兵衞　風呂と電話は一番に要るわい。

おらく　さうとも、自動車も玄關へ横付けぢや、五兵衞さん毎日自動車で呼びに來るぜ。

五兵衞　大きに。

六兵衞　毎日遊びにおいでや、然しそれも大儀や、二階一間貸すがな。

おらく　阿呆らしい、合住居が出來るかいな、見つともない、まあ近所へ小さな借家立てゝ上げよいな。

五兵衞　イヤ、わしは豚小屋が分相應ぢや。

六兵衛　遠慮しないな、今迄の恩返しぢや。

おらく　さうとも〳〵。五兵衛さんにもあんな姿もさして置けぬ、着物の一枚もこしらへるがな。

六兵衛　俺は何がうつるやらう？

おらく　まあ大島やな、私が錦紗の長襦袢、羽織も着物も皆錦紗づくめで……

六兵衛　下駄も足袋も錦紗にするか？

おらく　阿呆らしい、何云ふのや、五兵衛さんはまあ結城やな。

五兵衛　おらくさんなぶりなや。

おらく　イエナ、恩返しでするのやかな、そんな仕立直しのネンネコも着せて置けるかいな。

五兵衛　エライすまんな、油差しにこれが分相應ぢや。

六兵衛　その油差しも止めさすがな。

五兵衛　俺は好きで遣つてるのぢやい。

おらく　あら、五兵衛さん氣にさはつたのか、濟まんだな。

五兵衛　皮肉云ふない。

おらく　怒らんと笑顔見せて、つい嬉しさに下らぬ事しやべつて堪忍してや。

五兵衛　むづかしいな、怖い面は生れ付きぢや、何故笑顔して六兵衛の機嫌取らんならんのや?!

六兵衛　何も機嫌取れと云うたか。

五兵衛　又何故機嫌取る弱い尻あるのや。

おらく　貴方、あやまり〱。

六兵衛　堪忍ツ!

　　と五兵衛は莨をさがす。

六兵衛　莨ならあるぜ。

五兵衛　默つて出しても罰が當るまへ、恩に着せるなツ。

おらく　濟まん〱、親身の及ばぬ仲のよい二人、うちの人も、お前の事は風邪一つひいても心配してる位や、死ねば同じ土に骨埋める約束までしたのやないか、内の人が運が向けばお前も喜んで呉れたらよいやないか。

五兵衛　それ故初めから喜んでゐるわい、何や知らぬがモヤ〱〱して……

六兵衛　ハーン、又癇でも起きてるのか。

おらく　それも矢張り貧乏のせゐゆゑ、早う紡績も止めさすぜ。

六兵衛　一生お前養うても何んぼいる、先づ知れた年ぢや。
五兵衛　オイ、俺の死ぬのを待つてるのか、お前も貧乏人の友達あつて迷惑ぢやで、左連の無心云ふ俺ぢやないで、早う宿替へして、物云ふ事やめてや。
おらく　左様云うたら物に角が立つがな、あんたも年が年故、樂さそうとうちの人も云うた事やがな。
五兵衛　ウン、この兩腕の續くうちは、人様の世話には成らんのぢや。
おらく　でも年が段々寄るとな。
五兵衛　働けぬ樣になつたら野垂死するわい！
　と、貰入を投げる
六兵衛　ヤイよい加減にして置け、心安いと思へば親切に養うて遣らうと思うたのぢや、禮の一つ位云ふのが當り前ぢや。
五兵衛　何の禮を俺が云ふのぢや、一椀のめしも貰うた覺えないぞ。
六兵衛　吐すな。昨夕、うちで飯食うたやないかい。
五兵衛　その代り芋五百目やつたわい。

おらく　コレ今朝醤油がないと困つてたで、二合から上もあげてあるぜ。
五兵衛　それ故酒の五合もやつてあるぞ。
六兵衛　その代り大福餅を今日持つて歸つたわい。
五兵衛　誰も買うて來て呉れと頼んだか、欲しけりや返して遣るわ。（と、投げ返す）
六兵衛　何さらすのぢやッ！（と立上る）
五兵衛　喧嘩かッ！
おらく　うちの人對手になりな、これからは交際せぬつもりやらう。
五兵衛　當り前ぢや。
六兵衛　こちらもつきあふかい！
五兵衛　道で逢うても物云ふなよ！
六兵衛　誰が云ふかい、大助りぢや。
五兵衛　金が入つたと思うて大きな面するな、變な面に大島着てよううつるわ。
おらく　憚りさん、ホチチ。
五兵衛　狆猫が友禪のべべ着るのか。

六兵衞　ナニツ！
おらく　コレうちの人、金持ちはあんまり喧嘩せぬものやぞ。
六兵衞　貧乏人は困るな。
おらく　身分のある人は、投げ打ちや喧嘩せぬもの、お前も明日から旦那はんやぜ、お隣りのをぢさん、折角の紺も内の人の口には一寸合はぬ故お返し申します。
五兵衞　何ツ！
おらく　氣に障つたら御免、オホヽヽヽ。
と五兵衞口惜しき思入れ、此時中川再び登場。
中川　御免。
六兵衞　ナヽ旦那樣。
おらく　サアへ此方へ。
中川　有難う。此人は？
おらく　隣家のお方で……
中川　何の用でゐられるのですな。

五兵衛　此樣な家に用があるかい。

中川　禮儀を知らぬ人物だね。ハヽヽヽ。

六兵衛　誰の目も同じやな。

中川　貴方は？

おらく　此人の女房でらくと申します。

中川　左樣ですか、此人を歸して貰へますまいか、一寸密談がありますので……

五兵衛　云はいでも歸るわい。

中川　では早く歸り給へ。

と五兵衛下手入口の所へ行く。

おらく　一寸うちの人から承りましたが、今度色々と御親切に御手數に預りまし……

中川　イヤ、恐縮しますが、實は其事件に就きまして再び伺ひましたので……

六兵衛　ハイ、明日は必ず伺ひます。

中川　それがモウよろしいので……

おらく　と、何う成りますので？

中川　甚だ粗忽な話ですが、相續人の實子の幸一と云ふ人の所在が判明しましたので、只今村役場へ電報が來ましたので……

六兵衛　おつねの伜の所在が判りましたのか？

おらく　するとその財産は？

中川　無論その熊野幸一と云ふ人の物です。

六兵衛　ヘーン、すると私は？

中川　つまり何の權利もないのです。

六兵衛　ヘーン。（呆然となる）

五兵衛　醜態を見ろッ。

中川　默れッ。

おらく　モシ辯護士さん、吾々夫婦には一厘も入りまへんのか。

中川　氣の毒ながら何の權利も無くなつた譯です。

六兵衞　大將ツ！

中川　何だ大將とは？

六兵衞　餘り人をなぶりなや。一厘も入らんのなら、初めから仕樣もない事を云うて來るない。

中川　本職の知つた事ではない。本辯護士は法律の指さすまゝ、公明正大の手續を履行したのだ、本件に對して不平あれば、民法の制裁を仰いで法廷で堂々と爭ひ給へ。

五兵衞　ヒヤ〳〵！

中川　馬鹿ツ。（叱り付けて入る）

五兵衞　おとなりの旦那はん、お心持は何うぢやい？

六兵衞　八釜しいわい。

とおらく思入れ、中川去る。おらく癪を起す、六兵衛は驚きてウロ〳〵する。

五兵衛　何うした〳〵？

六兵衛　おらくが癪起した〳〵。

五兵衛　早合藥の鹽水やれよ。

六兵衛　押へて居て取りに行けるかい。取つて來て呉れ。

五兵衛　オツトショツ！

六兵衛　すまん！

五兵衛　滅相な！（と水を持來り渡す）

五兵衛　サア……

六兵衛　オツトショウ、氣が付いたか〳〵。

五兵衛　しつかりしろやーーい！

此時十助出で來り、

十助　オイ内に居るか、約束通り取りに來たぜ。

五兵衛　オイ向ふ見いやい、此の通り取り込み中ぢや。

十　助　大きな事吐すな、日が暮れた故取りに來たのぢや、お前とこの婆と約束してある、サア貰ふか。

此時おたつ歸り來る。

五兵衛　知つてるわい、今婆が歸る故拂うたるわい。

十　助　その婆何時歸るのぢや。

おたつ　歸つてるぜ。

五兵衛　オヽ、金持つて歸つたか。

おたつ　ハー。（と、五兵衛に渡す）

五兵衛　サア十圓ぢや、ツリ出せ！

おらく　（と、おらく苦しき中から）うちの人禮云ひんか。

六兵衛　（六兵衛、感極まつて五兵衛の手を持ち）五兵衛さん、すまんなア！

五兵衛　六兵衛さん、矢張り貧乏して仲好く暮さうなア！

と双方じつと感慨にふける。

十助つり錢を出してゐる。　――幕――　（説稽――松田青風）

花束

北尾龜男

この劇の主人公　青年飛行家
その親友
航空兵大尉　A
同
老紳士
中老紳士
新聞社々員
新聞社長の娘
同　寫眞班員

その他、ボーイ、來賓大勢

ある大きなレストランの廣間

諸處に煙草皿や灰皿を載せた小卓がまじつて、無數の椅子に埋まつてゐる。四隅に青々した植木鉢を配し、右手に出入口。正面奥は食堂で、折疊式の扉で仕切る。やゝ少時間。食堂からテーブル・スピーチの拍手が急霰のやうに起る。續いて『佐久間操縱士の健康を祝して乾盃します』といふやうな聲が聞えて『佐久間英一君萬歳』の音頭で、怒濤のやうな歡聲が繰返される。高らかな談笑などの少時ざわ〳〵した空氣の中に、食器の觸れ合ふ音が一齊に起る。やゝ永き間。

二人の燕尾服のボーイが食堂から出て來て、扉を左右に開いて佇立する。燦爛たる大食堂が見渡される。煙草の煙が薄く漂ふ。卓から離れた來賓が徐々に流れ出て來る。その中にこの劇の主人公である青年飛行家が、特に四五人に圍まれながら前の方に押し出されて來て。來賓はフロックコート、モーニング、タキシード、中には羽織袴、又は制服の陸海軍將校などもまじつてゐる。

すつかり食堂から出きるとボーイが再び扉を閉ざす。來賓は思ひ〳〵の姿勢で大抵椅子につく。二三人づつかたまつて立ち話をしてゐるのもある。皆、華やかな晩餐に滿喫して陶然として居る。何處からかかすかに音樂が聞えて來る。煙草の紫煙が、或は活動寫眞の大砲の煙のやうに、或は『民の竈』から

のやうに立ちのぼる。

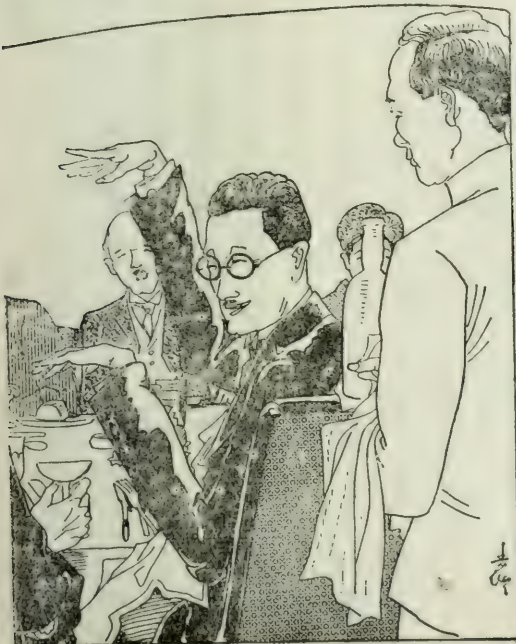
中老紳士　……どうもえらく蒸しますな。今夜は。

老紳士　左様。……今日は丑の日ぢや。土用の。

中老紳士　二三日前、ちよつと關西へ行つて來ましたが、あちらも中々烈しうごわすわい。京都なんかは閉口しました。あの夕凪ぎで。

老紳士　さうでごわせう。暑い處ぢや。あそこは。

來賓の一　佐久間君、こゝへ來たまへ。こゝに椅子があいてゐる椅子が。

來賓の二　こゝにもある。こゝへお

いごかない。佐久間さん。佐久間さん。

主人公（まごく＼して）は、有難う、有難う。

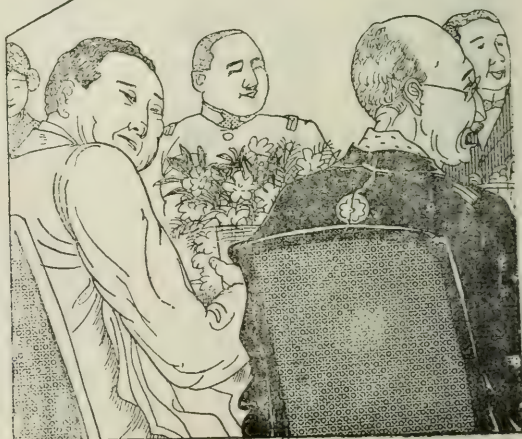
來賓の三（主人公の手をとらんばかりに）まあこゝへ掛けたまへ。お掛けなさい。いろ＼／＼その……（にやにや笑ひながら）お話を承りたいから。

主人公（腰をおろす）

（二三人のボーイが、盆にリキユールを載せて、來賓の間を勸めて歩く）

老紳士（ボーイに）何だね？

ボーイ　ウヰスキーと、ペパアミントでございます。

老紳士　ふうん、わしはタンサンがほしいな。

ボーイ　はい、たゞ今。

中老紳士　一つ貰はうか。その黄色い方がいい。（リキユールをとる）

老紳士　好きだな。

中老紳士　あなたも何うですか。暑氣拂ひに。

老紳士　いや、もう頼まれても……。

中老紳士　水なんかよりは餘つ程、ようごわすぜ。

老紳士　いや、もう……。

（ボーイが、名刺をのせた小さな銀盆を持つて出て來て、主人公の前に行く）

ボーイ　この方が、ちよつとお目にかゝりたいといふことで。

主人公　（名刺をとつて）はあ。では何處か別室で……。直ぐ行きますから。

ボーイ　はい。（去る）

老紳士　佐久間さん。最前、お話を聴き漏らしたが、速力といふものは……一時間のぢやね。どれ位でごわす。あんたの飛行機ぢやと。

主人公　百四十哩出ます。フル・スピードで。

老紳士　百四十……ほう！　ぢやとすると一時間に……靜岡へんまではらくぢやな。

主人公　はあ、いや、もつと……豐橋まで……。去年神戸から來る時に、濱松の辨天島の上まで、丁度一時間で來て了ひました。

老紳士　ふうん！　水上機ぢやつたね。あんたのは。

主人公　はあ、しかし水上機でも陸上機でも、さう大して變りありません。速力に。

中老紳士　風の方向で餘程違ひませうね？

主人公　はあ、いや、大した風でなければ……。近頃は強馬力の發動機を載せますから。

老紳士　あんたのは……六、六……。

主人公　はあ、三百のを二臺つけてをります。

中老紳士　一體その……。ねえ佐久間さん、どんな氣持のもんでごわせうかね、飛んでゐる時は……？

主人公　さうですね。いつもそれを訊かれるんで困るんですが……まあ一番分り易く云ふと、大きな船に乘つてゐるやうなもので……。素晴らしい非常な速力の汽船にですね。

中老紳士　つまりその動搖の工合が……？

主人公　はあ、體にうけるショックは、丁度あれと似てをります。たゞあれより、もうちつと輕いふは〳〵した感じですけれども……。宙に浮いてゐるんですから。

中老紳士　ふうん……。はゝあ、分つた。ぢや、ハンモックみたいなものだな。早い話が。

老紳士　ハン……？

中老紳士　ハンモック。ご存知でせう？　あのそれ、よく子供が庭の樹に吊るして、寢ころんでゐるぢやごわせんか。仰向いて本なんか見ながら……。

航空兵大尉B　成程。宙に浮いてゐるな。あれは。

來賓の一　エレヴエーターの工合とも違ひますか。

主人公　はあ、さうです。つまりあれです。エレヴエーターで降りる時の……エレヴエーターにも隨分足ののろいのがありますけれどね。のろいんぢや駄目ですが、早い奴なら、あのすうつとした吸ひ込まれるやうな氣持ですね。すうつとした……。あれなんか、まあ……まあ似てゐると云へますね。いくらか。

大尉B　エレヴエーターが停る時に、下手な奴がやると、ちよつとかうショックをうけませう？　突き戻されるやうな……。あの感じですよ。つまり。着陸して車輪が地面に觸れた瞬間の氣

持は。
中老紳士　はゝあ、ぢやあまりいゝ氣持のものぢやごわせんな。あれぢやあ……。（主人公に）それで下を瞰た時はどうですか。飛びながら、眼のまはるやうなことはごわせんか。
主人公　そんなことはありません。絶對に。
大尉Ｂ　昔はありましたがね。のろいふらふらした飛行機時代には。
主人公　もう一旦飛び出して了へば、どんな人だつて愉快になれます。いゝ氣持のものです。實際。
來賓の一（乘り出して）本當ですか。
主人公　本當ですよ。船なんかよりは餘つ程らくです。たとへば……一番いゝのは高い建物ですね。丸ビルとか三越とか……。あゝいふ高い處の頂邊に上つて、そこへ寢ころんで下を眺めて見るんですよ。さうすると一番よく分ると思ふんです。飛びながら下を瞰た時の氣持が。
中老紳士　おや、それぢやちつとも愉快ぢやない。氣味の惡いもんですよ。高い處から下を覗くのは。
主人公　それは立つて見るからです。立つて見るから足がすくはれるやうで氣味が惡いんです。

横になつて寢ころんで見てごらんなさい。空が足もとに見えたり、家や電車が頭の上を走つたり。

來賓の一　餘計氣持が惡さうだな。そいつは。

主人公　いや、まるで宙返りでもしてゐるやうです。飛行機で。

老紳士　いや、いかん。それや感心せん。

（ボーイが、新聞社員と、十二三歳の盛裝した少女を案内して出て來る。少女は美しい大きな花束を抱へてゐる。そのうしろに寫眞班員が續く）

ボーイ　（主人公に）たゞ今のお名刺の方が、こちらでと仰有いますので。

新聞社員　（機敏に）どうも、かういふお席へ甚だ失禮でございますが、特にどうか。

主人公　はあ、私、佐久間です。

社員　私は帝國日報社長の代理でございます。えゝ……この度は空前のご成功でお目出たう存じます。社長が自身およろこびに上がる筈でしたが、生憎據處ない社用で旅行いたしましたので、失禮ですが私が代つて。

主人公　恐れ入ります、どうも。

社員　（少女を前に出して）社長の娘でございます。

少女　お目出度うございます。（花束を捧げる）

主人公　有難う存じます。（花束を受取つて、少女と輕く握手する）

（うしろで、寫眞のマグネシウムの音が起る）

社　員（恭しく奉書の巻物を出して讀む）一等飛行機操縦士佐久間英一君は、航空倶樂部主催太平洋横斷飛行競技會に參加して、大正十×年三月、ユンゲル式六百馬力水上飛行機をもつて敢然東京灣を發し、途中幾多の艱難辛苦と鬪ひ、而も不撓不屈、遂に未曾有の飛行を完成して當初の目的を貫徹せらる。（寫眞のマグネシウムの音が起る）實にその壯擧たるや、將に有史以來の龜鑑とすべく、又その成功の光輝今や全世界に冠絶す。洵に吾人神州男兒の本懷名譽之に過ぐるものなし。本社は茲に謹で深厚なる祝賀の微意を表し、併て邦家航空界のため將來尚一層の御努力を望む。（巻き收めて主人公に出す）

（烈しい拍手が起る）

主人公（直立不動で）どうも有難う存じます。微力にも拘らず無事飛行が成し遂げられましたことは、偏に皆樣の非常なる御同情と御聲援の賜ものでございます。この後とも何分よろしく御指導をお願ひ申します。

（再び烈しい拍手が起る。それにまじつて「佐久間君萬歲」といふ叫びが聞える）

社　員（砕けて）何れ社長が歸京次第、一夕粗餐を差上げたいと思つてをります。どうぞその節は是非御出席を。

主人公　は、有難う。伺ひます。

社　員　ではこれで失禮いたします。どうも飛んだお妨げを……。皆樣、甚だご無禮申し上げました。（少女と一緒に去る。寫眞班員も續く）

主人公　（花束を小卓の上に置いて、元の席に戻る）

來賓の一　あれで、あしたの新聞に麗々と書きたてるんですな。寫眞入りか何かで。

大尉A　しかしどうです。愉快ぢやありませんか。素晴らしいですよ。何と云つたつて時代の寵兒だ、佐久間君は。ねえ、さうぢやありませんか。

來賓の二　日本が初めて生んだ日本空界の代表者だ。最も名譽ある、最も光輝ある……。

大尉B　實際です。實際、この名譽と功績に價するものは……大勳位は少し恐れ多いが、勳一等をもつて酬いても決してその……決してその……。いや、勳一等が至當だ。

大尉A　至當だ。我輩も同感だ、それは……。然るに、然るにだ。然るに當局はこれに對して、餘りに冷淡すぎやせんかと思ふ。假りにこれが軍部の者だつたら……つまり吾々軍部の者だつたらだな。勿論早速文句なしに戰時並みの待遇をうけるところなんだが、つまり民間操縱士といふ點で、民間といふ點で、非常な損をせんけれやならん。我輩自身は光輝ある帝國軍人の名

譽を持つとるけれども、その……そのつまり、その一個の私人として、私情の上に於て忍びんのだ。私人として義憤を感じるんだ。我輩は。

中老紳士　尤もなお說だ。日本は肩書の國だからな。肩書さへあれば少々腐つてゐても役に立つ。が、これがなかつたら。

來賓の一　なかつたら、十割の損だ。全く。

來賓の二　十割の損ぢや……結局無しになつて了ふぢやありませんか。無しに。

來賓の一　えゝ、だから結局無しですよ。結局墮一本でさあ、死ぬまで。いや、死んでも墮一本だ。無冠の大夫は。

來賓の三　死んだら墓標一本です。

中老紳士　何とかならんものかね。さう云はれて見ると、成程、航空俱樂部の賞金だけでは、ちとどうも……。何しろあれだけの大きな仕事なんだから。世界的の。

大尉Ｂ　さう、さうであります。實際、とても金錢などに代へられん國家的功勞なんでありますから……。實際。

大尉Ａ　いくら民間の一飛行家でも、功績は功績でありますからな。それを故意に認めなかつた

り、官民によつて恩賞に甲乙の差をつけたりするちゆふことは甚だよろしくない。國家として
よろしくない。國家的に嘆かはしい憂ふべきことだと考へるのであります。

大尉Ｂ　同感だ、我輩も……。第一、人心を惡化せしめる所以だ。社會機構の不公平ちゆふこ
とは……。

大尉Ａ　いや、我輩は社會機構などについて述べとりはせん。我輩はたゞ一民間飛行家の破天荒
な事業の成功に對して、當局が餘りに無關心すぎる。あまりに冷淡すぎる。あまりに繼つ子扱
ひするちゆふことに……。

來賓の一　いや、お說ご尤もだ。よく分る。ご兩君の仰有ることは、よく分る。よく分るが、しか
し當局でも人がゐない譯ぢやない。相當考慮は費やしてゐるんだ。つまり深甚の考慮をね。し
かし、如何せん何分前例のない國際的のことですからな。そこも多少考へてやらんといかん。
全く始めてのことで、總てが全然白紙狀態なんだから……さうでせう？　だから、それでちよ
つと表彰の方針がつかん形ぢやないかと想像されるんだが、私には……。

大尉Ａ　それならそれで豫め內意位は漏らして然るべきである筈だ。佐久間君に對して。それを
今もつて何の沙汰もない。殆ど風馬牛の態度であるちゆふことが、甚だその……。

老紳士（大きな欠伸をする）

中老紳士　それぢやどうです。議論が出たついでに、丁度いゝ機會だから、一つ今夜ここへ集つたものが主唱者になつて、然るべく建白でもしては……。

來賓の二　機運促進の意味でね。さういふ內意が當局にあるものとして……。

大尉Ｂ　成程。それや大いにいいですな。朝野の名士がこれだけ一堂に集まるなんて滅多にないことでありますからな。（大尉Ａに）どうだい、貴公。

大尉Ａ　勿論贊成だ。さういふ運動を起してこそ、今夜のこの歡迎祝賀會に意義が生じるのだ。大いにやらう。及ばずながら犬馬の勞をとるよ。我輩も。

主人公　いや、もう、どうぞそんなことは……。どうも、それぢやかへつて恐縮です。

大尉Ｂ　まあ、まあ、いゝですよ。そんな遠慮をせんだつて……。まあ我輩等に任しておきたまへ。きつと勳章を貰つて上げる。

大尉Ａ　勳一等は怪しいが、旭日重光章……或はちよつと下がつて、旭日中綬章位は確實だ。しかし君、佐久間君。これが成功したら我輩等を一夕招待して、慰勞の宴を張らんけれやいかんぜ、大々的に、なあ君。

大尉Ｂ　それや貴公云ふだけ野暮だ。第一、賞金五萬圓が默つとらん。吾々が飲む位、一と月二た月流連したつて平氣だ。たかは知れとる。なあ佐久間君。

主人公（にこ〳〵笑ひながら）　はあ、それやもう……分つてをります。充分その……。

中老紳士　それはまあ、あとの出來た時の事として、第一の問題は……。

大尉Ｂ　（てれ隱しに鸚鵡返しに）第一の問題は……。

中老紳士　誰か文章家はをられんかな。表彰文案の起草委員になる方は……。

大尉Ｂ　さうだ。表彰文案の起草委員……。

來賓の二（中老紳士に）　それはもうあなたに限る。詩經家たるところの、あなたを措いて、ほかに人は。

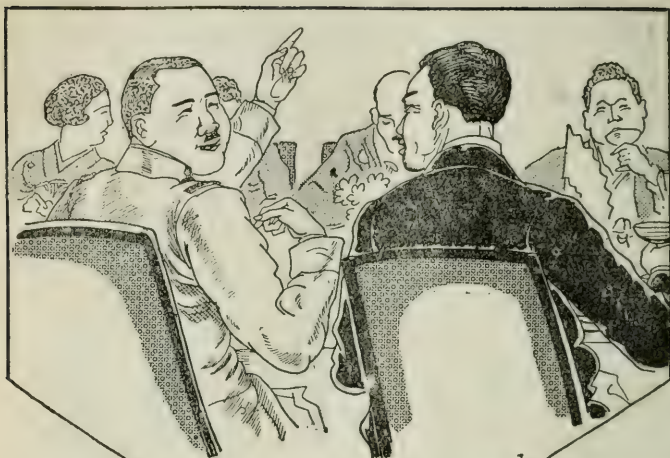
中老紳士　滅相もない。そりやお斷りだ。とてもそれや私なんか……。

來賓の一　そんなこと仰有つてはいけませんな。是非ご苦勞を願はんけれや……。

大尉Ａ　（中老紳士に）ぢや、どうか一つ起草委員といふことに……。ご面倒でも。

中老紳士　いや、それや駄目ですよ。實際。本當に書けません。私には。

大尉Ａ　しかし、推薦してゐられる方さへあるのでありますから、枉げてお引受を。

老紳士（大きな欠伸をする）
中老紳士（頭を掻きながら）弱りましたね。どうも……。ぢや……ぢや一そかうしたら何うです。實行委員を選擧してね、皆さんの中から五六人。それで萬事はその方々にお願ひするといふことに……。
大尉Ｂ　成程！　名案でありますな。ぢや早速發頭人のあなたから、その。
中老紳士　發頭人？　發頭人は少しどうも……。暴力團の首魁ぢやあるまいし。
大尉Ｂ　成程。いや、これは失禮。ぢや發起人？　或は發……議者ですか。
大尉Ａ　君、君、そんな發起人も糞もありやせん。問題は實行委員の選擧だ。
大尉Ｂ　あゝさうか。成程。（中老紳士に）では先登にあなたから一つ實行委員に……。
中老紳士　私に？……實行委員？……ふうん、それやまあ……それやまあ成れと仰有るなら成りもするが、それよりは……。
大尉Ａ　まだ外に何かいゝ案がありますか。
中老紳士　どうでせう。たとへ今こゝでなにがしかの實行委員を擧げたところですな。擧げたところで、とても今夜中に萬事解決するといふ事は。

大尉B　は、出來んのであります。さうであります。

中老紳士　どうせ相當の日子を要すると思ひますね。然らば寧ろですな。

大尉A　はあ。

中老紳士　寧ろこの際、もつと大々的に團結をして……基礎のある團體をしてどすな。たとへば……何とか期成同盟會といつた風な、まあそんな風な堂々

たる運動方針の下にですな。

大尉Ｂ　成程！　それは又一段と妙計でありますな。うむ、成程！　それや成程、お說の通りその方が、それやもう確かにその……。なあ原田大尉、貴公どう思ふ？

大尉Ａ　異議なし。贊成！　つまり佐久間一等飛行機操縱士功績……功績かな。功績表彰期成同盟會づてな風なものでありますな。

中老紳士　左樣。

大尉Ｂ　佐久間一等飛行機操縱士功績表彰……か。期成同盟會。成程、いゝね。それやもうそれに限る。堂々としとる……なあ佐久間君。

主人公　はあ、結構です。

中老紳士　待つて下さい。（考へながら）佐久間操縱士功績表彰……その功績表彰の功績は蛇足ぢやありませんかね。功績は……。表彰といふ文字があれば、それで分ると思ふが……。佐久間一等飛行操縱士表彰期成同盟會。

大尉Ａ　佐久間一等飛行操縱士功、いや、表彰、表彰期成同盟會……ですな。

大尉Ｂ　うむ、分る〳〵。それでよく分る。

大尉Ａ　ちよつと、ちよつと待つてくれ。しかしさうなると會長を置かにやならんが……。同盟會長ちゆふものを。

大尉Ｂ　成程。うむ、しかし、それや勿論……それや勿論置かにやなるまい。(中老紳士に)置かにやなるまいでせうな？

中老紳士　置いてもいゝでせうな。會の存在をはつきりさせる意味で。

大尉Ｂ　はあ、はつきりさせる意味で、勿論置いた方がいい。會の存在を、その……その……。ぢや、その第一にその會長を。

大尉Ａ　まあ貴公、默つとれ。少し……。(中老紳士に)ところで、その人選は……？

中老紳士　左樣。まあどなたか先輩の方に。

大尉Ａ　先輩の方と……。(四邊を見廻してから、老紳士の前に行つて)恐縮でありますが、あなたに本會々長をお願ひしたいので……。甚だその恐縮でありますが……。

老紳士　本會？……いや、わしなんかは微力で。はゝゝ。とてもその器でごわせん。

大尉Ａ　どういたしまして。そんなこと仰有らずに、どうか一つ是非ご面倒を。

老紳士　誰も相手にしてくれんでな。わしなんかでは……。

大尉Ａ　いや、そんなことは……一つ是非。
老紳士　もつと、その然るべき人に賴んだらようごわせう。その方が成功の早道ぢや。
大尉Ａ　決してご迷惑はおかけしないつもりでありますから、たゞその……お名前だけ拜借さして戴きたいので……是非その……。
老紳士　それなら……文部大臣が見えてをつたやうぢやが、あの人に賴んでごらん。
大尉Ａ　はあ、左樣でありますか。（四邊を見廻す）
來賓の二　文部大臣は、もうとうに歸られましたよ。食堂からこつちへは入らずに直ぐ。
大尉Ａ　はあ、左樣でありますか。（老紳士に）歸られたさうであります。大臣閣下は。
老紳士　ふうん。では……淸水伯爵がよかろ。あの人は世話好きだから極く適任ぢや。
大尉Ａ　淸水伯爵。（當惑して）はあ、どんな方でありますか知ら。
（來賓の中から「淸水さんも歸りました」といふ聲が聞える）
老紳士　歸つたか。さうか。……うむ、さうぢや、參謀總長がをつた。あれぢや〳〵。參謀總長に賴め、あの人に。
大尉Ａ　（俄かに姿勢を正して）參謀總長閣下は、さき程お歸りになられました。はあ。

老紳士　宮島大將は？

大尉Ａ　宮島閣下も先程、栗山中將閣下とご一緒に。はあ。

老紳士　歸られたか。みんな歸つて了うたな。それでは……森山次官は？　外務省の。

中老紳士　森山君は、さつき玄關の方へ出て行つたから、これも歸つたでせう。きつと。

老紳士　ふうん。……では神村子爵は？

大尉Ａ　カミ……？

中老紳士　（大尉Ａに）神村子爵。

大尉Ａ　はあ、カミムラ子爵と……。（大尉Ｂに）君知つとるか。神村子爵……閣下を。

大尉Ｂ　いや、知らん。生憎その……我輩。

來賓の一　神村さんは、さつき食堂に居る時、電話がかゝつて來て、何だか忙がしさうにしてゐましたぜ。

大尉Ａ　はゝあ。それぢや多分これも……。

老紳士　では、もう誰もをらんやうぢやね。成つて貰ふやうな人は。

（この評議中に、うしろの方からぼつぼつ、中にはこそ〳〵出て行く來賓が次第に烈しくなる。もう三分

の一位しか殘つてゐない）

中老紳士　さつき警視總監の顏が見えてゐたが……。（四邊を見廻す）

大尉B　はあ、警視廳のでありますか。

中老紳士　（微笑）えゝ、警視廳の警視總監……。歸つたらしい。居られん。

大尉A　……困つたな。どうも……。會長が居らんぢや、どうにも問題にならん。

大尉B　海軍の寺井閣下はどうだ？

大尉A　いゝけれど、もう居られまい。

大尉B　あした、彼所に行つて賴むのさ。

大尉A　日をあらためて賴み廻る位なら、寺井閣下でなくたつて、もつと……寧ろ總理大臣官邸にでも押しかけた方が有利だ。

大尉B　成程！　それもさうだな。

中老紳士　ぢやさうしたら何うです？　一そ。

大尉A　さうしたら、とは？

中老紳士　さうするのですよ。此處で、居ない人をあれこれ云つてゐるよりはですな。誰でもかま

はない。今夜缺席の人だつていゝから、こつちで會長をきめて、副會長が必要なら副會長も置き、それから理事なら理事、幹事なら幹事といふ風にですね。

來賓の一　天下の名士を片つぱしから物色するのですな。

大尉B　成程！　はゝあ。面白いね。

中老紳士　それを手分けして、一人一人說き廻るのですよ。きめて置いて。

大尉B　成程上策ですな、そいつは……うまい作戰だ。

中老紳士　何處でもみんなさうやつてゐるのですよ。ソサイエテーなんていふものは。

大尉Ａ　はあん、ぢやさうしませう。……おい、ボーイ。ボーイはをらんか。……ボーイ。

（ボーイ出て來る）

大尉Ａ　紙を持つて來てくれ。

ボーイ　半紙でございますか。

大尉Ａ　うむ、何でもよい。

ボーイ　はい。（去る）

老紳士（四邊を見廻して）　おゝ、これは、もうみんな……（欠伸を嚙み殺しながら立ち上る）さあでは、そろ〳〵……。

大尉Ａ　お歸りでありますか。

老紳士（時計を出して見て）　遲くなつた。お先きへご免蒙らう。

大尉Ａ　しかし、ちよつとご相談願ひたいと思ひますから、ご迷惑でも今しばらくどうか。

老紳士　老人はお役にたゝんでな。

大尉Ｂ　いや、どうか。どうかもうしばらく。

大尉Ａ　ご迷惑ですが、一つ是非お力添へを。
老紳士（澁々椅子に腰を下ろす）
（ボーイが紙を持つて出て來る）
大尉Ａ（紙をうけ取りながら）その卓子をこゝへくれ。
ボーイ　はい。（灰皿などの載つてゐる小卓を、大尉Ａの前に引き寄せる）
大尉Ａ（卓に向つて、萬年筆を執る）
大尉Ｂ（ボーイに）おい、ビールでも持つて來んか。冷たいのを。
ボーイ　さあ。もう時間でございますから……訊いて參りませう。
大尉Ｂ　何處かにあるだらう。二三本徵發して來いよ。
ボーイ　はい。（去る）
（來賓は殆ど去つて了つてゐる）
大尉Ａ（書いたのを讀む）佐久間一等飛行機操縱士表彰期成同盟會役員候補者名簿。―
大尉Ｂ　え、なに？……もう一度。
大尉Ａ　佐久間一等飛行機操縱士表彰期成同盟會。

大尉Ｂ　長いな。いや。どうも……どうしてさう長いんだ？

大尉Ａ　どうしてつたつて……どうもこれ以上――みんな必要な字ばかりだからな。

大尉Ｂ　ふうん。成程。それにしてもちつと長いな。ちよつと、ちよつと、もう一ぺん讀んで見てくれ。（耳を傾ける）佐久間……。

大尉Ａ　佐久間一等飛行機操縦士表彰期成同盟會役員候補名簿……仕様がない。これ以上。

大尉Ｂ　一と息には云へんな。（中老紳士に）どうでせう？　尠くも短い名前ではありませんな。尠くも……。

中老紳士　ぢや、その一等飛行機操縦士をとつて、單に飛行士としたらいゝでせう。或は操縦士とか航空士とか、單に……。

大尉Ｂ　成程！　うむ、成程、それやもうその方が……。同感ですな、頗る……。

大尉Ａ　簡單明瞭だね、その方が。ぢやさうしよう。……矢張り操縦士がいゝね。佐久間操縦士が？

大尉Ｂ　佐久間君、何うです、君の意見は？

主人公　はあ、結構です、それで。

大尉A　ぢやいよ〳〵會長だ。誰だ、會長は。

中老紳士　ちよつと〳〵。この候補といふ字はいらんでせう。役員候補の候補は。…

大尉B　……成程。いらんねえ。いらんよ。それは。…

大尉A　仰せの通りだ。消しませう。

大尉B　寧ろ名簿案だね。役員名簿案。

大尉A　いや、餡も皮もいらん。單に役員名簿でいゝ。それより會長をきめてくれ。早く。これこそ一番重大案だ。

大尉B　勿論總理大臣がよからう。正々堂々と。

大尉A　成るかな。總理大臣なんかが。

大尉B　成つても成らんでも、そこを賴むんだ。承知するまで賴むんさ。

大尉A　さうか。よし、ぢや會長は總理大臣。（老紳士に）ご異議ありませんか。

老紳士　ありません。

大尉A　（書きながら）は、では副會長。

大尉B　副會長も置くのか。

大尉A　おつた方がよからう。賑やかで。

大尉B　成程！　ぢやまあ順序として、まづ……内務大臣。それとも外務……

大尉A　（老紳士に）　如何でせう、内務大臣でよいですか。

老紳士　よいでせう。

大尉A　は、では副會長内務大臣と。（書く）　これは一人でいゝか。もう一人置かんでも？

大尉B　二人置くか。成程。一人よりは二人の方がいゝな。ぢやもう一人……かうつと。……うむ、うちの大臣はどうだ。うちの？

大尉A　うむ、そいつはよからう。至極適當だな。では陸軍大臣と。……いや、待てよ。

大尉B　何だ？　いかんか。うちの大臣では。

大尉A　こゝへうちの大臣をもつて來る位なら、いつそこの内務大臣をやめてだな。うちと海軍とを並べた方がよくはないか。軍部兩大臣、右大臣左大臣つていふ工合にかう……。

大尉B　成程！　それも名案だね。（中老紳士に）　どうでせう、御意見は？

中老紳士　結構ですな。至極。

大尉A　（老紳士に）　では内務大臣を變更して、副會長を陸海軍大臣二名といふことに。

老紳士　どうぞ。

大尉Ａ　は。（書く）次ぎは理事だ。それとも幹事とするか。職名は？

大尉Ｂ　理事と云つた方が立派だな。それや。

大尉Ａ　（老紳士に）如何でせう？　幹事よりも理事の方がよいといふ說がありますが。

老紳士　よいでせう。

大尉Ａ　理事で？……は、では理事。（書く）どん〳〵云つて下さい。書きますから。

大尉Ｂ　人數はどうなんだ。豫めその――。

大尉Ａ　それはかまはん。若干名ちゆふことにしておいて、すべて人物本位で行く。（氣がついて、中老紳士に）と、いふことにしては如何でせう？

中老紳士　それも理窟ですね。結構です。

大尉Ａ　は。（老紳士に）では理事若干名といふことに……御承知下さい。

老紳士　承知しました。

大尉Ａ　は。ぢやその理事を一つ――。誰ですか。

大尉Ｂ　まづ各省の大臣次官――それから局課長位のところまで何うだ。

大尉Ａ　大臣と課長を一緒にするのか。理事に。

大尉Ｂ　いかんかな。一緒ぢやあ……。成程いかんかも知れんな。

大尉Ａ　いかんちゆふこともあるまいが……それなら内閣書記官長、法制局長官、警視總監……なんていふところもいゝぞ。

大尉Ｂ　いゝな、そんなところも。（中老紳士に）どうでせう？　そんなところは。

中老紳士　いゝでせう。そんなところで。

大尉Ａ　は。ぢや、まづ眞つ先きに内務か。（書きながら）次ぎに外務と。大藏――遞信――農商務。

中老紳士　あゝ君、ありませんよ。それや。

大尉Ａ　（吃驚して）え、ない？　何が？

中老紳士　分立しましたよ。この間。

大尉Ａ　……いや、その……何が分立したんですか。―

中老紳士　知らんのですか。

大尉Ａ　いや、その……知らんのです。

中老紳士　はゝあ。あゝさうですか。いや、農商務省が二つに分れてゞすな。つまり農。

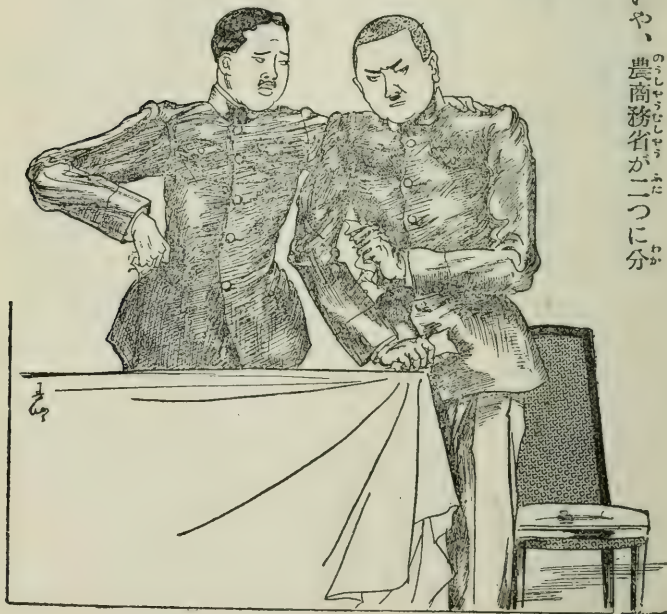
大尉B　いや成程。たしかにさうだ。農務省と商工省だ。

中老紳士　いや、農林省ですよ。

大尉B　あゝ農林省。成程。農林省。

大尉A　(書きながら低く)　どうも軍隊生活をしとると世事に疎くなつて……。えゝと、農務……

中老紳士　いや、農林。

大尉A　あゝ農林……それから商工省ですか。どうも頗る複雑だな。

大尉B　お次ぎが司法。文部。

大尉A　お次ぎが司法……文部と。それから。

大尉B　ザツトオール！

中老紳士　おつと、も一つありますよ。

大尉B　え？　まだありますか。

中老紳士　ありますよ。鐵道省。昔の鐵道院。

大尉A　違ひない、鐵道……と。それから？

大尉B　（不確實に）もうない、今度は……。（中老紳士に）どうでせう、大きな銀行會社の重役なんかは？　つまりあなた方のやうな――その――富豪や實業家を全部網羅して、その……。

老紳士　（遮つて）おや、ちよつと、ちよつと見せて下さい。

大尉A　は、どうぞ。（紙を出す）

老紳士　（眼鏡をかけて覗きながら）いや、これは美事だ。素晴らしいもんぢや！

大尉AとB　（同時に）は？

老紳士　すつかり内閣が出來上りましたな。一大内閣が。

大尉Ｂ　成程。內閣ですな。いや、妙ですな。
老紳士　短時間にえらいお腕前ぢや。（哄笑）
中老紳士　しかしご兩君、中々お骨折ですな。實際立派な義俠的行爲ですよ。偉いもんだ。
大尉Ａ　なあに！　何でもありません、これ位のことは。
中老紳士　いや、中々どうして……。大變ですよ。第一、その多人數を、一人々々訪問して說き廻るなんて容易なことぢやない。
大尉Ａ　訪問？
中老紳士　えゝ。說き廻るだけでも難事業だのに、一々承諾させんけれやならんのだからね。實際思ひやられますよ。殊にかういふ人達はみんな眼の廻る程、忙がしいと來てゐるんだから、中中おいそれと簡單に會つちやくれん。散々無駄足をさせて、やつと秘書官か三太夫かゞ取次に出て來ると思へば、後日何れよく伺つておきまして、と來る。これやもう何處でも極まり文句なんです。だがこつちは正直に、もう伺つておいてくれたものと思つて、後日電話か何かで都合をきいて出かけて行くと、伺つておきましたが、何れよく考へさせて戴いて・位のところで、ていよく追つ拂はれる。そこでこつちは馬鹿だから、馬鹿は馬鹿なりに正直だから、もう考へ

てくれるてあるだらうなんて、いゝ氣になつて出かけて行けば、大臣は近頃非常にご多忙で……。開闢以來、大臣はご多忙にきまつてゐるさあ、何處の大臣だつてね。それをさう云ふんですよ。大臣は非常にご多忙で、どちら樣へも、えゝ、樣づけですよ。丁寧なものです。斷る時には。どちら樣へもさういふことは一切お斷りしてゐますやうな次第でして、折角のご希望を誠に殘念ですがとか、お氣の毒ですが……つてなことを云つてね。全く始末になりませんよ。あゝいふ連中は

大尉A　そ、それや、一體何の話でありますか。

中老紳士　え？　いや、ご參考までにちよつと、その一席…… はゝゝゝ。

大尉B　成程！　いや、お說の通りです。は、全くさうであります。

大尉A　貴公、何を感心しとるんだ？

大尉B　……おい。

大尉A　う？

大尉B　う、ぢやない。一體、貴公そんなものを書いて、どうするんだ。後生大事に。

尉大A　どうする？　これをか。

大尉Ｂ　まさか我輩等が、つまり貴公と我輩の二人でやるんぢやあるまいな。これを。

大尉Ａ　勿論！　我輩等は現職にある人間だ。現職軍人がこんなことをやつとられるものか。馬鹿な！

大尉Ｂ　それぢや誰が實行するんだ？　誰がその人達を說き廻るのだ？　第一、一生懸命にそんな役名名簿なんかこさへたつて、事實上は空文ぢやないか。反古ぢやないか。

大尉Ａ　空文？　反古？……面を洗つて來い、面を！　貴樣寢ぼけとるな。

大尉Ｂ　寢ぼけとるのは貴樣だ。

大尉Ａ　なあに貴樣だ。貴樣こそ寢ぼけとる。かうしておいて片つぱしから歷訪するんだ。さういふ諒解ぢやないか。始めつから。

大尉Ｂ　だから我輩それを云つとるんだ。一體、歷訪とは何だ。誰が步くんだ。貴公自身やるつもりか。

大尉Ａ　我輩が？　馬、馬、馬鹿を云へ！

大尉Ｂ　そら見ろ！　では誰がやるんだ。貴公よりほかに居らんぢやないか、誰も。

大尉Ａ　チヨツ、分らん奴ぢやな。貴樣。

大尉Ｂ　分らんのは貴様だ。貴様が分らんのぢやないか。我輩にはよく分つとる。

大尉Ａ　分つとらんぢやないか。少しも。まあ最初の話を考へて見い、最初の約束を。もう忘れたか。今夜こゝにお集りの諸君と一致の協同動作で。

大尉Ｂ　おい、待て〳〵。そこだ〳〵。

大尉Ａ　何がそこだ？

大尉Ｂ　鈍い奴だな。一體その貴公が相談して、一致の協同動作を執るべき諸君ちゆふものは何處にゐるんだ。その諸君ちゆふものは。

大尉Ａ　何だと！（始めて四邊を見廻す。主人公と、その親友と、老紳士と、中老紳士のほか誰もゐない。大尉Ｂに）貴様それを知つとつて、何故今まで默つとるんだ！　何故我輩にこんなものを書かした。（書いた紙を破いて捨てる）け、怪しからん奴だ。

大尉Ｂ　いや、實は我輩も今まで知らんかつたのだ。こんな結果にならうとは！

大尉Ａ　知らんで濟むか。侮辱だぞ！　え、侮辱しとるぢやないか、大體。

大尉Ｂ　まあ、まあ堪忍せい、仕方がない、これが世間の通例だ。堪忍せい、堪忍せい。

老紳士　（立上る）どれ、おいとませう。はゝゝゝ。いや、遲くまでご苦勞。（去る）

中老紳士　そこまでご一緒に。佐久間さん、ではお先きへ。（續いて去る）
主人公　（立ち上る）どうぞ、失禮しました。
大尉Ａ　無責任な奴等だ！　情けない奴等だ！　よく人間の皮をかぶつとるなあ！
大尉Ｂ　（腕時計を見て）お、もう十二時だ。早く行かんと電車がなくなるぞ。
（白い上着に着代へたボーイが二三人、どや〳〵と出て來て椅子を片付けはじめる）
大尉Ｂ　おい、さあ立て。遲くなる。
大尉Ａ　一體、今夜の司會者はどうしたんだ。司會者は。
大尉Ｂ　をらんね。歸つたんだらう。大方。
大尉Ａ　歸つた？……怪しからんぢやないか。客を殘して司會者が先きに歸るちゆふ法があるか。
大尉Ｂ　司會者のことまで俺は知らんよ。
大尉Ａ　チョッ！　どいつもこいつも成つとりやせん！　呆れ返つた奴等ぢや！
大尉Ｂ　もう諦めろ。ちよつとした物のはずみで間違つたんだ。世間にはザラにあることだ。まあ勘辨しろ。
大尉Ａ　糞つたれめ！……おい、何處かで飲み直さう、景氣よく！　俺はたまらん！

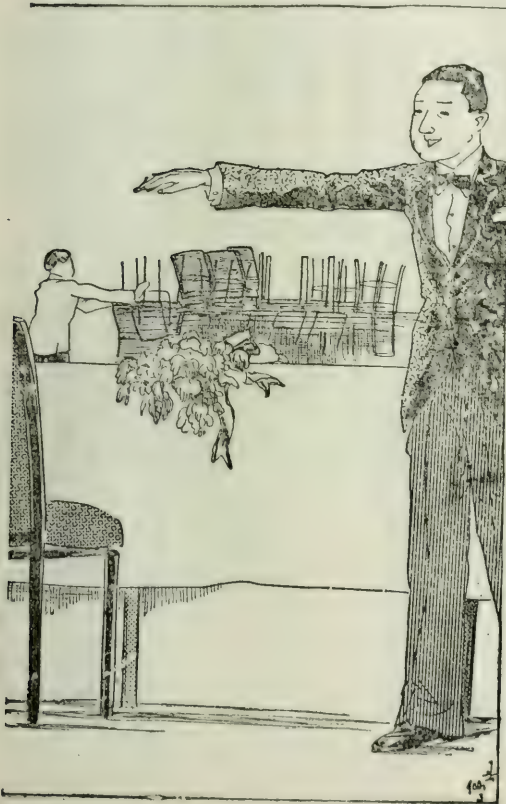
大尉B　よし、飲む。行かう。（主人公には眼もくれず、大尉AとB、足早に去る）

ボーイの一　椅子を片付けます。恐れ入りますが、お立ち下さい。

主人公　椅子？……あゝさうか。

（立ち上る）

ボーイの二　時間でございますから、どうぞお引取り下さい。

主人公　時間？……あゝさうか。ふゝゝふゝ。何のことだ。結局、外

へ追ひ出されて了ふのか。獨りで……。

（今迄背後の方に一人ぽつねんとしてゐた主人公の親友が傍へ出て來る）

親友　おい、英ちやん、もういゝんだらう？　行かう。

主人公（吃驚して）何だ、淸ちやん、お前まだゐたのかい。今まで。

親友　うむ。待つてゐたんだよ。銀座を歩いて歸らう。

主人公　そいつは濟まなかつたな。遲くまで待たしちやつて……。僕は、もうとつくに歸つたと思つてゐたんだよ。君は。

親　友　默つて行つちまふやうなことはしないよ。

主人公　有難う。有難う。本當にすまない。待たしちやつて。

ボーイの一　もし〳〵、これをお持ち下さいまし。（花束をとつて出す）

主人公　あゝ花か。（手を出しかけたが）捨てゝくれたまへ。いらないから。

ボーイ　かしこまりました。それぢやお捨て致します。

親　友　まだ萎れちやゐないよ。持つて行けよ。折角くれたのに。

主人公　いらないよ。……ねえ淸ちやん、人間なんて花束みたいなものだね。この花束は赤いリボンで結んであるけれど、黑いリボンの奴もあるぜ。え、あるだらう？　しかし、赤だつて黑だつて、何方で結ばれたつて、結局花束の壽命は一時的ぢやないか。さうだらう？　人間だつてさうだ。幸福も不幸もさう永くは續かない。一時的だよ。ほんの一時だよ……。

ボーイ　あかりを消します。（電燈のスヰイツチをひねる）

親　友　英ちやん。行かう。

主人公　俺はもう飛行機なんかいやだ。……ふん、何てくだらねえ世の中だらう！

（薄暗くなる）——幕——　（挿繪——名取春仙）

空腕

『太郎冠者、々々』
『はア、御前に居ります』
『お前を呼んだのは餘の儀でない、明日お客様が御座るによつて、淀へ行つて、鯉を買うて來て呉れ』
『よろしうございます。その位の事なら、何も私が參る迄もございません、誰か餘人に申付けませう。次郎冠者、次郎冠者』
『コレ〱太郎冠者、次郎冠者には外の用事を云ひつけてある。お前が行つて來なさい』
『あの私が？』
『左様だ』

『よ、よろしうございますが、今日はもう、日も暮れましたれば、明日早く……』

『明日では間に合はぬ。是非、今日行つて来い』

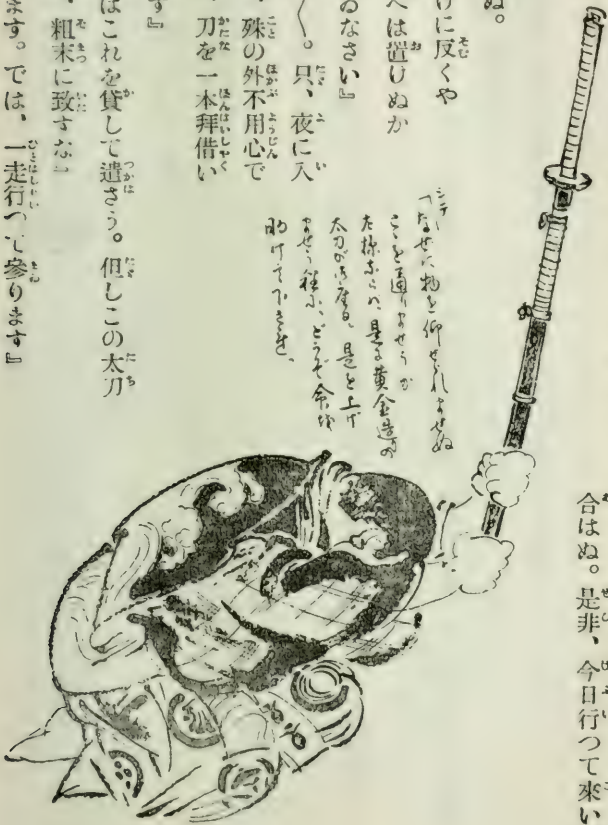
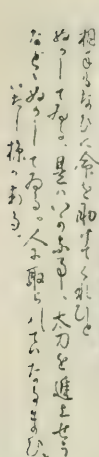
『ハ、でも』

『いやなら頼まぬ。併し主人の申付けに反くやうなものは、家へは置けぬから、その積りでゐなさい』

『ま、参ります／＼。只、夜に入つての鳥羽殿は、殊の外不用心でござりますれば、刀を一本拝借いたし度く存じます』

『尤もぢや。ではこれを貸して遣さう。但しこの太刀は大事な刀ぢや、粗末に致すな』

『忝うござります。では、一走行つて参ります』

『うむ、早く行つて參れ、待つてゐるぞ』

『畏りました……さて〳〵迷惑千萬な御用を云ひ付けられたものぢや。併し、主命ならば是非もない。けれども困つた事になつたものだ。わしは元來臆病で、竹藪がざわ〳〵と云つてさへ縮上るものを、夜中に淀まで……とは情ないと申してゐた所で用事は足りぬ、どれ急いで參らう。おゝ、此所はもう東寺四つ塚だ。これから先きが不用心なのだ。仕方がない駈けて行かう……これは不可ん。後から、何か追かけて來るやうな氣持がして何分にも氣味が惡い。アツ、向ふに大勢人が立つてゐる。扨は盜賊に違ひない。申しお泥棒樣、私はこれから淀へ鯉を買ひに參るものでございます。お金らしいお金は持つて居りませぬ。どうかこの刀を差上げま

す程に、生命ばかりは、おた〳〵〳〵お助けなされて下さりませ』

太郎冠者は手を合せて切りに並木を拜んでゐます。

話變つて、主人は太郎冠者を出してやりましたものゝ、

『大層遲いな、彼奴は大の臆病もの、途中で何か間違でも出來たのではあるまいか。どりや一つ行つて見てやらう……プツ……果して案の定、太郎冠者め並木を盜賊の群と思ひ違へて、切りに拜んでゐる。左樣だ、何と嚇すか、あの刀を一つ橫取りしてやらう。その刀を出せツ』

と奪ひ取つて、大急ぎで自分の家へ歸つて來ました。

『アヽ、悲しや〳〵。遂々袈裟掛けに斬り居つた。斯麼なことになるであらうと思つたから、明日の朝にしようと云つたのを、何んでもかでも行けいと云はれたので、遂々こんな情ないことになつて了うた。あゝ情けない。豫て寂しいものとは聞いてゐたが、これ程死出の旅が寂しいものとは思はなんだ。斯樣と知つたら、妻子にも別れを告げて置いたもの……アヽ、寂しいことぢやなア。オヤ、こゝは鳥羽の戀塚ではないか、扨は六道の辻にも戀塚が有ると見えるな。おや〳〵〳〵、こりやア確かに鳥羽の戀塚ぢや、戀塚ぢや。して見ると、わしは斬られはしなかつたのだ。嬉しや〳〵、一つしか無い命を拾うた。アツ、た、大變ぢや〳〵、太刀がない〳〵。えゝつ

と、かうつと……扨は先刻の盜賊共に奪ひ取られたものと見える……これは困つたことになつたぞ、まゝよ、御主人樣は、ア、見えても中々の正直ものぢや。好い加減なことを面白可笑しく話して、胡麻化すとしよう……もうし旦那樣、只今立戻りました』

『オ、、太郎冠者戻つたか、心配をして居つたぞ』

『はい〳〵、只今歸りましてござります』

『して、鯉はあつたであらうな？』

『それについてお話がござります。私の申す一伍一什、一通お聞きなされて下されませ』

『氣がかりぢや、早く申せ』

『私事、一刻も早く鯉を求めて立戻らうと存じ、大急ぎで四つ塚まで參りました所、日はとつぷりと暮れ果てゝ、四方は眞の闇となりましてござります』

『左樣であらう。あの邊は聞えた物騷な所、怪しい者は出なんだか？』

『はい、私めも、左樣存じましたので、拜借した刀の鯉口をぷつりと切つて、すた〳〵と歩いて參りますと、闇の中から立現れた四五人の大の男』

『うん〳〵』

『私めの前後を取つめ、身ぐるみ脱いで置いて行けと申すのでござります。扨はと存じまして一足退つて居合腰、己らは、わしの事を知つて出たか知らずに出たか。我こそ小太刀遣ひの名人太郎冠者と申すものぢや、近寄つて、一つより外ない素首、ぶつ飛ばされまいぞと大音に呼はりますと、曲者共は私の勇氣に恐れたと見えて、そのまゝ雲を霞と逃げ去りましてござります』

『ハヽヽ、それは手柄であつたな。お前の威張つた態が手に取るやうぢやわ』

『旦那樣に、一寸お目にかけ度い位でござりました』

『見たかつたな』

『ほんにお眼にかけ度うございました』

『それからどうした』

『對手の逃げ去つたこそ物怪の幸ひ、無益の殺生するにも及ばぬと存じ、又も道を急いで參りますと、先刻逃去つた奴らが、今度は三四十人の仲間を連れて引返し、私めを八方より取かこんだのでございます』

『うむ／＼』

『ぎらり／＼と引ぬいた白刃の光りには、秋の野になびく芒の穗を見るやうでござりました。太郎

冠者観念と、八方から斬つてかゝつて参りました』

『うん〳〵』

『心得たりと、私は、松の大木を小楯に取つて、サアこい来れと、ぴたり身構へましたは、私得意中の得意とも云ふべき合掌金剛』

『勇ましいな』

『左から斬り込んで来るを、一太刀合せて片手上段空竹割』

『うん〳〵』

『右から来るのを、片膝突いて横一文字』

『うん〳〵』

『正面から来るのを、刎ね返して置いて田楽刺』

『うん〳〵』

『或は梨割、車切り、奴、袈裟掛け、矢筈斬り、据斬、さいの目千六本』

『大出来々々』

『こゝまでは吾れながら大出来でございましたが、猶も劇しく斬り込んで来るのを、かつきと許

りに受け留めた途端、鍔本から二三寸の所で、ぽつきと折れましてござります』
『折れた？』
『美事に折れました』
『してその折れた太刀は？』
『いかに干將莫邪の劒でも、折れては役に立つまいと存じまして、群がる敵の中へポーンと投げつけて、引揚げて參りました』
『左樣か』

『何と大出来と仰有つては下さりませぬか』

『うん、それは出来した。所で、お前に見せるものがある』

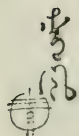
『何でございます』

『この太刀ぢや』

『ほゝう美事なものでござりますな』

『見覚えがあるか？』

『頓とござりませぬ』

『己れ、こゝ

な横道者めが…』

『ア、驚いた、左様な大聲をお出しなされては、驚くではござりませぬか』

『扨てもよくのめ〳〵と嘘をつく奴ぢや。お前を出してやつた後、何となく心掛りになつた故、後からついて行つて見れば、お前は並木をぬす人と見違へて、この刀をやる程に、生命ばかりは助けて呉れと、切りに賴んでゐたではないか』

『えーつ』

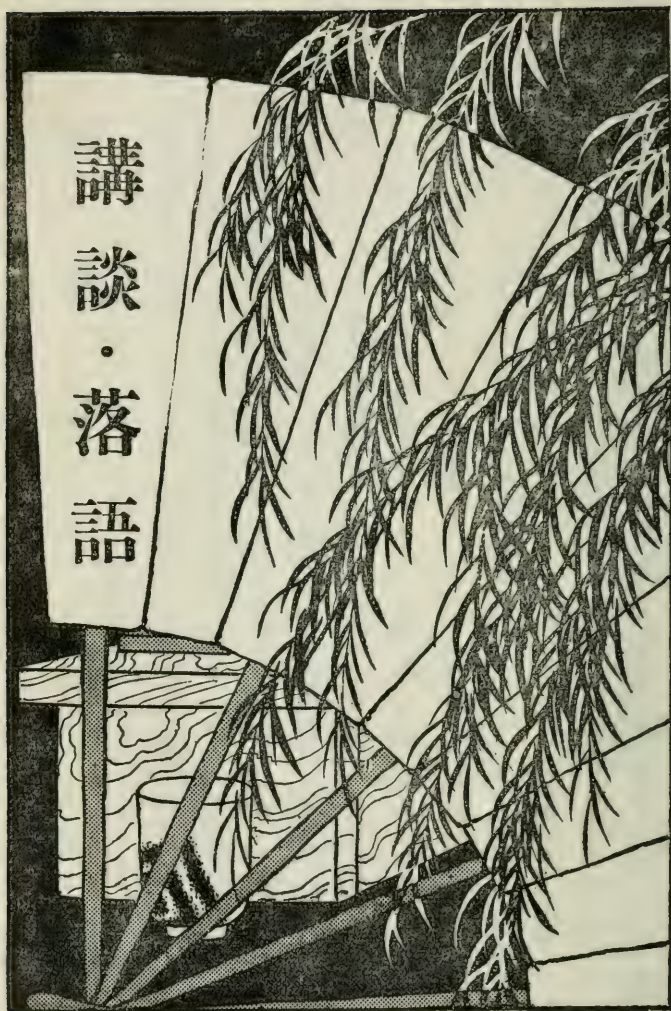
『他人にでも奪られてはと思つて、わしが奪つて戻つたのがこの劍だ。聞きともない空腕立……苦々しいわ』

『あゝもし、お待ちなされまし。名にし負ふ名劍の事でござりますれば、折と折とが入合ひまして、私より先きへ戻つたものでございませう』

『己れ、またその様なことをぬかすか、もうゆるさんぞ』

『惡うございました、宥して下さりませ〳〵』

『やるまいぞ〳〵』（**挿繪―松田靑風**）

講談・落語

藪入り

林家正藏

『かくばかりいつはり多き世の中に、子を思ふばかりは誠なりけり』

と云ふ古歌がございますが、全く其の通りで、親として子を思はない者はございませず、其の愛情は格別なものでございます。御両親の中、子を思ふ情愛に何れ變りのある筈はございませんが、女親の方は又一層情愛が深いやうでございます。と申すのが、何しろ、子供衆が生れますまで十月の間胎内へ留めて置きまする。十月留めると云ふのは容易なものではございません。どんな懇意な質屋でも、さう只で留めて置くのはありません。

お産は女の大役で、命懸けの大仕事でございます。其の又お産をなさる迄の間の御婦人が御妊娠中の姿は、さう申しては失禮でございますが、餘り宜しいとは申されません。顔が青ざめて、頬肉が落ちて、頬骨が突き出て、恰で岡へ上げられた鰻のやうな顔に成り、ハアハア肩で息を切

つて、大きなお腹が前へせり出して反り返つた御様子は、家鴨が文庫を背負つたやうに、實に慘めなもので、其那苦しみの末に、お産の大難場を通過して出來ました子供ですから、其の可愛いのが當然の事でございませう。

さて、産れました子供衆を、蝶よ花よと可愛がつて育てて居りまする中に、十一二に成りますと、從前は、男の子供衆は良く奉公に出しましたもので、すると御奉公に出ました子供衆は、年に二度、正月とお盆にやぶ入りと申しまして、一日御主人から御暇を貰つて、親許へ歸つて參ります。尤も當今では、お商人には皆夫々公休日と云ふものがございますが、從前は此の二度に限つたものです。其のやぶ入りの當日には、親御さんに、久し振りで可愛い我が子の無事な姿を見て大喜びを致します。菊守園菊外さんの句に、『藪入りや、何んにも云はず泣き笑ひ』と云ふのがありますが、僅か十七文字でよく其の狀を現はして居るやうに考へます。久し振りで我が子の顔を見るのを樂みに、御兩親は前の晩なぞは碌に寢やあ致しません。

父『おい、おかつ』か『何だえ』父『もうそろ／＼龜坊が來さうなものだな』か『未だお前さん、夜中ぢやあないか、今頃歸つてなぞ來るものかね』父『さうかなあ、でもお前、九つを打ちやあもう今日の部ぢやあないか』か『それはさうだけれども、眞夜中に小僧をやぶ入りに出すと云ふ

家はありやあしないよ』　父『成程な……』

又暫く經つと、

父『おかつ』か『何だえ』　父『未だ、龜坊は來ねえかしら』　か『未だ來やあしませんよ』　父『さうかなあ』

又暫く經つと、

父『おかつ』　か『何さ』

父『未だ龜吉は來ねえかしら』　か『未だ來やあしませんよ』父『さうかなあ』

と云つて其の儘默つて了ひましたが、到頭落着いて居られないと見えまして、飛び起きると、入口へ參りまして、雨戸をガラリと開けた。

か『お前さん、何をしてるのさ』

父『龜吉が來るのを待つて居るんだ』　か『未だ夜が明けないぢやあないか』

父『夜が明けねえつたつて、龜

坊だつて久し振りで親の家へ歸つて來るんだ、夜の明けねえ中に、飛び出して來さうなもんだ』

か『そんな事があるものかね』

さうかう致します中に、夜が明けて參りました。

父『有難え、有難え、到頭夜が明けた。だが夜が明けたてえのに、近處ぢやあ、何處もよく寢て居やがるなあ。もう起きたら良ささうなもんぢやあねえか、起きて居るのは家ばかりだ、近處だつて交際に起きさうなもんだ、御彼岸ばかりが交際ぢやあねえ』

と、阿父さんは、立つたりしやがんだりして居ります。

父『龜坊は急いでやつて來るだらうから、俥にでも乘つて來るかも知れねえ』

途端に、先の横町から俥が、

父『來たかな……いけねえ、いけねえ、向ふの横丁へ曲つちやつた。……オヤ、又御出でなすつた、此の俥かな……オーヤオヤ之も違ふか、……何時になつたら來るのかしら、それとも今日は藪入りだと云ふのに、何時もの通りに、雜巾掛や掃除をチヤンとしてから來るのかしら、藪入りの朝に働かせるとは主人の奴は不埒な奴だ、馬鹿にして居やがる』

か『何をお前さんそんなにブツブツ怒つて居るんだよ、御主人はねえ、よく解つた方だから、夜が明けて直ぐぢやあ、未だ人通りが少なくつて物騒だから、それでゆつくり出して下さるんだよ、それをそんなに惡く云つちやあ濟まないよ』

父『オヤ、コン畜生、いやに主人に肩を持ちやあがる、手前主人と怪しいな』

か『馬鹿な事を御云ひでないよ、其那處に何時までも立つて居ると、風邪でも引くといけないから』

父『ナーニ、風邪位引いたつて構はねえ』

か『其那無茶な事を云ふもんぢやあないよ、さあ中へ御這入りよ、話が有るんだから』

父『何だえ』と中へ這入つて參りました。

か『實はねえ、此の間、あの子を世話して下すつた差配さんが來て、眞實に彼の子は良い小僧で、良く働いて結構だと、御店では大層評判が良く、末には立派な大商人に成れるだらう、良い子供を持つて幸福だ、全く鳶に鷹だと云つて居なすつたよ』

父『さうか、其奴は有難えなあ、彼奴が大商人にでもなつて呉れなけりあ、俺達は生涯貧乏で暮して了はなけりやあならねえ。だが、鳶に鷹つて云ふと、彼奴は鷹で俺が鳶か。まあ、何んでも構はねえ、彼奴さへ賞められりや結構だ。そんなら今日は、彼奴が歸つて來たら最初に差配さんの處へだしぬけに彼奴を連れてつて、今日は鳶が鷹を連れて參りました、とんだかで來ました、と云つて吃驚させてやらう。それから婆さんの墓參りに連れて行かう、婆さんは彼れを可愛がつて、年を老つて、ろくにきかない身體で、抱いたり背負つたり、能く面倒を見て呉れたつけなあ……だが、龜は隨分大きく成つたらうなあ』

か『そりやお前さん、育つ盛りだもの、大きく成つたでせうとも』

父『事によると俺より大きく成つたかも知れねえぞ』

か『馬鹿な事を…幾ら大きく成つたつて今年十二ぢやあないか』

父『それもさうだな……それから、御近處へも色々御心配をかけてるから、彼奴を連れて御挨拶に一と廻りして來ようなあ』

と、頻に會話をして居りますと、

『御免下さい』と、云ふ聲がしたので、『はい』と、返事をして内儀さんは立つて入口へ行く。

『御免下さいまし』

か『おやまあ、誰かと思つたら龜ぢやあないか、良く來たねえ、……お前の來やうが遲いつて云ふので、阿父さんはぷんぷん怒つて妾を叱つてばかり居たのだよ』

龜『はい、もつと早く參らうと思ひました處、御主人樣が、朝早くは人通りが少くつて物騷だからと仰つしやるので遲くなりまして』

か『さうかえ。矢張り妾の思つた通りなんだ、……見違へたやうに大きくなつたねえ…… さあ、上へ上つて、阿父さんは奥に居るから行つてお會ひなさい』龜『左樣でございますか』

と、龜吉は上へ上り、奥へ參りまして丁寧に御辭儀を致し、

龜『阿父さん暫くでございました、當年はまことに御寒さが酷しうございますが御變りもなく

て結構でございます……また阿母さん、只今はろくに御挨拶も致しませんでしたが阿父さんと逢つて御弱い方でございますが、別段御變りもございませんやうで結構でございます』

か『良い鹽梅に妾も阿父さんも丈夫で暮して居るが、何時も阿父さんは御前の事ばかり心配して、龜は此の頃どうしたらう、粗相でもして叱られて居やあしないかしら、それとも病氣にでも成つて居やあしないかと、始終氣にして居るんだよ、早くお前も大きく成つて阿父さんに孝行なしてお呉れよ』　龜『ええ、そりや出來るだけ孝行は致す心算で居りますが、……それ、過日御手紙では、阿父さんは風邪を御引きなすつたさうで……』

父『何の、若い裡にやあ、ちつとやそつとの鼻風邪位は朝飛び起きて、少し骨の折れる仕事をして一汗かけば療つちまつたものだが年を老るとさうも行かねえんでなあ……おかつ、龜は大きく成つたらうなあ』

か『大きく成つたらゝつて、現在目の前に居るぢやあないか』

父『それがね、見ようと思ふんだが、涙が目へ一杯に溜つて來て眼を明く事が出來ねえ……歸つて來て呉れて俺は此那嬉しい事はねえ、俺は嬉しくつてたまらねえ』

と阿父さんは嬉し泣きに泣いて居ります。親子の情はまことにかくあるべきでございます。

聽て、阿父さんは涙を拭いて眼を開き、

父『なーる程、龜、手前は大きく成つたなあ、どれ立つて見ろ………うむ、うむ、大きく成つた、仕立下しのピンとした着物、それは御主人様から下すつたのだな』 龜『ヘエ』

父『帯もさうか、うむ……龜、お前は何が食ひ度い、構はねえから食ひ度いと思ふものを何でもさう云ひな』 龜『ヘエ、有難う存じますが、朝の御飯を頂いてから未だ間が有りませんので、別段お腹は空いて居りません』

父『そんな遠慮をするなよ』 龜『いゝえ遠慮なんぞ致しません』

父『そんなら、云つて見な、云はないのか、おかつ、龜は何が好きだつけなあ』

か『さうね……たしかこれは天ぷらが好き

だつたが』　父『さうか、矢張り好きな物は俺に似て居るなあ、天ぷらとそれから』　か『角のおすしやのにぎりをよく食べたがつたよ』

父『それから』　か『大福餅も好きだし、鰻だつて嫌ひぢやあなし』

父『さうか、ぢやあ、それを皆誂へて來ねえ、龜、それを片つぱしから食つて見せて呉れ』

か『馬鹿な事を御云ひでないよ、そんなに一時に食べられるもんかねえ』

父『ナーニ、今は食へる盛りだ』

か『幾ら食べる盛りだつてさう一時に食べちやあ毒だね……龜や、何を食べるえ』
龜『はい、有難うございますが、頂くのは後程にして、一つ御湯へ參り度う存じます』
父『うむ、さうしねえ、奉公して居ちやあ、朝湯へ這入つて良い心持に成るてえ事は出來なからう、ぢやあ湯に行つて來ねえ、おかつ、石鹼と手拭を出してやりな』
龜吉は母親から石鹼と手拭を受け取り、懷中から何やら出しまして、それへ置き、
龜『どうぞ御預り下さいまし、行つて參ります』と出て行きました。後見送つて父親は、
父『おかつ大きく成つて驚いたな』
か『全く妾は始めて這入つて來た時には何處の人かと思つたよ』
父『さうか……おい、其處へ何か置いてつたな、何だえ』　か『紙入れだよ』　父『どれ一寸見せな』　か『お止しよ、居ない留守に見るのは』
父『ナーニ構やしねえ、親が子の物を見るんだ、出しなつたら』
か『ぢやあ、さあ』と出した紙入れを受け取つて、
父『御小使を何の位持つて居やがるなあ、一つ調べて、後へ幾らか餘計に入れて置いてやらう』
と中を調べて見ますと、一圓紙幣五圓紙幣取り交ぜて大分有る樣子。

父『オヤ、馬鹿に持つて居やがるな、五、十、二十、三十、四十、五十、六十、七十、八十、九十……』

と勘定をして居りまする中に、父親は顏色が變り、手がブルブルと震へて參りました。

父『おかつ、〆めて、百圓の上有るぞ』　か『えゝつ』

父『あゝ飛んだ事をしやがつた。まあどんな良い御主人だつて、小僧のやぶ入りに百圓も呉れる筈はねえ、野郎飛んでもねえ了簡を起しやあがつた、困つたなあおかつ』

か『ほんとにねえ』と、二人は吐息をついて居りまする、ところへ、

龜『只今、阿父さん阿母さん只今』

と、湯から戻つて來た龜吉、兩親の樣子を見ると何だか變なので、怪訝な顏をして居ります。

父『おい、龜』　父親は龜吉をグツと睨み付けまして、

父『まあ、こゝへ來て坐れ』　龜『へエ』

父『龜、俺はなあ、しがねえ稼業の職人で、手前も知つての通り、年中貧乏だ。けれども幾ら困つたつて、他人樣の物なんざあ、塵つ葉一つ目に呉れた事はねえぞ。宜いか、それに手前はまあ、何てえ野郎だ、そりや、御主人の息子さんや何かの樣子を見て、自分もあれが欲しい、之が

買ひ度いと思ふのは無理はねえ。だが、其れを我慢して、欲しい物も持たず、食べたい物を食べずに、御主人大事にせつせと働くのが奉公だ』 龜『ヘエ、ですから、別段何が欲しいと思つた事も、何が食べ度いと思つた事もございません』 父『やい、此の野郎口答へをしやがるな』と、父親は手を延ばして龜吉の頸首を掴んで其れへ引擦り倒し、拳を上げて、あはや打ち下さうとしますと、母親は流石に見兼ねて其の手を押へ、か『まあまあ御前さん御待ちよ、口で云つて解る事だ、そんな手荒な事をおしでないよ』となだめましたので、父親はやうやく手を離して、

父『太え野郎だ、太え野郎だ』と頻りに怒つて居ります。

か『龜や、お前は、差配さんの話しによると、正直に良く働いて大層評判が良いと云ふので喜んで居たのだが、とんだ事をして來たねえ』 龜『ヘエ』

龜吉は、何が何やらさつぱり解らず、眼をぱちくりさせて、オロオロ聲で、

龜『一體何を私が惡い事を致しましたので』

か『何をしたつて、さう白ばつくれるから憎らしいのだよ』 龜『でも私には解りませんから』

か『では云はうか』 龜『どうぞ仰つしやつて下さいまし』 か『お驚きでないよ』 龜『ヘエ』

か『此の紙入はお前どうしたんだえ』 龜『それは旦那様が、家へ行くんなら、此のお金を入れ

て行けと云つて下すつたので……』
か『紙入は下すつたとしても中の御金はどうしたんだえ』龜『それはあの……』
か『云はないでも解つて居るよ、……お前が御湯へ行つた後で阿父さんが、紙入の中を見ると
お金が百何圓、隨分吃驚したぢやあないか、さあそれはどうしたのだえ』
龜『あゝ、其れでございますか、それなら別に御心配には及びません。實は、御店に惡い鼠が居て、惡戯をして臺所を荒して困りますので、或晩私が鼠取りをかけて置きました處、朝起きて見ると、大きな鼠が一匹掛つて居りましたので、早速其れを殺しまして、交番へ持つて參りますと、紙の札を呉れましたので、其れを番頭さんに見せますと、其の札はお前の取つた鼠だから御前にやるから、其れを御金と換へて貰つて御出でなさい。其れに、其の札に付いた番號で懸賞の御金を籤に當つた者にお上から下さるさうだから大切に藏つて置くやうにと云はれましたので、其れを貰ひまして、御金を貰つた上、番號の札を大事に藏つて置きますと、暮に籤が分りまして私の札が一等で百圓に當りましたので、其れで其の御金をお上から頂戴して、旦那樣に見せまして、お預け致して置いたのでございます』
と、始めて百圓の金を持つて居る理由を話しましたので、兩親は胸撫で下し、打つて變つて顏

色を和げ、父『さうか、そんならさうと早く云やあ良いのに』

龜『ヘエ、御湯から歸つてから、ゆつくり御話し致さうと思つて居りましたので』

か『さうかえ、云はれてよく解つたよ、全くねえ、妾は、お前に限つて他人様の物を盗つたり何かする氣遣ひはないと思つたんだよ』

父『嘘を吐きあがれ、手前だつて矢張り他人様の物を盗つたのだ、今から其んな風ぢやあ、行末が案じられるつて泣いたぢやあないか』　か『泣きあしないよ』

父『何、泣かねえ事があるものか、末は大盗人に成るだらう、鼠小僧見たやうな泥棒に成つて小さいから小鼠小僧と云はれるやうになりやあしないかと、云つたぢやあねえか』

か『だからさ、つまり小鼠だ、此の御金は鼠だと云つたのだよ』

父『口の減らない事を云ふなよ……だが龜吉、此の御金を貰つた時に御主人は何んつて云つた』

龜『大層喜んで下さいまして、天から授つたのだと仰つしやいました』

父『成程、天から鼠を降らしたのだな』

龜『旦那様の仰つしやつたのには、平常お前が好く働くから其れで天から授けて下すつたのだと……』　父『して見ると、之は忠（チウ）の御蔭だなあ』

（挿繪——代囚收一）

芝濱の財布

桂文治

何でも、物事は正直でなければいけませぬ。正直でよく稼いでさへゐれば、其日に困るといふことはございませぬ。

女『ちよいと熊さん、お前さん起きておくれよ。私が時刻を計つて起すんだよ。もう起きてもいゝよ』熊『エ、まだ早いぢやねえか』女『早いッたッて、途中まで行けば夜が明けるよ。さア顔を洗つてお出でよ』

井戸端へ顔を洗ひに出た後で、魚屋さんのことでございますから、內儀さんが、盤臺その他の物を取揃へておく。亭主の熊五郎、やがて顔を洗つて來て、

熊『ぢや行つて來るよ』

と、威勢よく出て行く。その後姿を見送つて、女房は家へはいり、片附物などをして、もう餘

程時刻が經つたと思ひまするが、更に夜の明ける模樣がない。すると奴さん、慌てゝ歸つて來て、

熊『おい開けてくんねえ〳〵』女『何だねえ。開いてるよ』熊『あゝさうか』女『慌てゝどうしたんだね、あれ、護模靴を履いたまま上へ上つて來ちやア困るよ。どうしたんだえ』熊『後から誰か追駈けて來るやうだ。見てくんねえ』女『誰も來やアしないよ』熊『さうか、ぢやア自分の跫音か。何でもいいや。早く締りをしてくんねえ。心張りをしてくれ……あゝ驚いた。急いで來たんで、咽喉が燥乾いてしまつて口が利けねえ。湯でも水でもくんねえ』女『ど*

*うしたんだえ。顔の色が變つて、お前さん、何か間違ひでもしたんだらう』

熊『まアいい、そこへ坐んねえ。

冗談ぢやアねえ。馬鹿に早く起しやアがつた』

女『どうも大變に濟まないことをしたんだよ。實はね、お前さんが明日からお酒を斷つて稼ぐといふから、私も稼いで貰はうと思つて、昨夜寢たんだらう。トロトロとして目が覺めて、もういゝだらうと思つて、起したんだよ。ところがね、時刻が間違つてゐたので、鐘を聞き損なつてしまつて、本當に氣の毒なことをしたと思つたけれども、もう仕方がない……』

熊『間拔けめえ、酷い目に遇せやがる。手前が、途中まで行けば夜が明けるといつたから出掛けたんだ。すると途中まで行つても夜が明けねえ。たうとう芝の濱まで行つてしまつた。ところがまだ問屋ぢやア一軒も起きた家はねえ。沖を見ると眞暗で、夜の明ける氣色はねえ。癪に障つたから、よつぽど歸つて來ようと思つたが、いや／＼さうでねえ。これから歸つて又出直すと、

億劫になると思つたから、これはいつそのこと、こゝで夜明しをしようと思つて、天秤に腰を掛けて沖を見ながら、夜の明けるのを待つてゐたんだ。ところが、お前に早く起されたんで眠くなつて來やがつた。こいつア汐水で面を洗つたら目が覺めるだらうと、濱へおりて汐水で面を洗ふといゝ鹽梅に目が覺めた。それから上へあがらうと思ふと、ひよいと足へ引掛つたものがある。はて妙だわいと、手を掛けて探つて見ると、革の財布だ。たしか金が入つてるに違えねえ。長え紐がグル／＼卷きつけてある。これは天から乃公に授かつた金だと思ふから、濡れたのを懷中へ入れたまゝ、買出しもしねえで急いで來たんだ。すると後からピシヤ／＼人が尾けて來ると思つたが、さうぢやアねえんだ。譬にもいふ己の踵に嚇かされたんだ』女『ぢやア何かえ、お前さん、そのお金を拾つて持て來たのかえ』熊『ウム、懷中に持つてる』女『濡れてる物を懷中へ入れてゐて、疝氣でも起ると困る

よ』熊『疝氣も起るだらうけれども、今のところぢやア夢中だ』女『出して御覽な』

熊『よし……縮りがしてあるか』女『大丈夫だよ』

熊五郎、懷中の中へ手を入れて取出し、

熊『それこれだ。汐水で紐がきしんでる。確かに金だぜ』

財布の紐を解いて見ると五拾錢銀貨がザクザクと出た。

熊『見ねえ、どうだ、大した金だなア……どのぐれえあるだらう。世間に金滿家は幾らもあるが、こんなに金を持つてる奴はなからうな』女『まア本當に大變のお金だねえ』熊『大した金だなア。有難え。運が向いて來たんだな。どうだえ、幾らあるか分らねえ。勘定をしてみよう……明りが暗えな。大蠟を五六本點けねえな……なに蠟燭がねえ。一本あるなら、細かに刻んで

列べて點けねえ……どうだいまア、何處から手をつけていゝか譯が分らねえ。チユウ、チユウ、タコカイナ……』女『何だねエ。お待ちよ。私が勘定をして上げるから』

女房が勘定して見ると、丁度百圓ございます。

女『ちよいと熊さん、これは、お前さん大變だ。百圓あるよ』熊『エーッ百圓。乃公アお耻かしい話だけれども、生れてから百圓といふ金を持つたことがねえ。有難い、運が向いて來たなア』

女『けれどもお前さんこれは拾つて來たんだね』熊『さうよ』女『落した人があるから、お前さんが拾つたんだらう』熊『それは當然だ。まさか捨てたんでもなからう』女『拾つたものを無闇に使ふ譯にやアいかないから、これは一旦お上へお屆けしなければいけないよ』

熊『冗談いふな。是れが現在往來で拾つたんなら、お上へ屆けるといふこともあるが、海の中で拾つたんだ。してみれア乃公に授かつた金だ。屆けるには及ばねえ』女『それぢやアお前さんこのお金を屆けないでどうするつもりだえ』熊『どうすると聞かれると返事に困るが、何にしろこんなにある金だ。かうしねえ。長えことお前にも貧乏さして、さん〴〵襤褸を下げさしたから、まづこの金でいゝ着物を着ねえ。これからは不斷にも木綿物はよして、縮緬でも蜀江錦でも何でも着てくれ。乃公だつてこんな古い半纏で、天秤棒を擔いぢやア巾が利かねえ。縮緬の半纏か

何か着て、金罐の盤臺をかついで、一番友達の所へ廻つて驚かしてくれる。何しろ、これだけの金が入つたんだから、一つ前祝ひに友達を集めていい心持に一杯やらうぢやアねえか』女『それはさうとしたところで、兎も角このお金は私が預かつて置くから、お前もう一寢入おしよ』

熊『もう眠かアねえ』女『眠くないつたつて、又晝間疲れが出るといけないから、夜の明けるまでお寢よ』熊『ああ違えねえ。まだ夜が明けねえんだ。……これは弱つたな。迚も寢られねえ。嬉しいんで、眠いのが何所かへ行つてしまつた』女『そのうちにやア眠れるよ。お金は私が預かつたから安心しておやすみよ』熊『ぢやア寢て見ようか』

女房にいはれて熊五郎、床へはいつたかと思ふと、いゝ心持にぐつすり寢込んでしまひました。

女『熊さん、さア夜が明けたからお起きよ。お起きよ』熊『ア、アーツ……なに夜が明けた。さうか……手拭を貸してくんねえ。湯に行つて來らア』女『ぢやア早く行つてお出で』

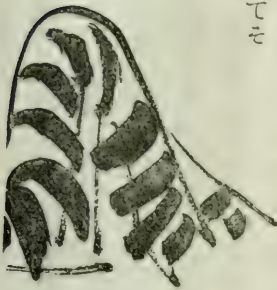
手拭を持つて、熊五郎、湯へ參りまして、湯から歸りがけに友達の所へ寄つて、それから酒屋と、近所の店持ちの魚屋へ行つて何か誂らへて歸つて來た。

熊『おゝ今歸つた』女『さア支度が出來てるから、買出しに行つておくれ』

熊『冗談いつちやアいけねえ。けふは目出度い日だ。今に一杯やらうと思つて、友達の所へズ

ーツと寄つて来た。今にみんなが来るだらうから、酒の支度をして置いてくれ……あゝ揃つて来やアがつた……おお、みんなズーツと上つてくんな、ズーツ……と、あんまりズーツと上ると、家が狭えから、いゝ加減にズーツと上つてくれ。何しろ、みんなよく来てくれた。けふは乃公の所で目出度えことがあるんで、祝ひに一杯やるんだ。みんないゝ心持に飲んでくれ』

○『何だか知らねえが、兄貴が祝ひ事があるから来いといふので、かうやつて揃つて来たが、何でもまア目出度えことなら結構だ。御馳走にならう』熊『さアみんな機嫌よく飲つてくれ』

と、これから車座になつて酒を飲み始めましたが、そのうちに友達は何れも酔拂つて帰つてしまひ、自分も酔がまはつて、仰向さまに引繰返つてそこへ高鼾で寝てしまひました。夕方明火の點いた時分に、やうやく酔が醒めたか、奴さん目を覚まし、

熊『おや明火が點いたな。アーツ、すつかり寝込んぢやつた。富の野郎帰つたか。彼奴、酒は強いな。彼奴とは迚も飲ツくらは出来ねえ。勿論けふはいゝ心持に飲んだせゐもあつて、ひどく乃公の方が酔ちまつた。目が覚めたら、どうも變な心持だな。まだ其處らに酒

があるだらう。迎へ酒に一杯やりてえから、熱くして一本つけてくれ』

女『お前さん、目を覺ましたら、私は聞かうと思つてたことがあるんだよ』熊『何だ』

女『お前さん、今朝起きてお湯へ行つたんだね』熊『さうよ』女『それから歸りに友達の所へ寄つて、大勢集まつて來て、何だか知らないが、心祝ひがあるといつて酒肴を馳走して、お前さんも大層機嫌よくお酒を飲んで、醉拂つて寢てしまつたらう。みんなも喜んで御馳走樣々々といつて歸つてしまつたが、一體どういふお目出度いことがあつて、御馳走をしたんだえ』熊『どういふことツたつて、目出度えぢやアねえか。祝ひに一杯やつたん

だ』女『だからさ。お前さんにどういふ目出度いことがあるか知らないから、私やア打捨つて置いたけれども、今に魚屋からも酒屋からも勘定取りに來る。そのお金をどこで拂ふんだえ』熊『家で拂つておきねえ』女『拂つておけといつても、お前さんが稼いでくれなければ、お金なぞはないよ』熊『無えけれども、あの何でやつてくれ』女『何さ』熊『それ、あの一件よ』女『何だか分らないねえ』熊『分らねえことはねえぢやアねえか。あの一件よ』女『あの一件つて何さ』熊『あれツ、耄惚けてゐやアがる。乃公が芝濱で拾つて來たらう。革の財布にはいつた、銀貨で百圓、勘定したぢやアねえか。お前に預けて置いた、あの内で拂つておきねえ』女『いやだよ熊さん、お前さんしつかりしておくれ。私は、お前さんから百圓といふ大金を預かつた覺えはないよ。百圓と云ふお金を、お前拾つて來たといふのかえ……冗談いつちやアいけないよ。よく考へて御覽な。不斷からお酒を飮んで怠けてばかりゐて、百圓なんといふお金が、どうして授かると思ふんだね。お酒を飮んで怠けてばかりゐて、それでお金が欲しい〳〵と思つてるから、お前さん、お金でも拾つた夢でも見たんぢやアないか。私はお前さんから預かつた覺えはないよ』熊『冗談いつちやアいけねえ。乃公はお前に確かに……』女『いいえ、私は知りません。お前さん、よく考へて御覽、夢だらう』熊『ウーム、夢か。これは驚いたなア。少し待つてくん

ねえ。金を拾つたのが夢で、酒を飲んだのが眞正か。驚いたなアこいつは……エ、と、昨夜寢たんだな。昨夜寢て、今朝起きて、今朝又寢て、又起きたかしらん……これは譯が分らねえ………あゝなる程、夢だ。飛んでもねえことをしたな。お前がいふ通り、酒ばかりくらつて怠けてゐて、金が欲しい〳〵と思つてたもんだから、金を拾つた夢を見たんだな。いやもう乃公は生涯酒を斷つて、きつと飲まねえぞ。すつかり懲りた。明日つから酒を斷つて稼ぐから、この始末だけは、どうか付けてくれ。伯父の所へも毎々だから、乃公には頼みに行かれねえ。どうかお前から理由を話して幾らか借りて來て、この始末を付けてくんねえ。その代り、屹度明日から酒を飲まねえで、一生懸命に稼がア』女『さうしてくれりやア、眞正に私は嬉いんだよ。けれどもねえお前さん、好きなお酒だから、生涯飲まないといふ譯にもいくまいから、かうしておくれな。後生だから三年の間斷つておくれ。三年御酒を斷つて、一生懸命稼いだら、どうにかなるだらう』熊『そんなら結構だ。乃公は生涯斷たうと思つてるんだ。明日からきつと斷つぜ』

と、これから眞實に稼ぐといふ氣が出たから、翌る朝になると、暗い中に起きて、買出しに出掛ける。新らしい物を買つて來て、お邸へ商ひにまゐります。品物が新らしいのに値段が安いといふので、何處へ行つても評判がいゝ。從つて商ひも澤山でございます。晝時分になつて家へ歸

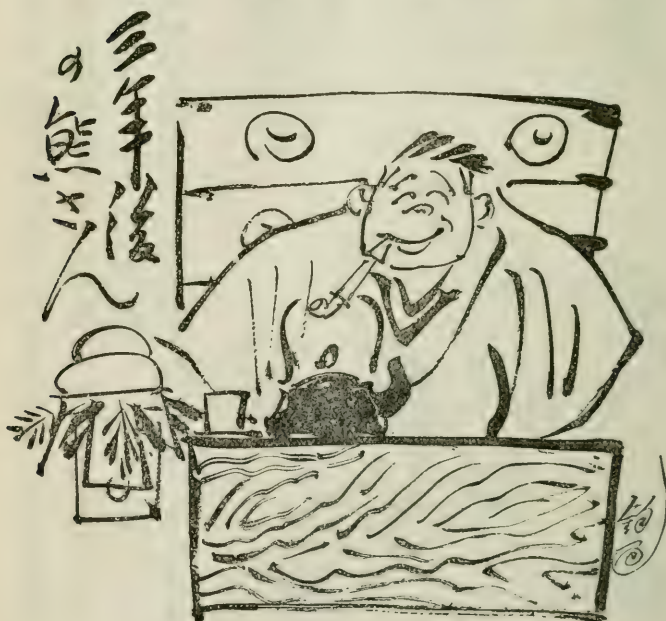
つて參りますると、足を洗はないで直ぐにお晝御飯を食べ、これから又盤臺をかついで夕河岸の買出しに出掛ける。そして山の手を賣つて歩く。忽ちの間に賣り切れて日の暮れ方に家へ歸つて來る。また夕御飯を食べて、それからおでんの煮込みをこしらへて賣りに出掛け、九時過ぎまで稼いで歸つて來る。

それからといふものは、毎日暗い内に起きて、夜の更けるまで少しの休みもなく、身を粉に碎いて稼ぎます。稼ぐに追付く貧乏なしで、三年間といふもの、この人が夢中に稼いで、三年目の大晦日、餅屋からは餅を屆けて來る。簞笥の抽斗には夫婦の外着の一枚も藏つて置けるやうになり、炭薪も土間に積んであるぐらゐの景氣。一日稼いで夜にはいつて歸つて來た熊五郎、一風呂浴びて來て、

熊『あゝいゝ心持になつた』

女『おやお歸りかえ、けふは別段に御苦勞でしたねえ。さぞ草臥たらう』熊『併し一日稼いで來て、湯に入つて身體を休めるぐらゐ、いい心持はねえな……やア乃公は外に出てゐて氣がつかなかつたが、何時の間にか疊が新らしくなつたな』

女『實はお前さんに斷らなかつたが、あんまり疊が汚いから、私が稼いで貯めて置いたお金で

もつて、けふ疊を取換へたんだよ一
熊『さうか、そんな事は斷らないでもいゝや。併し疊の新らしいのと女房……いやなに、女房は古くなくちやアいけねえ。何だ。茶か。湯上りの茶は妙なものだ。ぢやあ一ぱい御馳走にならう。いゝ心持だな……やア何だかいやに鹽つ辛いや』
女『これはお前さん、福茶だよ』
熊『ああ福茶か。洒落てやあがる。福茶なんざア生れて初めてだ。いい心持だ。有難いなア。けふは大晦日だが、何處にも借がねえな。借金取りは來めえな。あゝ

有難え。さうだつけなア。一昨年の大晦日、米屋の畜生呶鳴り込んで來やがつて、乃公はきまりが悪いから、風呂敷を被つて戸棚の隅の所に隱れてゐると、風呂敷へ目をつけて、何だか戸棚の隅で風呂敷が動くといひやアがつた。正月だつてえに、袷一枚で慄へてゐて、あんな辛えことはなかつたが、一生懸命稼いだお蔭で、今年の大晦日の樂なこと。何でも人間は稼がなくつちやアいけねえな』

女『眞實にさうだね。お前さんが稼いでくれたんで、大晦日でもかうやつて借金取り一人來ず、安心をして年が越せる。それでね熊さん、實は私もお前さんの留守に一生懸命稼いで、貯めたお金があるんだよ。それを今夜出して見せよう』

熊『まアそいつアいいや。春になつたら、それで又何處へでも好きな所へ遊びに行つて來ねえ』

女『けれどもさ、お前さんが一生懸命稼いでくれるんだから、留守に私が手を空けて遊んでゐては濟まないと思つて、私も一心になつて稼いで、三年の間といふもの、碌に勘定もせずに投り込んで置いたので、どのぐらゐたまつたか、今夜出して勘定をしてみようと思ふんだよ』

熊『ウム、そいつア豪儀だなア。大晦日に金の勘定をするなんざア馬鹿に景氣がいゝな、まア出して見ねえ』

女房が立つて、戸棚の隅から長い竹筒棒を持つて來て、亭主の前へ出した。

熊『何だ竹筒棒か。大概女の內職は竹筒棒だ。幾らもありやアしめえ』

女房が亭主の見てゐる前で、竹筒の口の捻りをひねつて、あけて見ると、五十錢銀貨が、ザク

ザクと出て來ました。

熊『エヽーッ、こりやア驚いた金だな。こりやアみんなお前が稼いだのか』

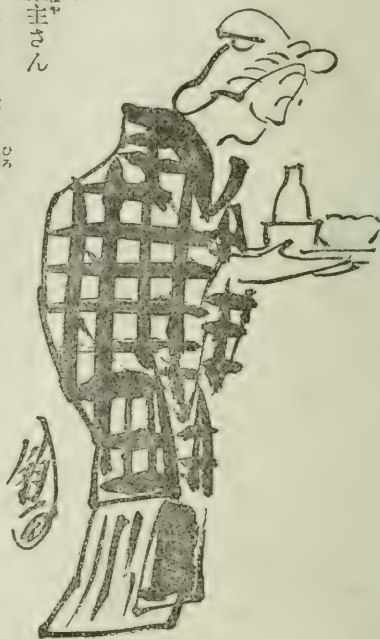
女『熊さん、お前忘れたのかえ』

熊『エヽッ』

女『このお金をさ。お前さんが三年前に芝の濱で拾つて來たお金だよ』

熊『エヽッ……アツさうだ。畜生々々、畜生これは夢……』

女『實は三年前、お前さんがこのお金を拾つて來てくれた時に、私も嬉しかつたが、嬉しいながらお前さんの料簡を聞いて見ると、お前さんが飲み食ひをし*たり、着物を着たり、外見に使つてしまひさうな樣子。お金は使つてしまひ、後で拾つたといふことが知れるとお前さんも私も

どんなお咎めを受けるか知れない。それゆゑお前さんが醉つて寢てしまつたのを幸ひに、家主さんへ行つて話をしたところが、拾つた物を默つて使ふ譯にはいかないから、お上へ屆けろといふので、お前さんには濟まないけれども、あの時私は夢にしてしまつて、お金はお上へ屆けといた。ところがこの間お前の留守にお喚出しがあつたから行つて見ると、このお金は落した主がないから下げて遣るといふお話。私はあんまり嬉しいから、すぐにお前さんの前へ出さうと思つたけれども、いや〱さうでない。このお金をお前さんの前へ出したら、又元の通り氣が緩んで怠けるといけないと思ひ返して、今日が日まで藏つて置いたけれども、今夜といふ今夜、お前さんが眞實の心から、何でも人間は稼がなくつちやアいけないといつたので、

私やアこんな嬉しいことはない。今までお前さんを夢にして欺してゐたのは私が悪かつた。だけれども、このお金はもうお上から立派にいたゞいたのだから、お前さんが今夜一晩に使つてしまつても、誰も何ともいふ者はありやアしないよ。改めて受取つておくれ』

熊『ウーム、成程、乃公はどうしてかう馬鹿だらう。お前のいふ通り、あの時この金があれば使つてしまふ。使つてしまつた後で、拾つたといふことが知れた日にやア、飛んだことになつた。お前に夢にされたばつかりで、乃公は稼ぐ氣になつたんだ。有難えなア。有難え。世の中に女房ぐれえ有難えものはねえ。女房大明神……』

女『厭だよ、この人は。だけれども、お前さんもねえ、長いことお酒を斷つて稼いでくれたが、けふは丁度三年目だよ。けふは私が勸めるから、一口飲んでおくれ』熊『さうか。ぢやアあんまりいゝ心持だから、一杯やらうか』

女『一口おあがりよ』

女房が立たうとすると、

熊『おゝ待ちねえ。酒はやめよう』女『なぜ』

熊『酒を飲んだら、又これが夢になるといけねえ』（挿畫――池部鈞）

子は鎹

柳家小さん

白銀も黄金も珠も何せんに、まされる寶子にしかめやも

却々尤もな古歌でございます。御夫婦の中でも、お子さんの無いと言ふものは誠に淋しいもので、又甚だ危ない話で御座います。別れ話などが出ても、竹行李に傘一本ブラ下げて、『ハイ左樣なら』と簡單に別れられますが、子供衆があると、多少口説が起つても、子に引かされて我慢をする。『子は鎹』とはよく言つたもので御座います。尤も、中には鎹の利かない御夫婦もあります。鎹を三本位生んでも未だグラついて居るなどと言ふ隨分建てつけの惡い御夫婦もあります。一旦結婚した夫婦が別れるなどと言ふのは、つまりお互ひの修養が足りないから起る事でありまして、世間に聞えても、あまり自慢になる話では御座いません。

『エート、弱つたなどうも、二三日家をあけると、家の閾が高くなつちまふから不思議だ。女房

の奴怒るだらうな、好い工合に寢込んででも居て呉れりア知らん顏してもぐり込んぢまふのだが、お出が荒れたら事だぜ。此方が醉つてでも居りア茶化しちまふんだが、生憎醉は醒めちまつてるし、金は無し、仕方がねえや、水でも飲んで醉つた氣で轉り込んでやらう』
『アラお前さんぢやないか、何をして居るの？　天水桶へ首を突込んでサ、汚ないね、ぼうふらが湧いてるぢやありませんか』『道理で喉が擽つたいと思つた、ウーイ好い心持ちだ』『何んですね、ぼうふらを呑んで好い心持ちも無いもんだ、此方へお這入りなさい』『俺の家へ俺が這入るのに遠慮はあるめえ』『だつてお前さん、先刻つから家の前を行つたり來たりして居るんぢやありませんか、見てましたよ、ちやんと』
『いやに目が屆いてやがるな、まア仕方がねえ、這入るよ、へイ只今』
『只今ぢやありません、一體何處へ行つて居たんです』『仕事に行つたんだよ』『仕事つたつて、お前さん稼出りア晩に歸れるぢやありませんか。一體今日で幾日だと思つてるんです、四日目ですよ、四日も續けて仕事をして居たんですか』『そんなにアしねえ』『それ御覽なさい、一體何處に行つてたんです。家のことも考へないで』『俺だつて別段家の事も考へずに遊んで居たわけぢやねえ、歸らう〳〵と思つて居たんだが、ついフラ〳〵と遲くなつちまつたんだ。まア宜いや

な、怒りなさんな、怒る面ぢやねえや。まア俺が惡いんだから謝る、謝るよ』『いいえ謝まつて下さらなくつたつて可ござんすよ、何處に行つてたか言つて御覽なさい』『だからよ、俺が惡かつたから謝まつてるんぢやねえか、亭主が相場を下げりア女房の株が上らい、此の通り頭を下げて』『お止しなさいよ見つともない、頭を下げてお尻を持上げて何んと言ふ恰好です。謝つて貰ひ度かアありませんよ、言ひ度くはないけど、あんまりだから妾ア聞きますよ、サ何處へ行つてました、此の四日の間と言ふもの』

『大きな聲をするない箆棒奴、此方が間が惡いと思ふから胡麻化して居るんだ、文句を言はずに默つて寢かしちまへば事が濟むんだ』『いゝえ胡麻化したつて駄目ですよ、寢かしませんよ、うるさいかも知れないけど、白狀するまでは妾ア聞きます。いゝえ聞きます』『强つて聞き度きア話してやらア、申上げるよ、木戸錢を拂ひねえ』『いやですよ、寄席ぢやあるまいし』

『默つて聞いてろ、四日前に仕事に出かけたんだ』『それは知つてますよ』『默つて聞いてろい、それから家へ歸るつもりだつたんだが豈計らんや』『そんな所で計らなくつてもよござんす』

『一々うるせえな、丁度仕事の切りが付いたので、家へ歸るつもりでブラ／＼やつて來ると繪草紙屋があつた』『あらまア、そこで坊やのお土產でも買つてやんなすつたの』『そんな詰らねえ

物は買やしねえ、ト見ると迚も綺麗な女の立姿が錦繪になつて張り出してある。俺ア暫らくは呆つとして見惚れちまつた、實によかつたぜ』『あら、お前さんにも繪が見る目があるの』『俺の目は何んでも見えるよ』『いゝえ、繪の良さが解るのかと言ふのよ』『繪なんぞ良いか悪いか解らねえが女は美人だ、迚も

好い女だつたぜ、幾價だと訊いたら五兩だ、高えから負けろと値切つて見たが、繪師が豚丸だから負けねえと言ふんだ』『豚丸ぢやあるまい』『ウムもつと細りした好い女だつた』『いゝえさ、繪師は歌麿ぢやないの』『然うかも知れねえ。何しろ此場合繪師なんざアどうでも構はねえ、俺ア字がよめねえから繪草紙屋の亭主に讀んで貰つたら、是れが有名な美人で、愛嬌者で、天下に名高い、ウーム何んとか言ふ女だ』『何んて言ふの』『何んとか言ふんだ、ウーム、あの雨洩りおせんよ』『雨洩りなんてえのはありアしない、笠森でせう』『笠が洩りアやつぱり雨洩りだ。何しろ其笠森おせんて言ふのは美人だなア』『然りア然うでせうとも、あれだけ人氣を集めた女ですものね、そりア好いとしてお前さんの歸らなかつた譯を訊き度いんですよ、繪草紙なんぞで人を胡麻化さうとしたつて承知しませんよ。三日の間歸らずに何處に居たんです、サア伺ひませう』
『些とお恥しくて申上げ憎いや』『大方何んでせう惡い所へでも遊びに行つてたんでせう』
『ヤイ〳〵出過ぎた口も可い加減にしろい、何んだと？ 惡い所？ 箆棒奴、斯う見えても憚りながら亭主だ、女房に濟まねえ樣な曲つた事アこれンばかりもしてやしねえや』『なら何處にうろ〳〵して居たんです、一晩や二晩ぢやあるまいし三晩も續けて』『だから其奴は些とお恥しくて申上げ憎いンだ』『言はなけりア妾ア生涯疑つて居ますよ』

『仕様がねえな、ならまア思ひ切つて言つちまふが、實は其の繪草紙屋の前に居たんだ、何しろおめえ雨洩りおせんて者は美い女だからな、動けねえや。買ふにア金が足りねえし、仕方がねえから朝から晩まで坐り込んで眺めて居た。腹が空ると近所のめし屋へ馳け込んで茶漬けを掻込んで又眺める、夜は其處の軒下へ轉がつて夜明けを待つて繪草紙屋を叩き起して又眺める』『まア大層な凝り方をしたもんですね』『見れば見る程美い女だな』『でもよく夜露で風邪も引かずに』『氣が張つてるからな繪草紙屋の方でも驚いてやがつた、こんな根氣の好い人は珍らしいつて、俺ア別段繪草紙屋と根比べをする氣ぢやなかつたのだが、生じ家へ歸つてお多福面を見るよりア、おせんの繪を見てる方が可かつたからな』『ちよいと熊さん、お前さんお多福と言ふのは誰のことを言ふの』

『誰のことつて、お前より外にお多福は居ねえ、好いお多福だ。出額で目が細いなぞは念の入つたお多福だ、品評會で一等になるだらう』

『大概におしなさいよ、馬鹿々々しい。妾アどうせお多福ですよ、お多福でお氣の毒樣でしたね、笠森おせんは嘸美人でせうがね、お多福で惡けりア何故妾を女房に持つたんです。だから妾はあの時に斷つたでせう、斷つたらお前さん何んと言ひました、妾の様なお多……妾の様なお多福はお

止しなさいと言つたら、お前は自分でお多福だと思ふかも知れないけれども、俺の目から見りア生きた辨天樣だ、小野の小町か照手姫の樣だと手を合せて拜んだぢやありませんか。いくら何んだつて彼の時辨天樣に見えて今になつて念入りお多福に見えるなんて、あんまりです』『そりア彼の時にはお前だつて美い女だつたよ。辨天樣に見えちやつたんだ、此頃は嫌に薄汚なくなつてふやけてるからな天井裏のお多福だ』『ハイどうせ天井裏のお多福です』

『オヤ、嫌に不貞腐つた返事をするぢやねえか、氣に入らねえな』『どうせお氣には入りますまいよ』

『當りめえよ、疾うから氣に入らねえんだ。要らねえ所で嫉妬を燒きアがつて、久し振りで亭主が歸つて來たのに不服な面してやがる、そんな嬶アは百年の不作だ、どうでえ、物は相談だが子供を連れて威勢よく出て行つて呉んねえか』

『まア呆れたね、宜うござンす。お前さんが出て行けと言ふなら出て行きませうけれども、何も妾は無理に女房にして呉れと言つたわけぢやありませんよ。妾が奉公して居ると、お前さんが物置の根繼ぎで働きに來た大工さん、お晝休みに、用があるから來て呉れろと言ふからお前さんの後からくつついて行くと、妾を藏の傍へ連れて行つて、實はこなひだからお前のことを思つて居

るんだ、後生だから俺の言ふことをきいて夫婦になつて呉れ、冗談言つちや不可ません、妾は未だ御主人に奉公して居る身分で、そんな獨り定めの返事は出來ませんと、彼の時にお前さんに斷つたらお前さん何んと言つたえ、懐中から出刄庖丁を出して、男が一旦齒から外へ出したことは後へ引込ますことは出來ない、人間は汗の如しだから、ウンと言つて俺と夫婦になつて呉れ、ウンと言はなきア此の出刄で殺しちまふ、さあウンか出刄か、ウンか出刄か、と責めたてたぢやないか、妾もお前さんに殺されちや辛いから、夫婦約束だけして、後で奥さんにお話し申して見た所、さう言ふ親切な方ならお嫁に行つたらよからうとおつしやるから、お前さんの所へ嫁いて來たんですよ。いくら其日稼ぎの叩き大工だといつても世帯道具の少し位はあるのだらうと思つて來て見たら呆れ返つて了つた。朝起きて御飯を炊かうと思つて臺所へ來て見るとお竈もなければお釜もない、お米は何處にあるんですと訊いたらば

蜜柑箱の隅に少しばかりあるんだ、あれで今朝は間に合せておいて呉れろ、第一桶が無くてはお米を磨ぐことが出來ないと言つたら、今俺が敎へてやると言つて、お前さん自分で起きて來てさ、酒屋の貧乏德利を持つて來て、德利の中へ水とお米を入れてゴボ〳〵と振り廻して居た。妾ア德利でお米を磨ぐのなんて始めて見ましたよ。お米は磨げたけれどもお釜が無くては御飯に炊くことが出來ないと言つたら、よく俺のすることを見て居ろ。斯うして炊くんだつて德利の中で水加減をして自分で火を起してさ、火の中へ德利を乘せたでせう、妾は德利で御飯を炊いたのも始めて見ましたよ。中で御飯は出來たけれども口が狹いから杓子でよそふことが出來ないと言つたら、德利なんか酒屋のものだから壞したつて構はないと言つて薪で德利を敲つたら德利が壞れて中に德利形の御飯が出來て居た。それを二人で食べたことなんぞ、今ぢやお前

さん、そんなことはすつかり忘れちまつて、何うか斯うか暮し向が纏まつて臺所の道具なぞも妾が工面して遣らへ、是れでやつと世間並な世帶になれたと思つて喜んで居る所へ、ヤレ念入りのお多福だの、ヤレ天井裏のお多福だの、揚句の果に子供を連れて出て行けの、笠森おせんは美い女だのと、そりア、向ふは顏が賣物で水商賣、まして歌麿が錦繪に描けばどんな女だつて綺麗になるのは當り前、妾だつて歌麿に描いて貰へば實物よりお多』

『うるせえやい、緣起が惡いやい、嫌に昔の棚下しをしやがつて、そりア彼の時はお前がもつと若かつたから綺麗に見えちまつたんだが、疊だつて古くなりア取返へたくなるのが人情ぢやねえか、ベソ〳〵泣きアがつて、家の中に濕氣が出て入梅時は困るからサツサと子供を連れて出て行つて呉れ』

『そりアお前さんが出て行けと言ふなら出ても行きませうが、妾だつて只は出ることは出來ませんよ』

『太えことを言ふない手切れ金なんざアありアしねえ』『いゝえお金なんぞを欲しかありません、離緣狀を一本書いて下さい』『オヤ此女、お前だつて知つてるぢやねえか、平常から俺は字ア書いたこたアねえんだ、そんな物は書けねえ、強て欲しけりア何處かへ行つて書いて貰つて持

つてけ』『そんな馬鹿なことが出來るもんですか。よござんす、字で書くことが出來ないなら何んでも好いから確に別れると言ふ證據の印を下さい』『ウム、印なら印と早く言へ、どうしても離縁狀を書かせるのかと思つて冷汗を掻いちまつた。印なら其處等に何んかあるだろ、それ其處に五合德利があるから其奴を持つて行け』『五合德利などがどうして離縁狀の代りになります』『一升の別れでございます、逆さにしてもオツトもございません、と斷つて歩け』『冗談言つてないでもつと確りしたものを下さい』『そんなら其の竈の下に火吹竹が一本あるだろ、其奴を半分折つて持つて行け』『火吹竹を半分持つて行つてどうなります』『フーフの別れと言ふんだ』『まア洒落見たいなことばつかり言つて、夫婦が別れる時てえものは三行半と言ふものがなけりアならないもんですよ』『何んだ、三行半か、然んなら然うと早く言へば可い、そんな物は雜作もねえや、今書いてやらア、待て〳〵、あゝ此紙で可からう……サア書いた、持つて行け』
『オヤ大層すら〳〵と書いたと思つたら是れは只の棒が引いてあるだけぢやありませんか』
『さうよ、棒が三本半、此奴を立てて上から見りア三行半だ、文句はあるめえ』
『可ござんす、是れでもお前さんが書いた物だから、是れを證據に貰つて行きます……だがお前さん、男の子は男に附くのが當然だと言ひますけれど、龜坊をお前さんの傍へ置いといて、後

から來た女が邪慳にすると、妾は別れて居て心配ですから妾が連れて行きます。いゝえもう亭主などは持ちません。龜坊と二人位のことなら、奉公でも何んでもして働いて食べて行きます。龜坊や、ちよいと此處へおいで』

『何んだい、阿母さん』

『阿母さんはね、今日からもう此家に居なくなるんだよ、お父つアンからお暇が出てね』

『お閑になつたのかい、阿母さん、何時も忙しい〱つて言つてたのに』

『其閑とは違ひますよ、お前には解らないのだから阿母さんの言ふ通り仕度をしてね、一緒に出て行くのサ、阿父つアんの所へ行つて、永々御厄介になり

＊ました、御機嫌よくお暮しなさいと言つておいで』

『ぢや阿母さんと阿父つアんと喧嘩したんだね。仕様がないなア、阿父つアんが惡いんだろ、阿父つアん

勘辨してお上げよ、阿母さんが泣いてるよ、阿母さんだつて謝れば可いぢやないか、阿父つアん勘辨してお上げよ、阿母さん謝りよ、ウワーン、ウワーン』

『坊や泣かなくつても好いよ、阿母さんは決心したんだからね、早く阿父つアんの所へ行つてお暇乞ひをしておいで』＊

＊『阿父つアん、早く止めて呉れないとヨイトま乞ひになつちやふよ』『勝手にしやがれ』

『阿父つアん、止めるなら今の中だよ』

『止めやしねえ、サツサと出て行つて呉れ』

亭主は、有合ふ新雑棒を振り上げて、女房と子供を追ひ出さうとする所へ馳けつけた家主、

『コレ〳〵まア待ちな、何んだいそんな物を振り廻して』「打棄つといてお呉んなさい女房を叩

き出すんだから』『いくら叩き出すつたつて手品ぢやあるまいし棒を振り廻して女房が出るわけの物ぢやない、手荒なことをしては不可ないよ』『大きにお世話だ、お前さんは店賃を取つて溝板の番をして居りア可いんだ』『如何にも私は家主だから店賃を取つて溝板の番をして居りア役が濟む樣なもんだが、店子が喧嘩をして居るのを見ちや放つとくわけには行かないよ、何んだつてお内儀さんを出すんだい、こんな好いお内儀さんを』『何も彼もありアしねえ、面と言ふことが氣に入らねえから叩き出しちまふんだ、それも只は出さねえ、景品に餓鬼をつけてやつちまふ』『景品て言ふ奴があるかい賣出しぢやあるまいし、ま、熊さんや氣を落付けてよく私の言ふことをお聽きよ』『家主さんの言ふことなんざ聽き度かねえや、どうせ店賃の催促にきまつてるんだから』『コレサ、店賃なんざア』『どうでも好いかい』

『好かアないがね、此場合そんなことを言ふのぢやない、他に言つて聽かせることがある。お前は朝出ると日が暮れなけりア歸つて來ないな。私は年中長屋を見廻つて居るからよく知つて居るが、世間のお内儀さんと違つてお前の家のお内儀さんは感心だ。禮儀は知つてるし無駄口は叩かず、用の外には外へも出たことがない。お前が歸らなけりや夜は夜中でも夜通し起きてらア、こんな結構なお内儀さんは又持たうと言つたつて持てやしない。夫れを薪で毆つて追ひ出さうなん

て、飛んでもない罰當りだ』
『オヤ、此の禿茶瓶、嫌に俺ン所の嬶の肩を持ちやがるな』『肩を持つ譯ぢやないが實に感心な人だ、世間で評判の確り者』『ホレ見ろ肩を持つてるぢやねえか、扨は何んだな、家の嬶から店賃を一つ餘計に貰やがつたな、やいおすみ、手前家主に賄賂を使つたんだろ、益ゝ承知が出來ねえ、今の三行半を出せ、もう一行付け加へて四行半にして叩き出すから』
『馬鹿なことを言へ。まアおすみさん、腹も立つだらうが、話は後で解るから、兎も角も私の家へ來なさい。私が引受けた、サア龜坊、阿母さんの荷物を持つて一緒に來なさい、阿父つアんも平常は好い人なんだけど、虫の居所が惡いと、彼んなに解らなくなつちまふので困る。サアサ來なさい／＼』
『ハヽヽヽヽ、とう／＼行つちまやがつた、止しア好いのに家主が詰らねえ所へ出て來やがつて却つて事が本物になつちまつた、まア好いや女房と芝居は變らなくつちや面白くねえ』
呑氣な考へでゴロリ寢轉んで、たつた今叩き出した女房とのそも／＼の馴れ初めから、苦勞を相倶にした古い追憶などを、小間物屋の虫干しの樣にずらりと並べて、それからそれへと思ひ浮べて居るうちに何んとなく淋しくなつて了つた。是れは當然のことで、例へお多福だらうが、お

かめだらうが、長年連れ添つた女房なら未練の殘るのが是れが人情。『是りア不可ねえことをしちまつた、出すんぢやなかつたな。同じ出すんでも一行半位で出しアよかつたんだが、まア仕方がねえ、家主さんの所に居るんだろ、貰ひ下げにして來よう』ガラ〳〵〳〵。

『ヘイ今日は御免なさい』『オヤ熊さんかい』『先程はどうもへヽ、何しろ氣が立つて居たもんですからね失禮致しまして、考へて見るてえと私ン所のお內儀さん位好い女は世間に澤山居ない』『何を言つてるんだい、立派に離緣狀をつけて叩き出した女はお前のお內儀さんではないよ』『然う急に薄情なことを言はなくつたつて可いぢやありませんか』『薄情とは何方の言ひ草だ。可哀相にお內儀さんはナ大きな荷物を背負つて龜坊の手を引いて何處かへ行つて了ひなすつたよ』『エツ、そんならあのほんとに』『冗談に離緣される者があるかね、お前さんもあんまり輕率だ。郵便貯金ぢやあるまいし、出したり入れたり、だから私が止めたぢやないか、何故私の言ふことをきかなかつたのだ。今更そんなことを言つた所で取返しもつかないが、ほんとにお前がお內儀さんに歸つて來て貰ひ度いと思ふ心があるならば』

『有る所の騷ぎぢやありません、どうか家主さん周旋料は來月店賃と一緒に持つて來ますから女房を探してお吳んなさい』『探せつたつて、何處へ行つたか解らないものは無理だよ。それより、

か、お前が酒でも止めて堅い人間になつて、一生懸命稼ぐ樣にでもなれば世間にも目はある、誰が何處でお內儀さんに此話をしないでもあるまい。だから、歸つて貰ひ度いと思ふ心があるなら、料簡を入れ替へて眞面目になつて御覽」

家主さんに懇々と說教をされて突放された熊さん、それからと言ふものは、ガラリ打つて替つた樣な別人になり、几帳面に働き出しました。

月日の經つのは早いもので、丁度お內儀さんと別れてから三年經ちました或日、お店の普請に就いて木場へ木口を見に行つた歸り、番頭さんと二人で水場の萬年橋の所まで參りました。

『熊さん近頃はスツカリ堅くなつたね』『エヽもう今迄のことを考へると夢の樣でございます』『然うだらう。お內儀さんと別れてもう餘程になるな』『ヘイ今年で三年でございますかな』『時時は思ひ出すこともあるだらうね』『ナーニ女房のことなんざア、ヘヽヽヽ、女房は兎も角も子供のことを思ひ出して不可ません。此間も菓子屋の前を通ると饅頭が並べてありました。そいつを見ると、アヽ龜坊は饅頭が好きだつたが、と思ひ出しましてね、自然と淚が出ますんで、饅頭を眺めてボロ〳〵泣いて居りますと、菓子屋の小僧が、あの人は淸正公樣の詣兒ぢやアなからうかと言ひました』『ハヽヽヽ、大笑ひだね、然しまア無理もない話だ、もう大きくなつたらうな、

幾才になつたい』『恰度十才でございますよ』
『早いものだな、十才になるかい、オヤ、オイ棟梁今向ふから歸つて來る學校の子供の中に、オ、ソレ鞄を斜にかけて居る子は龜坊ぢやないか、面影があるぜ』
『ドレ〳〵、ドレでございますエ？ ア違えねえ龜でございますよ、動いて居ります』
『動かねえ奴があるものか、確かに龜だな』『正に龜ですよ正覺坊ぢやありません』『巫山戯て居ないで早く逢つてやんな、久し振りで親子が廻り會つたんだ、私は一足先

へ行くからな、ゆつくり逢つてやんな』

『どうも濟みません。ぢや番頭さん、直きに參りますから一足お先に……オーイ、オイ龜坊』

『ヤー、お父つアんだね』

『どうしたい、大層大きくなつたな、俺ア毎日お前のことを案じて泣いて居たから、親が泣くと子が育つ、とはよく言つたもんだ、大層大きくなつたな』

『阿父つアんも大きくなつたね、子が無くても親は育つものだね』

『何を言つてやがる、今は何處に居るんだ』

『此の先の、米屋の露地の塵溜めの隣りに居るんだよ』

『汚ねえ所に居るな、阿母さんは』

『阿母さんも居るよ、毎日お仕事をしてるよ、洗濯だの縫物だの、寄つておいでよ阿父つアん』

『莫迦なことを言へ、寄ることは出來ねえ、昔ア夫婦でも今ぢや赤の他人だ、途で逢つても口を利くことも出來ない』『極りが惡いのかい』『無邪氣なもんだな、何かお前今學校へ行つてるのか、何年になつた』『行つてるよ二年だよ、阿母さんが然う言つてたよ、男は讀み書きが出來なくつちや不可ないつて、阿父つアんは仕事も上手だし立派な人だけれども、惜しいことに明盲だ

つて、阿父つアんよく杖なしで歩けるね、坊やがこゝに居るのが見えるかい』『何を言つてやがるオイ亀』『エ?』『今度の阿父つアんは可愛がつて呉れるかい』『さアどうだかね、阿父つアんは三年も前から一度も來て呉れないから解らないや、たまには遊びに來て可愛がつてお呉れよ』『然うぢやねえ、今度の阿父つアんよ、俺は先の阿父つアんだ』『先のにも今度のにも阿父つアんは一人しか居ないよ』『ぢやまだ今度の阿父つアんは無いのか』『訝しいな、いくら世の中が進歩したからつて、子供が先へ出來て阿父つアんが後から出來るなんて理窟はないよ阿父つアん、そんな理窟が』『生意氣言ふな、ぢや何か阿母さんは未だ一人か』*

*『一人だよ』『どうして暮して居るんだ』『方々の針仕事をして居るよ』『違えねえ、仕事は巧かつたな、嘸お父つアんの事を惡く言つてるだらうな』『イイエ、惡くなんか言つてないよ、阿父つ

アんは好い人なんだつて、阿母さんの勤め方が惡るくつて阿父つアんに叱られて別れて居るけれども、いまに阿父つアんの氣持ちが直つて呉れる時もあるだらうつて』

『違えねえ、おすみ濟まなかつ＊た。サア龜坊少しだが小遣ひをやらう』

『アツ是れは一圓札だね』

『然うよ』『豪氣だな、阿父つアん人間は斯うも變るもんかね』

『生意氣なことを言ふな。それからな、明日の今頃此處へ來いよ、お前は鰻が好きだつたな、向ふの鰻屋へ連れて行つてやるから、いゝか、けれども阿父つアんに逢つたつてことは阿母さんに言ふなよ、叱られると不可ねえからな、どうだ此の頃鰻を食つたことがあるか』

『些つともないよ、女の手で大きくするんだから贅澤なことを言つちや不可ないつてお豆腐ばかり食べてる』『然うか可哀想に、まア好いや明日の今頃乃公が此處に待つてるから』『直きそこ

の米屋の裏だから寄つといでつてば』『駄目だよ、寄るわけにアいかねえ、袂をそんなに引張るんぢやない、放しなつてば、オヤお前、額に疵があるがどうした』『是れは運動會に行つた時、山口の金ちやんに石を打つけられたんだよ』

『危ねえことをしやがつて、もう少し下へ下れば目を潰しちまわ』

『其の時阿母さんが怒つたよ。男親のない子だと思つて馬鹿にするんだ、さア誰が打つたか相手を言へと言ふから、山口の金ちやんだと言つたら、彼處の家ぢや仕方がない、よくお仕事を持つて來て呉れる家だから、痛からうが我慢しろ我慢しろと言ふから、痛いけど我慢しちやつた』

『ウム、可哀想にな』『其時に阿母さんが沁み〴〵然う言つたよ、斯う言ふ時には、あんなわからず屋の唐變木でも、男親があれば宜いつて』『馬鹿にするない……ぢや宜いか、明日此處へ來いよ、阿母さんには內證だよ、ウム、好い子だな、ハヽヽ、行つちまやがつた、可愛いもんだ、子供つてえ者は、打棄つといつても大きくなるもんだなア』

『どうしたんだね此の子は、何んだつて斯う遲いんだよ、惡戯して立たされでもしたんぢやないのかい、他の子は皆んな歸つて來て居るぢやないか。サア鯛燒が買つてあるからね、一寸此の糸をかけてお呉れ、オヤツお前此のお金はどうしたんだえ』『アツ、それは不可ないよ』『何が不

可ないんだえ、此のお金はどうしたんだよ』『アワ〳〵』『隱してると承知しないよ、言つて御覽』『不可ないんだよ、無理に聞きたがると木戸錢を取るよ』

『阿父つアんの眞似なんかおしでないよ、どうしたのさ此のお金は』『貰つたんだよ』『莫迦なことをお言ひでない、一錢や二錢のお錢なら吳れるお方もあるかも知れないが、一圓と纏つて子供に吳れる人があるものか、お前もさもしい心になつたね』『淋しかないよ、表は賑やかだ』

『いえさ、惡い事をしたのぢやないのかい。斯うして阿母さんが、夜の目も寢ずに仕事をして居るのは、お前を立派な人に育てたいと思ふばかりだよ。何處から之を持つて來たんだよ』

『不可ないよ阿母さん、訊いちや不可ないよ、阿父つアんの時だつて無理に訊きたがつて喧嘩になつたんぢやないか』『お前と阿父つアんとは違ひます。サ言ひなさい』『困つたな、口止めされてるんだけど、阿母さんの良い人から貰つたの』

『嫌だよ此の子は、妾にそんな者は居ないよ。本當のことを言ひなさい、言はないかい、どうしても言はないかい。言はないと此の鐵槌で打つよ』

『仕樣がないなア、ぢや言ふよ、今向ふの四ツ角で阿父つアんに逢つて貰つたんだよ』

『エヱツ、阿父つアんに逢つたのかい』

『ヤア、阿父つアんと言つたら膝を乘り出して來た』
『何を言ふんだよ、定めて酷い裝をして居たらうね』
『イイエ立派な裝をして居たよ、縮緬の帶を締めて、それに腹掛けの隱しに澤山お紙幣を持つて居たよ。阿母さんは未だ一人で居ると言つたら、然うかと言つて泣いて居たよ。阿母さんがいつも言ふ通り、阿父つアんは好い人なんだね。あの樣子ぢや阿父つアんも未だ一人なんだらうね』
『ぢや然うかい、妾の思ひが通つて居るのだ、嬉しいね。それから何か言つたかい阿父つアんは』
『明日の今頃彼處に待つてるから來い、鰻を食べさせてやるつて、お豆腐ばかりぢや瘠せちまふつて』
『餘計な事を言ふんぢやないよ』
『阿母さんも明日一緒においでよ』
『然うかい、嬉しいね、三年振りで妾の思ひが叶ふのだもの、だけど、本當に子供は夫婦の中の鎹だね、こんなに別れて居て又一緒になれるのも、皆んなお前と言ふ鎹があるからだよ』
『エツ、坊やは鎹かい、道理で鐵槌で毆ると言つたんだね』　（挿繪――清水對岳坊）

拾つた三兩

三升家小勝

江戸ツ子の生れ損なひ金を溜め

といふ川柳の惡口がございますが、江戸ツ子は宵越しの錢を使はない、金のないのを自慢にしたものでございます。

金『どうも驚いたな是は、錢を使つてしまつたと思つたら、宜い鹽梅に財布を拾つたぜ……オヤ、中に金が入つて居やアがる。金が三兩に質印に書附が入つて居やアがる……何だ、神田小柳町大工吉五郎と、ア、此奴が落しやアがつたんだ、持つて行つてやらう……ア、此所だ〳〵、山形に吉の字の障子が建つて居る、家に居るかしら……オイ御免よ』吉『何だ、用があるなら內へ入つて吳れ』金『用でもなくつちや此んな汚ない家へ來るかい』吉『亂暴な奴が來やがつた、何だ手前は……』金『乃公ア神田白壁町の左官の金太郎ツてえもんだ』吉『ホーツ、金太郎にし

ちやア赤くねえぢやアねえか』金『まだ茹でねえんだ』吉『生で持つて來やアがつた、何か用があるのかい』金『何か用があるのかぢやアねえ、手前柳原で財布を落したらう』吉『何を言やアがるんだ、柳原で落したと知れて居りやア、拾つて來らア、何所で落したか分るけえ』金『成程それに違ひねえ。實は乃公が拾つた、中を檢めて見ると、金が三兩に實印に書附が入つて居るんだ、サア手前の金だ、取つとけ』吉『冗談言ふない箆棒めえ、一旦乃公の懷から出たものだ、二度と再び閾を跨がせることは出來ねえ、手前に呉れてやるから持つて行け』金『冗談言ふない、手前の金と知れて居るものを乃公が持つて行けるか』吉『オヤ／＼持つて行かねえな此ん畜生、やると云つたら持つて行け、持つて行かねえと毆り付けるぞ』金『箆棒めえ、金を屆けてやつて毆られて堪るものか、毆られるものなら毆つて見ろ』

吉『お誂へなら撲り倒してやる』ポカリツ、

金『アツ痛え、やりやアがつたな此ん畜生、巫山戯たことをしやアがる、乃公だつて毆られ放しぢやアねえ』

吉『何をしやアがる』

江戶ツ子は氣が早い、直ぐに喧嘩にな

つてしまふ。
△『ヤイ金太、何をボンヤリ歩いて居るんだ、確かりしろ、どうしたんだ』
金『喧嘩をしたんだ』
△『喧嘩をした、どうしたんだ』
金『マア聞いて呉れ、斯ういふ譯なんだ、今朝柳原を通ると躓づいたものがあるから、見るとそれが財布なんだ』△『大變なものに躓づいたな』
金『拾つて中を檢めて見ると、金が三兩入つて居て、書附があつて、それに神田小柳町大工の吉五郎と書いてある、それから乃公が其の金を持つて行つてやつた』
△『感心だ、衣服はボロを着て居ても、腹は錦でなければいけねえ、美い衣服を着て居ても。

心が汚れて居ちやア人間ぢやアねえ、屆けてやつたら先方で喜んだらう』

金『所が喜ばねえ』△『ヘエー、をかしいな、落した金を屆けて貰つたのだ、喜びさうなものぢやアねえか』金『乃公もさう思つて持つて行くと、先方の奴は鰯の鹽燒で酒を飲んで居やアがつた、何か用かといふから手前柳原で財布を落したらうと云つたら、何を言やアがるんだ、柳原で落したと知れて居りやア拾つて來る、何所で落したか分るかと、斯う言ふんだ』

△『何程、それからどうした』

金『それから、それは御尤もだけれども、中に金が三兩、實印が入つて居て、書附に神田小柳町大工の吉五郎とチヤーンと書いてある、手前のものだから屆けてやつた、取つて置けと云つたら、冗談言ふな、一旦乃公の懷から外へ出たものだから緣がねえんだと、二度と再び閾を跨がせることは出來ねえ、手前が拾つたのだから、手前持つて

歸れと斯ういふんだ、癪にさはるぢやアねえか』

△『尤もだ、怒つてやつたか』

金『怒つたとも』

△『何と云つて怒つた』

金『乃公だつて惡い了簡で持つて來た譯ぢやアねえ、ホンの出來心だから、どうか取つて置いて與れと……』

△『妙な腹の立て方をするな』

金『何と云つても受取らねえ、よく考へて見ろ、一旦落した物を懐へ入れるやうなことがあつちやア、先祖の助六に濟まねえから持つて歸れ、手前も職人ぢやアねえかといふから、それは乃公も職人だ、それとも殿樣に見えるかと云つてやつた』

△『變だなア』

金『そんなことを愚圖々々いふには當らねえ、木の實は元といふから、此の金を受取れといつたが、どうしても受取らねえ、手前に呉れてやるから持つて行け、貰ふことは出來ねえ、持つて行かなきや毆るぞといふから、毆れるものなら毆つて見ろと云つたら、折角だからと云つてポカリと毆つた。サア乃公も我慢が出來ねえ、江戸ッ子だ、巫山戯たことをするなと飛び上つて、鰯を三匹踏み潰した。言ふことが癪にさはるから、飛び上つて取ツ組合つたが、力は五分と見えて隣りの壁へドシーン、ドシンとぶつかるから、どうも喧嘩をするのは構はねえが、其方へ行つてやつて呉れ、さう壁へぶつかつちやア佛壇や神棚のものがガラ〳〵落つこつて危なくつていけねえ、喧嘩をするなら仲好く喧嘩をして呉れと隣りから苦情が出た』

△『當然だ』

金『處へ先方の家主が出て來やアがつた。飛んでもねえことをしやアがる、此所は原ぢやアねえから、喧嘩をするなら他所へ行つてしろといやアがる。箆棒めえ、好き好んで喧嘩をするんぢやアねえ、斯ういふ譯だといふと、家主が分つた奴で、それは吉公手前が宜くねえ、御心配下すつて、態々金を屆けて呉れたのだから、之を受取つて置いて、折の一つも持つて禮に行けと云つ

たが、此の時の吉公の答が、實に敵ながら適れな奴だと乃公は感心した』

△『どんなことを言つた』

金『家主なんぞに愚圖々々いはれる譯はねえ、まご〳〵しやアがると、長屋中相談して、糞尿を他所へ運んで、向ふ

十年店賃を納めねえからさう思へと言つたが、大層なものぢやアねえか』

△『何が大層なものだ』

金『スルト家主が、吉公に此の通り分らねえ人間だから、お前さんが何を言つても分る氣遣ひない、何れお顔は立てるから、今日の所は歸つて呉れといふから、其の儘歸つて來た』

△『それで手前宜いのか』

金『宜いにも悪いにも顔を立てるといふのだ』

△『手前一人顔を立てるとしても、此の長屋に＊佇んで居る乃公の顔はどうして立てるんだ』

金『成程、けれどもお前の顔は立て難い面だ』

△『何を言やアがる、斯うなれば此方からも訴へてやれ』

そこで、双方から町奉行大岡越前守様へ願書を出す。いよ〳〵差紙が着いて、呼出しといふ

ことになりましたが、只今と違ひまして昔は總て脅迫的だ。お呼込みと云つて、一々名前を呼んで白洲へ入れる。入口の戸がガラリと開いて、それには鎖が付いて居て、がらがらピシヤリと音を立てゝ閉める。其の音を聞いただけでもゾツとする。家主が附添つてズラリとお白洲へ列ぶ。正面は鞘形のお襖、公用人、目安方、縁の下にはつくばひの同心が控へて居る。どういふものでございますか、同心方は皆巻羽織と云つて、羽織の裾を皆前の所に挾んで居ります。

『シーツ、シーツ……』

吉『オイ家主さん〳〵、誰か白洲で赤ン坊に小便をやつて居る』

家『馬鹿なことをいふない。今お奉行の大岡様が是れへお出ましになるんだ、頭を下げてろ頭を』

吉『ヘエ』

大『ア、コリヤ〱、神田小柳町大工吉五郎とは其方か。苦しうない、面を上げい』

吉『表は今閉めたばかりで』

同心『コレ〱馬鹿なことを申すな。面ア上げろ、面ア上げろといふんだ』

吉『脅かすない箆棒めえ、盗賊や泥棒をして此所へ引張られて來たんぢやアねえんだ、三兩の金を落して、受取らねえといふんで願つて居るんぢやアねえか、脅される所があるか、何を言つてやアがるんだ、吝つたれめ』

家『コレ〱お役人と喧嘩をする奴があるか、何が吝つたれだ』

吉『吝つたれぢやアねえか、武士のくせに羽織の裾を端折つて居やアがる』

家『餘計なことをいふな、笑はれらア、默つて頭を下げてりやア宜いんだ』

吉『先に上げろといふから上げたんぢやアねえか、又下げるのかい、頭だから宜いけれども、米だと相場が狂ふぜ……ヘエ上げましたよ』

大『其方去る日柳原に於て金子三兩取落し、是れなる金太郎なる者が拾ひ取り、其方宅へ屆け遣はしたる所、金子受取らず、亂暴にも金太郎を打擲に及んだといふ願書の趣きであるが、そ

れに相違ないか』

吉『へヽ、どうも濟まねえね、故意と落とした譯でも何でもねえ、つい粗匆で落としてしまつたんで勘辨してお呉んなせえ、それから家へ歸つて鰯の鹽燒で一杯飮んで居ると、此の野郎がおせつかひに持つて來やアがつて、是が手前の金だつてえから私は冗談言ふなつてんで、乃公の懷へ入つて居りやア乃公の金だが、手前の懷へ入つて見りやア手前の金ぢアねえかと斯う言つた所が、當人の言ふには、イヤさうでねえ、此の中には神田小柳町大工の吉五郎といふ書附があると、斯うゆすりがましいことを言やアがるんで、それから冗談言ふなツてんで、此の書附があればこそ乃公ア寃の災難を被て居るんだ、手前に改めて呉れてやるから持つて行けと斯う言つた所が、當人の言ふには持つて行かねえつてんで、持つて行け、持つて行かねえの押問答だ、自烈體えから引ツ叩くぜといつたら、引ツ叩けるものなら引ツ叩いて見ろと斯ういふんでげすから、そいつを又引ツ叩かねえでも物に角が立つだらうと思つてポカリと……』

大『左樣か、面白い奴ぢやな……コリヤ〳〵金太郎、何故其の砌り其方は三兩の金子、吉五郎より申受けぬのぢや』

金『オイ〳〵冗談いつちやアいけねえぜ、エ、オイ大將』

大『コリヤ〳〵、天下の裁斷に冗談といふことがあるか』

金『眞劍かい、眞劍なら乃公の方でも言つて聞かせてやらア、のう』

家『のうとは何だい』

金『さうぢやアねえか、此の財布の中に書附があるから當人の所へ屆けてやつたのだ。若し書附がなくつて、屆け場に困つて居たらば、往來に落こつて居たものを拾ひ取つたつてんで、縛るのがお前さん方の稼業だらう。ねえ、さうして置いて、自身番へ屆けろとか役所へ屆けろとか、縊へて下さるのが公儀のお役人だ。金はたつた三兩だよ、此んな物を猫婆にするやうな、そんな吝つたれた了簡なら、今時分私やア棟梁になつて居らア。どうかして棟梁になりたくねえ、人間は出世をするやうな災難に出會ひたくねえと思へばこそ、毎朝金毘羅樣を拜んで……』

家『冗談をいふない』

大『コレ〳〵捨て置け〳〵、兩人共正直な奴ぢや。然らば此の三兩の金子、双方要らんとあらば、越前守預かり置くが宜いか』

金『どうか濟まねえが預かつて置いてお吳んなせえ、頼むぜ大將』

家『又大將といふ』

大『就ては其方共の正直に愛でて、二兩金づつ褒美を遣はすが、此の儀は受け呉れるか』

家『恐れながら家主より、當人共に成り代つて御禮を申上げます。私共町內に斯樣な者の出でましたことは譽れにございます。有難く御禮を申上げます』

大『双方共受け呉れるか、此の度の調べは三方一兩損と申すことに致すが宜いか？ 解らんければ越前守申し聞かせる。吉五郎、其方受け置かば三兩共の儘損得なしといふ事になる。金太郎も貰ひ受けなば三兩の得となる。越前守も預かり置けば三兩の得となるのぢや。

然るに此所へ越前一兩を加へ、双方へ二兩づつ遣はす、さすれば、吉五郎は一兩の損、金太郎も一兩の損、越前も一兩の損となる。之を三方一兩損と申すのぢや、相分つたか」

家「恐れ入りましたるお取計らひ、有難い仕合せに存じ奉りまする」

大「分つたら一同立て……ア、待て〱、大分調べに時を經たやうぢや、定めし兩人空腹に相成つたらう、只今兩人に食事を取らす……コレ〱兩人の者に膳部の用意をいたし遣はせ」

吉「ヘエ、是りやアどうもお氣の毒だね殿樣、此所ンところは物が高いから錢がかゝるだらう、どうも濟まねえな」

金「オイ〱吉公見ろい、手前なんざア此の間鰯の鹽燒で酒を飲んで居やアがつた。殿樣のはそれなものぢやアねえぜ、鯛だ、鯛だつて本物だぜ、北海道や朝鮮ぢやアねえ、河岸ッぷりが違ふんだ、旨えや、食つて見ろ、中々旨えや、オイ又腹が空つたら喧嘩をしようぜ」

大「コリヤ〱如何に空腹ぢやからと云つて、餘り食すなよ、腹も身の中ぢや」

金「ナーニ多くは(大岡)食はねえ、たつた一膳(越前)」　（挿畫——清水對岳坊）

厩火事

三遊亭圓生

夫婦といふものは、出雲の神樣が結ぶのだとかいふことでございます。ところが、吾々が覺えて、同胞三千五百萬と稱して居つた時がございますが、今では八千萬に達するといふ、出雲の神樣もなか〳〵お骨折で、一が二になつても倍するに相違ありませぬが、三千五百萬の倍といつた日には中々どうも緣結びも骨が折れるだらうと思ひます。その代り、マア仕事が殖えて來ると神樣も矢張り幾らか粗略に結ぶものと見えて、最下等の所へ行くと、どうも三日位しか夫婦として居なくて、直きに又他人になる。又後の細君が來て直ぐに出て行くといふやうなことが幾らもあります。さうかと思ふと、もう長い間の夫婦で、朝から晩まで、暇さへあれば仕事のやうに喧嘩をして居るといふ、これを腐れ緣と昔から申します。あんなに喧嘩をするなら別れたら宜からうと他人はさう思ひますが、そこが又どういふ譯か別れられぬといふ。これは兎に角責任のある出

雲の神様が結んだのでございますから、その責任のお手傳ひで、神様のお手を煩はさないで兩方くツついたのは別れ易うございますが、矢張り別れられぬといふのは妙なものでございます。

女『チョイト旦那。まことに相濟みませんがね……』

旦那『オヤ又來たナ、お前がその顔の色を變へて來るところを見るとナ又夫婦喧嘩だらう』

女『エ、實はさうなんですよ』

旦那『さうなんですよぢやアないよ、困つたもンだナ。それで、お前の考はどうしようといふのか、

泣聲で俺の處へ來たつて仕樣がないぢやないか』

女『それはマアさうなんですけれど。今日といふ今日は愛想も糞も盡きちやつたんです。誠にお手數でございますが別れさせて戴きたいとかう思つてお願ひに出ましたので』

旦那『アヽさうか、それは別れる方が宜いだらう、私もどうも悪い者を世話したナ。もと／＼お前は女髪結で宅の女房の髪を結びに來る、お前の亭主といふものは第一私の家へ始終出入して居て、それが爲めに、盆暮には半纏の一枚つつも遣つてあるといふやうな理窟で、お前ともチョイ／＼顏を合はせるし双方獨身で居た所が詰らねえ話だらうから、夫婦共稼ぎと云ふことがあるからてんで、夫婦にした。サアそれから毎日のやうに何うだ

斯うだといふ、もう幾度口を利くか知れねえ。說諭をして見たり色々するが、双方ともに分らない。で私が仲へ入つて、さうさ、四五年前だらうナ、お互に稼業をして居るからいけない、二人で稼ぐには相違ないが、亭主の歸りが遲いと云つては夫婦喧嘩、女房の歸りが遲いと云つては夫婦喧嘩ぢやア迚も納りが付くものぢやアないてんで、それから餘計稼ぐお前を休ませる譯には行かないから、夫婦揃へて置いて私が會つて言うただらう。亭主の方を仕事を休ましてしまへ、忠實な男だし飯位炊けるだらうと云ふと、亭主もそれア親方の所へ居りましたから飯も炊けますしお茶位出來ます。男の手で何でもないことでございますから、さうかそれならと云ふんで、お前も喜んで、それで二三年は行つたのだ。それが又此頃になるとのべつだ、どうもこれぢやア俺も世話が燒き切れないから、もう寧そ別れた方が宜いだらう』

女『さうですか』

旦那『別れさせてやらう』女『エヽ』

旦那『俺もお前の亭主にはちよいと氣に入らない事がある。四五日前お前ン處の前を通つた。さうすると格子が五寸ばかり開いてたから、下駄泥棒でも入つちやア惡からうと思つて、オイ〱居ないのかといふと、アヽ旦那ですか、どうもつい一人身體で出られないものですから御無沙汰

をしました、マアお掛けなさいと云つて戸口を開けて呉れたから、入つて上へは上らずに腰を掛けて居るとお茶をついで出したりして、丁度晝間の一時頃、飯を食つたものと見えて膳を壁の方へ片寄せて、マア一服召上れと云ふのだが、この膳に載つてたものが俺の氣に入らない』

女『ヘエー何が載つて居りました』

旦那『さう顏の色を變へて騷ぎなさんなよ。刺身が一人前、五切か六切載つかつて居たのだ。それに膳のところへ德利が一本附いて居つた。お上さんが油だらけになつて汗を垂らして働いて居る、その留守に假令五勺の酒でも飲んではどうも俺は氣に入らない。別れた方が宜いだらう』

女『だつてあゝやつて留守をして居ますからね、退屈もしますから、ナニ飲んだつて一合あると二人で餘る位で、ホンの五勺か三勺のお酒ぐらゐ飲んだつて、何も別に不經濟といふ程のこともなし、貴方、そんなに言はなくつたつて宜いぢやありませんか』

旦那『何だね、愛想も糞も盡きたとお前が言ふから、それでお前にそれを言つてやるのに、どうも夫婦仲といふものは迂濶り口が利かれないね。それなら、お前が勝手に、別れるとも別れないとも勝手にするが宜い。私はもう媒妁人といふ名ばかりだからナ、勝手になさい』

女『さう貴方が御立腹になつては誠に困るのですけれどね。妾はもう親類とては無し、從弟が

一人居りますけれども、これもう丸で音信不通で逢つたこともないのですし、從弟從々弟といへば他人も同樣ですからね。木から落ちた何とかで、何處といつても御相談する所もなし、此方樣を親のやうに思つて居るのですけれども……あの人が共白髮まで添ひ遂げて深切にして死水を取つて吳れる人でせうか、貴方のお眼識はどういふものでせう』

旦那『困つたなア、私の子供の時分に、お前の亭主も矢張り小さかつたんだが、それで長年出入つて居るから向ふも親戚同樣にして居るが、俺の所へ寢泊りなして居る譯ぢやアない、風呂や井戸が壞れたとか腐つたとかいふ時に出て來て仕事をする位のことで、子供の時分から知つちやア居るけれども、どうもお前が七年も八年も夫婦で居てお前に氣心が分らないものを、この人が深切な人でせうかどうでせうかと聞かれたつてそいつは誠に困る。けれども人間は一事が萬事といふことがある、試し樣が幾らもある。親に孝行な人に友達に不實だの身内に不人情だのといふ人は決してないといふものだね』

女『ヘエー人間の試し方があるんですか、それで分るんですか』

旦那『分るとも。一事が萬事だよ。唐土を知つて居りますか』

女『知つて居りますかつて、お團子のことでせう』

旦那『お團子ぢやアないよ、唐土といふと今の支那だ』

女『ヘエー、チヤン／＼ですか』

旦那『チヤン／＼と云ふ奴があるかい。それは唐土の昔だよ。孔子といふ學者があつたナ』

女『アラマア、帝劇へ何時でも出て居るいづれ幸四郎か何かの弟子でせう。そんな役者は餘り知りませんけれども、まだ下廻りなんでせうね』

旦那『何を言つて居るんだ。役者ではない、學者だよ』女『學者つて何です』

旦那『仕様がないね、學問の出來る偉い方なんだ、今の世の中でいへば文學博士といふやうな神様になる程の人なんだ』

女『ヘエー、それがどうしたんです』

旦那『毎日お役所へお勤めになる』女『いづれ郡役所か何かへ出て居るのでせう』

旦那『何を言つて居るんだ。文部省といふやうな處へその毎日お勤めだ』女『ヘエー』

旦那『さういふ方の住ふ處といふものは、もう町中の繁華の處は騒々しくていかぬ』

女『ア、成程、それではマア何れ中澁谷といふやうな、……彼處邊は好い地面がありますけれども、隨分と値が高いさうですね』

旦那「蒼蠅いな、さう喋舌つては困るよ」

女「おやア成たけ默つて居りますけれどもね」

旦那「それで郡部といふやうな處へお在でになつて日々のお勤め、靑に白……この上馬が居るんだ」

女「ヘエー、じ、、、やうめつて何です」

旦那「馬だよ。この白馬が大變にお氣に入りだ」

女「アラ マア、家の人がさうなんですよ。夏はいけないけれど、寒い時などにはあの濁酒はおいしくはないが身

體が温まつてお腹が脹るつて……』

旦那『何を言つてるんだね。白馬と云つたつて濁酒や何かではないよ、白い馬だよ』

女『ア、さうですか。明神様や山王様何かにある』

旦那『さう決まつてやしない。孔子様はこれが大變にお氣に入りなんだ』

女『へエー、それがどうしたんで』

旦那『或日のこと、その日に限つて御愛馬の白馬に樂をさせてやらうといふお考か、孔子様が靑の方へ乘つて行らつしつたんだナ』女『鹽原多助の馬でせう』旦那『それが何だ』女『だつて靑よ〳〵と……』

旦那『何を言つてるんだ。黑い馬をどういふ譯か俺は知らぬが靑と云ふんだ』女『さうですか、黑いのを靑といふ、妙なものですネ。それでどうしたんで……』旦那『お留守に厩から火事が始まつた。サア馬係りの人は一生懸命、けれども飼料があるから直ぐ火が大きくなつてしまつた』

女『ヘエー大變ですね、自動車喞筒か何かで……』

旦那『何を言つてるんだね、それは昔だ、大昔だ』

女『ア、昔ぢやア迚もそんなものはありますまいけれどもね。それでどうしたんです』

旦那『厩の中に人が一生懸命火を搔分けて入つて、馬の口綱に捉まつた。上馬ほど火を恐れるといふね。名馬といふものは大變なもんだ』 女『ヘエー』 旦那『それこそ人間なら悧巧と云つても宜い位』 女『ヘエー、さうですかね』 旦那『後へ／＼と退つてどうしても出ない。人の力と馬の力とは違ふ。火を恐れて奥へ／＼と這入る。自分の身體へ火が附いては堪らない。それが爲に横の羽目を蹴破つて漸くにして外へ出た。係りの人もい〻鹽梅に怪我をしなかつた。折しもお歸りといふ聲が掛つた。そのお係りの人は御前へ出て恐る／＼、今日過つて御厩から火を發しまして、御愛馬の白馬が……と申上げたら、その言葉を消して、イヤ／＼家來の者に怪我はないかどうぢやと仰しやつた。一同無事にございます、と申上げると、それならば上乘であると何も仰しやらぬでニコ／＼笑つて奥へお通りになつてしまつた。その御家來はお前何と思ふ、ア、有難い御主人だ、只た御一言だが馬のことを問はぬで家來に怪我がなければそれで上乘と仰しやつて下さつた。この君故には命を棄て〻も盡さうといふ心持が出るぢやアないか。これが一事が萬事、

論語の中にある厩焚けたり、子、朝より退いて曰く、人傷けりや、馬を問はず……』女『アラ火傷の禁厭ですか』旦那『何を言つて居るんだ。火傷の禁厭ぢやアないよ、論語にあるんだ。今言つただけの事なんだ』女『へエー、さうですかね』旦那『大した情合ぢやアないか。この反對にした話をお前に一ッ聴かせるがね』女『へエー、反對したといふとどうするんです』旦那『アベコベの話なんだよ、麹町邊だが、私が大恩を受けたお屋敷のさる旦那様がナ』女『アラマア猿成金ですね。毛が三本足りないとかいひますが、猿がお屋敷の旦那になつたのですか』旦那『さうぢやアないよ、さる旦那といふのは名前が云へないから、さる旦那といふのだ』女『ア、さうですか』旦那『それが大變に瀬戸物が大好きなんだナ』

女『へエー、似た事ばかりあるものですね、家の人が瀬戸物が好きなんですよ。銀座の夜店などへ行つて古い瀬戸物の罅の入つたものだの、接いだり何かしたものを買つて來ては、自分が大工なもんですから、自分で箱を拵へて、その箱の中へそれを一々黄色い布や淺黄の布なんかに包んで入れて置いて、雨でも降つて用の無い時何かはその箱を出してはそれを見て、さうしてそれを大切さうに撫でたり擦つたりして居るんですよ。まるで狂人なんですね』

旦那『そんなものぢやアないよ。當時素人瀬戸物研究會などいふものがあつて、えらい方がさ

ういふものを弄んで居らつしやるナ』

女『ヘエーそんな事があるんですかね。ヘエー』

旦那『夜店で買ふなんてそんな品ではない。一品買つても何百圓とか何千圓とか、或は何萬圓なんていふやうなものなんだね』

女『アラそんな大きな瀬戸物があるんですか』

旦那『大福餅や何かとは違ふよ。大きいから高いの小さいから安いの、そんな譯のものではない。小さなものが何萬圓といふやうなものもある』女『ヘエー、初めて聞きました。ヘエーさうですかね』旦那『夏のことで珍客がお出でになつたんだ』女『アラマア、旦那が猿だものだから狆がお客に來たんですか』旦那『さうぢやアないよ。珍客といふのは珍らしいお客様なんだ』女『さうですか、それでは平生に來るのはヽヽワン客とでも云ふんですか』旦那『ワン客といふものがあるかい。變な事ばかり言ふね』女『ヘエー、ツイお喋舌りなものですから餘計なことを言ひますけれども』旦那『それで夏のことだから二階がお涼しい。一ぱい木の葉で埋まつて居るといふやうな處へヒヤリ／＼風が來て、好い心持、お茶を奬めお菓子を奬め、その菓子器といひ茶器といひ、何れも結構なものなんだね』女『ヘエー』旦那『大きな鉢の中に菓子が三切か五切ぐら

ゐ、チョボ〱と眞中にあるといふものは、器の中を見せようといふ御主人の考だ』女『へエー』旦那『同じ瀬戸物の好きなお方で、お友達も大變に喜んで、お茶を替へて幾度も召し上り、瀬戸物の横を見、裏を見、中は勿論のこと、やがて、目の保養を致しました、何よりの御馳走で有難うございましたと御挨拶が濟んでお歸り、いけぞんざいにして壞しでもするといけないといふので、その跡片付は下女や何かにはさせない、奧さんがなさる』

女『それはさうですね、宅の人も始終それなんですよ』

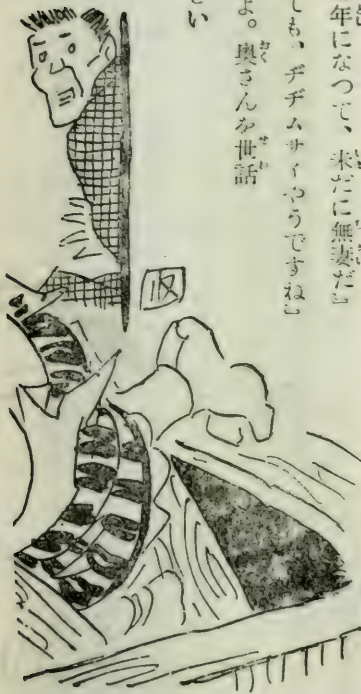
旦那『そんなものぢアやないよ。蒼蠅いナ、默つておいでよ』女『へエ』

旦那『その奧さんが、お茶器が下がつて、今度は菓子器の鉢、これが又、吾々なんぞ見たことのない何とかいふ品物で、二度ばかり見るには見たが、こんなものが何で高いのかと思ふやうなもので、立派なものには相違ないが、値段を聞いて肝を潰すやうな金の鉢なんだ』女『へーエ』

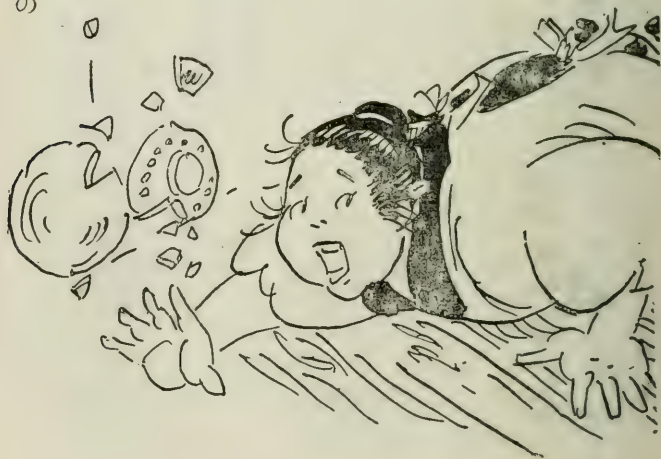
旦那『女といふ者は血の道がある。梯子の段を降りる、丁度半ばで血の道のせゐか眩暈がした。前へのめれば鉢諸共自分も怪我をしなくちやならぬ、奧さんはグラ〱ッと來たから後ろへ反るやうにした。右の足がスルリと辷つて、トン〱トン〱、四段ばかり落ちて其處へ尻餅を搗いた。けれども一生懸命、鉢を兩手で持つて差上げた。所へ、旦那が顏色を變へてやつて來て、い

きなり、アッ鉢を壊しはしないか、見ると坐つた奥さんが鉢を大事に持つて居たんで、ア、そんなら宜かつた、と云つて旦那が降りて來ると、奥さんがいらつしやらない。庭だらう、便所だらう、風呂場にでも居やしないか、方々捜したがどうしても居ない。暫くすると、袴羽織の媒妁人が來て、さて是々瀬戸物の無事を見て、そんならいいと仰つたきり、奥さんの體のことは一言もお訊ねがなく、誠に末が思ひ遣られますからお暇を戴きたいといふ、男として、女房の方から離縁を請求されて、俺が悪かつた謝まるからといふ譯にはいかないから、たうとう離縁をしてしまつた。もう五十幾ツといふお年になつて、未だに無妻だ」

女「もう年を取るとどうしても、ヂヂムサイやうですね」

旦那「ヂヂムサイではないよ。奥さんを世話の仕手がない。なぜないかといふのに、近所の人があの人は不實な旦那だ、薄情な旦那だ、邪慳な旦那だとかいつて、も

う女房を貰ふたつて來人もない、未だに獨身だ。コレが一事が萬事ぢやないか』女『へえ』

旦那『聞くところによると、お前の亭主は瀨戸物が好きだといふ　何もいふことはない、お前家へ歸つて、夫婦喧嘩はお前がして來たので、何でも彼でも亭主だから、先刻はつい身體の工合が少し惡くて、何だかムシヤクシヤして居る所へお前に叱られたから血の道が來た、若し何かお前の氣に障ることをいつたのなら、勘辨して下さいと謝まりなさい』

女『ヘエ〳〵、謝まることは何でもありません。亭主に謝まるのですから、妾に亭主が謝まるといふの

なら間違だけれども、女の方で謝まるのは仕方がありません』

旦那『さう分つて居れば結構だ。それで家へ歸つてナ、斯うしな、裏口から入つて行きナ。それでお前は打萎れてそこへ手をついて、誠にどうも相濟みません、どうか御勘辨下さい、血の道で是々だ』

女『エ、〳〵それは分つて居ります。それから瀬戸物の方はどうするんで』

旦那『大事にしてなる瀬戸物を壞して見なさい、試し所だ』

女『ア、成程、一體あんな瀬戸物は邪魔で仕樣がないのですからね……けれども、壞すたつてお二階がありませんの、お向ならあるんですけれども、お向の方は裏に日があたるし、二階もあるんですけれど、お家賃が二圓高いから馬鹿々々しい。算盤を取つて一年見通して置くと二十何圓違ふなんて、そんなケチなことを職人の癖に言つてるんです』旦那『何を言つてるんだ。それは當り前だ、一軒家を借りるといふことになると其の位の勘定はする、それでどうした』女『平家ですからお二階がないのです、屋根の上にあがつて落つこちる譯にも行かないし』旦那『何を言つてるんだ、そんな事をして怪我でもしたらどうするんだ』女だつて、血の道で少しは怪我をするんでせう』旦那『怪我をしなくつてもいゝのだよ。裏口から入つて行つてナ、さうして上板

を開けて少しずらしておきナ、お前がポンとそれに乘つかればガタリといふからその途端に持つて居る瀨戸物を放り投げるのだ』女『ヘエ、妾だつて其の方が後で世話がなくつていゝんです。どうせ皆安物ですから、あんな物壞してしまふ方が極りが付いていゝのです』旦那『壞してしまつて、其の音を聞いて、瀨戸物を壞しやしなかつたか、といつて、瀨戸物のことを言つて、身體の事を訊ねなかつたらズツとお前出て來な、とても見込はない』女『アヽ成程』旦那『さうぢやねえか』女『ヘエ、さうすると厩焚けたり、子、朝より退いて曰く人傷けりや、馬を問はず』旦那『旨いナ、直ぐ覺えたナ』女『ヘエ、覺えはなか〱いゝんです。その代り直ぐ覺える代りに明日になれば忘れてしまふんで』旦那『何だ詰らない。それでは宜いかい』女『ヘエすつかり分りました――それでは裏口から上つて、それから瀨戸物を壞すんで――ヘエ〱、試し所ですから一生懸命やります……どうも手を貸して戴きまして有難う存じます、左樣なら』

亭主『オイ、裏口から入つて來たのかい、道が惡いぢやねえか、表の格子の方から入れよ……變だナ、……いけねえいけねえ、糠味噌は上つてるよ。お前がもう歸るだらうと思つて、お前が歸つたら一緒に飯を食はうと思つて、出し置きにすると美味くねえから、ちやんと蓋物の中に入れて蓋してあるんだ。湯も沸え立つて居るし、お前が歸つたら一緒に飯を食はうと思つて待つて

るんだよ』女房『アラマアどうも誠に相濟みません。又先刻は飛んだ事を申しまして誠に相濟みません』亭主『濟みませんばかり言ふなよ、どうしたんだ』女房『ツイね、私も血の道が起つて居つたものだから、お前さんに悖らふやうなことを言つて、どうぞ御勘辨下さい』亭主『そんな改まつた挨拶する奴があるかい、夫婦といふものはそんなものぢやねえや。年中かうして一緒に居るんだ、まあお互に蟲の居所の惡い時もあるからな、それを一々ギヤー／＼言つたつて仕樣がないやねえ、まあ足でも洗つてこつちへ來なよ。飯を一緒に食はうと思つて待つて居たんだよ』

女房『マア、お前は情愛があるわよ。お前は居士だよ』

亭主『居士つて何だよ』

女房『私だつて何だかよく分らないけれど、それは偉いよ』

亭主『何が偉いんだ――何だかイヤに變ぢやアねえか』

女房『それア亭主なんだもの……チヨイと瀬戸物を洗つてしまはうかと思つて居るんだよ』

亭主『瀬戸物を洗ふ？　マア其邊を見なよ。隣りの婆さんが、あの人は男だけれども本當に忠實だ、實に感心だと云つて、近所方々へ行つて肝を潰して居るんだ。鼠入らずの隅だつて塵一つ無いゝのし、膝といふものは能く汚なくなつて居る。それが男の手一つで、いつ見ても綺麗なもの

たゞほんとに珍らしい人だと言つて大變に褒めて居るんだ……どうだ洗ふ所はねえだらう』

女房『ないけれども、それでも洗はなくちやアどうも工合が惡いんだよ』亭主『オイ〳〵その戸棚のは止しなよ、それは只の安物ぢやアねえから、其邊の瀨戸物屋にある道具とは違ふんだ――いけないよ〳〵、それはいけないよ――そんなら燈りを點けてやるから、臺所は馬鹿に眞暗だナ、アツ――そら落つこちたぢやアないか、お前怪我はしやしねえか――何處か痛みはしねえかい――怪我しやしねえかつて云ふんだよ――』

女房『そんなことは宜いけれどもね、アノ……』

亭主「何だ」　女房「大切な瀬戸物を壊したんだよ」
亭主「そんな事はどうでも宜いや、怪我はしやしねえかつてことよ」　女房「アラ眞物々々」
亭主「何を言つてるんだね、其處へ坐つて動けねえのぢやアねえか、怪我はしやしねえかといふことよ」
女房「私はどうなるかと思つて居たんだよ、事に依ると麹町の猿になるんぢやアないかと思つて、お前は唐土だよ」　亭主「變だナ」
女房「厩焚けたり、子、朝より退いて曰く、人傷けりやと、馬を問はず、チーン、ブン／＼」
亭主「隣りの婆さん、これア正氣ぢやアねえよ、變だナー」
女房「ほんとにお前さんは情合があるよ、妾は本當に嬉しい」
亭主「いけない／＼、變な眞似をしなさんなよ、だん／＼近寄つて來た、どうするんだ」
女房「どうするつたつて本當に情合があるよ、だつて私の身體のことを聞いて瀬戸物のことを言はない、そんなに妾の身體が大切なのかい」
亭主「當り前よ、怪我でもされて見ねえ、明日から好きな酒が飲めねえから」

（插繪――代田收一）

仇同志

磯村野風

加賀金澤、松平加賀守の家臣服部瀬左衛門と稲垣半兵衛とは、不思議に仲が惡い。双方共祿高一千石、何れも戰場生殘りの勇士で、而も揃ひも揃つて忠義無類の武士である。それでゐて、寄ると觸ると、犬と猫のやうにいがみ合ふのだから始末が惡い。

殿樣も、初めの内は、何とかして仲を直してやらうと思召して、種々手をお盡しになつたが、双方共強情で、どうしても折合ひません。

『あの兩人は、予の手にも負へんわ』

と、百萬石の殿樣が匙を投げた位の仲。

『申し上げます』

『何ぢや？』

『只今、殿様より急のお使にて、即刻登城致せとの御使にございます』
『即刻登城？　はて何であらうな、よい〳〵、直ぐに參ると申上げて置け……それからな、八内に馬の用意をさせなさい』
『畏りました』
服部瀬左衞門吉實は、直ぐに仕度に及んで、自分の邸を出ました。今しも金澤城の大手柳町の所まで參りますと、丁度、退出と見えて、馬上ゆたかに、此方を指して參りますのは、服部の喧嘩相手、

加賀家名代の豪傑稲垣半兵衞正國でございます。

『八内見ろ、向ふから狸めが來居るわ』

『旦那樣、そんな大きな聲をお出しになりますと、稲垣樣に聞えます』

『聞えても好いではないか、顏と云ひ、形と云ひ、狸そつくりだから狸と申すのだ、狸で結構だ』

間抜けの大聲、これが稲垣に聞えたから堪りません。

『平助、山猿めが、人眞似の上下を着けて、

念入りに馬にまで乗つて來居るぞ。フヽ沐猴に冠とはよく申した、あれで御幣を持たせると、猿によく似合ふのぢやがな』

『だまれ稻垣、拙者を捉へて山猿とは何だ、この狸侍めが！』

『狸だ、ぬかしたりな山猿！』

『その山猿の腕前を見せて與れうか』

『望む所だ、山猿こいッ』

『狸からぬけ』

『いや、猿　らぬけ』

二人は、あはや眞劍勝負に及びさうな權幕。

『おいもし旦那樣、急なお召で御登城の途中、眞劍勝負などを遊ばしては、殿樣へ對し不忠になりは致しませんか……』

『旦那樣、たとへ勝負を遊はすにもせよ、御役目をお果しに成つてから、御ゆつくりと遊ばしてはいかゞでございます』

『いかさま、其方の申す通りぢや、これ古狸、登城の途中でなくば、一刀の下に斬つて捨つる奴

なれど……場合が場合故ゆるし遣す、其代り、立戻り次第、其方の邸へ押しかけて參るから、逃げかくれを致すな』

『うむ、面白い。待つて居るによつて、貴樣こそ裏の竹藪へ逃げ込むな、この山猿め！』

『うゝ、ま、參らいで何と致す、首を洗つて待つて居れ』

服部瀬左衞門、かん〳〵に怒つて登城致しました。

『へゝつ、麗しき尊顏を拜し、恐悦至極に存じ奉ります』

『オゝ服部か、苦しうない、近う參れ』

『ハヽツ』

『本日遽に其方を呼出したのは餘の儀でない。其方娘花に、よき婿を世話し取らせんと思うてちや』

『うぬ、古狸め、覺えて居れ、よ、よくも拙者を山猿などと……』

『コレ〳〵瀬左衞門、古狸がいかゞ致した』

『ウヘーツ、恐入り奉ります』

『其方娘花を、大槻内藏之助方へ遣せ、予が媒酌をして取らせる』

『己れ古狸、立歸つたら、眞二つに致し呉れるぞ』
『コレ、瀬左衞門、異存はないな』
『へゝつ、ゐ、委細承知仕りました』
瀬左衞門、夢中で承諾して了ひました。
『オ、承諾いたしたか、予も滿足に思ふぞよ』
『はつ、何事でござります？』
『服部、其方はどうか致して居るな、只今其方の娘花を、大槻内藏之助に遣はせと申せし所、委細承知仕りましたと申したではないか』
『これは怪しからんことで、實は手前、少々考へ事を致して居りました爲め、心にもなき御返事を申上げました次第で……此儀は何卒御取消を願ひます』
これは服部の斷るのも無理はございません。大槻内藏之助は、元傳藏と云つて、鐵砲組足輕一石[illegible]人扶持の大槻長次兵衞の倅で、才智に長けて居りまする所から、殿樣の御寵愛を受けてトントン拍子に立身出世、今日では、八千石の中老上席まで進みましたが、最近に到りまして、お家へ横領を企て居るとの噂高く、心あるものは内々爪はじきを致して居る所でございますから、精忠

無二の服部は、一も二もなく斷つたのでございます。

『一旦承知を致し置きながら、今に及んで斷るとは言語道斷、……是が非でも娘を遣せ』

『仰せではございまするが、娘花には、……最早や定まれる夫がございます』

『何、定まれる夫がある、それは何者ぢや？』

『はい、それがその……何でございます……その夫と申しますのは……』

『何者の倅で、何と云ふものぢや？』

殿樣は、服部め、大方と聞いて、好い加減なことを云つてゐるなと早くも感付きましたから、誰れだ／＼と、切りに問ひ詰めて參ります。

『それはその、……うーむ、稻垣の古狸め、お、覺えて居れ、それがその……』

『誰れぢやと申すのぢや、判然と申せ！』

『ハツ……稻垣半兵衛めでございます』

『稻垣半兵衛、アツ！　それに相違ないな？』

殿樣は思はず吹き出してお了ひになつた。稻垣と云へば、婿どころか喧嘩對手だ、よしツ、それならば、うんと苛めてやらうとお思ひになつて、

『確かに、花の夫は稻垣ぢやな？』

瀬左衛門も、今更、それは間違ひましたとも云へなくなり、

『はい』

『うむ、半兵衛は少し老人ぢやが、其方と並んで當家名代の勇士、婿として恥しからぬ男ぢや、予は改めて兩人の月下氷人になり遣すであらう、早々婚禮の日取を定め、予が手許まで申出るやうに致せ』

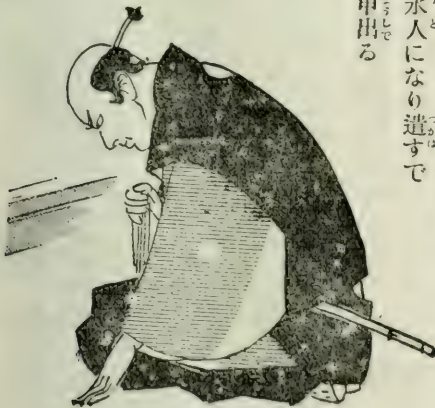
『ウヘーッ、承、承知仕りました』

服部瀬左衛門、泣きつ面をして自宅へ戻つて參りました。

『お歸り遊ばせ』

『お父樣、お歸り遊ばせ』

『うん、今戻つた』

『大變お顔の色がお惡うございますが、何か御

心配なことでも……』
『うん、大變なことが持上つて了つた』
『まア、大變とは氣掛り、何事が起つたのでございますか？』
『實は斯樣ぢや』
と、茲で初めて一伍一什を物語りました。
『まア貴郎、人もあらうに、あの古狸なぞに娘を遣すなんて……』
『サヽ、其所が間違なんだ。つい憎い憎いと思つて居つたので、我れ知らず口へ出て了つたのだ。今更あれは嘘でございますと云つた所でお取上げにはなるまい、據ないから、拙者は申譯の爲めに切腹い

たす。お前は、娘花を連れて親戚の所へ参り、篤と相談の上、身の振方をつけて呉れ』

『まア、お待ち遊ばせ、私も武士の妻、今更未練がましいことは申上げませんが、今此所で御切腹遊ばしたのでは、犬死になりは致すまいかと存じます』

『たとへ、犬死になつた所で、どうにも仕様がないではないか？』

『私の考へは、これは一層の事、稲垣様に事情をお打明けになつて御相談を遊ばしたら、稲垣様も、あの通り頑固一徹な方ではございますが、武士の情は御存知の事と存じます。殊に大槻めを敵のやうに常日頃嫌つてお出でださうでございますから、ことによつたら相談相手に成つて下さるかも知れません』

『ば、馬鹿なことを云ふな。たつた今、御上の御用が済んだら、直ぐに半兵衛めの所へ乘込んで眞劍勝負を致さうと約束した俺が、どの面下げて稲垣の所へ……』

『仰せではございますが、忠義の爲めなら、その位の事はお忍び遊ばすが當然かと存じます……』

『お父様、私はあの古狸は大嫌ひでございます。あいつの顔を見ると、三日間は御飯がおいしく御座いません。私は、あんな奴の所へお嫁に参る位なら、自害をした方がましでございます』

『まア〱、左様一概に申すな。わしだからと云つて、決して、あの狸が好きで云ひ出したので

はない、物のはずみだ』
『でもあなた、はずみでは濟みますまい。何事も忠義の二字にお免じ遊ばして、一刻も早く稻垣様の所へ……』
『いや、たとへお前が何と云つても、わしは稻垣の所へ行く氣は出ない。あんな奴の所へ行つて頭を下げる位なら、潔よく切腹いたすわ』
『それはあなたとしては、其方がさつぱりしておよろしいかも知れませんが、それでは殿様へ對し不忠、御先祖へ對し不孝にならうかと存じます……若しあなた様が稻垣様に事情を打明け、手を突いてお頼みになるにも拘らず、稻垣様が無禮なことを仰有つたり、傍を向いてお出でになりましたら、其時こそは武士の意地、只一刀に斬つて捨て、返す刀で美事に御切腹を遊ばしませ』
『してお前達は？』
『私も武士の妻、あなたが立派にお腹を召したと承りますれば、娘花を刺殺し、自害して相果てます』
『し、死んで吳れるか……』
『はい、これ程迄に申上げても、まだお分りに成りませんやうでしたら、私共はあなたのやうな

沒分曉漢……』

『おい／＼、沒分曉漢は酷いな……では行つて見よう』

『えツ、お出で下さいますか？』

『うん、仕方がないから行く……併し半兵衞の事だから、多分傍を向いてゐるに違ひない』

『左樣あなたのやうに、御自分で許りおきめになつても、稻垣樣が又、どんなお考へをお持ちになつていらつしやるか分らないではございませんか』

『いや、彼奴は、乾度對手に成らないに決つてゐる』

『それは又、どう云ふ譯でございます？』

『知らん顏の半兵衞……と云ふからな』

『まア、この場合、お洒落どころではございませんよ、お出でになるとすれば、一刻もお早い方がよろしうございます』

『よし、極りは惡いが行くとしよう、貞、鎧を出して吳れ』

『どう遊ばすのでございます』

『着て參るのだ』

『オホヽヽヽ、物を頼みにいらつしやるのに、鎧を着ていらつしやる方がございますか、そんなことをなすつたら、愈々果合にお出でになつたものと思ふではございませんか』

『夫れも左様だな。では槍丈けでも持つて參らう』

『夫れこそ、ヤリ〳〵御苦勞でござります』

『洒落るな』

服部瀬左衛門、仕方がありませんから、只一人悄然として、稲垣の住居へやつて參りました。

『ウーム、ざ、殘念ぢやな、……あんな狎野郎に頭を下げるのは……と云つて今更歸る譯にも行かず、えゝ、仕方がない、思ひ切つて入らう、その代り、傍でも向いてゐて見ろ、抜き打ちにして呉れるから……』

『頼む、たの――む』

いやはや、物騒千萬のお客様です。

『どーれ……』

平助が飛出して見ると、服部ですから、

『し、少時！』

と奥へかけ込んで、
『旦那、来ましたよ服部様が……』
『来居つた……どんな風をして、何人位の同勢だ』
『ハ、ツ、服部瀬左衛門其日の扮装は、黒糸をどし南蠻鐵の大鎧、同じく五枚しころ、日の丸の軍扇の前立うつたる兜を猪首にきなし、一間柄笹穂の槍を小脇に掻い込み、朱のあつぶさ掛けたる連錢栗毛の太く逞しきにゆらりがつしと打跨り……ヤア〳〵遠からんものは音にも聞け……』
『馬鹿ツ、好い加減にしろ、眞正の事を申せツ』
『ヘエ、實はお一人なんで……』
『一人……？　鎧兜は？』

『それも嘘なんで……實は素面素小手なんで……』

『うむ、流石は服部、よくぞ一人で參つた。一騎打こそ望む所だ、いでや寶藏院流の腕前を現し、只一突に致して呉れるわ』

袴の股立高々と取り上げ、長押にかけてあつた九尺柄の槍を取るより早く、ばら／＼と玄關に立現れ、

『おゝ服部、先刻の約束を違へずよくぞ參つた。稻垣半兵衞正國の槍先が、受けられるものなら受けて見よ』

と、ビユーツ／＼／＼と五六遍、素振りをかけてぴたりと中段に構へました。

『アハヽヽヽ、いふな半兵衞、汝如きものゝ槍先にかゝる瀬左衞門ではないわ、性根を据ゑて突いて參れ！』

『何をッ、小癪なッ！』
ぶつりッ、突かゝつて來た槍先を體をかはして空を突かせ、流れて來た千段巻をしつかと握ると、
『ホイ、しまつた、わしは喧嘩に來たんぢやアなかつた』
と氣がつきましたから、
『まて、半兵衛』
『いゝや待たぬ。扨は瀬左衛門、貴様後れたな？』
『うんにや後れはせぬ……まづ槍を引いて、一通り拙者の申すことを聞いて呉れ』
『ハヽヽヽ、大方後々の菩提でも弔つて呉れと申すのであらう。その儀ならば心配いたすな、命日毎に必ず讀經をして遣すから……』
『ま、待て、相變らず貴様は氣が早いな。最初貴様に別れて御殿へ出ると、殿様が拙者に向ひ、其方の娘花を、大槻内藏之助へ遣せ、予が媒酌をして取らせると云ふお言葉なんだ』
『うん〳〵』
『所が、貴様の事が頭にあるので何を仰有つたか頓と分らず、委細承知仕りましたと申上げ

て了つたのぢや』
『アハヽヽ、貴様も念入りの馬鹿だなア』
『まア、笑はんで聞け……わしもはつと思つて、改めて聞直すと今のやうな次第だ。其所で仕方がないから、娘花には、最早や先約がございますと申上げたんだ』
『うん、一寸巧くやつたな』
『所が更に巧くないんだ。その婿は誰れだと云ふお訊ね、拙者その婿の名を誰れだと云つたと思ふ？』
『拙者は八卦見でないからそんなことは判らん』
『判るまい。恐く釋迦牟尼佛と雖もこれは分るまい、稲垣驚くな』
『少しも驚かん』
『その婿の名は……と云はうとしたが、扨嘘をついたことのない拙者だ。ぐつと詰つて了つた……そして心中に、只貴様が憎い〳〵と思つてゐたもんだから、其婿は稲垣半兵衛正國でございますと云つて了つたんだ』
『何、拙者が、貴様の娘の婿、じよ、冗談を云つちやアいかン、拙者甚だ迷惑だ』

『迷惑なのは貴様ばかりではない、現に娘の如きは、貴公の顔を見ると、三日間飯がまづいと云ふ位だ、萬一貴公の所へ輿入をするやうなことになつたら、潔よく自害すると云つて居る』
『やれ〳〵、大層嫌つたものだな』
『娘ばかりではない、妻までが貴公が大の嫌で、此の間も貴公の後姿を見たら、急に寒氣がし出して、胸がむか〳〵、頭がふら〳〵、到底二廻りと云ふものは、精神朦朧として……』
『好い加減にしろ、それからどうした？』
『殿は、貴様と拙者が犬猿も啻ならざる間柄の事をよく御存知だ、は、ア、こしらへ事だなと思召したと見えて、それは何よりの良緣だ、稻垣は、少し年を取り過ぎてゐて、顏や形は狸のやうな所もあるが……』
『噓を吐け』
『……當家名代の勇士だ、其方の娘の婿には申分のない人物、予が媒介をして取らせるから早速結婚いたせと云ふ御意なのぢや。拙者ももう何共云へなくなつたので、悄々として邸へ戻りこの話をすると、家内なぞは、まるで娘を人身御供にでも取られるやうな嘆きやう、わしは一層の事切腹して相果てるから、お前達二人は、緣類へ相談して、何とか立行くやうにしろと云ふと、そ

れは御随意だが、不忠不孝の侍になつても差支ないかと云はれると夫れも出來ず、眼を白黑とさしてゐると、稻垣様は、顔こそ狸……』

『餘計なことを云はんで、肝腎の話をしろッ』

『……狸に似てゐるが、忠義無類のお方だ、武士の情を知つてゐる方だ、斯様々々と打明けてお願ひしたら、屹度一臂の力を貸して下さるに相違ない。若しそれでも對手にならんと云ふのなら、其場に於いて一刀の下に斬つて捨て、返す刀で切腹をなさい。あなたが御切腹をなすつたと聞いたら、私は娘花を刺殺して直ぐに自害して相果てませうと……女ながらも立派な覺悟、私はどう考へても、貴様の様な奴に頭を下げるのは嫌ひだが、忠義の二字には代へられないと思つて、耻を忍んで頼みに來た……稻垣、貴様はこれでも、拙者と果合ひをするかどうだ？』

『…………』

『默つてゐては分らんではないか。今も云ふ通り、わしの家族は三人が三人共、貴様が大嫌ひなんだ。けれどもだな、不忠不義の大槻にやるより、まだ幾分ましなんだ、だから氣は進まんが、貴様に娘をやらうと思つて訪ねて來たんだ。尤も娘をやつたからと云つて、仲よくしようの、今迄の事を水に流さうのと云ふのではない。拙者は斷じて貴様の家へ來んから、貴様も婿面をして

好い氣になつて來るな。若しもノコ〳〵來居ると、向脛をかつぱらふぞ。どうだ稻垣、貴樣、これでも娘は貰はんと云ふか？』

刀の柄に手をかけて、チリ〳〵と進み寄つた服部瀨左衞門吉實、腕こまぬいて最前から此話を聽いて居た稻垣、何と思つたか、瀨左衞門の手を取つて奥の室に案内して、

『服部、まア、其所へ坐れ』

『拙者は今の話の返事を聞かん内は坐らん』

『マア、さう一國なことを云ふな、扨々、貴樣は豪い男だ』

『おだてるな、氣味の惡い奴だ』

『いゝや世辭でもない、巧言でもない、全く貴樣は豪い、貴樣のやうな忠義者を毛嫌ひしてゐた拙者は、何と云ふ愚者であつたらう、どうか勘辨して吳れ……不足ではあらうが、以來は拙者を弟と思つて、永く交際つて吳れ』

『稻垣、そ、それは本統か？』

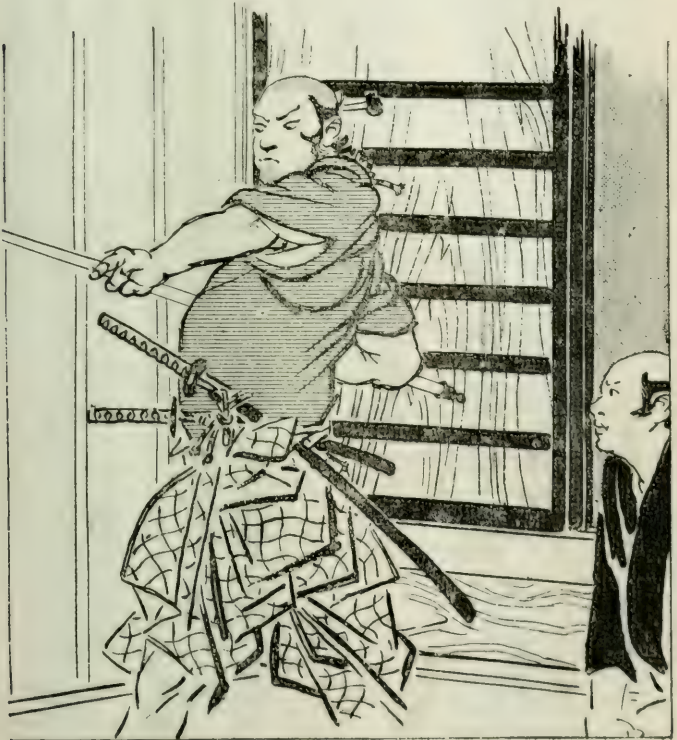
『拙者、口が腐つても嘘はつかん』

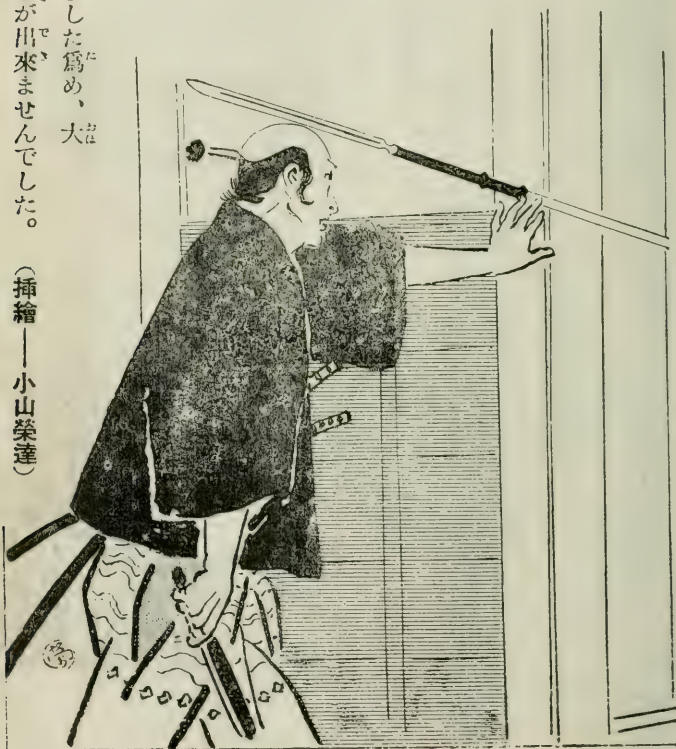
『か、忝い、然らば娘、花は貰つて吳れるのだな』

『頂戴いたす、これ幸、お前も聴く通りの次第だから其積りでゐなさい』
『誠に結構な事でございます……われ共宅には貰ひますやうな伜がないではございませんか？』
『成程左様であつたな。服部、弱つたな、伜順一郎は、昨年廿一才で相果てたよ』
『左様々々、男振りと云ひ、文武兩道と云ひ、申分のない立派な伜だつたがなア、尤もあの時は貴樣が吠面をかいてゐるかと思ふと、本人には氣の毒であつたが、實は赤飯にお頭付きでな……』
『馬鹿にするな、伜の死んだのを祝はれて堪るものか……左樣だ、誰れ彼れと云はうより拙者が貰はう。なア服部、拙者なら申分はあるまい』
『もしあなた、私はどうなるのでございます？』
『お前は當分臺所でくすぶつてゐろ、又其内には世に出る事もあらう』
『まア、お情けない……』
『汚い面をして泣くな、年甲斐もない奴だ。ナア服部、合せものは放れものだ、たとへ婚姻をしても、翌日離縁になる者もあるからなア』
『成程、離縁々々、貴樣、氣變りのせぬ内に早く離縁をしろよ』
『大丈夫だ、安心しろ』

『ちやア、早速日を極めて、殿様へ申上げる事に致さう』

兩忠臣は相談の上、結納の取替せを致し、愈々日を選んで輿入れと云ふことになりました。

これではいくら殿様でも手を出す事が出來ません。見す見す嘘と云ふ事は分つて居りますが、媒介をしてやると仰有つ

た角がありますから、いや／＼ながら莫大なお祝物を賜はる。稻垣、服部の兩人はこれが縁で、今度は水魚も及ばない位の大仲好しと相成りました。

大奸大槻内藏之助が、叛逆陰謀を企てました時、二人は互に提携して、加賀家の爲めに、忠義を盡しました爲め、大槻も遂に本望を達する事が出來ませんでした。

（挿繪――小山榮達）

左七の字

大江行親

一

『おい〱村越、そりやア十の字ぢやないか』

『默つて見てゐろ。一寸小手調べに十の字を書いて見たのだ』

『うつぷ、小手調べは大袈裟だな』

『何が大袈裟だ。武士として、常々其位の注意を拂つて事をせねば、思はぬ不覺を取るものだ』

『そりやア左樣かも知れんが、戰場と字を書く場合は違ふよ』

『いゝや違はん。治に居て亂を忘れずと云ふ事を貴樣知らんのか？』

『うんにや、知つてゐる』

『知つてゐれば、字を書く場合にも小手調べをして惡いと云ふ法は無いだらう』

『如何にもない。然らばそれはそれとして、では肝腎の七の字を書いて貰はう、千軍萬馬往來の間にあつては、小手調べより働が大切だ、サアそろ／＼實戰にうつつて貰はうか』

『喧しいわ、左樣つべ／＼吐されては、うるさくつて字が書けん』

『早くせんか、墨が乾いて了ふぞ』

『何うした村越、何を考へてゐる』

『早く七の字を書いて見ろ』

『譯は無いぢやアないか』

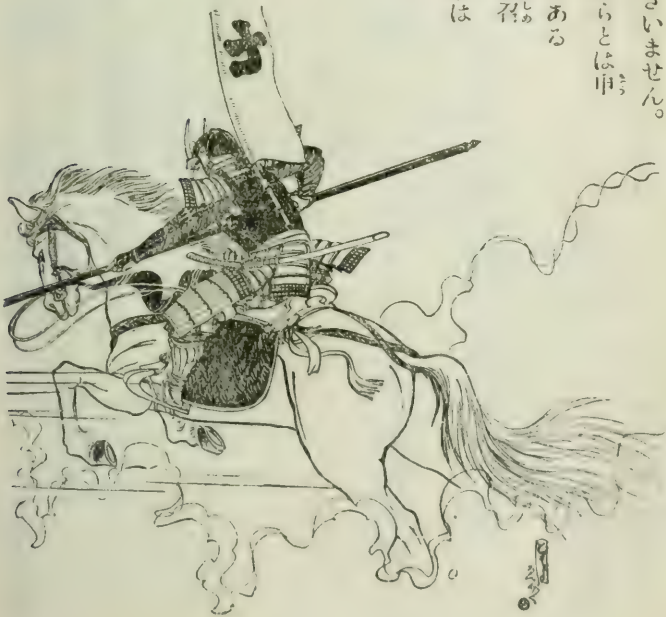
「右へ曲げるか左へ曲げるか……それで十の字が變じて七となるのだ』

『うるさいな、默つて居れ、夫を實は拙者も考へて居るのだ、せいては事を仕損ずる、緩くり見て居ろ、質には拙者もこりて居るからなア、アハ、、、』

『村越、喋つて許り居らんで早く書け、愚圖々々して居ると流れて了ふぞ』

「流れるはよかつたな、ウハ、、、、』

いや、けん／＼ごう／＼大變な騷ぎでございます。村越は筆の軸がミリ／＼云ふ程握りしめて、ウン／＼云つて居りますが、偖胴忘れして了つたものを、左樣無理に考へ出さうと云つたからと

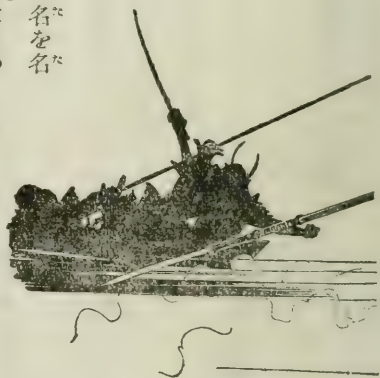
て、ひよいと思ひ出せるものではございません。
然しながら、幾ら時代が戰國だからとは申せ、七の字の書き方を知らない奴もあるまい、忘れて了ふ奴もあるまいと思召すかも知れませんが、この村越、名は三十郎、物忘れにかけては、こんな逸話を澤山持つて居る位の男でございますから、今度の場合なぞは、むしろ普通日常茶飯の事でございます。
或年の合戰の事でございます。村越三十郎、タツ／＼タツヽと馬を陣頭に乘出して、
『ヤア／＼、遠からん者は音

にゝ聞け、近くば寄つて目にも見よ、それがしは、徳川家康の家臣に、さる者ありと知られたる……ムーン、村越……村越……と云ふのは拙者の姓ぢや、名を聞いて驚くな、その村越ツ……』

すつかり三十郎を忘れて了ひました。

『それがしは村越ぢや、村、村、村越、えゝ、名を名乗るのは面倒なり、その村越とはそれがしが事なるわ！』

その儘馬に一角入れると、パツと敵軍の中へ跳り込み、家康から賜つたる大自慢の皆朱の槍なおツ取り、當るを幸ひ突き立て薙ぎ立て、またゝくうちに三十人を一槍の下に突き殺し、槍の血振ひをすると、ヒヨイと三十人から自分の名前を思ひ出し、

『ヤア〳〵、それがしこそは村越三十郎であるぞツ！』

と大音聲に再び名乗りかけて、又々馬を乘入れ十七人を槍玉に上げて了ひました。それでござ

いますから、七の字の下を何方へ曲げたらよいかを忘れるなぞは、殆んど忘れものゝうちへ入つて居りません。

三十郎も、合戰に次ぐに合戰の時代には、さして字の必要は認めませんでしたが、數度の合戰で次第に祿高を增して來ますと、まさかいろはを知らないと濟ましても居られませんし、それに、又性のよくない友人達がからかひますので、之では不可ないと、密に最近では酒井左衞門尉忠次を先生にして、いろはは四十八文字と數字を一から十まで、苦心に苦心を重ねてやつと習ひ覺えたのでございます。それを聞き込んだ若侍達、

『そいツは面白い、一番三十郎をからかつてやれ』

と云ふ事に評議一決して、

『村越、近頃貴公、大層學問にせいを出して居ると云ふ事ぢやアないか』

『うむ、せいを出して居ると云ふ程の事でもないのだが、チト感ずる所あつて勉學中だ。一體何處で聞いて來た』

『何處でと云つて、何しろ城内では、貴公の勉強振りが大評判なのでな』

『ほゝう』

『屹度あの分なら、今に御祐筆頭の脇田氏なんか御不要になるだらうとの噂とり〴〵だぜ』
『そんなに評判がいゝか、汗顔の至りだな』
「所でな村越」
『何だ？』
『一つ頼みがあるんだ』
『何だその頼みとは、新刀のめきゝでもして呉れろと云ふのか？』
『そんな事ぢやアないんだ、拙者先日一寸した普請をしてな、新築の座敷に是非一つ額を上げ度いと思ふんだが、何うだ一つ何か書いては呉れまいか』
『拙者がか？　そりやア不可んよ、勉強中は必ず人に物を書いて與へてはならんと師匠に固く止められてゐるのでな』
『左様でもあらうが、外ならぬ拙者の依頼だ、親友のよしみ、曲げて一つ書いて呉れ』
『弱つたな、何うも……』
「頼むよ、一つ、是非、ナア村越」
『うむ、左様まで頼まれて、それでも書かんと云ふのは多少友誼に反く様な傾もあるな、それ

ぢやア極く内々で書いて遣らう』

『夫は有難いな』

『所で紙はあるかい』

『用意して居る』

『却々御執心だな、ではト何を書かうかな、漢字もいゝもんだが、少し畫のこんでゐるものは、上へ上げると少々見劣りがするもんだで、ウーン、左様だツ』

『ナ、何だ、急に大きな聲をして、喫驚するぢやアないか』

『勘辨しろ、色々考へたが、最も書いて書き映えのするものは數字だ、これに上こすものはないな』

『ホヽウ』

『其處で夫を書いて進ぜる事に致した、一から十まで、一枚々々へ一字づつ書く、紙十枚を要する譯だ、大したものだらう』

『益々有難い、願つたり叶つたりだ、デハ早速たのむ』

『ウム、友人間の事だから、潤筆料は負けて置くぞ』

ドツプリ墨を含ませて、ツ――ツと引いた一文字。

『何うだ、これが一だ』

『フーン、立派なものだな』

『次は一の下へ一を引く、一プラス一、イクオル二だ』

まさかそんな事は申しません。

三、四、五、六……とまでは何うやら間違はずに書いて來ましたが、七へ來て、ウームとつまりました。筆が動きません。一體十の下を何方へ曲げたら七になるのだか、美事に忘れてのけて了つたのでございます。其處で色々下らない事を云つて胡麻化さうとしましたが、おつとどつこい左樣は參りません。

待つてましたと許りに色々からかひます。こんな時に限つて意地の惡いもので、

『何、村越が字を書いて居る、それは前代未聞だ、行つて見ろ〳〵』

『却々見られん圖だよ、どれ〳〵、お成程書いて居るわ、オイ三十郎、何うしたのだ、六から十に飛んだのか』

暇な奴が方々から出て參ります。

千軍萬馬往来の古武士、矢叫鬨聲にはビクともしない三十郎も、この新手には弱りました。カッとなつて、太刀傷だらけの頬ぺたへ油汗を浮べて、ムーン、ムーンと唸つて居ります。

所で、丁度御廊下を通りかゝつた酒井左衛門尉忠次、室内が馬鹿に噪がしいので、スーッと襖を開けて、ヒョイと中を覗き込んで見ますと、御弟子の三十郎がこの態たらく。

『失敗つた、馬鹿な奴だ、アレ程止めて置いたのに遂々ひつかゝつて了つたわい、しかし可哀相だな、何とかして遣り度い、ホゝウ、七を書くつもりなのだな、村越め、通り越して八を書いて居るわい』

と、

『エツヘン！』

と妙なせき拂ひ、聞き付けました三十郎が、ひよいと上げる顔と顔、忠次ニヤリと笑つてグイと顎を右へ曲げました。

『ウム、そうか何んだ、左か、譯はない！』

三十郎、正面から見たから之を左と取つて、

『各々、七は斯様に書くもの、後學の爲めよツく見て置かつしやい』

力まかせに、グツと左へ曲げました。

『アハヽヽヽヽヽ』

『ハヽヽヽヽ』

『ウフヽヽヽ』

『アツハ、アツハ』

『な、な、何を笑ふツ』

『違ふよ村越』

『何處が違ふ、現在師匠の忠次殿が………』

『アツ、こりや不可ん〱』

忠次はどん〱廊下を馳け出して了ひました。

聞いた家康大喜びで直ちに三十郎を呼んで、

『やり居つた〳〵、左り七の字とは奇想天外、その方ならでは出來ぬぞ〳〵、以後戰場に於ては左り七の字の差物を用ひよ』

『ハ、ツ、有難き仕合せにござります』

三十郎遂に差物の特許をとりました。

それからと云ふもの村越三十郎、紺地白拔左り七の字の差物を、煙硝風に吹きなびかせ、所々の合戰に拔群の功名、家康が關八州の領主となる頃には五千石の大身に出世を致しました。

二

天正十八年關白秀吉、小田原を攻め之を陷入れた時、鎌倉白旗八幡へ參詣して、堂宇修繕費として莫大な金額を寄付し、永く祭祀の斷えざる樣、一萬石を與へよと德川家康に命令を下しました。其時は家康も奇麗に承知しましたが、後日八幡宮の神官が一萬石の御墨付を頂戴致し度いと申し出た時、何喰はぬ顏で一千石の墨付を與へ、且、自分の手でチョイと許り修繕を加へました。

この事を京都の聚樂邸で聞いた秀吉、怪しからん奴は家康、早々次第相尋ねよと遠州濱松の城主堀尾吉晴を特使として江戸へ差しむけました。

秀吉の使者と聞いた家康、禮を厚うして江戶城に吉晴を迎へ、
『遠路の御使者御苦勞でござる、して殿下よりの御用向きは？』
『餘の儀でもござらんが、鎌倉八幡宮に社領一萬石を宛て行ふ可き旨、徳川殿に於てもとくと御承知のはずにも不拘、事實は一千石より宛て行はざる由、神官より細々と申出がござつた。如何なる思召か、聞糺して參れとの殿下よりの御申付けでござる』
『その儀は……』
と流石の家康も、今度の遣り方はちと亂暴なのでグツと詰りましたが、
『何れ當方より改めて使者を差出し、殿下の御前に於て御申開き仕るでムらう、この儀よしなにお取りなしを……』
とするりと拔け、席を改めて山海の珍味、酒宴三更に及んだ頃、堀尾吉晴、
『徳川殿御旗本に、紺地に白く、左り七の字を染め出したる旗差物を押立て、鬼神の如き働を爲す勇士を、斯く申す吉晴しば／＼戰場に於て見申した、一度面會致し度いと存ずるが、御引合せ下さるまいか？』
『これは／＼御褒めに預り恐縮でござる、彼は村越三十郎と申する武骨者、御會ひ下されなば

彼めの面目と心得ます、これよ、誰かある、村越にこの席へ參れと申せ』

『ハ、ツ』

間も無く次の間の敷居ぎは迄進み出でた三十郎、對手は濱松城主堀尾帶刀先生吉晴と聞いて、

『へ、ツ』

と平伏致しました。

『おゝ、御身が左り七の字の勇士村越殿か、予は堀尾帶刀である』

『へ、ツ、恐入り奉ります、麗しき御尊顏を拜し、恐悦至極に存じ奉ります。それがし事は德川内大臣家康が家臣、皆朱の槍御免村越……』

又三十郎を忘れて了ひました。

『皆朱の槍御免、村越……えゝその村越ツと……』

斯うなつては、もう金輪際出つこはございません。

『ホ、ウ、皆朱の槍御免の勇士村越……何と仰せらるゝな？』

『ムーン、そ、そ、その、村越、ウーン、も、も、茂助でござるツ』

『茂助？』

堀尾吉晴が呆れ返りました。茂助は吉晴の前名でございます。

『い、如何にもその村越茂助めにござります』

『コレ〳〵村越とやら、その茂助と申すは予の前名であるぞ』

『アツ、こ、これは……ムーン、ウヘーツ、道理で續きが何時もと少々違つて居りました』

家康も仕方がありませんから、

『アイヤ堀尾殿、御聞及びでもござらうが、この村越三十郎はなうての粗忽者、戰場に於ても屢屢姓名を打忘れ、村越それがし、村越めんどうく齋などと名乘を擧げ、つい先年も村越家康とやつてのけたうろたへ者、御無禮の段は平にお許しあれ、さり乍ら、今日三十郎が村越茂助と名乘りしは、粗忽者ながら御身の御勇名を記憶し居りし爲と存ずる。願はくば御身の前名茂助を、改めて彼れめに御與へ下さる譯には參るまいか、如何でござらう帶刀殿？』

家康人をそらしません。

『さて〳〵小氣味よき男、如何にも我が前名を差許す、早速ながら村越茂助、本日の粗忽料に之を遣すぞ』

やりそくなつた三十郎、來國俊の小刀を貰ひました。

偖、堀尾吉晴を京都へ送り歸した後で、家康は急遽總登城の觸を廻しました。何事であらうと先を爭うて登城して來る家臣一同、大廣間へ着席致しますと、家康自ら八幡宮の件を物語り、

『何れ當方より申開の使者を差出すでござらうと云つてその場はすましたが、偖この使者は却却至難い、誰にてもよい、汝らの中、首尾よくこの大任を果し得ると思ふ者あらば、遠慮なく申出い』

と申渡しましたが、この使者の口の利き方一つで場合によつたら關東關西弓矢をもつて相見えなければならない樣な事態を惹起すかも知れないのでございますから、一座は水を打つた樣にシーンとなつて、誰一人、

『某が……』

と申出る者もございません、その時、

『おいや殿、その御使者、かく申すそれがし相つとめますでございませう』

と呶鳴つた者がございます。

『ヤ、茂助だ』

『村越だ』

『三十郎だ！』

家康小膝を打つて、

『おゝ村越、よくぞ申した、如何にもこの大任汝に申付けるであらう、首尾よう致せ』

『へゝッ、委細承知仕りました。この村越が參るからには、決して惡い樣には致しません』

大言を拂つて江戸城を出で、日數を重ねて到着した聚樂邸。三河木綿の紋服に麻上下と云ふ質素ないでたち、三十五間の長廊下を石田三成の案内で悠然と進みます。通された大廣間、正面には御簾が下り、左右に豐臣譜代の豪傑、加藤、福島を始めとして、二列に分れて綺羅星の如くに居並んで居ります。

『シー、シーッ』

警蹕の聲で、御簾がする〳〵ッと上ると、衣冠束帶姿の從一位關白太政大臣豐臣秀吉が、苦い顏をして坐つて居ります。

『徳川內府の使者村越茂助、頭を上げい』

『ハヽッ』

『白旗明神の儀に就き、申開きあらば速かに答へてよからうぞ』

『ヘヽッ、恐れ乍ら此の度の御使者、只何事も大事大事と存じ居りましたる爲め、つい使者の口上、殘る方もなく失念仕つてござります』

之を聞いた諸大名、

『アヽ、あれでございな、村越とは』

『聞きしにまさるあわてもの』

『徳川殿には、何故又あんな呆け者を……』

『使者の口上跡方もなく忘れてのけたと、平氣で申して居ります』

ニヤリ笑つた秀吉は、

『さて〳〵世にも珍らしき口上ぢや、したが忘れたとあれば是非もない、その場に於てその方一存をもつて申開き致せ！』

『ハヽツ、然らば私一存にて……御免』

ぬつくり立上ると肩衣をポンと跳ねました。『アツ』と驚く諸侯をしり眼にかけ、袴を脱ぎ、着物をパツと後へはねて

褌一つ。大手を振つてツカ／＼と秀吉の眼前數尺の所へ進み出ました。

隆々たる筋骨、小山の如き力瘤、無數の刀傷、鐵砲傷、槍傷が、網目になつて身體中ベタ一面

『せびらを見せい』秀吉が鋭く云ふと、『ハヽツ』と茂助、きたない尻を恐れ氣もなくグイツと振向け、いきなり平手で、『ピシヤンツ！』と叩きました。

『恐れながら殿下、これにてたつた五千石！』

云ふが早いかハツと飛退つて平伏致しました。秀吉初めてにつこりとして、

『出來した、汝程の豪傑すら祿高僅か五千石……む、白旗明神社領の儀、内府取計ひの一千石にて苦しうない、遠路大儀であつた。さるにしても、内府殿はよい家來を持たれたものなう……村越、これを取らせる』秀吉手づから傍の香合を取つて三十郎の茂助に與へました。物を忘れて物を貰ふのがこの男の定石でございます。

『生々世々の面目、有難く頂戴仕ります』『秀吉の口上道中にて忘れまいぞ！』

『ウツヘ――ツ』秀吉も去る者、極どい所でずばりと一本。

村越茂助が得意滿面意氣揚々、江戸城へ乘込んだのはそれから間もない事でありました。

（挿繪――神保朋世）

日記・道中記

珍太郎日記

佐々木邦

はしがき

珍太郎君のお父さんは、某大學の英文學の先生である。お母さんは無論職業がない。子供達を立派に教育するのを天職と心得てゐる。その子供達は三女一男。珍太郎は一番の末つ子だ。大姉さんの律子さんは二十一、もう女學校を卒業して縁談がある。中姉さんと小姉さんは女學校へ通つてゐて、何方も成績がよろしい。珍太郎君も頭が好い。この日記の書き初めには小學生だが、中頃から中學生になる。お父さんやお母さんのところへ訪ねて來る人達のこと、學校や途上で見聞したこと、自分が特に感じたこと、それを珍太郎君は一々日記につけてゐる。その中から、教訓になりさうなところを次に拜借して御覧に入れる。

一家團欒

平和な家庭に一波瀾が起つた。お父さんの品行に嫌疑が懸つたのには乃公も吃驚した。暑中休暇になると早々お父さんは關西へ旅行したが、問題の起つたのは其旅行から歸つた翌晩だつた。姉さん達は、皆お部屋でそれ〴〵お仕事やお復習を始めてゐた。乃公も自分の勉强室で算術の宿題をやつてゐた。乃公達の學校は未だ休暇にならないのだ。お父さんは茶の間の火鉢のところで、煙草を喫ひながら夕刊を見てゐた。お母さんは晩御飯の後片付が濟んだばかりらしかつた。

『あなた、私達が結婚してから最早何年になるでせうね？』

とお母さんが言つた。

『さあ、何年になるかなあ。乃公に訊くまでもなく、勘定して見れば分るだらう』

と、お父さんは、煩さいねと言はないばかりの返事をした。新聞を見てゐる折は何時も斯うだ。

『何年になるか御存知ないなら申上げますが、丁度二十年と三ケ月に成りますよ』

『其くらゐ精確に知つてゐるなら、何も乃公に訊く事はないぢやないか。妙な奴だなあ』

『貴公こそ妙なお方ですわ。私は此の二十年間、あなたを立派なお方と信じて、あなたの行動に疑惑を挾んだ事は一度もありませんでしたが、今日は少々腑に落ちないものが私の手に入りましたよ。私、何も憤りませんから、覺えのあるところを有態に仰有つて下さい』

お父さんは、斯う藪から棒に罪人扱ひにされては驚かざるを得なかつた。

『何を言ふんだね、お前は？　乃公が何か悪い事をしたのか？』

と、新聞は最早手放したらしい。

『白ばくれても駄目ですよ。何處までも人を馬鹿になさるのね』

と、お母さんの態度はナカ／＼穏かならない。乃公は何事が出來したのかと思つて、茶の間へ顔を出した。

『珍太郎や、お前は彼方へ行つておいで』

と、お父さんが乃公を追出した。乃公は早速引退つた。親爺め、乃公に聞かれては困るやうな事を仕出來したな。

『お前は何か考へ違ひをしてゐるね。一體何うしたのだい？　何うしたと言ふのだい？』

と、お父さんは乃公の姿が見えなくなると、直ぐに稍急き込んで尋ねた。

『今日あなたの洋服を疊みましたら、ズボンから妙なものが出て參りましたよ。お覺えはございませんか？』

『覺えはないかつて、ズボンからか？　何が出たのだ？』

お母さんは、立つて、簞笥の小引出しから何か出して來たやうだつた。さうして、

『是は何でございますの？』

と言つた調子は、其品物をお父さんに突きつけたらしかつた。

『是か？　是はハンカチぢやないか。絹だね。何誰のだい？』

『お忘れになつたと仰有るなら、其隅のところの縫取を御覽なさい』

『成程、千代奴、千代奴とは妙な名前だ。お前の友達かい？』

『私には藝者の友達はございませんよ』

『ふうん、藝者のハンカチか？　藝者のハンカチが乃公のズボンに入つてゐる譯はないよ。是は何かの間違に相違ない』

『何れ間違でございませうよ。ズボンの衣嚢の中でなく、膝の邊から出て參つたのですから、間違も餘程金が入つてゐます。あなたは一昨晩は何處へお泊りになりましたの？』

『一昨日の晩か？　一昨日の晩は汽車の中だ』

『何時に京都をお立ちになりました？』

『八時二十分に立つた』

『其前の晩は何處へお泊りになりました？』

『然う一々疑らなくても宜いぢやないか』

『あなたが日頃可怪な事ばかり仰有るから、這麼事がありますと自然私も疑りますわ』

『可怪な事つて、乃公が何を言つた？』

『仰有るぢやありませんか。藝者買ひ一度しないで白髮が生えて了ふのかなあ、教員の一生は實に悲慘なものだと、如何にも殘念さうに始終仰有るぢやありませんか。』

『彼は冗談だ』

『冗談なら然う度々仰有らない筈でございますわ。あなたは、シエキスピヤは決して繰返さないとか仰有つて、同じ冗談や洒落を幾度も言ふ者は馬鹿だといふ御意見ぢやありませんか。其で

ゐて同じ事を度々仰有るのは、矢つ張り始終然う思つていらつしやるから、自然口に出るのでございますわ』
可哀さうに、お父さんはギウ〳〵といふ目に遭はされてゐる。お母さんの方がお父さんよりは遙に雄辯だ。一言云ふ中に三言も四言も云ひ返されるから、お父さんは迚も太刀打が出來ない。
『乃公は最早辯解しない』
と、一寸の間默つてゐたお父さんが、決然として言つた。
『服罪なさるのですね？』
と、お母さんは今更驚いた。
『服罪するものか。しかし、這麼馬鹿々々しい事は辯解の仕樣がないから辯解しないのだ』
『其では、何時までも私の心が晴れませんわ。決して憤りませんから、何卒事實を仰有つて下さい』
『事實も何もない。氣が晴れようが晴れまいが構はない。人を馬鹿にしてゐる。勝手にしろ！』
と言つて、お父さんは二階へ上つて了つた。恐ろしい權幕だつた。
大姉さんが茶の間へ入つた。お母さんと何かヒソ〳〵話を始めた。乃公も最早行つて宜からう

と思つて又顔を出した。間もなくお父さんの急いで下りて來る足音が聞えた。大姉さんは直ぐにお部屋へ引き返した。乃公も、鼠のやうに自分の勉強室に逃げ込んだ。しかし、お父さんは今しがたの激昂にも似ず、火鉢の側に坐ると共に哄笑一番して、

「おい、分つたよ。藝者のハンカチの秘密が讀めたよ」

と言つた。お母さんは返事をしない、拗ねてゐる。

「おい、お露、藝者のハンカチの……」

「藝者々々つて止して下さいよ。家には子供が大勢ゐるのですから」

と、お母さんが迷惑さうに言つた。子供はゐる。此處に聞いてゐる。

「まあ然う憤らずに聞いてくれ。乃公も何時までも疑はれてゐては心持が惡い。一昨日の晩、乃公は汽車の中で、寢ては覺め寢ては覺めしたが、何でも曉方だつたよ、ズボンの股から白い布が喰み出してゐるのに氣がついた。便所へ行つたまゝボタンをかけ忘れて白シャツの端が出てゐるのかと思つたから、乃公は大急ぎでズボンの中へ揉み込んで了つた。周圍を見廻すと皆寢てゐる。名古屋で乘つた乃公の隣席へ坐つた貴婦人風の女が、乃公に寄り凭るやうにして寢てゐるには迷惑したよ。屹度其の女が、此方の膝の上へハンカチを落したのを、乃公が寢呆け眼に、白シャツ

の端と早合點して手繰り込んだに相違ない。其でなくて這麼ものが乃公のズボンから出る筈はない』

と言つて、お父さんは又ハンカチを取上げて見たらしい。

『然うでございましたか。其で私も安心致しました。疑つて濟みませんでしたね』

と、お母さんは稍面目なげに言つたが、矢張り負け惜みが强いから、

『始終思つてゐなさるから、夢うつゝの中に藝者のハンカチと直覺して手繰り込んだのでございませう』

『馬鹿を言ふな。ハンカチとは今の今まで氣がつかなかつた。兎に角、人のものを取つて來たのだから、是は一種の泥棒だね。氣の毒な事をした』

『構ふものですか。藝者の物ですもの』

と、お母さんは、藝者には何處までも反感を持つてゐる。さうして、

『何なら律子に頼んで肘突にでも縫つて貰つたら宜いでせう。あなたの日頃の念が屆いたのですから』

と、お父さんの平常の冗談を餘程深く含んでゐるらしい。

『しかし彼れが藝者かなあ？　何う見ても立派な淑女だつた。さうして主人らしい商人風の男と一緒だつたからね』

　とお父さんは疑問を起した。

『藝者と素人の區別のつかないやうなあなたですか？　恐らくあなたの方から精々寄り凭るやうにしてゐたのでせう。眞正に不見識な人ね』

『最早好い加減にしてくれ。人の失策や冗談を、然う執念深く言ふものぢやない』

『最早嫌疑が晴れましたから、無罪放免にして差上げます。けれどもあなたは然麼風では小田さんの事は笑はれませんね』

『今度のは小田君以上だ。殊に泥棒染みてゐるから人聞きが惡いなあ。兎に角お前の機嫌が直つて宜かつたよ。今日はお前も眞劍だつたね。先づ結婚して何年になりますかといふ質問を起して、遠く紛擾の端緒を開いたところ等はナカ〳〵推敲の跡が見えて面白いよ。最早お前の前では冗談もうつかり言へない』

『其でも彼がズボンから出て來た時には眞正に吃驚したのですもの。殊に律子が最初見つけ出して、お父さんは何うしたものでせうねと申しますから、私も困つて了ひましたよ。律子には私か

ら充分に辯解して置きませう。是に懲りて、是からは些つとお氣をつけ下さい。父親の行動を、一々母親から子に辯解する必要があるやうでは、家庭教育が壞れて了ひますからね』

『氣をつける。大いに氣をつけるよ。家庭教育は破物だからね』

『其がいけませんよ。あなたは私が家庭の教育の事を申すと

直ぐに茶化すのでございますね』

とお母さんが咎めた。

其處へ大姉さんが刻限を見計らつたやうに入つて行つた。大姉さんは實に上手だ。立聞をしてゐたのかと思はれるくらゐだつた。波瀾は既に跡もなく靜まつて、談話は何時の間にか京都の井上さんの家に移つた。乃公も最早宜からうと高を括つてノコ／＼入つて行つた。問題のハンカチがあるかと思つて其邊を見廻したが、影も形もなかつた。姉さんが入つて來た時にお父さんが袂の中へでも匿して了つたのだらう。或は火鉢の横かしらと乃公が背伸びをして口を開いたら、

『珍太郎や、お前は何をキヨロ／＼してゐるの？』

とお母さんが氣取つたらしい。

『珍さんはお菓子が欲しいのですよ』

と姉さんは乃公を誤解してゐる。しかし何が仕合せになるかも知れない。早速昨日のお土産の八ツ橋と五色豆が澤山出た。當分は材料豐富だから有望だ。中姉さんも小姉さんもやつて來た。

『井上さんは、牧師さんの癖に家庭では矢つ張り然麼に我儘なのですかね？』

と大姉さんは大人染みた質問を發した。

『矢つ張りといふと？』

と、お父さんが聞咎めた。

『矢つ張り何處かの家庭のやうにといふ積りなのでせう』

と、お母さんが笑つた。

『井上と一緒にされちや困る。井上見たいな分らず屋で、妙に理想のある奴が一番難物だよ』

と、お父さんは自分の事を言つて、

『しかし彼の細君が女豪物だね。主人の我儘を通す風をして實は主人の鼻綱をしつかりと捉へてある。分らず屋といふものは單純だから却つて御し易いのだらうね。陽にパヽさんパヽさんと祭り上げて陰にマヽさんが絶對權を握つてゐる。彼のパヽさんマヽさん丈けは舍して貰ひたいね。日本にはお父さんお母さんといふ立派な言葉があるんだから』

『けれども此頃の家庭は大抵のところはパヽさんマヽさんよ』

と、大姉さんは固陋なお父さんの見識を擴げようとした。

『厭だねえ！ さうして、然麼家庭ではマヽさんが大抵フエリス女學校出で、眼鏡を掛けて酉の市に親類のある方だらう』

と、お父さんは自分の偏見を遮るものがあると直ぐに貶してかかる。

『眼鏡を掛けてゐなくても、ツエリスでなくても、私の友達の家庭は大抵マヽさんよ。大井さんのところでも、増田さんのところでもママさんですわ。さうしてお二人ともお母さんは大層好い御器量でございますわ』

と大姉さんは、お父さんの言つた條件と全然反對の實例を持ち出した。それ見ろ、早くハンカチの辯解をしないものだから、子供が父親を信用しなくなる。

『マヽさんやパヽさんの方が子供には言ひ好いからでせう』

と學者の中姉さんが說を出した。

『其は然うよ。お母さんと言ふよりはマヽさんと言ふ方が餘つ程簡單ですからね』

と大姉さんが贊成した。

「簡單が宜いなら日本にはもつと簡單な言葉があるよ。チヤンにオツカアは何うだい？』

とお父さんが言つた。皆笑つた。

『簡單ですけれど下品ですわ』

と大姉さんが貶した。

『下品でも自然なら宜いぢやないか。家のマヽさんはお口がお達者で常にパヽさんを遣り込めますと言ふよりも、家のオツカアは、始終臺所でセツセと働いてゐると言ふ方が、餘つ程自然な日本語ぢやないか』

『あなた〳〵』

とお母さんが到頭口を出して、
『困りますねえ、あなたにも。子供とお話すると悉皆子供になつて了つて』
『でも伴子が乃公を何うしてもパヽさんにすると言ふのだもの』
とお父さんは誤魔化した。
『あら私然様事言つてやしませんわ』
と大姉さんはお父さんの狡いのに驚いた。
其から又少時談話が他へ移つたが、今夜は何ういふものかお父さんの形勢が悪い。間もなくお父さんは乃公の家乃公の家と云ふ言葉を連發してお母さんの忌諱に觸れた。
『お言葉の中でございますが、乃公の家と仰有るのは壓制でございますわ。あなたお獨りの家庭ではありません。私や子供達も些つとは計算に入れて戴きたうございます』
とお母さんが故障を申入れた。
『其ぢや何と言へば宜いんだい？　我々の家か？』
とお父さんは案外素直に出た。
『態々我々と仰有らずとも、唯家で宜いぢやありませんか。乃公がいけませんわ。其とも私共の

家庭とでも言つて戴きませうか？』

『家庭は御免だ、共に私共は牧師の說教染みてゐて氣障な言葉だ。矢つ張り我々の家が宜い。ところで今夜は動もすると揚足を取られるから、最早二階へ退却するとしよう』

と言つてお父さんは書齋へ逃げて行つた。お父さんは二階へ獨りで寢る。小田さんの事を笑つても、自分も矢つ張り多少神經衰弱なので靜かなところでないと寢つかれないのだ。乃公はお父さんが行つて了つたから、お母さんが大姉さんにハンカチの辯解をすると思つて待つてゐたが、一向然麼事もなかつた。其中に、

『おい、律子や』と二階から大きな聲がした。

『はい』と大姉さんが答へると、

『我々は寢るから、我々の床を取つて、我々の蚊帳を吊つておくれ』

『はい〳〵、今直ぐ參ります』

『それから、我々のズボンに入つてゐた此のハンカチは……』

『あなた！』

とお母さんは疳高く天井を窘めて置いて、

『眞正に馬鹿で仕樣がないねえ、お前達のお父さんは！』

自己の擴張

一日の計は朝にあり。一年の計は元日にありといつて、正月は大切だから、何人しも緣起を祝ふ。然るに、其の正月の元日の而も朝つぱらから、乃公は馬の糞を渫はなければならない事になつたから今年の運勢が思ひやられる。

乃公が家の門の前に立つて歳旦の景況を見てゐると、筋向ふの薫さんのお父さんが馬に乘つて出掛けて來た。大禮服の金モールが初日を受けてキラ〳〵する。勳章が光る。軍人は矢つ張り威勢が好い。乃公が一揖すると、陸軍中佐は莞爾として擧手の禮を返した。

これまでは順當だつたが、馬は乃公の家の門前を通り過ぎると間もなく、忽ちピタリと立ち止まり、泰然として尾籠な用を足した。薫さんのお父さんは、斯ういふ事は毎度だから馬の擧動によつて其と察して、不動の姿勢で前方を見つめたまゝ、決して後方を顧みない。是も自若たるものだ。馬は事濟みになると直ぐに歩き出して行つて了つた。

乃公は、馬も騷がず人も驚かない其の如何にも事務的な態度に敬服したが、關係者が遠く去つ

て了ふと、遥かに湯氣を立てゝゐる汚物が異常の鮮かさで乃公の目に映り始めた。往來ではあるが目障りでならない。畜生といふものは元日も何も知らないから仕方がないと思つて、其儘引つ込んだが未だ氣になるから又出て行つた　馬糞は依然として往來に蟠踞してゐる。乃公は今度は現場を視察した。汚物は、自分量で測つても往來の中央から少し乃公の家の方の側へ寄つてゐる。念の爲め乃公は其から彼方の地面と此方の地面を步數で測つて見た。斯ういふのを實地踏査といふのだらう。さうして、其結果は此方に不利益な事を爭ひ難い數字で確かめたに過ぎなかつた。何となれば、問題の品物は精密に二步丈け此方側に近かつた。又隣屋敷との關係を調べると、一個丈け隣家の方へ轉げてゐるばかりで、殘餘は全く此方の領分に本據を占めてゐた。

測量の結果が斯う鮮明になつて見ると、此の汚物は、向ひや隣りの責任に歸する次第に行かないから、乃公の家で渫ふより外はない。彼の馬め、もう一步進んでからにすれば宜かつたのだが、今更何とも仕方がない。さうして家で取片付ける段になると、盛裝をした姉さん達の手を煩はす次第に行かないから、自然乃公が渫ふより外はない。乃公は割合に諦めが好いから、もう瞬刻の躊躇もせず、塵取を持つて來て自分の責任と信ずるところを果した。

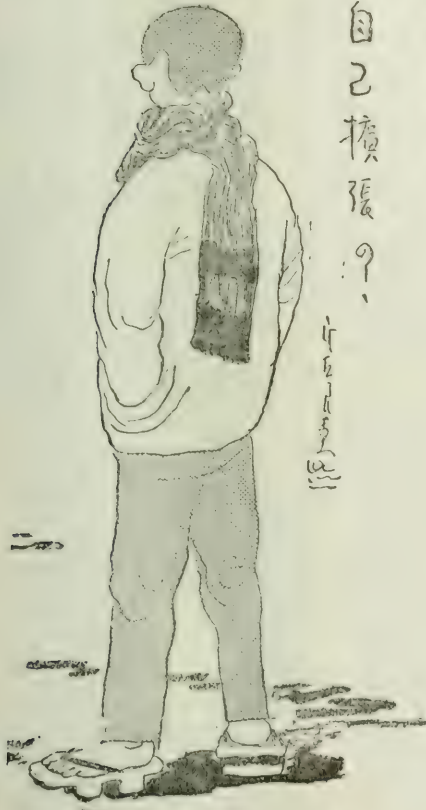
無精な乃公が、進んで馬糞の後始末をするまでに責任觀念の芽を吹かせてくれた根元は、日外

偶然市外電車に乘り合はせた學生である。其日は例によつて電車が込んで、或紳士が或紳士の杖を蹴飛ばして問題が起つた。

「人の杖を蹴つたら、一言挨拶するのが至當でせう」

と蹴られた方の紳士が苦情を訴へた。

「蹴つた次第ぢやありません。つい、靴が當つたのです。此通りの込み合ひですから、其れぐらゐの事は、お互です」

と蹴つた方

の紳士は言
葉穏かに謝
罪を拒絶した。
面白くなつて來た
と思つてゐると、蹴られた方
の紳士は、『兎に角他のもの
を蹴倒して置いて全く斷りを言はないといふ法はあり
ません。電車が込んでゐるゐない斟酌は損害を受けた私の方でする事です。あなたの理性の爲め
に一つ反省を願ひます』
と言つた。蹴つた方の紳士は少時反省してゐた末、
『成程。私の考へは自我的でした。あなたの仰有る事が道理です。私が粗相をして済みませんで
した。御免下さい』
と潔く謝罪した。すると蹴られた方の紳士は其を遮るやうにして、
『否々。其のお言葉では恐れ入ります』

と丁寧にお辭儀をした。さうして、

『實際此通り込み合つてゐるのですから、其くらゐの事はお互樣です』

と言つて、全く滿足したやうだつた。

乃公は悉皆感服して了つた。那麼のを君子の爭ひといふのだらう。理のあるところは何處までも言葉穩かに主張し、又間違つてゐたと氣がつけばポツキリ折れて謝つて了ふ。實に光風霽月だ。しかし同時に乃公は甚だしく失望した。もつと口論が激しくなつて立廻りでも始まるかと思つてゐたのに餘り呆氣なく片付いて了つた。

ところが、間もなく乃公の隣に坐つてゐた二人の大學生が、今しがたの小活劇の批評を始めた。其で乃公の失望は償なはれて餘りあつた。

『今のシーンは一寸奇拔だつたね』

と乃公に近い大學生が言つた。

『謝つた奴も案外道理が分つてゐるね。もう一方は僕の方の教授だよ。彼奴が謝らなかつたら、僕は出て行つて談じてやらうと思つてたよ』

と乃公に遠い大學生が力んだ。

『柔道が二段だと、喧嘩は默つて見てゐられないだらうね？』
と近い方のが笑つた。
『議論なんてものは或程度から先は腕力だからね』
と遠い方のも笑つた。
『ところで今君の方の教授が杖を蹴られて怒つたね。君は杖を蹴られて怒る心理を何う解釋するかね？』
『其麼面倒な事は何うでも宜いさ。僕なら直ぐに撲つて了ふ』
『亂暴だね』
『亂暴だつて構やしない』
『益々亂暴だ。君なら何うすると訊いてゐるんぢやない。杖を蹴られたのが腹が立つ心理狀態を君は何う解釋するかと言ふのさ』
『其は自分のものを蹴りやがつたから癪に障る。癪に障れば腹の立つのは自明の理だ』
『其の自分のものといふところだね。自分のものは或意味から言ふと自己を擴張したものだ。殊に着物見たいに身體につけてゐるものや杖見たいに手に持つてゐるものは自己の直接擴張だね。

そこで然ういふものゝ他から無造作に扱はれると自己其ものが侮辱を受けた場合と殆んど同様の憤激を感じるんだね』

『成程、君は相變らず小理窟を言ふね。しかし巧いや。道理で僕は此間足を踏んだ奴を突き飛ばしたぜ』

『足は自己其ものゝ一部分だよ。君は大ざつぱだから、足を自己の直接擴張ぐらゐに思つてゐるのだらう』

『足ぢやない。靴だつたよ。其だから痛くはなかつたけれど、癪に障つて突き飛ばしたのさ。足を直接に踏んだのなら撲つて了ふ』

『君の場合も彼の教授の場合も同じ事だ、若し彼の教授の杖なり、君の靴なりが、遙か向ふの方に置いてあつた場合に何人かが足蹴にしたと假定したら何うだらう？ 矢張り間接な自己の擴張だから好い心持はしなからうが、持つたり穿いたりしてゐる直接擴張の時とは大分違ふぜ。教授だつて左程に躍氣になつて謝罪の要求はしないね。君だつて突き飛ばしはしなからうよ。何うだい？』

『其は虫のゐどころ次第だ』

『何うも君のは亂暴で困る』

と理論家の方も笑ひ、腕力家の方も笑ひ出した。然うして未だ〳〵話が續きさうなところを電車が惠比壽に着いて了つたものだから、乃公は心ならずも降りて來た。

しかし彼の大學生の自己擴張論は餘程深い感銘を乃公に與へた。乃公は其後種々の機會に彼の學生の理論を實驗して見た。或時旗竿を擔いだ人が通りかゝつた。恐ろしく長い自己の擴張だと思ひながら、擦れ違ひさま一寸竿を引つ張つてやつた。すると其男は、

『坊ちやん、惡戯をしちやいけないよ』

と言つたきりで怒りもしなかつた。元來旗竿なんてものは杖と違つて然う始終往來を持つて歩く品物でない。恐らく買つて家へ歸るところで、所有物としても未だ時間が淺かつたのだらう。此故に此男は、此の馬鹿にひよろ長い自己の擴張は道理上頗る覺束ない、甚だ稀薄なものと暗々の裡に意識してゐるから、然う苦情を言はなかつたのだ。是が鳥差の竿のやうに合理的な直接擴張だつたら、長短に論なく乃公は叱り飛ばされたらうと思ふ。若し又、昔の武士の帶刀のやうに濃厚な直接擴張だつたら、乃公は斬り捨てられて了つたらうと思ふ。

又或日學校の歸りがけに乃公は道傍に休んでゐた馬力に飛び乘つて見た。すると煙草を喫つて

ゐた馬方は、

『坊ちやん、此の向ふの道普請はもう濟んだかい？』

と訊いただけで怒らなかつた。それから其馬方が馬と手綱を取つて歩き出してから不意に後ろから又飛び乘つてやつたら、

『こら〳〵』

と今度は凄じい權幕をして振り返つた。前のは手綱を放してゐたから間接の自己擴張といふ理由で大目に見た。ところが今度は手綱を持つてゐたから、後に引き續く馬と荷車は是も隨分長いものだが、神經に幅のある合理的な直接の自己擴張だつた。そこで本能的にコラ〳〵と怒つた。

それから乃公は自己の擴張を權利の上からばかりでなく、責任の方面からも考へて見るやうになつた。自分の持つてゐる棒が他に當れば、當つたのは棒でも責任は自分にある。此場合棒は自己の直接擴張だ。此間八百屋の小僧の自轉車が薫さんところの功さんを轢き轉ばした時、書生の杉山君は小僧を取つ捉へて、平に詫びてゐるのに二つも撲つた。轢いたのは自轉車で小僧ではなかつたけれど、乘つてゐた自轉車が自己の直接擴張だつたから、小僧が責任を負つたのだ。

又自動車が能く人を轢くのは元來智慮分別の足りない運轉手が自動車といふ尨大な團體に自己の

直接擴張をやつてゐるから動もすると逆上して戸迷ふので、熟練不熟練は第二の問題である。家屋敷も自己の擴張だ。お父さんの關係してゐる學校の塀が先頃暴風で倒れて、可哀さうに、通りがかりの後家さんが怪我をして死んだ。すると學校で其遺子を引取つて教育する事になつた。是は學校が塀の責任を負つたのだ。さうして塀は學校といふ自己の薄弱な間接擴張だつたのだ。此道理で乃公の家はお父さん初め乃公達といふ自己の間接擴張だ。自己を見苦しくして置くのは他に對する禮でないと思つて、乃公は元日を迎へる爲めに昨日特に念入りに門前を掃き清めたのだ。

ところで問題は門前の馬糞に戻る。乘馬は極めて確實の自己の直接擴張だ。昔馬のない國へ馬のある國の軍勢が攻め込んだ時、馬を見た事のない土人共は乘つてゐる人と乘せてゐる馬を一體の大怪物と思ひ込んで、狼狽したといふ話さへある。斯くも明瞭な自己直接擴張の責任を、自轉車で息子を轢いた小僧を怪我もないのに書生に撲らせる家の主人公が負はないとは、甚だしい矛盾といふものだ。馬糞は乃公が渫つて了つたからもう仕方がないが、今朝は濟みませんでしたぐらゐの挨拶を薫さんにでもさせに寄越すのが當然だらうと思ふ。矢張り彼の陸軍中佐は分らず屋かな。

乃公が此處まで書いた時に母さんが入つて來た。さうして、
『今薫さんのお父さんが御年賀にお出になつてね。お前に宜しく、今朝は申譯ありませんと言つて下さいと仰有つたよ』
と笑ひながら言つた。
然うか。矢つ張り分つてゐる。流石に陸軍大學の卒業生は違つたものだ。して見ると不動の姿勢で前方を見つめたのは極りが惡くて振り向けなかつたのだ。然うだらう。大禮服を着た自己の直接擴張だつたから。

夏の虫に就いて

暑中休暇の作文課題は『夏の虫に就いて』といふのだ。蚤でも蚊でも自分の興味を惹いた虫なら何でも宜いさうだ。小學時代には夏季練習帳といふのを頂戴して毎日記入に追はれたものだが、中學校もナカ〳〵生徒を遊ばせない。夏休み中と雖も兎角散漫に流れ易い乃公達の頭腦を何かに惹きつけて觀察力を助長させようといふ寸法だ。作文は唯字句ばかりの事と思ふのは大間違ひで、寧ろ觀察力の問題ださうだ。

觀ようと心して物を見ると種々の事に氣がつく。乃公は先づ蠅に目を留めて、此の厄介物を作文の材料にしようかと考へた。若し是で百點取れゝば廢物利用といふ見地から言つても大成功だ。蠅の好きな人もあるまいが、家ではお父さんが此奴に特に反感を持つてゐるので、有らゆる驅除法を試みる。近所に軍人がゐると馬を飼ふから蠅が多くて困る等と夏分に薫さんのお父さんまで評判が悪くなるくらゐだ。

斯ういふ目的で乃公は或朝縁側で日向ぼつこをしてゐる蠅をツク〳〵と見守つた。少時すると乃公は此奴の性急なのに驚いた。止まつてゐても少しも凝つとしてゐない。何の申譯か絶えず揉み手をしてゐる。忽ち兩手で頭を押さへたと思ふと、ゴシ〳〵と顏を磨き始める。其でも未だ退屈するのか、今度は後肢を動かして頻に羽繕ひをする。實に目まぐるしいくらゐ氣忙しい動物だ。お父さんの書齋の柱に『やれ打つな蠅が手を摺る足を摺る』といふ短冊が懸けてある。して見ると俳人一茶も今の乃公のやうに研究的態度で此昆蟲の一擧手一投足を打目戍つたことがあるのだ。乃公は此の一疋の蠅を通じて故人に會ふやうな心持がした。

蠅の美點は凡帳面なところにある。人間は左側を歩かなくて巡査に叱られるが、此奴は入口と出口の區別を甚だ嚴かに遵守する。黒砂糖の色香に迷つて硝子の蠅取りに誘き寄せられるのは愚

のやうだけれど、一度舞ひ立つて中へ入つて了ふと、彼等獨特の德性を發揮する。無論生命が大切だから逃げ出さうとして頻に足搔くが、出口が通行止めになつてゐるから仕方がない。此の際入口から出れば容易に出られるのにと思ふのは人間の横着な考へだ。蠅は入口は出口でないと確信してゐる。渇しても盜泉の水を飲まずとは義者の戒めで溺死すとも入口より出でずとは蠅の方の金科玉條らしい。人間は融通が利く所爲か餘り渇死しないが、蠅の社會には此の主義に殉じて溺死するものが每日唐辛水の濁るほどある、蠅は人間よりも遙に律義だ。

ところで乃公の見てゐた蠅が尙ほ頻に手を擂り足を擂りしてゐる間に、一疋の蠅取蜘蛛が緣板の隙目からヒヨツコと現れて周圍を見廻した。此奴は名稱から察しても分る通り、蠅を取つて食ふのを商賣としてゐる。元來蜘蛛には正業に就いてゐるものは一疋もないが、蠅取蜘蛛は店舖を構へず行き當りばつたりで仕事をするから蜘蛛の社會の追剝といつても宜からう。ツラ〱眺めるに、其の灰色の裝束といひ、ズングリとした體軀といひ、凄味のある面相といひ、如何にも不逞漢らしく出來上つてゐる。其に歩き方が飽くまで盜人式だ。歩く間よりも忍ぶ間の方が長い。さうして急ぐ時にはピヨンと跳ねる。ポン引は今や椋鳥の身邊に迫つた。

這麼事とは知らず律義者は相變らず頭を痒がつてゐる。乃公は氣の毒になつて警告してやりた

かつたが、論判が始まつてから仲裁しても晩くはなからうと思つてゐると、追剝は突如組みついた。脅し文句も何にもない。一切の形式を省略して了つた。人間同士の場合とは大分行き方が違ふ。律義者は一悶えしたきり、もう身動きもしなかつた。急所をやられたのか、其とも入口と出口の區別の時のやうに先樣は取るもの此方は取られるものと觀念したのか、グウともスウとも言はなかつた。乃公は晩蒔きながら側にあつたスリツパを取つて仲裁したが、兇漢は被害者を抱き締めたまゝ逸早く逃走して、戸袋の中へ匿れて了つた。

是が人間社會の出來事だつたら、好個の新聞種として嘸夕刊を賑やかす事だらうと乃公は思つた。折から日曜に朝涼の縁先で籐椅子に打ち寛ぎ書見に餘念のないところへ一壯漢が庭の枝折門から忍び込み鋭利な短刀で柄も通れと背後から刺したともなり、朝湯から歸つて庭先で萬年青の手入をしてゐたところを内弟子に出齒庖刀で抉られたとも書ける。しかし事實は政權や女房の問題でなく、全くの物取りで、而も目的が所持品でなく死骸其物にあつて、當人を擔いで行つて了つたとなると眞に未曾有の怪犯罪だから、刑事も散々首を撚つた揚句の果、解剖學の教授に嫌疑をかける外はあるまい。實に虫けら共は亂暴だ。理窟も何もない。強い奴が弱い奴を殺し德にする。

蠅の事は夜人の鼻に止まつて安眠を妨害する紛れ蠅といふ悪戯ものまで研究したが、何うも纏まりがつかないから、乃公は觀察の眼を蟻の方へ移した。此奴は蠅のやうに汚がられないのみならず昆蟲の中で一番餘計に人類の敬意を惹いてゐるから材料として扱ひ宜い。蟻は五日の雨を知り名將は百里の敵を計るとかやといつて、此の小さな虫は日本でも昔から悧巧なものとしてあるが、實益を貴ぶ西洋諸國に於ては其の精根の爲めに蜜蜂と共に萬物の靈長の中の厄挫者よりも一段上に置かれてゐる。のみならず彼等には立派な社會組織があつて中には夙に共和政體を奉じ、大統領を選擧するのさへあるさうだ。實に蟻といふ奴は洋の東西を問はず時の古今を論ぜず好評嘖々たる力行家だ。

蟻が決して眠らないといふ事は昆蟲學上の一新發見ださうだ。乃公は其處までは未だ突き止めないが、兎に角生きてゐる蟻で苟くも凝つとしてゐるのは未だ見た事がない。他の虫は蝶々でも蜻蛉でも草臥れ休みをしてゐる事があるけれど、蟻に至つては何時も必ず動いてゐる。決して靜止しないところを見ると、眠らないといふのも無稽の説ではないかも知れない。眞黒になつて働くといふが、此奴は元來眞黒だ。那樣色氣のない法被姿に出來上つてゐれば側目も振らず仕事に

精を出すより外に仕方もあるまいが、乃公は百點せしめるには斯ういふ勤勉な虫の事を書いて人頭の覺醒を促すに限ると思つた。

ところで或日乃公が庭で蟻の穴の番をしてゐると、お父さんが二階の縁側の長椅子から、

『おい、珍太郎や、一寸來てお吳れ』

と呼んだ。乃公が上つて行くと、

『其處の本棚の本を取つておくれ、二段目の眞中頃にある黑いのだよ』

と早速用を言ひつけた。同じ二階にあるものを取るのに庭にゐた乃公を呼上げなくても宜からうに、お父さんも矢張り蟻に意見をされる仲間だと思ひながら、乃公が持つて行くと、

『蟻の事を書いたところを讀んで聞かせるから聞いておいで』

と言つて、お父さんは長椅子に寢そべつたなり頁を繰り始めた。休暇で閑だと見える。乃公は蟻と聞くと乗り出して下から覗いたが、英語の本だから仕方なく、其の儘蹲つて、謹聽の態度を執つた。

『世間では蟻は悧巧だと言つてゐるのに此の先生は獨り蟻は素馬鹿だと力說してゐる。甚く旋毛を曲げたところが面白い。宜いかね。蟻が蟋蟀の脚を運んで行くところを讀むよ。……彼は先づ

邊りに辿つて扱ひ具合の悪い箇所を捉へ、馬鹿力を出して丸ごと空に差し上げる。さうして巣ではなくて巣と反對の方角へ出發する。其も落ちついてやれば宜いのに、殊更骨の折れるやうに無暗と急ぐ。間もなく石ころに行當るが、其を廻つて行くだけの智慧がないから、重荷を引き摺りながら攀ぢ登つて向側へ轉げ落ちる。斯うなると益々急き込んで、又獲物を擔ぎ上げ又新しい方面へ驀進する。草が道を遮ると、懲り性のない動物だから矢張り迂回する分別は浮ばず、御丁寧に莖へ登り始める。天邊に達して四圍を展望し、初めて此處ではなかつたと氣がついて、引き返すか轉げ落ち、更に新規蒔き直しに發足する。石といふ石、草といふ草の高さを一々踏査して三十分の後に着く先は最初の出發點の直ぐ近所だ……何うだね、面白いかい?』

『西洋の蟻も然うですかね？ 日本のも其通りですよ』

と乃公はお父さんの朗讀に釣込まれた。

『冗いから少し飛ばすよ……そこへ仲間が來る。好いものを拾つたね、何處で見つけたんだい？と訊く。場所を覺えてゐるやうな奴でないから、つい其邊で有りついた、と答へる。仲間は、家まで手を貸さう、と言ふ。それから二人は蟋蟀の脚の兩端を捉へて、各自兩方面へ引き始める。少時すると休んで相談をする。何うも變だ、可怪しいといふことに意見が一致する。しかしもう一

遍やつて見よう、と又引つ張り合ふが、矢つ張り動かない。其處で仲間割れがする。他の邪魔をするな、と何方も相手に罪を着せる。口論が嵩じて喧嘩になる。二人は固く組んで少時顎を咬み合ひ、何方か角なり脚なりを折るまでは上になつたり下になつたりしてゐる。其でも根が單純な奴等だから間もなく仲を直して、また以前通り狂氣染みた遣方で引き合ひを始めるが、怪我をした方は何うも歩が惡い。いくら力を出しても、獲物諸共引き摺られる。手を放して了へば宜いのに後生大事と齧噛みついてゐるものだから、小石に行當る度に向う脛を擦り剝く。蟋蟀の脚は這麼風にして引き廻された後、正に元來落ちてゐたところへ下される。汗みどろになつた二人の勞働者は長らく考へ込んだ末、乾き切つた虫の片脚なんかは要するに芳しい獲物でないと見きりをつけて、もつと重く骨の折れる古釘か何か探したいものだと各自別方面へ又々稼ぎに出掛ける……

『何うだね、隨分馬鹿なものだらう？』

『實際馬鹿ですねえ』

と感心したものゝ、乃公は差當り作文の材料に差支へると思ふと餘所事でなかつた。

『蟻が蟋蟀の脚を擔いで小石を登るのは日外お前と一緒に見に行つた菊人形の畠山重忠が馬を背負つて鵯越を降りるのと同じやうな力業だ。此著者も倘死にかけた蜘蛛を擔いで石道を通つた

蟻の實際を擧げて這麼事を言つてゐる。……今此馬鹿が二十分間に遣り退けた仕事を人間社會の寸法に換算して見ると、一人の男が馬を二頭背負つて六町ばかり歩いた事になる。其六町も平均一間ぐらゐの岩石がゴロ〳〵してゐる坂路で、途中ナイヤガラほどの絶壁一つと百二十尺の尖塔を三つまで攀ぢ上つて飛び下りたのだから驚く。而も斯く身命を賭して擔いで來た二頭の馬を彼は木立に繋ぐでもなく其儘捨てゝ又何か他の力業を探しに何處へか失せて了つた……さうして結論が振つてゐる……蟻が冬の蓄へをしないといふのは近頃科學の發見したところだ。斯ういふ事實が分つて來ると彼は或程度まで文學から抹殺しなければならない。彼は食つて宜いものと惡いものを見分けるだけの判斷力がないから、全くの無智蒙昧で、決して尊敬するに足らない。人が注目してゐる時に限つて彼方此方を慌しく動き廻るのは、忙しがるばかりで其實何も纏まつた仕事をしない人間同樣一種の詐僞師だから、迚も修身書の風上にも置けない。斯ういふ明白な食はせものが文明諸國民を美事ペテンにかけて現に今日まで道德敎訓の好資料に成り澄ましてゐると思ふと我輩は轉た人類の理性に疑念を挾まざるを得ない……何うだね、痛快だらう？』

とお父さんは讀み終つて嬉しさうに笑つた。

成程、面皮を剝いで完膚なしだが、乃公は閑人の此の氣紛れな入智慧の爲めに折角の作文の題

が興味索然として了つて、注意を蟬に向け始めた。

女權問答

『例へばあなたが手の屆かない棚のものを取つて戴きたい時、何う仰有つて御主人にお賴みになりますか？』

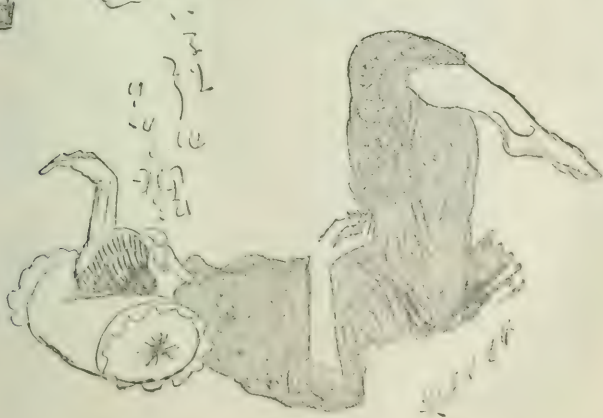
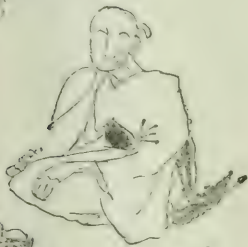
と言ふ聲で、乃公は、然う〳〵改良女史が來てゐたのだと思ひ出した。女史はアメリカ育ちにも拘らず、徹底的だから日本語が至つて純粹だ。日本語と英語とは常に別々の箱へ入れて置く。此點は兩方をチャンポンにして使ふ頭の惡い連中ほど氣障でない。

『然うでムいますね。さあ、何と申しますか知ら。私は然ういふ事は賴みませんわ。踏臺を持つて來て自分で取りますわ』

とお母さんが答へた。

『けれども假にお賴みになる場合には何と仰有います？』

『假にと仰有つても、事實然麼事を賴めば叱りつけられますから、何うでもして自分で取りますわ。』

『那麼に溫厚のやうでも上村さんは矢張りお小言を仰有るのですかね。其ならあなたが御病氣で身體の自由の利かない場合は御主人もお叱りになりますまいが、其折白湯が一杯戴きたいとしましたら、何と仰有います？』
『あなた、憚りさまですが白湯を少し戴かせて下さいませんかと申しますわ』
『歎願的態度ですね。しかし丁寧なのは結構でございますよ。それから御主人があなたに物をお賴みになる事は無論ありませう？』
『主人の方からは物は賴み通しですわ』
『御主人は何と仰有います？』
『おい、肩が張つたから少し叩けとか、歸つたら直ぐ晝寢をするから床を取つて置くんだぞとか申します』
『全然命令的態度ですわね。其ではお母さんにお賴みの時は何と仰有います』
『私がですか？』
『否、御主人がです。御主人がお母さんにお賴みの時は何と仰有います？』
と女史は一々何と仰有るかを取調べてゐる。這麼こと訊いて何にしようと仰有るのだらう？

扱ひと申す事になりますね。言葉を換へて申すと、妻よりも母の方が大切といふところに歸着しますのね』

『其は無論然うぢやございませんか。母は親ですもの』

とお母さんは矢張り貞淑だ。

妻と母が同時に溺れると假定したら先づ何方を救ふかといふ——乃公達東洋人には假定としても心持の好くない——問題に對して、アメリカ人は何の躊躇もなく妻と答へるさうだ。然るに日本人は等しく聊かも逡巡するところなく母と答へる。乃公だつて妻なんか助けるものか。お母さんの方が大切だ。尤も是は未だ細君がないから斯う氣前が好いのかも知れない。大姉さんは間もなくお嫁に行くが、萬一婿が新婦よりも老母に重きを置くやうなら乃公は承知しない。乃公は姉さん達の配偶になる人には西洋の標準を薦め、自分だけは日本の標準を守つてお母さんを大切にする積りだ。一方に偏してはいけない。和洋折衷に限る。其は然うと乃公は蹴つからかして下さいといふお父さんの苦しい熟語が妙に氣に入つた。乃公は今日で三日ばかり部屋の掃除を怠けてゐる。大分散らかつてゐるから一つお母さんに箒で蹴つからかして貰ひたいものだ。靴も此間雨の日に穿いた儘になつてゐる。彼は小姉さんに刷毛で能く蹴つからかして貰ふと都合が好い。這麼

事を考へながら寝轉んで天井を眺めてゐると、又樫の木でミン／＼が鳴き出した。ナカ／＼暑い日だ。

『私には日本の男子の女子――特に妻女に對する心理狀態が理解し兼ねますよ』

と女史はミン／＼でも油蟬でも平氣なものだ。さうして、

『良人は妻女を確に一段下に見てゐます。私は日曜學校の生徒に向つて、お父さんとお母さんの使ふお互の人稱代名詞を尋ねた事がございます。良人が直接に妻女を呼ぶ名稱は「お前」と「おい」と「こら」の三種類です。然るに妻女が良人を呼ぶ名稱は「あなた」と「もし」の二種類です。お宅では何うでございますか？』

『宅でも其通りでございますわ』

とお母さんは有體に答へた。

『主婦のあなたは敬稱をお使ひになつて、御主人の方は卑稱をお用ゐになるのですね。主人と主婦で出來上る家庭といふ意味から兩方で同樣な敬稱を使用する次第に參らないものでせうか？』

『其は然う參らない事もございませんわ。現に然うしてゐる家庭もありますもの。しかし宅では駄目です。私を茶化す時に限つて、あなたとか奥さんとか申します』

『然うお諦めでは仕方ありませんわ』

と女史は默つて了つた。這麼舊弊な女には意地をつけても張合がないと思つたのかも知れない。しかし又ミン／＼が鳴き出すと、再び自分の本分に促されて、

『唯今もお宅へ上る途中電車の中で私は餘程興味ある現象を拜見致しました。何うも私には日本の男子方の心持が充分理解出來ませんよ。車掌が或婦人の切符を切りながら、おい、何處へ行くんだいと、甚だ粗略な言葉を使ひました。すると隣席にゐた紳士が、聞き兼ねて、客に向つて失禮ぢやないか、少し愼み給へ、と注意した。しかし車掌はニヤ／＼笑ながら、實は此奴は俺の妻です、と答へました。紳士は然うだつたか、是は失禮した、と言つて笑ひ出し、他の乘客も皆大笑を致しましたが、私は可笑しいどころか、腹が立ちましたよ。此車掌は妻に向つては第三者が咎めるほどの無禮な言葉を用ゐても宜いと思つてゐます。紳士も其を是認して折角の忠告を慌てて撤回して了ひました。大笑をした他の乘客もヨク／＼な人達です。何れも車掌同樣に丁寧な言葉使をする馬鹿があるものかといふ信念を不用意の裡に表白したのに外ありません。電車の中は謂はゞ社會の一縮圖でせう？　して見れば日本の男子方の妻女に對する態度は先づ斯うしたものと認定しても差支ございますまいね？』

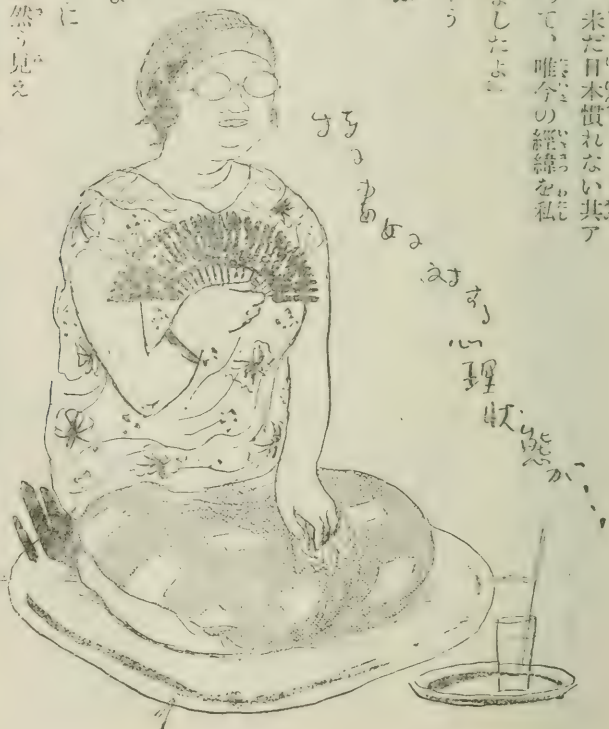
『其は何も爲たからと申して態と禮を缺くのではありませんが、何と申しませうかね、先づ習慣でございますわ。昔からの習慣で仕方ございませんわ。日本人は心持を色に現すまいと致しますよからね。自然……』

『侮蔑の心持を遺憾なく卑稱に現してゐるではございませんか？　他の婦人に對しては隨分丁寧な方も奧さんに向ふと全然別人のやうな言葉使をなさいますわ』

『否、私の申すのは侮蔑でなくて、妻に對する愛情を然う喋々しく表白するのが男らしくないやうに思ひます結果、自然今日のやうな粗略といへば粗略のやうな言葉使が出來上つたのかといふ私丈けの解釋でございます』

『言葉使ばかりではございませんわ。何うも日本の良人は妻女を弱いものとして飾る美徳に缺けてゐるやうに見受けられます。矢張り電車の中での出來事ですが、或時彼方から參つたばかりの私の友人が立つてゐた婦人に席を讓りました。すると他の男子が直樣其處へ腰を掛けて了ひましたから私は見兼ねて、此方は其御婦人に席をお讓りになつたのでございますよと注意してやりました。しかし其男子は別に極りの惡さうな顏もせず、否、お構ひ下さるな、其は私の妻ですから、と木の端か何ぞのやうに言つた儘、打ち寛いで新聞を讀み始めたではございませんか。　私は呆

れ返りましたが、同時に、未だ日本慣れない其アメリカの紳士が不思議がつて、唯今の經緯を私に尋ねるのには困り切りましたよ。

「其は少し極端な實例のやうでございますが、然ういふ方でも家庭では其程ではなからうと存じます。あなたのお目につくのは外側の事だけで、實際は日本でも矢張り主婦が家庭の中心でございますわ。唯彼方の人達のやうに喋々しくありませんから、然う見えないだけで、良人は主人として立てゝ置

くばかりで、先づ看板見たいなものですね。其から後は夫婦の自由競爭でございます』

『自由競爭と申しますと？』

『實力競爭でございます。男子は大抵見かけ倒しで、悧巧さうな事を申しても心は魯鈍なものですから、梶の取りやうで自由自在に操縱出來ます。陽に主人とか旦那さまとか崇めても、斯う申しては何ですが、實は一種の獵犬見たいなもので、其を使ふ獵師は主婦でございます　何處の家庭に致しましても道理の分つた奧さんほど表向は閑雅な服從的態度を執つて、良人の知らぬ間に事實上の主權を固く握つて居ります。斯ういふ次第ですから、日本の家庭では婦人の地位が低い等と一概に申すのは眞の皮相丈けの觀察でございますよ』

とお母さんは女史の蒙を啓かうとして、日本の主婦の爲めに柄にない氣を吐いた。お父さんを犬に譬へるところを見るに決して貞淑でない。

『然うでございませうかね？　眞正に然うなら結構な事で、私、日本の家庭の爲めに祝しますわ』

と女史は嬉しさうに言つた。

『何處の家庭でも然うでございますわ。私にしても家庭內の事は總て私の獨裁です。尤も然う氣取られては面白くありませんから、何方でも宜いやうな事柄だけは勿體らしく相談を持ちかけ

て、主人の意見を實行致します。男子は大ざつぱなものでございますよ。主人は何でも一々私が相談すると思つて、家は乃公が絶對君主だと申して得意になつてゐます」

「あなたも、隨分人が惡いのね」

「でも、專制君主を戴いてゐますと、此れぐらゐの陰謀をしなければ主婦の立場は持ち切れませんわ。主人は天邪鬼で、他が右と言へば必ず左と申しますから、餘程取扱ひが簡單でございますよ。極重大な問題になりますと、責任がありますから相談致しますが、其折でも、自分の思ふところ反對の事を申してゐれば主人は屹度其反對に出ますから、結局此方の希望通りに事が纏まつて責任は主人の負擔になりますからね」

「何處まで狡いのでせうねえ！　あなたは學校時代から惡智慧がありましたよ」

「あら、隨分だつ」

とお母さんは二十何年か前の聲を出した。學校友達と話してゐると娘時代に戻るものと見える。乃公は今の若々しい聲音でお母さんにも大姉さんのやうな年頃のあつた事を朧ながらも想像した。

「お宅では御夫婦の間に充分理解がございますから何でも圓滿に參りますが、安達の家庭には實

に困りますよ』

と女史は少時してから話題を安達さんに向けた。乃公は最負相撲の噂を聞くやうに、興味を催して頭を擡げた。

『安達さんも矢張り專制君主のやうでございますね』

『安達のは專制君主を通り越して暴君でございますよ。私が彼方へ參つてる間に悉皆後戻りをして了ひましたよ』

『矢張り御酒をお過しなさいますの？』

『飲酒ばかりぢやございません。私が斯うもあらうと想像してゐる事は皆してゐるやうでございます。其に姉は温順なばかりの婦人ですから操縦するどころか宜いやうに欺されて了ひます。一つ姉を連れて參つて、あなたに秘傳を伺はせませうか？』

『眞平でございますわ。其でなくても私は安達さんに恨まれてゐるのですもの。奥さまに入智慧をするとかあなたと共謀になつてゐるとかと能く仰有いますわ』

『安達が姉を騙す手際には實に感服致します。立派に禁酒をしてゐましたのが、歸朝して見ますと、晩酌をしてゐるぢやございませんか？　其も安達は姉の懇願によつて始めたと申しました。

姉は私への言譯まで引受けて、再び家庭で酒を飲んで戴く事にしたのださうですから驚きますわ』

『其は又何ういふ次第でございますの？』

『安達の同僚に神經が何うかして俄に顏の歪んだ方があるさうです。安達は其を急にお酒を止めた所爲にして、節酒の方が安全だと毎晩のやうに申して居りましたが、其中に何うも昨今身體に變調が來てゐるやうだと言ひ出しました。氣の弱い姉は悉皆怯えて了つて、其では禁酒は止めて節酒にして戴きますと賴むやうにして晩酌を始めさせたのださうでございます』

『まあ〳〵、安達さんもナカ〳〵お芝居が上手ですわね』

『姉は純日本式の貞女ですから、安達の爲めには隨分不合理な犧牲も厭ひません。安達は其處か附け目なのでございます。昔、貧乏侍があつて、と安達が或晩語り出しました。戰場へ出て一手柄立てたいにも馬がない。市で駿馬を見て來たが、手元不如意。四百四病の苦みもと、是は安達の口調でございます。すると其侍の奥さんが鏡の裏から小判五十兩を出して、是は良人の大事の場合に使ふやうにと嫁入の折母親から授けられましたお金、何卒唯今の急のお役場に立てて下さいませ、と申したといふ筋で、日本のお話にしては道德的に出來て居ります』

『其は確か山内一豐の奥方でございました。其奥方のお蔭で馬が手に入つて、一豐は後に大名に

出世致します」
「姉が感心して聞いてゐますと、安達は、此處だよ、お前と、一段聲を潜めまして、實は會社の帳簿に少し穴を明けたから今の間に埋めて置かないと首尾が惡くなる、良人の大事だと打ち明けました。姉は安達が待合入りをする費用とも知らずに、言はれただけを一も二もなく出してやつたのでございます。』

『丁度道樂息子が女親を瞞すやうな遣口ですわね。道理で先頃はナカ／＼話が分ると仰有つて奧さんを褒めてゐなさいましたよ』

『それから安達は毎月一度づつ貞女のお話を致しました。姉も御說法が始まると最早通ひ帳を開けて待つてゐるといふ有樣で、私の留守の間に三千圓近くも……』

折から樫の木で寒蟬が鳴き出した。家の庭へは寒蟬は滅多に來ない。機逸すべからずと、乃公は飛び起きて庭へ忍び下りた。

娘を嫁にやる親心

大姉さんの御婚禮が追々と近づいて來る。女親といふものは無暗に娘を吳れたがるだけあつて、

イヨ〳〵縁談が纏まると頗る緊張する。お母さんは毎日毎晩大姉さんの嫁入支度にかゝり果てゝゐる。乃公が學校から歸つて來て臨時試驗の答案を御覽に入れても、褒めるどころかお八つを出す事を忘れてゐる。男の子なんか何うでも宜いと見える。彼れも持たせてやりたい此れも一品だけでは肩身が狹からうと慾に慾を言つて、家中の物を大姉さんに脊負はせてやる氣でゐる。中姉さんも小姉さんも大姉さんのお支度については甚深な興味を持つて、矢張り引越車に荷を積む折と同じ心得でゐる。さうして長襦袢一枚仕上つて來ても必ず手に取つて吟味し、花梨の針箱の木理さへ具に檢査するのは、一々帳面に控へて置いて、自分達がお嫁に行く時にも全く同樣にして貰はなければ承知しないといふ下心らしい。しかし此間に處して獨り泰然たるものはお父さんだ。殊に昨今は足繁くお師匠さんに來て貰つて義太夫のお稽古に沒頭してゐる。其をお母さんが齒痒がつて、

「あなた、少しは私の身にもなつて相談に乘つて下さいましな。」

と憾むと、

「何に折角育て上げた無類のものを只で永久に呉れてやるのだ。然う何の彼のと景品をつけるには及ばないよ。」

と然も憎體に版で捺したやうに言ふ。先達而仲人が來て、

『お支度は何卒極御簡略にとの希望でございます。いやもう、お身體さへ來て戴けば其で願つたり叶つたりなのですから、此邊は呉れ〲も申上げてくれとの事でございました』

と繰返して言つたが、お父さんは此紋切形を文字通りに解釋して、大姉さんを裸で縁付ける積りかも知れない。長女で一番長く手鹽にかけ、親としての經驗から言ふと皮切だつた所爲か、兎に角餘程呉れ惜いらしい。斯ういふ人の娘を貰ふ男は一生は愚か子々孫々の代までも恩に着せられるだらうと思ふと、乃公はお婿さんが氣の毒になるくらゐだ。

『奥さん、一體娘を嫁に遣るの貰ふのといふのは女性の人格を無視して、婦人を物品扱ひにする非開明な言葉ではありませんかね？』

と或晩火鉢の側で煙草を吸つてゐたお父さんは改良女史の口吻を眞似ながらお母さんに話しかけた。

『あなたこそ呉れて遣る〲と二言目には、猫の子でも片付けるやうに仰有るぢやありませんか？　呉れて遣るのでも貰つて戴くのでも何方でも宜うムいますわ。何うせ一生獨身で置けるものぢやありませんもの』

と緣付けて了へば親の責任が濟むと思つてゐるお母さんは用語よりも實際本位で、閑人にかゝり合はずに一針でも餘計に運ばうといふ料簡か、お仕事から目を放さない。何方に轉んでも差支ない問題の時にはお母さんは屹度斯うだ。

「それがさ、乃公がくれてやると態〻二重に言ふのは忌々しいからさ。何うも日本といふ國は女の子を片付けるには甚だ割の惡いところだよ」

「何故でございますの？」

「何故つて、考へて御覽。女の子は呉れる貰ふといふ物品扱ひで親も當人も滿足してゐなければならないぢやないか？」

『滿足してゐるのですから、其で結構ですわ。然麼事よりも律子の夏帶でございますがね』

とお母さんは急にお仕事の手を休めて少し乘り出した。着物の事になると定つて乘り出す。さうして、

「此間拵へた一本の方は私が見立てたのですが、何うも律子の氣に入らないやうですから、彼は民子に讓る事に致しまして……」

「否、帶の問題ぢやない。呉れる貰ふの問題だよ」

とお父さんは實際問題を無視しようと努めた。家ではお母さんに興味のある事柄は兎角お父さんの嗜好に投じない。此故にお母さんは父さんを趣味の上の低能兒と見做して憐んでゐる。尤も優良兒として推賞を受けるにはお母さんや姉さん達の欲しがるものを何でも右から左へ買つてやらなければなるまい。

「其は分つて居りますよ。けれども嫁入支度と申すものは差當り新婦の一勢力でございますからね。先方へ參つて第一に目につくものは學問や性格でなくて、器量と支度ですから、親としては充分な事をしてやりたがるのが情愛でございますわ。他人の中へ唯獨り入るのですもの、少しでも肩身の狹いやうな思ひはさせたくありません」

とお母さんは衣類調度が單に品物でなくて勢力だといふ理を低能兒に說いて聞かせた。

「要るものなら買ふが宜いさ。乃公は何も費用を吝んで這麼愚痴を零すのぢやない。唯大義名分を明かにさへすれば宜いのだ。さうして其の嫁入支度も矢張り今の呉れる貰ふの問題の一要素になつてゐるのだから、まあ聽いてゐて御覽。女の場合には此の非開明な言葉が一向耳に障らないほど通俗になつてゐるが、假に地を替て男が嫁の方へ貰はれて行くとなると富人尠からず首を傾げるぜ――此方の天分や學識よりも養家の資產や門閥が法外に際立つて、お婿さん自身の輪廓が

情けないほど薄くなつて了ふからね』

『其は養子ですもの、當然ですわ。「粉糠三合持つたら入婿になるな」と申すぢやありませんか』

『其處だ。それで乃公も養子に行かなかつたのさ』

『あなたのやうな我儘な方に養子が何日勤まりませうかね』

「其の勤まり難い養子の役を女は嫁に行けば無條件で引受けるのだから割が惡いと言ふのさ。貰はれるのだから最早此方のものでないのは當然だらうが、萬事先方の家本位で當人の個性が全く消えて了ふのは何う考へても面白くない。日本では人は二の次で家が首位だ。斯ういふ不合理を押し通して行くには何人か犧牲にならなければならない。ところで男は狡猾だから、粉糠三合持たなくても家の爲めの犧牲にはなるまいとして、甚だしきに至つては軍人や實業家までが背嫁を貰つて個性を全うさうとする。然るに女は粉糠三合どころか何千何萬といふ支度をして、選りに選つて縁も故もない赤の他人の家の犧牲になりに行くのだから、全く割の惡い話さ。此邊の事情を考へて餘程大切にして貰はなければ困るよ」

とお父さんは歎息した。これが自ら家庭の君主を以て任じ、お母さんを使用人扱ひにしてゐる人の言葉とは迚も思へない。自己本位のお父さんは大姉さんをお嫁に遣る間際になつて初めて家

族制度の缺陷に氣がついたのらしい。

『急にお考へが穩健になりましたのね。矢つ張り寄る年波とでも申すものでせうか。然う致しますと差詰私も多少同情して戴けませうね？』

とお母さんが笑ひながら言つた。

『お前になんか同情するものか。お前は妻だ。嫁ぢやない』

とお父さんは早速分らず屋振りを發揮した。

『妻でも參つた折は花嫁でございましたよ』

とお母さんは權利を主張した。

『花嫁でも二十年前だ。婦人問題や勞働爭議のなかつた昔だから、お前は矢つ張り昔の相場で、乃公の家では乃公が絶對君主さ。二十何年も前の事を彼れ是れ言つたつて何誰が相手にするものか。お前は時效といふ事を知らないのだね』

とお父さんは妙な理窟をつけて、其矛盾の尻尾を捉へられない中に、

『どうれ』

と二階へ上つて行つた。　（挿繪――田中比左良）

女中日記

安東綠江

××日

私がいくら女中だからつて、叱られる事よりも、叱られない事の方が餘程氣持が宜いわ。旦那樣は隨分お人が好いけれど、奥樣と來てはほんとに氣むつかし屋だから、私泣かされてばかり居る。尤も、近頃は多少馴れて來たから左程でもないが、田舍から出て來たばかしの頃は、お叱言のたんびに、死にたいやうな情なさを沁々と味はつて來たわ。

人樣には笑はれるか知れないが、でも、此日記は私に取つては血と涙との記錄よ――

××日

瓦斯と云ふものを初めて見た。高等一年生の時、理科の時間で瓦斯の事を敎はつたが、實地に

見るのは今日が初めてだから隨分珍らしかつた。矢張り百聞は一見に如かずよ。
　朝御飯を炊く時、奧樣が態〻起きて來て、瓦斯に火を點けて下すつた。ボツと云ふ音がして、燐寸一本で見事に火が點く。それで御飯を炊いて、おみお汁を煮上げて、お茶を沸かして、それでもまだ火が消えない。消えない處か、朝早く火を點けたのが正午迄も燃えて居る。私は隨分便利なものだと思つたから奧樣に申上げた。
『奧樣、瓦斯なんて隨分便利だね、まだ消えないで居るんが』
『えゝツ』
　と奧樣は眼を圓くして、
『お前まだ消さないのかえ？』と、奧樣は突然勝手元に驅け出した。何だか色が蒼くなつてゐるやうだから、續いて私も奧樣の後から驅け出して行く
見てると、奧樣は螺旋をピリツと廻した。すると今迄熾んに燃えて居た火が、一時にプツと消えて、おとかたもなくなつた。成程便利なものだと思つたから、
『奧樣、隨分便利でねえか』と云つた。
『ほんとにお前は仕方がないのねえ。朝つから點けッ放しにして置いたの？』

『はい、其儘ですがね』

『其儘ぢやありませんよ、困つちまふわねえ、瓦斯は無料ぢやないんだよ』

『お金とるだかね』

『まあ、此人呆れて了ふわね』

奥様はぷん／＼しながら行つて了つた。私も實は呆れて了つた。瓦斯を燃やせばお金を取るんださうな。だつて理科の先生はお金の事なんか、ちつとも教へないんだもの……それに消し方なんか、てんで習つた事もないんだし、是れは私が悪いんぢやないと思ふ。奥様も随分怒りツぽいわ……

夕方、旦那様がお歸りになつてから、奥様が早速此事を云ひつけなさる。旦那様は唯笑つて居らつしやる。そして終ひに一言仰有つた。

『それは、お前が教へないのが悪いのさ』

ほら御覽なさいー、奥さん。

×　×　日

今日もお叱言を一つ食つた。昨日、むきみ屋といふ家へお使ひに行つた。そして、蜆を五合買つて來た。處が、奥さんはお寢みになるときに仰有つた。

『春や、あの、蜆は水に漬けときましたか』

『いゝえ』

『まあ……それぢや、直ぐにあれを水に漬けときなさい。そして明日の朝のおみお汁に入れるんですよ』

私は、奥さんの吩咐け通り、直にそれをバケツの中に入れて水を汲み入れた。

そして、今朝も、奥さんの仰

有る通り、蜆をおみお汁の中に入れた。

丁度御飯の時である。奥さんは、鍋の蓋を取つて見て、

『まア、春や』

と仰有つた。私は、又何かお叱言だらうと思つて恐る恐る奥さんの顔を見た。

『お前、おみお汁に、蜆を入れなさいと吩咐けておいたぢやないの？』

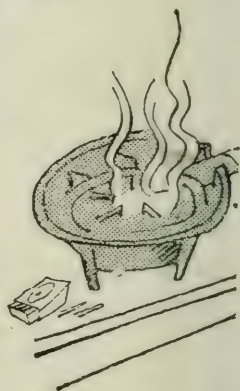
『はい』

『何うして入れませんでした？』

『あら奥様、底の方に這入つてますがね』

『底の方に？』

奥さんは、しやもじを取り上げて、底のはうを掬ひ上げて御覧になる。随分疑ひ深い奥さんだ。

『まア春や、お前蜆の殼を剝いてしまつたのかえ？』

『はい』
『驚いた人ね……ホヽ、蜆の殼を剝く人が何處の世界にありますかね』
『あれも食べるんだかね？』
『あれがあるから美味しいんですよ』
『それぢや持つて參りますだが、まだ棄てずに置いてあるだが……』
『馬鹿な事をお云ひ、殼だけ後から入れて何うします？』
旦那樣は、にやり〳〵笑つていらつしやる。もと〳〵、私の田舍の方では、佛樣を信じて居るから、貝類などは決して食べない事になつて居る。だから、蜆なんて食べた事がないし、それにあんな汚ない殼までお汁に入れるものとは夢にも知らないものだから、庖丁で一々丁寧に剝いて入れたのに、奥さんも隨分ひどい人だ。

×　×日

『御免下さいませ』
玄關の方に女の聲がする。早速出て見ると何處かの奥さんらしい人である。私は早速べたりと

坐つて兩手を突いた。

『奥さんいらつしやる？』

『はい、いらつしやる……ますだ』

『阪谷ですが……』

『あのウ、一寸御待ち下せえまし』

私は、直ぐに奥へ行つて奥さんにさう云つた。

『奥様』

『なあに？』

『あのウ、酒屋さんが來ましただが』

『まあ、玄關から來るなんて、勝手元にお廻りつてさう云ひなさい』

『はい』

私は玄關に再び出た。

『あのウ、勝手元にお廻りつてさう云ひなさいつて、云ひなせえましたが……』

『あら、さう。何うしてゞせう』

『……………』

私は、何うしてゞあるか其理由を知らないから默つて居た。

『あの、四谷の阪谷ですが、もう一度さう云つて頂戴な。』

『はい』

又立つて奥に行つた。

『奥様、勝手元に廻らうとしねえですだ……四谷の酒屋さんだと云つて……』

『四谷の？……』

『はい』

『奥さんぢやないの』

『はい、綺麗な奥さん、縮緬の着物を着て袋を下げて……』

『まあ』

奥さんは、顔を赤くして玄關の方に飛んで行つた。私は勝手元へ行く。すると、玄關の方で、奥さんと奥さんが鉢合せした。

『まあ、奥さんでいらしつたの、失禮致しました。女中が酒屋さんが見えたと申すのですから、

洵に失禮致しました。さあ何うぞお上り下さいませ。ほんとに少し足りない女なもんですから、失禮ばかり致しまして……』

　少し足りないなどと、奥さんも酷いわ。私に面と向つてなら幾ら何と仰有つても宜いけれど、他所の人の前であんなことを仰有るんだもの……

『春や、一寸お出で』

『はあい』

　又お叱言を頂戴するのかなあ。

だから私は女中なんて行きたくないと云つたんだけれど、お母アさんが『行儀作法を見習はなきあお嫁に行けない』つて無理

によこしたもんだから……

『何か御用だかね』

『何か御用ぢやありませんよ、まあ何と云ふ失禮な事をするんです』

『…………』

『宜いぢやありませんか、奥さん、まだ山出しですもの、無邪氣で宜いわ、ホヽヽヽヽ』

酒屋の奥さんがお笑ひになる。それにしても山出しなんて酷いわ。

『此前はね、奥さん、瓦斯を朝から正午頃迄……』

『あの、奥樣何か御用で御座えますかね、お茶を持つて來ますかね』

『ホヽヽヽ。お茶を持つてお出で』

『はい』

私は直ぐに立ち上つた。顏が火のやうに熱くなつた。奥さんは情知らずの何とかと云ふものだ。あんな事をみんなお喋舌りなさるんだもの……

私はお茶を持つて行つて、直ぐ隣りの座敷に引つ込んで、お二人の話をこつそり聞いてゐた。

私の棚下しがすんで、二人で思ふ存分笑つてから、今度は酒屋の奥さんの話が始つた。

『いえね奥さん、そりや面白い話があるのよ、矢張し山出しの女中でね、言葉が大變きたないから、何事に限らず「お」を附けて、もう少し丁寧に云ふやうになさいつて、奥さんが注意なすつたんですつて』

『えゝ、ホヽヽヽ』

家の奥さんが笑ふ。

『するとね奥さん、斯う云ふんですつてサ、「奥樣、あの、お鼠さんがお甕の中に落つこちなさいまして、上らうと仰有つてはおごぼん、上らうと仰有つてはおごぼん、つい〳〵、お死ばりになりましたよ」ですつてサ。ホヽヽヽ』

『まあ、ホヽヽヽ。家のあれ見たいですわねえ、ホヽヽヽ』

二人は、何が面白いのか笑ひ轉げていらつしやるやうだ。だが、家の奥さんのお口の惡いのには驚く。「家のあれ見たいです」なんて、家のあれとは、きつと私の事よ。だけど、私などは、そんな、鼠にまで「お」を附けるやうな馬鹿ぢやないわ……

×　×　日

今日は旦那様のお歸りが遲い。何時もならば五時頃にはきつとお歸りになるのだが、今日は七時になつても、八時になつてもお歸りがない。奧さんが立つたり坐つたりして、三遍も鏡臺に向つて、牡丹刷毛を使つてはお待ちになつてゐるんだのに、何時になつてもお歸りにならない。お歸りにならなければ、夕御飯が頂けないので、とてもお腹が空く。

八時半頃であつた。

ガラ〳〵と玄關の音がしたので、奧さんが飛んでいらしつた。私もお出迎へのために玄關に出る。處が御主人ではなくつて違つた人である。

『御免なさい』

『おや、いらつしやいまし、鈴木さんですか、さあどうぞお上り下さいまし』

はゝあ、此人は奧さんの知つてゐる方に違ひない。

『いや、今日は一寸急ぎの用事があるんですが、上野君に一寸玄關で御目にかゝりたいんです』

『まあ、左樣で御座いますか、あの、まだ良人は歸つて參りませんので御座いますが』

『あゝ、さうですか、まだ役所から歸らないんですか』

『どうしたんで御座いませうねえ』

『僕は何ですよ、神戸の方に急病人が出來ましてね、今日は役所を早引けして、今から夜行で出かける處なんですが、それぢや困つたなア』

『まあ、さうで御座いますか、誰方かお悪いんで御座いますか』

『えゝ、姉が俄かに悪くなつて……』

『まあ、それは御心配で御座いますわね』

『ではね、役所のことで少し頼んで置きたいと思つたことがあるんですが、それぢや役所宛に手紙を出しときませう』

『あゝ、左樣で御座いますか』

『ぢや、急ぎますから、是

れで失禮します』
お客さんは、玄關で挨拶もそこ〳〵に行つて了つた。
『まあ、どうなすつたんだらうね、今日に限つて』
奧さんは獨り言しながら茶の間へ通る。置時計を見ると九時だ。
『春や、お腹が空いたらうね』
『いゝえ、ゝゝゝゝゝはい』
奧さんは悄然ていらつしやる。お腹は益〻空いて來る。「先きに食べろ」とも何とも仰有らない。仰有らなければ食べる譯にはいかない。食べなければ腹の蟲がグウと音を立てる。
又時計を見た。九時半だ。時計のカチ〳〵の音が澄みきつて聞える。鐵瓶の湯氣がシュウ〳〵と上つて行く。奧さんは俯向いていらつしやる。淋しいやうな靜かな夜である。奧さんはひよつとしたら居眠りしていらつしやるかも知れない。
と、玄關でガラ〳〵と音がした。
『それお歸りだ』
奧樣の足の早いこと、運動會の選手見たいだ、

『只今――』

『御歸り遊ばせ、まあ、隨分今日は遲かつたわね』

『うん』

『おや、貴郎御酒上つていらしたの』

『うん』

『お顏が眞ツ紅よ』

『飲んで來た證據だ』

『何處で召上つて？』

『うん、なあに、鈴木君が是非交際へつてきかないものだから……』

『え、あの鈴木さんですつて？』

『うん、役所の鈴木さ』

『鈴木さん……さうですか、何處にいらつして……』

『彼奴の知つてる家だ』

『料理屋ですの？』

『カフヱーさ、なか／＼追究嚴重だね』

此問答の間に、旦那樣は洋服を褞袍にお召替へになつて、長火鉢の前にお坐りなすつた。そして、奥さんも旦那さんの直ぐ前にお坐りになつた。奥さんのお顏色が何時にもなく惡い。

『おい、どうしたんだい、馬鹿に悄然てるぢやないか、遲くなつたので怒つたのか』

『…………』

『交際といふ奴は已むを得ないからな』

『…………』

『御飯すんだのか』

『貴郎』

『何だい、改つて……』

『貴郎は鈴木さ　と今夜いらしつたの？』

『何遍訊くんだね、それがどうしたんだい？』

『何時頃いらしつて？』
『そ、そりや、役所が退けてから今迄サ』
『嘘でせう！』
『ウ、嘘なもんか、鈴木に訊いて見給へ』
『だつて、鈴木さんはいらつしやいませんもの』
『僕を疑ふんなら、鈴木の家に行つて訊いて來たら宜いサ』
『お宅にもいらつしやいませんもの』
『ゐ、居ない事は……そんな事が、お前、そんな馬鹿な事はないさ。一緒に歸つたんだもの—
『貴郎』
『…………』

『鈴木さんは今夜神戸にいらしたんですよ』
『えゝツ、こ、神戸に……なんて事は、ハ、、、、、俺に鎌をかけるのか、どうもお前の聰明には驚くね、處でお酒一本如何だい』
『鈴木さんはネ』
『もう鈴木の話はよせ』
『お姉さんが急病でいらしつたのよ、役所の事に就いて頼みたい事があるけれど、留守ならせむを得ないから、役所宛に書面をやるからつて云つてらしつたわ。解りましたか』
『解りましたよ』
『……………』
『……………』
『それでカフエーには誰方といらしつて？』
『……………』
『山下とか云ふタイピスト？　綺麗な女でせう、宜いわねえ』
『ば、馬鹿、女なんかと、そ、そんな君、ちやんと愛妻が家に待つてるのに……』

『よござんすよ』
『實はね、その……』
『いゝえ、もう聞かなくつても宜いわよ、私はどうせ、孤獨なんですから……春や』
『はい』
私は、空腹をこらへてやつと返事をする。
『お前、お腹が空いたでせうねえ、すまなかつたわ、早く御飯お上り、ね、ほんとに氣の毒だつたわねえ』
よお、奥さんのやさしい聲、私は此家に來てから一月にもなるのに、一度も此んなやさしい聲を聞いた事がない。
『あの、奥様は召上らないので御座えますか』
『私はね、もうお腹が一杯なの、お前早くお上り』
『でも、まだ召上らないのに一杯で御座えますか』
私は、あんまり不思議に思つたので奥様に訊いた。
『えゝ、もう澤山なの』

『でも、御遠慮ぢやないんで御座えますかね』

『御遠慮は宜かつたね、アハヽヽヽヽ』

旦那様がお笑ひになつた。奥様はそれでも下に俯向いていらつしやる。私は奥様がお可哀さうになつた。きつと嫉妬とか云ふのはあれの事なんだね。私もお嫁さんに行くなら、矢張り嫉妬とか云ふのを燒かねばならないのかしら？

×　×　日

今日は日曜日である。

午後の二時頃、誰方か玄關に見えた。

『いらつしやいまし』

『私は鹿島のお社から來ましたが是は地震除のお呪禁札ですから、何處かの壁に貼つて置いて下さい。皆お志だけ頂きます』と云ふ。

『はい畏まりました、暫らくお待ち下せえまし』

私は、直ぐにそれを持つて奥さんとこに驅け込んだ。

『何です、慌てゝ』

『あの、只今地震除けのお札を持つて來ましたが』

『何です、地震除けのお札？』

奥さんは四つに折つた札を取り上げてお開きになる。私も見ると、細長い紙に『鹿島要石』と木版刷りになつてゐる。

『何ですつて、是れが地震除けですつて？』

『はい』

『ふん、人を馬鹿にしてゐるわ。だけど一たん受取つたんだから返す譯にも行くまいから……はい、是を持つて行つてお上げ』

見ると五錢白銅一枚だ。たつた五錢位で地震が除けられるなら此麼安いものはない。奧さんのやうに不服がましく叱言を言ふ人は餘ツ程地震の好きな人だらう。私地震なんか大嫌ひだわ。

私は五錢白銅を玄關に持つて出て渡すと、神主様は顎髭をしごきながら、丁寧に扇子でお受けになつた。まあ勿體ない。

『春や――是れから玄關で斯んなものを受取つちや駄目ですよウ』

『はい、何故で御座えますだか？』

私は、奧さんの了見が間違つてゐると思つたから訊いた。すると奧さんは、

『斯んな紙一枚で地震が除けられますかね、馬鹿々々しい。あんなのは神様屋と云ふんですよ、神様を喰ひ物にしてるんだよ。是から變な人が玄關へ來て何かを渡さうとしても、決してお前は受けちやなりませんよ。受け取つたら、其の處分はお前にさせます。お前の責任ですから……』

私は、これから一切、何に限らず受取らない事に決心した。無闇なものを受取つて、それはお前が受け取つたのだから、勝手に處分をおしよ、なんて言はれたら目も當てられはしないわ。

××日

今日は、旦那樣がお歸りになつた時、何かを下げていらした。

『オイ、春や』

『はい』

『今日は魚屋に大好物の海鼠が見えたから買つて來たよ。直ぐに料理つて呉れ』

と仰有る。私は海鼠なんてものは、未だ見た事もないし、勿論お料理したこともない。新聞紙にくるんだまゝ受取つてお臺所に行つて開いて見て驚いた。生きてるのか、死んでるのか薩つ張り解らないし、それに第一あの姿！　私は氣味が惡くなつた。何んなにして料理をするのか見當もつかない。是れを奧さんに訊くと宜いんだけれど、さうなると「お前海鼠の料理方も知りませんのか」と叱られるに決まつてゐるから、私は一人でやつて見ようと決心した。

そこで、先づ瓦斯の上にお鍋をかけた。お鍋の湯がグラ〳〵沸いてる時に、此變挺子な動物を

投げ込めば、きつと死ぬに決まつてる。死んでからならば安心してお料理が出來る。

私はお湯が煮立つた時に、火箸で挾んでお鍋の中に投げ込んで早速蓋をした。旦那樣も實に厄介なものを買つていらつしやる。是が旦那樣の大好物ださうな。

私は海鼠を鍋に放り込んでから、お臺所の雜巾掛けやら、お米を磨ぐやら、お襁褓の干したのを取り込むやら、いろんな仕事に忙しく立ち廻つて居ると、旦那樣がお呼びになつた。

『おい春や、海鼠はまだ料理出來ないのか？』

『はい、只今――』

私はお襁褓の重ねを放つ散らかして、お臺所に行つた。

ほんとに忙しいこと。

お臺所に行つて、瓦斯の火を消して、お鍋を下して、早速料理にかゝらうと思つて鍋の蓋を取ると、これはしたり……たしかに入れた筈の海鼠が影も姿も見えない。

はゝア、不思議な事があるもんだなア、私は慥かに火箸で挾んで一時間程前にお鍋の中に入れたのに。たしかに入れた、きつとたしかに入れた。それだのに這入つてない。這入つてない所を見ると、何か泥棒でも來て持つて行つたんぢやなからうか。いや泥棒の這入る筈はない。第一泥棒が鍋の中のものを持つて行く氣遣ひはない。はて不思議な事もあるもんだ……と私が頸をひねつてゐる處に、又旦那樣の聲がした。

『春や、まだ海鼠は出來ないのか』

『あのウ、誠にすみませんが……』

『何に？』

『いらつしやいませんので……』

『何に？　誰がいらつしやいませんのだ』

『あのウ、逃げ出してしまひましたんで……』

『何に、何が逃げ出したのだ』

『海鼠で御座えます』

『海鼠が逃げ出した？　馬、馬、馬鹿な事を云つちや困るよ、ハツハヽヽヽ』

旦那様は笑ひながら、立つて臺所にお出でになつた。

『おい、一體何うしたんだい？』

『あのウ、居ませんので……』

『それぢや、お前が油斷してる間に、何處かの猫でも來て持つて行つたんだらう』

『いいえ、でも、お湯が熱いんで御座えますから、猫が取る筈も御座えませんが……』

『なに？　お湯が熱い？』

『ハイ、大分熱う御座えますが……』
『お前は一體海鼠をどうしたんだい？』
『あのウ、瓦斯のお湯にかけたんで御座えますが』
『ば、馬鹿ツ！　海鼠をお湯に入れる奴があるもんか』
『はい』
『はいぢやないよ、海鼠をお湯に入れたら解けつちまふんだよ……』
『あのウ、それでは……』
『馬鹿だなお前は、ハヽヽヽ』
旦那様がお笑ひになつた時である。奥のはうから奥さんがお出でになつた。
『何ですつて、海鼠を煮たんですつて、ホヽヽヽ』
『ハツハヽヽ、是は僕の失敗だつたよ、敎へるのを忘れてゐたから、だけど、海鼠の料理位は知つてるだらうと思つてゐたのにさ、ハツハヽヽ』
『貴郎、解るもんですか、蜆の殼迄剝くんぢやありませんか、ホヽヽ』
と、ほら御覽なさい、蜆の殼迄剝く女に、海鼠を料理せよとは少し御無理と云ふもんだわ。

それにしても、あの海鼠つて云ふのは何で拵らへたものかしら……

×　×　日

今日は奥様がお産なすつてから、初めて錢湯にお出掛けになつた。お出掛けになる時、

『赤ちやんを連れて行くんですから、お前も仕事がすんだら、直ぐにお湯に來てお呉れ、でないと一人では困るから』

と、仰有つた。だから私は夕御飯のお仕度がすむと同時に早速お湯に出かけた。お湯に行つて、直ぐに着物を脱いで、硝子戸を開けると、奥さんは赤ちやんを抱いたまゝ、お隣りの石井さんとこの奥さんと一緒に流し場でさし向ひに坐つて、色々なお話をしていらつしやる。

流し場にはたくさんの人が居て、一寸何處を通つて宜いか見當がつかない。だけど、裸だから一寸躊躇したけれど、外に通る所がないもんだから、私は思ひ切つて其處を通り抜ける事にした。そして、通り抜ける時、私は云つた。

『奥樣只今參りました』

『おや、春や來ましたね』

『はい、あの、裸で御免下さいまし』

私はつゝましやかにさう云つてお二人の前を通つた。すると、奥さんと石井さんの奥さんとが一度にホヽヽヽと御噴き出しになつた。だつて、行儀見習ひに上つてる私だもの、裸で人様の前を通る時は『御免なさい』位のことは知つてる。それをお笑ひになるとは、ほんとに意地の悪い人達だわ。

×　×　日

今日は朝から齲が痛む。左下の奥から二番目である。私は今迄歯が痛んだ事は滅多にない女だが、今日は何う云ふものか、朝起きると直ぐから痛み出した。私が痛さうにしてるもんだから、旦那様が仰有つた。

『春や、お前歯が痛いことはないのか？』

『はい、あの、痛みますんで』

『歯の痛むのは辛いもんだ、直ぐに歯醫者に見て貰つたら宜いだらう』

『はい』

『英語の格言に「哲學者も齒痛は諦められない」と云ふのがあるよ、實に辛いもんだ』

併し、旦那樣がお役所にお出でになつてから、奥さんが用事をたんと云ひつけなさる。今日は天氣が宜いから早くお襁褓を洗つておきなさいよ、とか、金魚の水を替へなさいよ、とか、筍を晩のお菜にするんだから、よく茹でときなさいよ、とか、それはそれは用事が多い。痛む齒を押へながらお襁褓の洗濯をするのは實に辛かつた。泪が出た。其癖奥さんは早く齒醫者に行けと仰有る。何が何だか私は解らなくなつた。

奥さんの言付けなさる仕事を全部終つた頃は最う五時前である。そして五時頃から着物を着替へて、奥さんの敎へなすつた齒醫者の處へ行つて見ると、最う診察時間が過ぎてゐて、明日でなければ駄目だとの話だ。

ふん、奥さんは私に向つて『氣が利かない、氣が利かない』と仰有るが、御自分もあんまり氣の利いたはうぢやない。旦那樣が今朝仰有つたやうに、英語の哲學者といふ人でさへ、齒の痛みには勝てなかつたと云ふんだのに、ましてや私等如きものが勝てるもんですか、おう痛い。奥さん覺えていらつしやい。おう痛いッ。（挿繪――前川千帆）

道中膝栗毛

十返舎一九原作

早合點縮尻の巻

彌次郎兵衛北八、江戸を出てから二日目の泊り、箱根の山を突當りに望む小田原の町、明日は彼の山を越すのだといふ前の日の夕暮れだ。

『お早いお着きさまでございます……こら〱おさんよ、お客様だよ、お湯を取つて上げろ』

と、宿屋の亭主女中にチヤホヤと迎へられて草鞋を脱ぎ、ズツと通つて納まつた兩人。

『オウ〱姐や、早く莨盆に火を入れて持つて來ておくれ』

『オヤ北八、危いことを云ふぜ』

『何が危いンだ彌次さん』

『だつてよ、莨盆に火を入れたら焦げてしまふだらう、莨盆の中の火入れの中へ火を入れて來い

といふものだ』

『チヨツ、くだらない言葉咎めをしなさんな。そんな氣の長いことを云つてゐると、日の短い時にやア莨を喫まずにゐなけりやアならないや』

『ハ、、、、そりやアいゝが、腹が空いたが早く飯を焚いてもらひたいもンだ』

『オツと、彌次さんお前も云ふことが違つてゐるよ』

『何が……』

『飯を焚いたら粥になつてしまふぜ、米を焚くといふのが本當だらう』

『とんだ敵討だハ、、、』

『時に湯が沸いたら這入りたいものだ』

『オイ〳〵北公、湯が沸いたら熱くツて這入れまい、水が沸いたら這入るンだらう』

『ウフツ、そんなことを云つてたら切りがない、いゝかげんに爲ようぜ』

『左樣よな、いゝかげんに水が沸いたら這入りたいな』

などと、口から出るまゝフザケた言を云つてゐるところへ、

『お客樣お湯が沸きました、お召なさいまし』

と女中が知らせに來た。

『ウフ丶彌次さん、彼の女もお湯が沸いたと云つたよ。してみると、俺の云ふ方が人間に通りのいゝ言葉だ』

『ハヽヽぢやアまア、俺が先に一風呂這入つて、湯を沸かしたのか水を沸かしたのか見て來てやらう』

と彌次郎兵衛手拭を下げて風呂場へと出てゆく。

此の宿の主人は上方者と見えて、風呂桶は其の頃關東では見た事のない造り方、關西で流行る五右衛門といふ据風呂で、土を以て圓圍ひに築立てゝ釜とし、其の上へ餅屋のドラ燒を燒く如き鐵板の鍋を掛け、其れへ風呂桶を据ゑて、周圍を漆喰で塗固めたもの、頗る沸きが早く燃料も多く要らぬといふ經濟的の風呂だ。

で此の風呂には蓋といふものが無く、底板が湯一杯に浮いてゐるので蓋の代用もするわけ、湯に入る時には、其の底板の上から踏沈めて入るといふ仕掛になつてゐるのだ。

が、彌次郎兵衛は元來そんな勝手を知らない、浮いてゐる底板を蓋と思つて其れを取除けてしまひ、

『どりや、一ツ好い心持にならうか』

と、ドブンと片足踏込んだが、堪ツたものではない、底板を除けて釜の鐵板が直かにあるのだ。

『うわツ』

と叫ぶと、足を振るつて飛上つた。

『あツあツ熱ツつゝゝゝ、こいつア恐しい風呂があつたものだ。地獄へでも落ちやアしまいし』

と膽を潰しながら云つたが、然し這入り方を訊くのも氣が利かないと、暫らく[illegible]で膝を組んで考へてゐたが、フト見るとそこの便所の側に下駄があつたので、

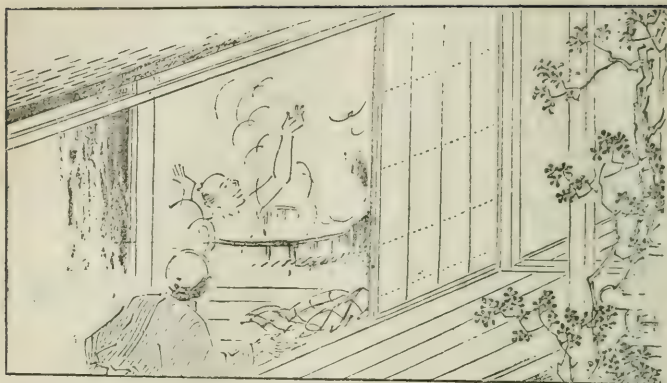
『ウム左樣だ、此の下駄を穿いて這入れば大丈夫だ、妙々』

と彌次郎兵衛面白さうに頷いて下駄を穿くと、ドブンと再び風呂に入つた。下駄を穿いてゐれば釜の上でも熱くない道理、すつかり好い心持になつて、

『素敵々々、あゝ好い湯だ……チヽツトンチトヽントン』

と口三味線か何かで鼻唄をうたつてゐる。ところへ北八待遠になつたと見えて、廊下から風呂の方を覗き込み、

『オイ〳〵彌次さんもう揚つたらどうだ、湯氣に上るぜ』
『オウ北公か、ちよいと俺の體へ觸つて見な』
『何故だ』
『もう此のくらゐ茹つたらいゝかな』
『ふざけちやアいけない』
『アハヽヽヽまアもう少し待てよ、直き揚るから』
『早く賴むよ彌次さん』
　と北八が焦れたさうに云つて座敷の方へゆくのを見すまして、彌次郎兵衛やがて風呂を揚がると、其の穿いてゐた下駄を片蔭へ隱してしまひ、素知らね顏で座敷へ戻り、
『さア〳〵早く這入つて來な、なか〳〵いゝ湯だよ』
『左樣か有難い』
　と北八手取早く裸になると、
『アリヤア〳〵』
　と喧ぎながら駈出して風呂場にゆき、突如飛込んだから堪らない。

『熱ツ、熱ツ、つゝゝゝウーツ』
と悲鳴をあげて魂消返り、
『オーイ彌次さん大變だ〳〵來てくれ、來てくれツ』
『何だ〳〵、やかましいツ』
『やかましいにもやかましくないにも、ウーン驚いた……一體彌次さん、お前は此の風呂へどうして入つた？』
『据風呂へ入るのに別にどういふ入り方があるものか。足を順に一本づつ入れてそれから胴半を浸けるのよ』
『チヨツ、そんな事を訊くのぢやアない……直かに釜があるのをどうして避けるのだといふンだ』
『釜は底一杯にあるのだ、避け様がない、初めの内は少し熱いが、がまんしてゐるとだん〳〵樂になる』
『馬鹿を云ふなよ。少し熱いどころか足が焦げついてしまはア……』

『だツて俺が入つたンだから不思議はない。まア〳〵辛抱して入つてごらん』

と云ひながら彌次郎兵衛をかしさを堪へながら座敷の方へ去つてしまふ。北八は忌々しがりながら、何かこれには工風があるだらうと考へるうち、隱してある彼の下駄を見つけて、

『はゝアこれだな』

と頷き、早速下駄を引張出して穿き、風呂の中へ入つて

『イヤ成程、これならいゝ』

とゆつくりと漬ツて、

『彌次さん〳〵』

と再た呼ぶ。

『何だうるさい、幾度呼ぶンだ……オヤ〳〵入つたな』

『ウム成程お前の云ふ通り、がまんしてゐると入れるもの

だね、あゝ好い湯だ。哀れなるかな石童丸はツンレン〳〵』
と北八如何にも好い心持さうにうたつてゐる。彌次郎兵衛、さては此奴も下駄を穿いて入つたな……と亦をかしく思つてゐる内、北八いゝ氣になつて長湯をしてゐるので、釜から直かに沸き立てる湯だから堪らない。尻の下へ熱湯がブク〳〵と上る爲め、立つたりしやがんだり、風呂の中で下駄を踏立て踏ちらし、遂々釜の底を拔いてベツタリジヤブンと尻餅を突いてしまつた。
『わあツ、うわツ、たツ大變々々』
と北八夢中でわめき立てる。湯は洐流れ溢れてシウ〳〵ザア〳〵。
『どツ、どうしたンだ北公……』
『どうもかうもない彌次さん、難船だ〳〵ツ』
『底が拔けたのかハヽヽヽ』
此の騒ぎに宿の主人が驚いて駈着けて來てみると、風呂場の周圍は洪水の有様、風呂の中では北八が尻の上らぬ大苦しみの體に、
『まア〳〵これはまア』
と呆れながら、主人は漸つと北八を抱へ出してみると下駄を穿いてゐるので又呆れ返り、

『イヤアお前さまは途方もないお人だ、下駄を穿いて風呂に入るといふ事がおますかい、阿呆もたいがいにしなされツ』

と主人も遂々怒り出す始末、北八はショゲる、流石に彌次郎兵衛も面白がつて見てばかりもゐられず、主人に詫びて釜の底を抜いた直し賃を出し、此の珍事漸つとの事で落着した。そこで例に依つて狂歌一首。

　据風呂の釜をぬきたる科ゆゑに
　　宿屋の亭主尻をよこした

と暢氣に詠みはするものゝ、訊くは一時の耻、訊かぬは飛んだ縮尻の損害と、つく〴〵感じて顏を見合はせたのだつた。

甘く見て辛い目の巻

据風呂の底ぬけ騒ぎで面目を踏潰した明る日、箱根八里を例の滑稽だくさんで越え、泊り〳〵に笑ひ草を殘し、いつか入つて來たのは遠州路、岡部を過ぎて藤枝の宿にさしかゝつた時のことである。

馬の暴れたのに驚いた田舎老爺が、うろたへて身を避けた途端、うか〳〵やつて來た北八にぶつかツた。

『えい危えツ』

といふ間もない、頑固な田舎ォ爺の體がぶつかツた勢ひで、北八よろ〳〵バツチヤリと水溜りの中へ轉つたから、さア承知しない、起き上ると老爺の胸倉をグイと取つて、

『汝ツ、眼が見えねえのか、寒鳥の黑燒でも喰らやアがれツ』

と小突き廻した。

『ハイこりや御免なさい』

『ごめんも六めんもあるものか。何の遺恨があつて此のお阿兄さんを水溜りへ轉がしたのだ』

『ハイ俺が轉したのぢやござらぬが、馬が刎ねたで俺が體がおツ飛んだでがす。それにさアその溜りは水ぢやア無え

だ、今刎ねた馬の小便でごぜえますだ』

『なツ何だ馬の小便だ、べツべツ、さう聴いちやア愈々勘辨できねえ』

『はアて解らねえ人だ。馬の小便だから馬の小便だと云ふだ。正直に云つたが何で惡いでがす、第一あやまつてゐるにハア堪忍しねえなら、俺だつてスツ込んぢやアゐねえだ。これでもハア、村ぢやア名主役も勤めた家柄の者でがすぞツ』

『名主も狸もあるものかツ』

と北八云ふが早いか、ポカリと老爺の天窓をくらはせる。老爺も彌々怒り出し、

『この野郎ツ子ツ』

と唸る樣に云ふとゲンコを固めた、こゝに大立廻りにならうといふ騒ぎ、少し後になつてゐた彌次郎兵衞、其の態

をみて驚き駈着けると、

『これさ〳〵、まア北八も了簡しろよ、爺さんもそんな面をしねえで……どつちもがまんすりやアいゝンだ』

と漸つとの事で兩人を引分ければ、北八も一ツくらはしたので納まり、老爺も不承々々ながらがまんをして、ブツ〳〵云ひながら去つてしまつた。

『オイ〳〵北公串戯ぢやアないぜ、あんな田舍老爺なんか捉めえて啖呵を切つたツて男振りは上りやアしない。江戸ッ子の面を汚しなさんな』

と彌次郎兵衛親分だけに叱言は云ふものゝ、老爺の藥罐天窓を凹ました今の北八の强がつた態度がをかしくもあり、果は笑ひながら、其の宿を過ぎ小川を一ツ越すとそこは瀨戸といふ所で、鳥渡した町並をなしてゐる。と其の町端れの茶見世の前を通りがかりにフト見ると、先刻喧嘩をした田舍老爺が床几に掛けてゐて、彼方からも二人を見附けて、

『これ〳〵最前の衆、寄らツしやれ〳〵、最前はハアえらく御無禮のウしたが、俺も惡かつたでごぜえます。仲直りにハア酒エ一ツ進ぜませうが……寄らしやれ〳〵』

と、すつかり機嫌を直した顏で、さも懷かしさうに呼止める。

『どうしよう彌次さん』
『どうしようも斯うしようもあるものか。先刻天窓をくらはした奴に、ノメ〱と酒を馳走になれるかい』
『其れも左樣だな……』
『さア行かう〱、爺さん、折角だが又緣があつたら馳走になりませう』
と云ひ捨てて行き過ぎようとすれば、老爺は飛出して來て、
『あれさマア、そんなこと云はずに寄つてくんなされ。俺ア何だか仲直りしねえぢや氣イ濟まねえでがす』
と無理やりに二人の袖を引いて離さうとしない。其れまでにされてみると二人は元來飲める口だ、咽喉がグビ〱して來る。
『なア北公、折角だからチョックラ休んで御馳走になるかな』
『ウム、こんなにいふのを無にしちやア惡からう』
と云へば、
『左樣でがすとも〱、ほんの俺らの意志だ……これさ御亭どん酒ェ早く出して下され。肴もド

ツシリ出して下され……それは左様と、ハア此所ぢやア店先で爲樣ねえから、奥座敷の方にしませうがの……』

と老爺は一生懸命優遇顔に、其の茶見世の奥の方へ二人を案内して草鞋を繙かせれば、二人もだん〳〵いゝ氣になつて、やがて運ばれる酒肴でゆつくりと飲み始めた。

飲むほどに二人は調子附いて、例のお喋舌でハシヤギ出せば、老爺も面白がり、

『イヤ人はつき合つて見る者だ。氣の好い衆だな……先刻ハア俺がいつまでも負け無え氣でゐたら、もつと痛え目のウ見なくばならなかつたど、よくマア了簡して下されたつけよハヽヽ』

と、取交しては盃を重ねる。

『なアに、此方も言過ぎて濟まなかつたよ、こんな氣前のいゝ仁とは思はなかつた。ほんたうに濟まねえ〳〵』

と北八が云へば、

『イヤまつたくだ、田舍にもこんな粋な旦那どんがあるから恐れ入るよ』

などと、彌次郎兵衛は只で飲める酒の有難さで追従たら〳〵、やたらに呷りつける。

其の内老爺は、

『年寄るとハア小便が近くて爲樣ねえでがす』
とさも面倒さうに云つて、便所へと起つて行つたが、その長い事いつまで經つても戻つて來ない。
『ずゐぶん長い雪隱だな』
『老爺いゝ機嫌で大分飲んだから、雪隱の中で眠つてゐるのぢやアないか』
『左樣かも知れないハ、、、、。何でも介はない、勘定は向ふ持だ、其の間にウンと飲まうぜ』
『よからう、さア注いでくれ北公』
『オツと來た』
と兩人亦呷りつけ〳〵、さらに空徳利を並べ立てたが、小半時經つても老爺はまだ便所から出て來ない。
『オイ〳〵彌次さん、老爺はまだ出て來ないがどうしたンだらう？』
と北八が云ひ出すと、
『ウーム少し變だな』
と兩人少し不安な氣持になつて來たので、ソワ〳〵しながら女中を呼び、

『姐や〳〵、こゝに居た老爺どんは、まだ雪隠に入つてゐるかい』
と北八が訊けば、
『いえ彼のお客さんは、とうの事お歸りになりました』
と女中は云つた。
『えツ歸つたツ』
と兩人聲を揃へてキヨロリとした眼を向けながら、
『其れで、勘定はして行つたか？』
と訊けば、
『いえ、御勘定は二人のお客さんから澤山貰へ……と云はれました』
と女中は二人の顏を見返しながらいふ。
『えゝツ』
と思はず奇聲を揚げた兩人、息を彈ませて顏を見合はせ、
『やツやられたツ！』
と、あいた口が塞がらなかつた。

凹まされた薬罐の仕返し、是非もなく勘定は此方持といふ辛い目に遇つて、折角飲んだ酒も醒め、あきらめの爲例の一首、

　　御馳走と思ひの外の始末にて
　　　腹もふくれた面もふくれた

謀計川ながれの巻

大井川の増水を連臺に乘つてヒヤ〳〵しながら渡り越し、金谷の宿から小夜の中山へかゝる頃降り出した雨、道を急ぎ、日坂で宿を取つた其の夜、雨は彌々ぬける程降つたが、明る朝はカラリと晴れた素敵な天氣に、勇んで其の宿を出た彌次郎兵衛北八、鹽井川といふ川の邊へ来ると、

『こいつアいけない、オイ北公、昨日の强降りで橋が落ちたと見えて、みんなザブ〳〵歩いて渡つてゆくぜ』

『なアるほど……だが大して廣い川でもないからわけはあるまい。佐々木梶原なら池月磨墨だが此方は膝栗毛に鞭を打つて一番威勢よく渡らう』

と、兩人尻などからげて支度をしてゐると、其の傍に佇つて考へてゐた京上りと見える座頭の

二人連れが、歩いて渡ると聞いて心配さうに、

『もし〳〵少々伺ひますが、川水は膝ぐらゐまでありませうかな』

と、一人の座頭が北八の見當へ耳を向けて訊いた。

『さうさ、膝の上を越すかも知れない、何しろ流れが早いから氣を着けて渡ることだ』

と、其の座頭流れの方へ耳を傾けたが、やがて足で探つて小石を拾つて、川の中へポンと投げ込み、其の水音を聽いて、

『ハヽア……イヤ成程早さうな流れの音ぢやな』

『ムヽ此の邊がどうやら淺い樣だ、これこれ猿市ッ』

と連れの座頭を呼び、

『二人共脚袢を取るのも面倒臭いから、お前だけ取つて俺を背負つて渡つてくれまいか』

と云へば、猿市白い眼を剝いて、

『そんな馬鹿なはなしがあるものか、お前こそ俺を背負ふがいゝ』

と負けてゐない。

『兄弟子に向つて生意氣な、仕事も腕も鈍いくせに……』、

『そんな狡いことを云ひなさるな、ぢや、ジャン拳をして負けた方が背負ふ事にしよう』
と云つた。
『イヤ左樣ぢやな、其れも面白からう』
『ではよいかな犬市、そらジャンケンポン』
『ジャンケンポン』
と互ひに片手でジャン拳をしながら、片手を握り合つて勝負を調べてゐたが、紙を出した犬市が石を出した猿市の手を握つて、
『さア勝つたぞ〱』
と云へば、猿市は口惜しがりながら、
『えゝ忌々しいが是非もない……そんなら此の風呂敷包を背中へ結んで、それ〱よしか、俺に背負さるがいゝ』
と、手早く支度をして背中を向けて待つてゐる。と此の樣子を見てゐた彌次郎兵衛は、これは有難い妙々と領きながら、横から廻つて巧く猿市の背中へ乘つてしまつた。
左樣とは氣の着かない猿市は、連れの犬市と心得て其の儘ザブ〱川に入り、流れを蹴つて難

なく向ふへ渡り越した。と此方の河岸に取残された犬市、
『こらよ猿市、どうしたのぢや、早く渡さぬのか、何をしてゐる〱』
と呼び立てるに、向ふ河岸で其れを聴いた猿市。
『何を吐すのぢや犬市、たつた今背負つて渡してやつたではないか。又其方へ行つて俺を騙るのか。ふざけるな〱』
と腹を立てゝ怒鳴つてゐる。
『馬鹿を云ふな猿市、俺は先刻から此方に佇つて待つてゐるのぢや。汝ばかり先に渡つて太い奴だッ』
『太いとは貴様の事ぢや』
『こりやヤイ猿市、汝ツ兄弟子に對つて言語同斷……えい早く來て渡さぬかツ』
と犬市は漸よく白い眼を剝き出し、烈火の如く怒つてゐるので、猿市も是非無く再び川を渡り返し此方河岸へ戻つて、
『さア〱さつさと背負され〱』
と澁々ながら背中を向ければ、北八占めたりと彌次郎兵衛の如く、横から密つと行つて背負さ

つてしまつた。
猿市、又も何にも知らずに其の儘川の中へザブ〳〵、犬市は急き込みながら、
『これこれ、猿市、どツ、どこにゐるのぢや〳〵』
と呼び立てゝ探し廻れば、川の眞ン中まで行つて氣の着いた猿市、
『オヤツ』
とばかり、背負つた北八の體を片手で探り撫でて、
『やツ此奴ツ』
と憤然として吐きつける樣に云ふが早いか、背中を搖つて、北八を川の中へドブーンと振落した。
『ひやア』
と叫んだ北八、濡鼠の半身を出して手足を藻搔いたが、水は滿々、流れは早い。
『たゝゝ助けてくれーえツ』
と悲鳴を響かして浮きつ沈みつといふ有樣。
流石暢氣な彌次郎兵衞も驚き慌てゝ川へ飛込み、

『さアしつかり俺に掴まれ〳〵』

『ウン、プツプツプル〳〵』

と北八は水を吹き〳〵、漸つとのことで引揚げられて、危い息をホツと吐いた。

『ハヽヽ何といふ有様だ。その濡れ方ぢやア骨まで腐るぜ。まア何しろ着物を脱ぎな、絞つてやらう』

『ウームあの座頭酷い目に遇はせやアがつた』

『座頭が悪いンぢやアない、此方が悪いンだ』

『悪いと云やア全體彌次さんが悪いや、先へ背負さつて見せたからだ』

『ハヽヽ、だが北公、俺は川へ落こつては見せなかつたぜ』

『左様よ、落つて見せてくれりやア俺は背負さりやアしないや』

『ハヽヽヽそこで一首やらかした』

と相變らず、

陥りけり目のなき人とあなどりし

むくいは適面川のながれに

子供は正直おちやけの巻

北八は、川陥りの濡着物を、宿に着いてから乾して貰ふ事にして、着替へを出して着かへたりしてゐると、彼の座頭二人はいつか川を渡り、通り過ぎて往つた。

『ヤレ〳〵・危く江戸ツ子を一人川流れにする所だつたつけ』

『あんまり惜しくもない江戸ツ子だがね』

『左樣ぞんざいに扱ふなよ』

『ハヽヽヽだが盲人にあのくらゐぞんざいに扱はれりやア

世話がない』

などと喋舌りながら、彼の鹽井川から小一里、掛川の宿へ入つて來た。

と見ると、其の宿の取つきの茶店に、先刻の座頭の二人連れが酒を飲んでゐる。

『オイ北公ごらん、彼の座頭が酒を飲んでゐるぜ』

『ウム、奴等俺を川へ陥めやアがつて涼しい顔をしてゐやアがる。よし／＼、意趣返しをしてやらう』

と北八低聲で云つて、さらに氣着かれぬ樣に假聲をして、

『ハイ御免よ』

と云ひながら、彌次郎兵衛と其の茶店へ入り、知らん振りをして座頭達の傍へ腰を掛ける。

『おいでなさいまし』

と女中は茶を汲んで來て、

『何か召上りますか』

と訊く、北八は首を振つて、

『何にも要らない。お茶を呑んで休みさへすればいゝのだ』

と猪假聲で云つた。
彼の二人とは氣の着かない座頭達は、
『なア猿市、先刻の川へ陥つたベラボウ共は何うしたらうな』
『それ／＼ハヽヽ手を放して落とした時にはいゝ氣味だつたわい』
と云ひながら、猿市が猪口に一杯注いでチビリと旨さうに一口飲んで下に置くと、北八こつそり手を出して猪口の酒を呑んでしまひ、元の所へ置く。
『イヤもう太い奴等だ。人の背中まで奪ふ奴だから、何でもカスリを取る事ばかり心懸けてゐる奴に相違ない』
と猿市再び猪口を取上げて飲まうとすると一滴も無い。
『オヤ／＼、溢したかな』
と呟いてまた一杯注いで一口つけて下へ置く。北八又チョイと取つてグイと飲んでしまふ。
『何しろ、奴等は碌な者ではあるまい、大方護摩の灰かも知れぬテ』
と猿市、猪口を口の所へ持つていつたが亦空ツぽだ。
『はアてな……』

『何を考へてゐるのぢや、猿市』

『何を考へてゐると云つて、今注いだばかりの酒がなくなつた』

『溢したのぢやろ』

『ウンニヤ、前のは溢したと思ふが、今度のはたしかに溢さぬ……そんなことを云つて犬市、お前飲みをつたのぢやな』

『馬鹿を云へ、俺は俺の猪口で飲んでゐるわい。そんなことを云ふなら徳利を此方へよこせ』

と二人が云ひ合つてゐる間に、北八手早く徳利の酒を自分の茶呑茶碗にあけて、元の所へ置く。

『俺の猪口の酒まで干して徳利をよこせもないものだ』

とブツ〳〵云ひながら猿市徳利を取上げて注がうとすると、今度は徳利が空ツぽだ。

『やア〳〵〳〵』

『猿市何がやア〳〵〳〵だ』

『徳利に酒が無い……犬市、汝れ飲んぢまつたのではないか』

『とんだことをいふ、俺は今の先猪口に一杯しか飲まぬ』

『まつたくか……ハア、さては此の茶店の亭主が、盲人と侮つて横着をするのぢやな、よゥし、談判しよう、亭主どん〳〵』

『へい〳〵、何ぞ御用でございますか』

『こら亭主どん、俺等目が見えぬとて馬鹿にしなさるな。二合の酒が、猪口に二杯や三杯で空になるとはどうしたわけぢや。それを云へ、それをツ』

と、猿市は眼を白くし、顔を赤くしてイキリ立つて云へば、

『とんでもない、徳利充満にして上げた酒ぢや、溢しでもしなさつたのぢやらう』

と亭主も少しムツとした調子で云ひ返した。すると其の時、先刻から北八の狡い様子を店の前で見てゐた子供達が二三人、

『ワアイ〳〵座頭どんの酒を、みんな彼のをぢさんが、飲んでしまつた』

『悪いをぢさん〳〵』

『ツアイ〳〵』

と囃し立てるので、流石の北八面喰ツたが、茶碗を手に持つて見せながら、

『とんだことをいふ子供等だ、俺の飲んでゐたのはお茶だぞ〳〵』

と云つたが、子供達は正直だ。

『噓だアい〳〵』

『其の茶碗で酒を飲んだのだ。お茶ではないやアい』

『おちやけだ〳〵』

と、子供も洒落てまぜつかへせば、さてこそといふ様に、茶店の亭主は北八の顔をみて、

『成程お前は酒臭い、顔もえらう赤うござるぞ』

とキツといふ、側から猿市見えぬ眼を向けて怒るまい事か、

『汝れ横取をして飲みをつたのか、圖太い業ぢや』

とわめき立てれば、犬市も、

『目の見えぬ者ぢやと思うて悪い事をしくさるツ。今日は太い奴にばかり出會ふ日ぢや』

と口惜しげに云つた。

『これさ〳〵、俺は酒などは飲まぬといふのに……俺は茶に醉ふ癖があるのだ』

と北八まだ強情を張つて苦しい言譯をすれば、そんなことでごまかされない猿市は、

『茶に醉うて酒臭いやつがあるかい。こりや亭主どん、此の人の飲んだ茶碗を取つて嗅いで見な

され。酒臭ければ其れが證據ぢや』
と、動かぬ所へ氣を着けて云つた。
『なるほど左樣ぢや』
と早速亭主は茶碗を嗅いで、
『ヒヤア、臭い〱、たしかぢや〱。こりやお前達が酒代を拂はツじやい』
と云へば、北八もモウ是非がないとは思つたが、
『酒代を拂ふのは嫌だ、お茶を飲んだのだから茶代なら拂はう』
と負惜しみなことを云つた、亭主は苦笑ひをしながら、
『左樣か、そんなら茶代で宜しい、お茶が二合で六十四文貰ひませう』
と云ふ。
『えゝ何だ茶が二合だと、途方も無いことをいふな』
と北八が亦力みかゝるのを、彌次郎兵衛見兼て、
『これさ、お茶でも醉つたのだから其れだけの勘定を拂つてしまへ。どうも今日は日が悪い』
と云へば、

『拂ふのがあたりまへぢや』

と猿市は威張りながら考へた顔をして、

『ハヽア、大方お前方は、先刻の背負さつた奴等だな。其の上酒まで背負さらうとは、まるで泥棒ぢや』

と吐きつける。

『ナニ泥棒だと、此のど盲ツ』

と北八起ちかゝつて喧嘩腰になるのを、彌次郎兵衛亦押止めて、無理やりに勘定を拂はせ、手を引張る樣にして、

『さア〳〵行かう〳〵』

と茶店を出て足早に此の宿を通り過ぎ、ホツと息をすると、

『串戯ぢやアないぜ北公、智惠の無い事をしたものだ。俺ア冷汗をかいちやつたぜ』

と叱言たら〳〵で、例の狂歌をひねり出した。

する事もなす事も皆茶々無茶苦
茶碗の香りなちやけない酒

起すまじき慾の巻

京大阪をふざけ巡つた彌次郎兵衛北八は、元來た東海道を眞直ぐに江戸へ戻るほど、いそがしい體の持主でない、暢氣なついでに木曾街道へと志ざし、播州路から近江へ入つて、彼の八景を一日に觀る琵琶湖の風光に、例の狂歌などを詠みちらし、名代の膳所の城下へさしかゝつた時、前髮立ちの十才ばかりの子供が、犬をけしかけながら駈出してゆく拍子に、何やら紙に包んだ物をカラリンと好い音をさせて落して行つた。其れを見かけた彌次郎兵衛、

『オヤツ』

とばかり、後から行つてをしへもせずに拾ひ上げると、ニヤリと笑つて其のまゝ懐中へ捻込んだ。北八チラと其れを見て、

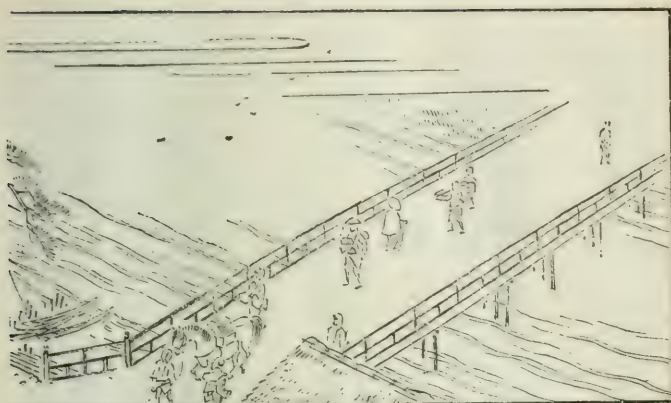
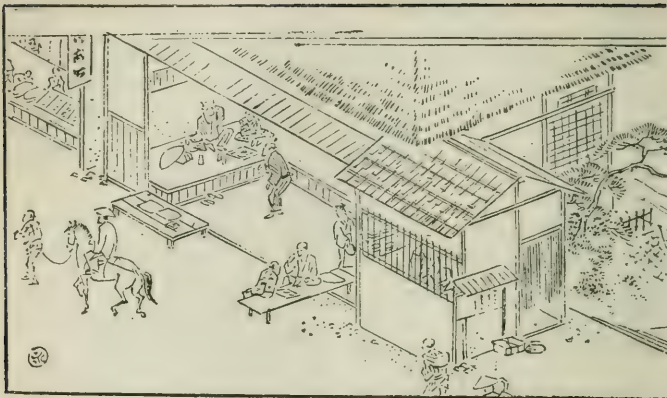
『オイ彌次さん、何だ〳〵』

と駈寄れば、

『シツシツ、大きな聲をするな』

と前後を見廻しながら、

『いゝものを拾つたンだ。まア密つと俺の懐中へ手を入れて探つて見ろ』
と云へば、
『どれ〳〵』
と北八は彌次郎兵衛の袖口から手を突込んで探り廻す。
『ウフヽ、擽ぐつたい、そこは臍だ〳〵』
『ふーむ、臍を拾つたのか』
『馬鹿な事をいふな、臍を拾ふ奴があるか……それ〳〵、これだ〳〵』
と云へば、北八探り當てて、
『イヨウ、こツ、これは小判だ〳〵』
『これさ、大きな聲をするなよ……なんとまア天道様は餘程氣が利いてゐるぢやアないか。定めし俺たちが道中で不自由だらうと察してお授け下しおかれたものに違ひない。其の思召を粗末にしては悪いから、早速先へ行つて旨い物で一杯やる事にしよう』
『ウム、そいつは奇妙頂禮だ。又もや御意の變らぬうちに、急いでいゝ茶屋を見つけよう』
と、やがて瀬田の長橋へ來る。

此所は彼の豪傑田原藤太が三上山の大百足を退治したに依つて名代の所だ。
瀬田の町の兩側に軒を並べた茶屋々々から、女たちは爭つて聲をかける。
『あんた方これへお入りな、お仕度なさらんかいな』
『名物の蜆汁に、鰻の附燒、鮒のお刺身もござります』
『お休みな〳〵』
と喧ましく呼立てる。
『さア彌次さん・今の天道樣から授かつたやつで奢つたらどうだ、そこの茶屋がよささうだ』
『オツと宜からう』
と、二人は店つきのいゝ茶屋を見分けてズツと入る。
『ようお入り……御酒など上りなさるかいな』
『ウム酒か、酒も喰ふし飯も呑みやせう。何でもドシ〳〵持つて來い、懷中で金が唸つてゐるのだ』
と彌次郎兵衛が反かへツて云へば、
『まつたく運は天にありといふがほんたうだ。彌次さんがそんな氣前者にならうとは思はなかつ

た……さア〳〵、何よりも早く酒を持つて來てくれ』
と北八は咽喉を鳴らしながらいふ。其のうちに口取肴に銚子盃を持つて來る。
『イヨウ來た〳〵有難え。どれ始めよう。北公やつて見な、なか〳〵好い酒だ』
『なるほど素敵だ』
『だが、此の蜆はいやにガリ〳〵して食ひ憎いな』
『オイ〳〵彌次さん慌てちやアいけない。ガリ〳〵する筈だ、お前貝のまんま嚙つてゐるぢやアないか』
『アハヽヽ、こりやア少し慌て過ぎた』
と相變らず馬鹿を盡しながら、樂しさうに飲み合ひ、やがて充分に腹をこしらへると、
『彌次さん、おかげ樣ですつかり人間らしくなつた』
『どう考へても天道樣は有難え……それぢやそろ〳〵出掛

ようかな。オイ〳〵御亭主さん勘定をしておくれ。時にお世話だが細いのが無いから此れを取替へてくれ、其の代り祝儀も遣るよ』

と彌次郎兵衛大きなことを云ひながら、先刻拾つた金を紙に包んだまゝ差出せば、

『へい〳〵有難うさんで……』

と亭主は走り寄つて受取り、其れを開いて見て、

『はゝア何ぢや、瀬田村雀屋忠兵衛忰忠吉と刻んである、こりや俺が家の子供の迷子札ぢや』

と云ひながら、彌次と北八との顏から迷子札を見比べてゐたが、

『ハ、、、こりやよう拾つて下さいました、先程子供に言付けまして、膳所の飾屋へ取りにやつたのでございましたが、ツイ途上で落したとの事で、きつい叱言を云つてゐた

所でござります。まアあんた方がお拾ひなされたのでえらい仕合はせ、有難うござります』
と迷子札を頂いて云ふ。
『えツ何だつて』
と彌次郎兵衛は瞻をつぶし、
『そツ、そりや迷子札か、をかしいぢやないか、ドレ見せなせえ』
と手に取つてみて、
『ふーむン、なアるほど、形も重味も小判そつくりだが、迷子札に違ひない、やれ〳〵』
と情けない顔をする。亭主は聴えない振りで横を向いてゐる。
『オイ〳〵彌次さん、そゝツかし過ぎるぢやアないか。よく紙を開けて見てから懐中へ入れゝばよかつたのだ』
『うーむン』
『唸つたツて追つかない、さつさと勘定をした〳〵』
と北八も共に面目を踏潰してすつかりショゲ返へる。
『イヤハヤ御亭主飛んだ戯談を云つて濟まなかつた。それぢや今度はほんたうの勘定をしよう、

幾何だい』

『ハヽヽえらい面白い方々ぢや、へい勘定は六百五十文でござります』

『左様かい、なか／＼安いな』

と、澁々顏でこんなごまかしを云つて勘定を濟ませて、其の茶屋を出でれば、北八は彌次郎兵衞を振顧つて、

『えゝオイ彌次さん、惡い事は出來ないものだな』

『ウム天道樣のお授けだと思つたら、天道樣の罰が當ツちまつた、忌々しい』

と彌次郎兵衞首を捻つて、例の狂歌を詠んだ。

拾ひ物せし代りとてむだな錢
捨てしは慾に迷ひ子の札

用心はすべきものゝ卷

拾ひ物の失敗を大笑ひに笑ひながら、いつか守山、武佐を過ぎて、相の宿淸水がはなといふ所に入つた頃は、もう日が暮れて、足元が暗くなると共に、したゝか飲んだ酒のおかげで疲れもし

たので、早く宿に着かうとするのだが、まことに佗しい相の宿で、宿屋らしい宿屋がなく、たまたま在るのは、六部や順禮が泊る木賃宿、

破れ行燈が心細く燈つてゐるのだつた。

『なア北公、次ぎの宿まで行く根がぬけたから、此の木賃で往生しようか』

『此の上歩いて行倒れになるよりはまだ宜からう、がまんして泊らう』

と、其の煤けた軒の薄汚ない木賃宿へ入つた。

亭主が出て來て、

『さアさ、上らんせ〳〵』

と、如何に彌次北でも、六部や順禮を客にしてゐるこんな宿屋では好いお客に相違ない。汚ならしい女房共々チヤホヤと迎へ入れた。

『さア〳〵お客様、圍爐裏の脇へ寄らつしやれ』
と女房が云へば、
『お疲れさんやろ』
と亭主も世辭よく、やがて膳立などをして運んで來たはいゝが、缺けた茶碗に剝げた膳の汚れたまゝ、無性臭い事お話しにならず、流石の彌次も北八も大閉口の體。
『ヤレ〳〵、大變な家へ泊つちまつたものだな』
『そりやアいゝが彌次さん、汁の中も、皿の物も、みんな茗荷ばかりはおどろいたなア』
『此の邊は茗荷が名物かも知れない』
『名物だと云つて、これぢやアあんまり名物過ぎらア』
などとブツ〳〵云ひながら、其れでもどうやら晩飯を濟ませて、氣味の惡い汚れ蒲團にくるまつて寝たものゝ、眠れればこそ、臭いのと寒いのでマヂ〳〵してゐると、兩人

が眠つたと思つたのか、宿の夫婦は圍爐裏の傍でヒソ〳〵と話してゐる。

『なアかゝあ、あれだけ茗荷喰はせたら、彼の客物忘れるに違ひない。先刻見たら財布を佛壇の所へ入れた様子ぢやが、明日の朝また茗荷を喰はしたら、彼の財布置いてゆくに違ひないぞ』

『左様したら、わしに袷一枚こしらへて貰はうかいな』

『えゝとも〳〵』

と恐ろしい話、茗荷を喰べると物忘れをするといふ所から巧んだ膳立、これを寢耳に聴いた彌次郎兵衛は、密つと北八の横ッ腹を突いて、聲を忍ばせ、

『オイ〳〵大變なことを云つてるぜ』

『ウム、聴いてゐる〳〵』

『太い奴らだ、明日はさつさと起きて、さつさと出掛けようぜ』

『其の事だ』

と、眠れぬまゝに打合はせて用心し、密つと佛壇の中へ預けて置いた財布を持つて來て懐中へ入れてしまひ、やがて其の明る朝、出された膳を喰ふ振りをして喰はずに、そこ〳〵にして其の木賃を出て去つてしまつた。

後を見送つた宿の夫婦、

『うまくいつたぞ、かゝあ、たしかに佛壇に入れた財布を取りにゆかずに、彼の客は忘れて去つたぞ』

『ほんまに茗荷はよく利くなア』

と云ひながら佛壇の方へ行つて、其の中を見れば、何の事財布は無かつた。

『やッこりや不可ん、財布はいつの間にか持つて行きくさつた』

と亭主が口惜しさうな顔をして云へば、

『まッ左様かい、ぢやが、彼れほど茗荷喰うたから何か忘れて去つたやろ』

と女房が云ふ。そこで亭主はキョロ／＼と見廻してゐたが、フト氣が着いた樣に、

『やツ、彼の客、勘定を忘れて去つたツ』

と叫んだ。

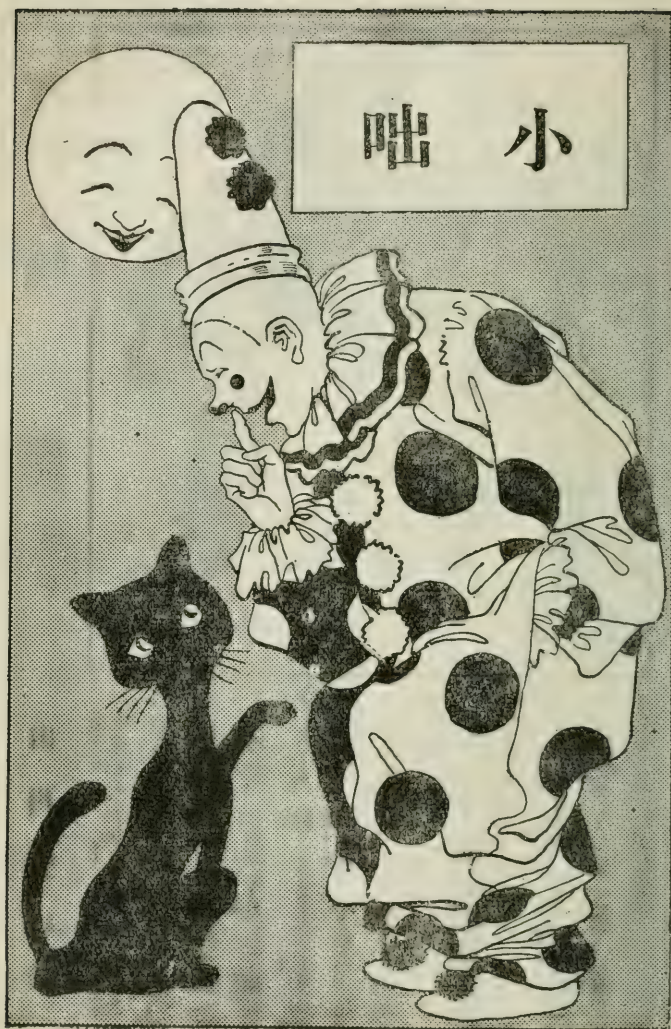
急ぎ歩に、彼の木賃宿を遠く離れた彌次北は、例によつて一首詠んだ。

　　宿賃を忘れて來しは名物の
　　　冥加至極の仕合せ／＼　（挿繪――山川永雅）

道中膝栗毛を讀んだ者は皆、著者の十返舍一九は、どんなに剽輕な愉快な先生だらうと想像した。

そこで、フアンの一人が、無理に賴んで一九と共に旅をしたが、一九は、彌次喜多で見るやうな野放圖な先生ではなく、どつちかと云へば寧ろ潔癖で、極めて七むづかしい先生だつたので、すつかり閉口してしまひ、たうたう中途から口實をもうけて遁げかへつてしまつたといふ事である。

池田永一治

小咄

江戸小咄

因果は廻る

山川秀峰畫

往昔行つた例もあるから差支へはあるまいと、姥捨村の百姓が、我子に片棒を擔がせて祖母を山へ捨てに行き、ヤレ／＼是れで重荷を下したと、歸らうとして息子の手を見ると、畚を持つてゐるので、

『そんな物は、もう要るまいから捨て終へ』

といふと、息子は眞面目な顔をして、

『まだ要るとも、もう何年かしたら、阿父さんお前を捨てに來なけりあならないがなア』

夫婦喧嘩

二言三言いひ爭つた末に、出て行けと云はれた女房が、すつかり着替へて髪を撫でつけ、

『アイ左樣なら』と、涙ぐむ風情に、亭主は遉がに不愍うになつたが、そこが男と、ぢつと見てゐると、悄然として店から出ようとしたので、

『店から出ることはならねえ』

と呶鳴つた。

それではと、裏口へ廻ると、

『其所からもならねえ』

『それぢやア、どうするの！』

『出所が無けりあ、出ねえで居るまでさ』

梯子

ぶん〳〵怒りながら、隣家から歸つて來た男
『隣の老爺の吝みつたれにも呆れ返る。砥石を借りにやれば、こちらへ來て研げといふし、薪割を貸せといへば、こちらへ來て割つてくれとぬかす。實に馬鹿にしてやがる、近所の手前もあるから、一つ懲らしてやらなければ、腹が癒えない』
と言つてゐるところへ、隣家から、梯子を借りに來たので、
「ハイ〳〵、お易い御用でございます。どうせ空いてるのだから、どうぞ、此方へ來て、上つて下さいまし』

河豚汁

河豚を貰つたが、氣味が惡いので、誰かに最初試食せて見て、中毒らなかつたらば食べませうと、河豚汁を拵へて向ふに臥てゐる乞食に遣り、暫くして見に行くと乞食は少しも異狀が無いので、それなら安心だと、自分も河豚汁を食べて終ふと、乞食が來て、

『モシ、旦那樣、お汁は召上りましたか』

といふので何氣なく、

『ア丶今食べたよ』

といふと、乞食が喜んで、

『旦那樣が上つて大丈夫なら私も頂戴致しませう』

流行語

殿様が、家來を呼集めて、流行語は一切禁ずると言ひ渡すと、家來の中で、

『こいつあいゝ』

と、うつかり口を辷べらした。

殿様が怒つて、

『今云ひ聞かせてゐるのに、我言葉を用ゐぬのは不埒な奴だ』

といふと、家老が、

『只今のは流行語ではござりませぬ。上様のお羽織を賞めまして、濃茶はいゝと申上げましたのでござります』と胡麻化したので、殿様が笑ひ出し、

『ナルほど、こいつあいゝ』

賣卜

賣卜者の店先で、近所の茶目公連が、棒切を持つて飛び跳ねて騒ぐので、客人が些しも寄り付かないから、易者はすつかり業を煮やし、やかましく小言をいふと、子供達は馬の耳に念佛で、ヤレこの易者は當らないの、ヤレ下手糞だなぞと近所へ觸れ廻はつて歩くので、易者はカン／＼に怒り

『此奴等は、稼業の邪魔ばかりしやアがる奴だ。一體汝等は何處の餓鬼だ』

と、どなると、子供達が、

『聞くまでも無え、賣卜者なら、叔父さん當てゝ見な』

色紙

骨董屋の店を通ると、古い色紙へ俳句を戯書したのを、この間紙屑と一緒に賣つたのが、恭しく飾られてあるので、ア、乃公の書も彼アして見ると萬更馬鹿にも出來ないと自惚れ、

『モシこの色紙は何價です』

『ヘイ、二分に致して置きます』

『二分は高い。一分に負かりませんか』

『コレは酷い。此色紙は極く古物で、中々二分や三分で賣るのぢやありませんが、あんな下手糞な字が書いてあるので安いのです』

『……　……』

嫁姑

箸の上げ下しにも嫁をいびる姑の居る家へ、町内から集會を觸れて來たので、嫁が出て、

『今日は、主人は生憎留守でございますが、歸りましたらば、さう申しませう』

といつて歸したのを、姑が陰で聽いて居て、

『今のは何のお寄合だえ』

『アイ、何でもこの町内に嫁をいびる姑樣が二人あるさうで、それを皆さんから異見をして矯させようといふ集會ださうでムいます』

『ハテナ……、もう一人は一體誰だらう』

金持

『私の家には金が千兩もあるのに、お前は何故私を尊敬しないのか』と金持が威張ると、貧乏人が、

『あなたが、千兩持つて居ようが居まいが、私には何の關係もありません。私はあなたを尊敬する必要を認めませんよ』といふので、

『では半分遣つたら尊敬するか』といふと、

『さうなるとあなたと同等になるから尊敬は出來ません』といふ。

『では私の錢を殘らず遣るから尊敬しろ』といふと、

『否々さうなると、あなたは一文無し、私は金持、尚更尊敬は能きません。』

芝居では泣かれぬ

『金を拾つた時の氣分は嬉しいものだ』

と他人がいふから、

『そんなに嬉しいものなら、乃公も拾つて見よう』

と、十圓紙幣を疊の上に投げ出して、拾つ見たが、ちつとも嬉しい氣分にならない。これでもか、これでもかと行り直してゐる中にさつと窓から吹込だ風で紙幣が飛出すと、其男大いに驚き。

『こりや大變だ』

と、血眼になつて座敷中を引つ搔き廻し、やつと見付け、

『ヤレ〳〵嬉しかつた』

江戸小咄

池田永一治畫

手數が省ける

妹『ひどいわ、ひどいわ、姉さんッたら、お林檎を、半分わけにするつて云つておきながら、自分では大きな方を取るんだもの』

姉『ぢやあ、あんたに切らせたらどう切るつもりだつたの』

妹『あたしなら、大きく切つた方を姉さんにあげてよ』

姉『さうでせう――だから大きい方をあたしが取つたのさ』

据風呂

田舎からの泊り客を据風呂に案内したが、半時ばかり何の音沙汰もないので、早くあがりなさいといふのも失禮と、湯殿の口から、『御緩りとお入り下さい』といへば『ハイ』と返辭があつた。まづ安心と落ついたが、その後待てど暮せど上つて來ない。不思議に思つて又『御緩りとお入り遊ばせ』と聲をかけたら又返辭があつた。その後、稍〻久しく經つてから、お客が海老のやうに赤くなつて上つてきたので、連れの客驚いて『長湯だつたナ』といへば『ハテ御馳走かもしんねえが、湯を強ひられるのも、せつねえもんだぞ』

使

淺草の仁王、善光寺へ使に行つて戻り、あの佛頂面を一層不機嫌にして居るので、觀音不思議に思召し、

『仁王、どうぢや、口上のおもむき、慥かに申し傳へたであらうな』

と聞き給へば、

『釋迦が寢てゐて挨拶しましたから、とても癪に觸つて、何にも云はずに戻つてよゐりました』

と云へば、

『では、其時、其方もおほかた立つてゐたであらう』

値ぶみ

何でも値ぶみしなくては氣のすまぬ男、『先生、この茶碗は九谷で、結構ですな、五圓位お出しになつたでせう。これは紫檀の茶盆で、へえ三圓ぢやお安い。このお茶は玉露ですな。一斤二圓は致しませう』と、一々見まはしてはぶみ打を入れるので。『お前さんは惡い癖だ。やめたらよからう。第一、品がわるい。人に嫌はれる。やめたらよからう』と諭すと『イヤ有難う。先生なればこその御注意、我身に取て千金の値……』『それそれ、言ふあとから千金などと……』『イヤ今後は誓て申さぬ。もし違ひましたら罰金百圓』

琴の爪

紙屑買、ある裏長屋の女房に呼込まれて紙屑を買つたが、其紙屑の中に琴の爪が三つあつた。紙屑買はお世辭のつもりで、

『琴の爪を持つておいでになるからは、昔は定めて御身分あるお方、世に連れてかうしたお暮しをなさると思へば、おいたはしう存じます』

女房、その言葉にそゝられ、

『まあ屑屋さんは御眼が高い、成程、私も以前はかなり豐かに暮したもので、その琴の爪も、近い頃まで五つ揃つて持つて居りましたが……』

入れ智慧

『先刻、集りの席でナ、酒を飲むかと聞かれたから、高くつて飲めやしねえ、だが酒の糟を食つてゐると答へたら、皆の衆に腑甲斐ないと笑はれた。何ぞ笑はれぬ工夫はないか』

と與太郎。

『馬鹿正直に答へるからよ、正宗を樽で取つて毎日飲んで居るのぢやといへ』

と、敎へられ、なる程と合點した。

次の日、敎へられた通り威張つて語るに、

傍の一人、

『そいつア豪氣だ。今日は何程飲んできた』

『知れたことよ、燒いて三枚さ』

倅の教育

寝床の中で、腹這になつて煙草を喫んでゐた親父、吐月峰をポンと叩いた煙管を投げ出して、

『おい、倅はもう起きたかナ？』

と大きな聲で聞くと、女房、

『まだですよ』

といふ。親父舌打ちして、

『チエツ、どうも仕様のない奴だ。コリヤお嬶、構はぬ故倅奴をたゝき起してやりなされ、昔から、朝寝をするやうな奴はロクな者になりやしない。何時も俺と一しよにばかり起きたがる』

どちらが

大安坐を掻いて、強か、きこしめしてゐた親父の許へ、息子も亦どこで飲んだか、ぐでん／＼に酔つぱらつて帰つたのを見た親父、酔眼をぐつと据ゑ

『コラツ、何だ。だらしのねえ恰好をしやがつて！　見ろ！　手前の顔は三つもあるぢやねえか。そんな化け者を乃公の家に入れるわけにはゆかないぞ!!』

『ナ、ナニを！　糞親父、誰が入つてやるものかい。頼まれたつて御免だい。こんなぐるぐる廻るやうな家なんか危なつかしくつて入れやしねえや』

自分の頭の蠅を追へ

『世の中にア随分、閑な男もあるもんですね、橋の下で釣をしてゐましたがね、一匹もかゝらないのに三時間も糸を垂れて居つた男がありましたよ』

相手の男感心して、

『ほほう』

『それを又、傍に蹲んで、退屈もせずに見て居る男がゐるぢやありませんか、随分上には上の閑人があればあるものですね。』

『そんなベラ棒があるかい』

『いいえ本當なんですよ。だつて私は始めから終ひまで見てゐたんですから』

早合點

問ふは一時の耻、問はぬは末代の耻と心得た田舎者、訪ねた家の主人の机の上に獅子の文鎭の置てあるのをみて、

『これは何でございます』

と訊くと、

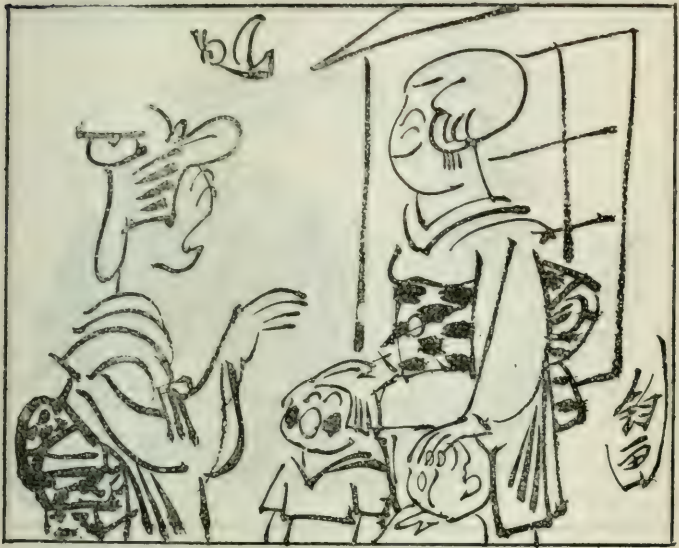
『これですか、これは文鎭ですよ』

と教へて呉れた。

一ツ物識になつたと大喜び、其の後ある社に参詣した折、左右にある大きな唐獅子のつくばへるを見てゐたが、得意顔で同件の人にむかひ、

『イヤ、これは大きな文鎭ぢやな』

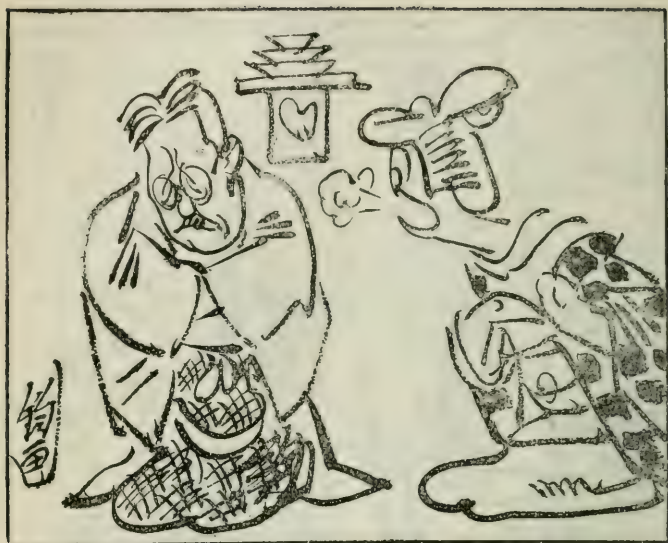
現代小咄

池部　鈞　畫

お互にね！

『奥さんは、大そう獨唱をお好みのやうでしたが、この頃は、ちつともお唄ひになりませんやうで御座いますね』

『子供が、二人にもなつたんですもの貴方――。近頃は、まるで自分の時間なぞはありませんわ』

『本當にさうですわ。子供つていゝものですね――お互に！』

『…………』

念には念を入れよ

『貴郎の果斷的な所は、男らしくて、私本當に頼母しいと思つてゐますが、もう少し熟慮なさると、尙更失敗がなくて好いと思ひますわ』

『如何にも僕は熟慮が足りないよ、その爲に大失敗をしたことがある』

『まあ、大失敗なんて……些つとも存じませんでしたわ、何時頃なんですの』

『もう十年も前の事さ』

『マア…それで、どんな事だつたの？』

『お前との結婚さ』

『…………』

町內 一

三軒つゞいてゐる洋品店のうちの一軒が
『東京一大安賣り』
といふ看板を出した。
その隣りの洋品店でも負けぬ氣で、翌日
『日本一大安賣り』
の看板をあげた。
又その隣りの家でも早速、その翌日、
『世界一大安賣り』
と看板を塗りかへた。
そこへ、又新しく越して來た洋品店、さて看板に何と書くかと見れば、筆太々と、
『町內一大安賣り』

ほんとは？

年末に、やつと買つてもらつた古着のコートを着て年始廻はりに出かけた細君、意氣揚々と友人の許を訪れ、その戻りに、後から着せてもらひながら、

『これは安物でしてね……』

『お立派ですわ。失禮ですが幾何程？』

『急いだものですから、出來合を買つたんですが、これでも十六圓よ……』

『えゝ、十六圓ですつて。古着屋つて隨分儲けるものね、これは妾が賣つたの……八圓で』

すると小聲で、

『ほんとうは十圓なの……』

疊が怖いか

『乃公の家は、代々船乗りで、乃公の親父も、祖父も、みんな難船して死んぢまつたんだ』

『それでも君は矢張り船員をやつてゐるぢやないか、海が怖くはないかね』

『貴方のお父さんや、お祖父さんは、何でお亡くなりになつたゞかね』

『みんな病氣で亡くなつたのさ』

『何處で亡なつたかね』

『疊の上で死んだよ』

『へえ……？　それでも貴方は疊が怖くはないかね』

革命とは？

犬も食はないといふ夫婦喧嘩に、いつもの通り花が咲いた。

勇敢極まる細君、

『口惜しい!! 畜生! 結婚する前は何ていつた。貴女は僕の女王だなんて、さんざ、妾を奉つておきながら、今更豚とは何だい。何ていふんだよう! えゝ口惜しい!』

もう昂奮から立ちかへつたゐた亭主、

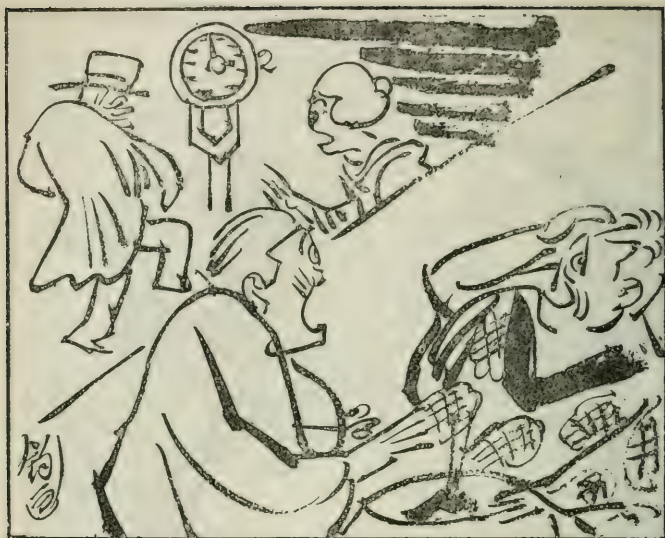
『それア言つたよ。確かに女王といつたさ。だがね、おい、あんまり女王が暴政を布くと、とかく人民は、共和國を建設したくなるんだぜ。オイ』

あてにならぬ熟練

自動車と紳士とが衝突した。轢き倒した紳士を助け起した自動車の運轉手、

『貴方が、ボンヤリして歩いてゐるから、こんなことになつたんです。私は、これでも、十二年も前から自動車の運轉をやつてゐるんですからね。熟練の私に失策などは決してある筈は有りません』

轢かれた紳士、足を撫りながら、

『でも、わたしは四十八年も前から歩いてゐるから、歩くことにかけては、君よりも熟練してゐる譯だがな――』

困つたもんだ！

『ヤア、早いネ』

『早くもあるまい、もう十時だぜ、さア出かけよう！　仕度をしたまへ』

『僕はまだ朝飯前だ』

『どうして、そんなに遲いんだ』

『君、實際、僕の妻には困つたものだ。毎晩二時頃まで起きてゐるんで、朝がおそくつてやりきれアしないよ。宵張りの朝寢坊といふんだからナ』

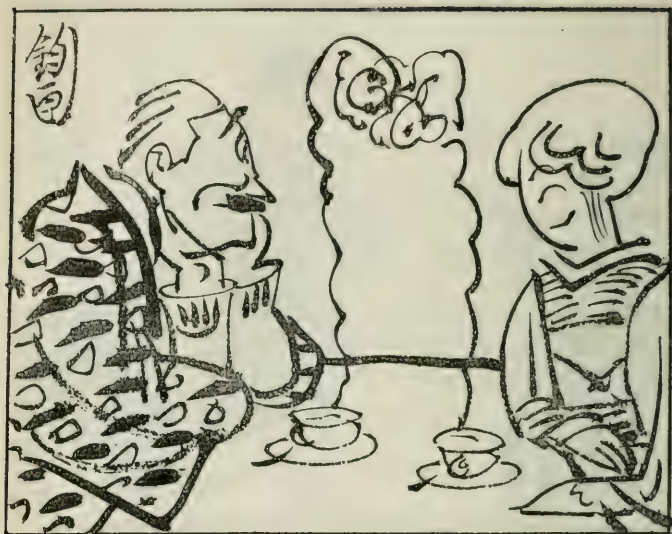
『ホウ、そんなに晩くまで一體何をしてゐるんだい』

『ナーニ僕の歸りを待つてるのさ』

山上山あり

因業な老爺が馬車に乘つてゆくと、狹い長い山道の曲り角で、向ふから來た青年の馬車にバッタリ出合つた。老人の方は、後へ戻るには七八丁も行かなければならないが、青年の方は一丁も戻ればよかつたが、剛情な青年は後戻りしようとしない。青年は、もの〻半時間も睨みあつた揚句、ポケットから新聞を出して悠々と讀み初めた。政治欄から社會欄、廣告まですつかり讀み了つて、さて相手は如何と顏をあげると、

『あいたら貸して下さい』

さすがの青年も默つて後へ引き返した。

趣味の問題

二人とも、結婚前までは、音樂會、運動會には、きまつて顏をあはせる程のフアンだつた若夫婦、紅茶をすゝりながら、

『貴郎！　この頃は、もう音樂會も運動會も、きらひになりまして？』

『なぜさ？』

『でも、切符がきても皆お返しになつて、お出かけにならないぢやありませんか』

『ぢや、お前は行きたいとでもいふのかい』

『いゝえ、さうでもありませんわ』

『それみろ、今更出るにも及ぶまいぢやないか……』と、互に顏見あはせて、莞爾。

頓智小咄

水島爾保布畫

惡戯の白状

新築の土藏の白壁に樂書を見付けた主人、小僧に向ひ、
『あれ程云つておいたに、此の白壁に樂書をしたのは誰だッ名前を云へ』
と小言を言ふと、誰も自分だと答へるものがない。そこで主人、面を柔げ、
『だが、惡戯書にしてはなか〳〵器用に出來てゐる。こんなに書ける奴は誰だらう』
と譽めると、小僧の一人得意になり、
『へい、實は私で御座います』

菩提を弔つてやる

名古屋の繪師大石眞虎に近所の菓子屋、或日又復例の大立廻りを始めたので、眞虎何思つたか、其場に驅付け、突然店にある菓子を往來に投出した。之れを見た夫婦、蒼くなつて忽ち喧嘩をやめ、

『先生、何をなされます』とつめよると、

『お前達は今迄殺せ〳〵と喚いてゐたが、何方が殺されても、一方も下手人として命がなくなれば當家も今日限りぢや。それで、死んだ後より生きてゐるうちに追福のため見物人に施しをした方が一層功德と思つたのぢや。』

其の後夫婦喧嘩は絶えてなくなつた。

埋めた五百兩

盲目が、用心のために、庭の隅にこつそり埋めて置いた五百兩を、隣りの男が知つて、盗み出して了つた。盲目、間もなくこれに氣がつき、何氣なく隣りに遊びに行き、四方山話の序でに、

『實は私は千兩のお金を持つてゐる。五百兩は或處に隱してあるが、後の分も追付けそこに埋めようと思つてゐる』

翌くる朝、盲目が庭の隅を掘ると、盗られた五百兩がちやんと埋めてあつた。

盲目はにつこりと笑つて、急いで別の場所に金を隱して了つた。

詩人の健啖

伊太利の詩人ダンテ、或富豪の邸に御馳走に呼ばれた。其頃は主人もお客も、食殘りの骨を食卓の下に捨てゝおく習慣だつた。惡戲好きの其主人は、そつと自分達の皿の骨をダンテの足下に押遣り、さて食事が濟むと、

『皆さん、ダンテ先生の御健啖には驚きました。あの食卓の下の骨を御覽なさい』

處がダンテは少しも騷がず、

『いや、私より御當家の御主人の御健啖には全く驚いてゐる始末で』と主人の足下を指して、『あの通り御主人は、骨迄すつかり鵜呑みにして何も御殘しになりません』

しやくりの妙薬

れつきとした立派な士、住吉権現に参詣する途中、ふとしやくりが出てどうしても止まらないので、切りに苦しがつてゐると、路傍に寝てゐた乞食、ムク〱と起上り、

『おのれ、親の敵、其處動くな』

と呼ばはつて、じり〱と詰寄つた。武士大いに驚き、

『コレ〱、人違ひを致すな。身共は人に敵と呼ばれるやうな事を致した覺え更にない。必ずともに逸まるではないぞ』と云ふと、乞食暫く武士の様子を見てゐたが。

『さあ、しやつくりが直つたら一文下され』

一そ射殺してやる

ビスマークと其友達が或日獵に出た時、其友達つい足を滑らして深い沼地に陷つたので、アプ〳〵しながら悲鳴を擧げ、

『ビスマーク君、助けてくれ、早く〳〵』

ビスマークも流石に驚いたが強ひて平氣な顏をして、

『馬鹿云ひ給へ。俺が其處に飛込んだら一緖に吸込まれて死んで了ふ。斯うなつたら迚も助からないし、俺も君が苦しむのを見るのが辛いから、一思ひに射殺してやる』

と獵銃の狙をつけると、友達大いに驚き死物狂ひに岸に泳付いたのでやつと助かつた。

バカッ……だな私も

番頭、或晩のこと廊下を歩いてゐると、曲り角で誰かとドシンと衝突つたので、いつも小僧を叱るときの癖が出て、つい、

『バカッ！』

と怒鳴つてから、暗闇をすかし、よく〳〵見ると、何ぞ知らん主人公なので、あわてゝ口へ手をやり、

『……だな、私も……。旦那、へエ御免下さいまし』

主人仕方なく、

『アヽ番頭さんか』

『暗う御座いますから御氣をつけなすつて』

蓼と鮓

『旦那樣、またお隣りから、鮓につけて食べるのだから、濟みませんが少しばかり蓼を下さい、と云つて來ました』

といふ小僧の言葉を聞いて主人、苦い顏をして、

『昨日も一昨日、もそんな事を言つて貰ひに來やがつた。今日も云つてくるとは實に圖々しい。よし、そんならお前も隣りに行つてかう云つてやれ』

『ヘエ、何んと云ふので』

『かういふんだ、いゝか。蓼につけて食べますから、お鮓を少しばかり下さいつてな』

支那小噺

太田雅光畫

虎の皮

虎が、獵師を喰へて山の中へ逃げ込んだ。その伜が驚いて弓をおつとり、虎を追ひかけ、矢をつがへて身構へすると、虎の口に喰へられた親父、

『足を狙へ足を……、皮にキヅをつけるなよ』

腰掛の脚

田舎の腰掛には、自然の木の股で脚を作つたのがある。

その脚が一本折れたので、下男に言ひ付けて、森の中へ見付けにやつた。下男は、斧を持つて出て行つたが日が暮れてから、素手で歸つて來て、

『または、いくらでもあるけんどどれもこれも皆上向きで、下向いて生えてるまたは一つも見つからねえだよ』

嘘

偶然古い知己に途上で出逢つた

『やあ暫らく』

と、向うから近よつて來る人を捉へて、

『おやつ、君はたしかに死んだといふ話をきいたがなあ』

『冗、冗談いつちやいけない、僕はかうしてピン〳〵生きてゐるぢやないか』

『さうかなあ……だが君は名代の嘘つきだからなあ、また僕を擔がうと思つてゐるんだらう……』

人に見せる着物

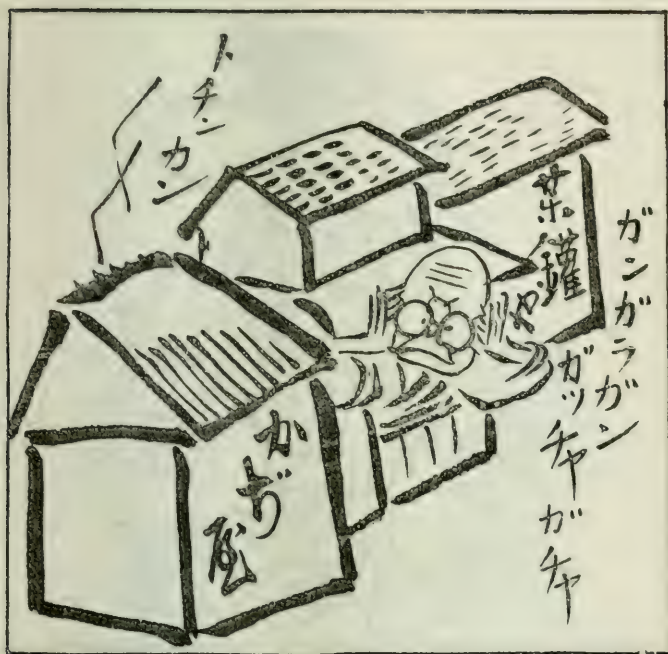
新調の一帳羅を着て街へ出歩く奥様、折角の衣裳を見てもらへないぢやつまらないと、反身になつて、その上しやなり／＼と態をつくつて練り歩いた。暫くして近所に遊んでる子供をとらへて、

『ねえ坊つちやん、今誰もわたしを見てはゐませんか』

子供『誰も見ちやアゐないよ』

そこで奥様肩を弛めて言ひました

『人が見てゐなけりやア一寸休むわ』

閑靜好きの隱居

閑靜を好む隱居、藥鑵屋と鍛冶屋の間にはさまれて、朝な夕な苦しめられてゐた。『若し兩隣が引越してくれるなら御馳走をした上だくさんの御禮を出さう』と云つてゐた。

間もなく二人が引越をすると云ふので隱居すつかり喜んで『それはお名殘惜しいやうな結構なわけで』と、その夜、酒よ肴よで盛んにもてなした。翌日、鍛冶屋が藥鑵屋の家へ引越し、藥鑵屋は鍛冶屋の家へ引越した。

大びらで内書事

兄弟の百姓があつた。兄貴が先へ歸つて來て飯の仕度をして出來上つたので、『オーイ、飯が出來たぞ』と畑の弟を大聲で呼んだ。『チョックラ待てよ、今鋤をかくして行くだ』これ又大聲で叫んだ。飯の時兄貴は『物を隱す時は内證にしろ、人に聞えるでねえか』とお說敎した。飯が濟んで畑へ行つた弟。あわてゝ歸つて來て、兄貴の耳のそばへ口を寄せ、聲をひそめて『オイ兄貴、まんまと鋤をぬすまれたわい』

家鴨に乘つて

客が來て、食事時になつても、『なんにも有り合はさないから』と云つて茶漬けもふるまはぬけちん坊にムッとしたお客は『刀を貸して呉れ、俺の乘つて來た馬を料理して食はうぢやないか』と言ふと主人驚いて、『お前さん、歸りはどうする量見だい』と聞くと『お前のところに澤山飼つてある家鴨を一羽借りて乘つて歸るまでさ』

夜着

見得坊の人が貧乏になつたので蒲團の代りにこもを着て寢てゐたが、子供はこもを着て寢ることを別に恥かしいとも思はずこもを着て寢る事を喋るので、親父たまらず『人が聞いたら夜着だと云ふんだ、夜着だと……』とたしなめた。或日親父が人と話をしてゐる時ヒゲに藁屑がくつついてゐるのを見て、『お父さん ヒゲの夜着をとりなよ』と子供が言つたので親父冷汗グツショリ。

西洋小咄

太田三郎

說教と救助

一人の子供が流れに落ちて、アップ〳〵ともがいてゐた。

と、折から通りかかつた或る男が、それを見て、いきなり小言をあびせかけた。

『ちえツ！　馬鹿だなあお前は。お前は何といふ輕率者だ。いつたいお前は、この川が深いつてことを知らなかつたのか。お前のお母さんは、きつと此處で泳いぢやいけないと云つて禁めてゐたんだらうのに。――ごらん、お前がそんなに苦しむのも、つまりは親の云ふことを聞かなかつたその罰だよ』

といつた調子で長々と辯じたてつゞける。子供はたまりかねて叫んだ。

『小父さん！　お說法はもう澤山。とにかく、早く助けておくれよ。上れないで困つてるんだから。それからいくらでも小言をお云ひよ！』

錯誤の錯誤

主人『おい〳〵』

小僧『へえ〳〵』

主人『先刻の二通の手紙は、ポストへ入れてくれたどらうね？』

小僧『へえ、たしかに入れました。だが旦那、ありや切手が間違つて貼つてありましたぜ。外國行のに十五文の切手が貼つてあつて、却つて內地のに二十五文の切手が貼つたつたんぢあありませんか』

主人『あツ！　さうだつたか。で、どうしたんだい？』

小僧『いや御安心なさい。私が、ちやんと間違ひを直しておきましたから。なあにね、二通の手紙の宿所を、あつちとこつちと書き換へておいたんですよ』

主人『…………』

――輕率な好意ほど對手にとつて迷惑なものはない。

痛い賄賂

西班牙のある王樣が、戰爭で荒された或る地方の人民たちに、澤山の救恤品を下さるといふので、その邊の人たちは、皆ぞろ〳〵と出かけていつた。ところが、宮城の門番がひどく狡い奴で、王樣からの下され物を、後で半分自分に頒けてくれゝばよし、さもなければ一歩も門內へは入れないと云つて、頑張つた。で、仕方なくみんなは、要求を容れることにして、やつと城內へ這入つた。やがて、人民たちは、王樣の前へ導かれていつた。すると、その中の一番正直ものである一人の百姓が、

『王樣！　お願ひでございます。どうぞ私達を、一百づつ笞打つて下さいますやうに』

王樣は驚いて、

『ほう、妙な願ひぢや。でも、一體それはどうした譯でかの？』

『だつて王樣！　あの門番の御役人が、私達に、王樣から戴くものゝ半分を是非くれろと申しまする。私は、あの憎らしい人を、思ふさま笞打つてやりたうございますから』

——やがて、門番に重い罰があつたのは云ふまでもない。

過ぎたるお世辭

何ごとにも知つたかぶりをする、そして馬鹿にお世辭のよい或る夫人が、ある時、佛蘭西の有名な小說家のアナトール・フランスに逢つた。

『まあ、先生！　あたくしは、とても熱心な先生の愛讀者でございますのよ』

『では、私の著書のうちで、奥さんは何が一ばんお好きですか？』

が、夫人がもぢ／＼してゐるので、フランスは更に語をついだ。

『たぶん「眞珠の筥」などぢやないですかなあ？』

『えゝさうですの、ほんとうにまあ、何といふ御傑作でせう、あの、あれは、「眞珠の筥」は！』

しかし、小說家はこの時、この夫人が實は何一つ彼の作を讀んではゐないことを覺つた。で、ふとした惡戲氣から、まだ嘗て書いたこともない本の名を、出鱈目に云つて訊いてみた。

『では、「アッピイの林檎」はいかゞです？』

すると夫人は、忽ち仰山な表情とともに、

『まあ！　あれはあたくしの、寢た間も側を離さない愛讀書でございますの！』

匿すより露はるゝ

有名な佛蘭西の文學者のラ・フォンテーヌが、ある朝、燒林檎を喰べようとしたが、すこし熱すぎたので、冷めるのを待つ間に、ちよつと圖書室の方へ行つてゐた。と、その後へ這入つてきたのが彼の友達の一人、うまさうなその林檎を見ると、しめたとばかり、むしや〳〵失敬してしまつた。少時して部屋へ歸つてきたラ・フォンテーヌは、件の林檎がないのを見て、

『おや、どうしたらう、此處にあつた林檎は？　君が喰べたのかね？』

『いゝや』

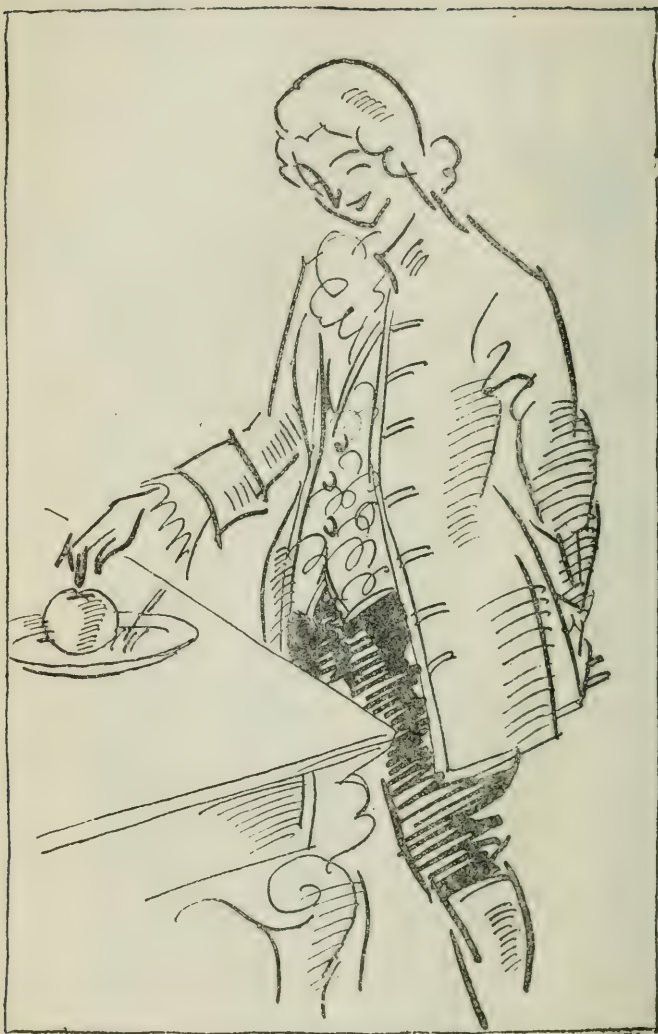
ラ・フォンテーヌは、ふとすこし茶目氣を出して、

『さうか。まあ好かつた、君でなくつて！』

『え？　何故？』

『何故つて、君。あの林檎の中には、鼠を捕るために、猫入らずが入れてあつたんだよ！』

すると、友達の顏は、みる〳〵眞靑になつた。

『えツ！　猫入らず?!　あゝ、僕はもう助からない！　解毒劑を早く！　早く！』

世間の評價

ある町にかゝつた物眞似芝居で、役者の一人が、マントをすぽりと頭から被つて、仔山羊の鳴き聲を眞似たが、それが如何にもうまいので、見物は喝采した。ところが一人の百姓が、

『あんだ！　あんな眞似なら誰にだつて出來べえに』

と云つたので、見物が納まらず、翌日、百姓と役者とに、眞似競べをさせることゝなつた。

その日、見物人たちは、小屋一ぱいに集つた。やがて、最初にまづ例の役者が、常よりもなほ一層盛んな喝采の裡に演技し了つて、さて百姓の番となつた。

彼はよち〳〵と舞臺へ上ると、これまたすぽりとマントを被つた。そして、ひそかに携へて來てゐた眞物の仔山羊を突ついて、めやう〳〵と鳴かせた。が、はじめから侮辱しきつてゐた見物人たちは、

『馬鹿ツ！　ちつとも似ちやゐないんぢやないか。なあんだ、その聲は！』

とさん〴〵に罵倒する。百姓は、ぽんとマントを跳ね除けて、

『これ見さつしやい！　いまの泣聲は、この本物の仔山羊でねえか！』

牡蠣喰ふ男

ある吹雪の夜に、あたふたと旅籠屋の廣間へ這入つてきた一人の旅人があつた。煖爐を取り卷いて先刻からぬく／＼と暖まつてゐた先客たちは、誰一人席を讓つてやるものがない。濕氣と寒さのために凍てきつた旅人は、しばらく片隅に佇んでゐたが、ふと、

『御亭主、どうか牡蠣を一皿、私の馬に持つて行つてやつて下さい。大急ぎで』

『へえ、牡蠣を？ 旦那、馬あ牡蠣なんか喰べませんよ』

『いゝから持つてツて下さい。私の馬は喰べるんだから』

馬が牡蠣を喰べる?! こいつは見ものだ！ とばかり、皆はた／＼と厩の方へ馳けていつた。

やがて、件の牡蠣の皿を持つたまゝの亭主と、先客たちとが、ぽかんとして再び廣間へ歸つてきた時には、曩の旅人は、一人悠々と煖爐の前へ陣取つて、手を翳したり濡れた衣を乾かしたりしてゐた。

『あゝ、御亭主御苦勞。え、なに？ 馬は牡蠣を喰べなかつたつて？ さうだつたかねえ、では私が喰べるから』

なほ〳〵書

『御婦人の手紙といふものは、ずゐぶん廻りくどいもので、きつとなほ〳〵書がくつ附いてゐますね。私はまだ、なほ〳〵書のない御婦人の手紙を見たことがありません』

或る紳士が、ある貴婦人連の集りの席でかう云つた。と、一人の若い令嬢が、

『いゝえ、失禮ですけれど、そんなことはございませんわ。あたくし、なほ〳〵書なんか附けませんでも、立派に書いてお目にかけましてよ。では明日、あなた様にお手紙を差し上げてごらんにいれませうか』と憤慨した。

翌日、紳士は果してそのお嬢さんの手紙を受取つた。見ると、なる程よほど注意したと見えてなほ〳〵書はないが、一ばん末の署名の次に、

――一寸申添へまゐらせ候。これにても御前様は、妾が、なほ〳〵書これなき手紙を書き得べうもなきやう仰せあそばさるべく候哉。

――短所は、短所として當人に氣附かれない場合において短所となる。

最上の謝恩法

英國の、ある高い身分の家の息子が、巴里へ來て三年間滯在してゐた。そして有名な語學の先生に就いて佛蘭西語を習つた。

けれど、物事をさらに身に染みてしない性で、先生のずゐぶんな苦心も仇に、いつかう進歩の痕がみえなかつた。さうかうする中に、やがて彼は、倫敦へ歸ることになつた。

で、いよ〳〵別れの挨拶に先生の許へいつた時、

「英國へ歸つたら、是非先生の爲になる樣なことをして、聊か謝恩の一端としたいと思ひます。何かあちらで、私で役立つやうな御用はありますまいか？」

と、暗に自分の身分をほのめかせた。

先生は輕く笑つて、

「いや、御好意ありがたう。ではね、お願ひだから、君が私の弟子であつたといふことを、どうか誰にも云はないでくれ給へ。私にとつては、それが、君から受ける何よりの謝恩なんだよ。」

――

奥様の神經

ある田舎の小さいホテルへ泊つた二人の巴里夫人があつた。

夜中に、ふと二人は、その部屋の窓が、皆すつかり閉めきつてあることに氣がついた。

さあ大變、どちらも、常に、空氣の流通といふことにひどく八釜敷い衛生奥様であつたから堪らない。その一人は、いきなり寢臺から飛び下りて、まづ一ケ所どこかの窓を細目に開けようとした。

田舎の宿の消燈後の、加之、マッチも見附からないまつ暗闇の中を、手探りであちこちと撫で廻はした末に、やつとガラス戸を探りあてゝ一生懸命に引張つた。しかし扉は、ひどく堅くつてなかなか開かなかつた。

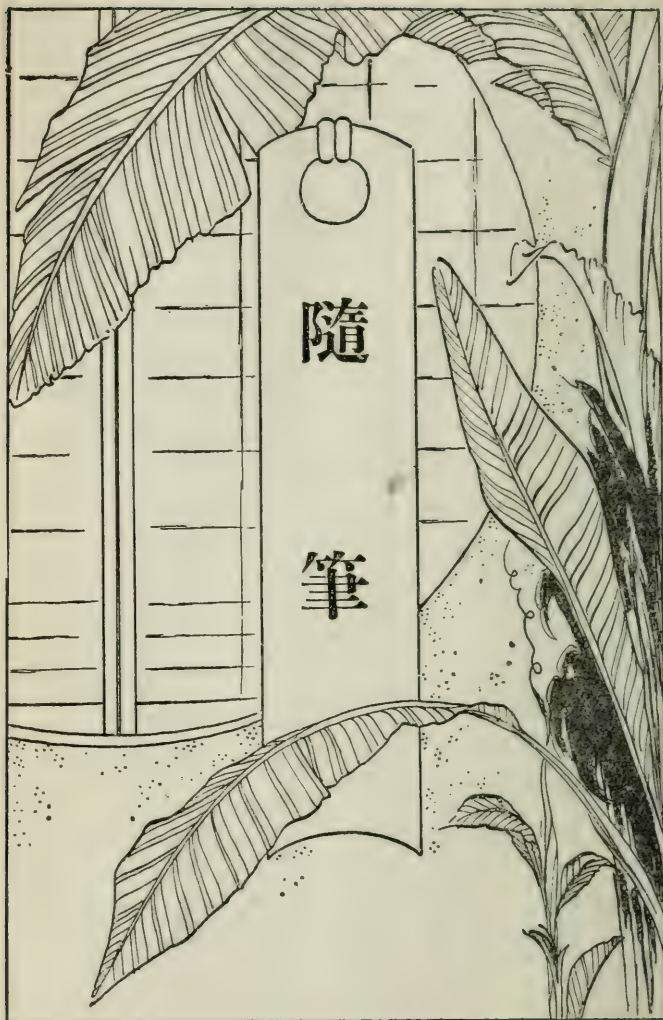
『どうしませう貴女！ どうしても開きませんのよ』

と泣き聲を立てる。

も一人の奥様はまた奥様で、

『あゝ、困りましたわねえ！ ですけれど貴女！ 後生ですから、どうぞも一度試して下さらな

い！ あゝ苦しい！ あゝ〳〵、あたくし、もう窒息しさうですの。あゝ！』
と喚きだすさわぎ。
が、幸にして、しばらくすると、忽ちがちやんとガラスが碎け落ちた。
『あらツ！ あたくし、たうとう窓を壞してしまひましたわ。……が、ですけど、ごらんあそばせ、これでやつと新鮮な空氣が這入つてまゐりましたから』
『まあ、ほんたうに！ どうも有り難うございました。あゝ、すこし樂になりましたわ。だんだん樂になつてきますわ。いえね、先刻はもう、ほんたうにこの儘窒息して死んでしまふのかと存じましたの。えゝ、あたくしはもう、通風設備の完全でないお部屋では、どうしても眠られませんですのよ』
『えゝ、それはもう、あたくしもでございますわ』
これで、二人の奧樣は、やつと安々とした眠りに入つた。
ところがその翌日のこと、新手な通風設備でやつと安眠したその衞生奧樣たちが、やをら眼を覺してみると、なあんのことだ！ 窓はやつぱり、すつかり閉めたまゝになつてゐて、たゞ部屋の片隅にあつた大きい飾棚のガラスが、めちや〳〵に壞されてゐた。

隨筆

日本産パパとママ

堀内信水

或年の初春、吾輩が神戸から東京へ歸る際、急用で歸京する時間の關係上、二等急行に乘つた。

と、吾輩の前の座席に、迚も素敵な美人が居るのを發見した。八歳位の女の子と、五歳位の男の子を連れた上、乳呑兒まで抱いて居るのだから、何うしても二十八九にはなるのだらう。それに、夫君とも見える洋服の紳士は何う見ても四十前後だ。然し、これがモダーン夫人とでも言ふのだらう。大きな花模樣の羽織から化粧の具合、誰が見ても廿歳か廿一だ。然かも、乳呑兒は元より、二人の子供も其方除けで、席が定まるや否や、手提鞄から化粧刷毛を出して早速顏の造作直しだ。吾輩は少々呆氣に取られた。

『ママ、靴を脱がしてよ！』

『ママ、僕の外套も！』

だが返事もしない。彼女は夢中だ。

『ねえ、ママ』

『よう、ママ』

忽ち彼女の眼が光つた。

『まあ、うるさい！ パパにして頂きなさい！』

そこで洋服の紳士、蹲踞んで二人の靴の紐を解いてやる。外套を脱がせ、手袋を外す。すると今度は父親の方へ鼻を鳴し始めた。此の子供たち却々勇敢だ。

『ねえパパ、妾、アイスクリームが欲しくなつたわ！』

『パパ、僕も！』

『駄目々々、駄目だよ』

『だつて妾、咽喉が渇いたわ、ようパパ！』

『僕も！ パパ、僕もだよ！』

『不可ないよ、不可ません』

流石に父親は厳格だ、すると、此の時漸く顔の造作直しを終つたモダーン夫人が横から口を入れた。
『貴郎、取つてお上げなさいよ。給仕に命令ければ食堂にあるぢやないこと？』
『それは、あるにはあるが……』
『妾も少し咽喉が渇いたところだから、給仕にさう言つて頂戴！』
『でも、汽車のは美味くないよ』
『そりや美味くない事は解つて居るけれど、貴道驛賣りのなンか、下等で口へは這入りやしませんわ』

『それもさうだね。ではさう言はうか。おい給仕、給仕、一寸！』

やがて淡雪のクリームが四つ。銀盆を捧げて食堂の給仕が運んで来た。

『ママ、妾、サンドウヰッチ！』

『ママ、僕も！』

『本當にお前たちは贅澤やさんだねえ、おほゝゝゝ！ねえ貴郎、給仕を呼んでサンドウヰッチを、妾も喰べてもいゝわ』

今度はサンドウヰッチを四人前。

『ママ、妾、キヤラメル！』

『ママ、僕も！』

『さうね、妾も林檎を貰はうかしら！　ねえ貴郎！』

いや何うも實にうるさい、いゝ連中だ。アイスクリームだ、サンドウキッチだ、ミルクキャラメルだ、林檎だ――何處まで行くのだか知らないが、まだ京都へも着かない中から此の騒ぎだ。よくまあ口へ這入るものだ。然しそンな事は向ふの胃袋だから何うでもいゝとして、此處にまことに聞き棄てにならない事がある。吾輩は先刻からそれが不愉快で、不愉快で仕方がないのだ。それは彼等の子供が自分たちの父親、母親をパパ、ママと呼んで居る事だ。否、寧ろ自分の子供たちに自分たちをパパ、ママと呼ばせて居る彼等夫婦の事なのだ。而かも、そのパパなる紳士は、最前から自分一人で子供たちの面倒を見て居る。さうして細君の命令に應じて彼方此方と動いて居る。更にさうして細君が顧みない乳呑兒を今度は洋服の手で抱いて居るのだ。吾輩は到頭見るに見兼ねて、その儘食堂車へ立つてしまつた。

食堂車は間もなく定食の時間が來たと見えて、ぽつ〳〵旅客が這入つて來た。恰度吾輩が腰を掛けた向ふ隣りには親子？　五人の外國人夫妻がつゝましやかに食事を取つて居た。何うやら話す言葉から察すると英吉利人らしい。子供は當歳の乳呑兒と三歳位の男の子と八歳位の可愛い金

髮の女の子で、それを眞中に挾んで如何にも樂し氣だ。殊に母親は片手に乳吞兒を抱き、片手でパンや肉を喰べながら母性愛を遺憾なく現はして居る。父親もナプキンを食卓の上へ擴げてやつて、娘がパン屑を散らかさないやうに、極めて細心の注意を以て、紳士的態度を持し、或は牛乳を飲ませ、或は細君にまで肉や魚を切つてやる。そして何事か靜かに打語らひつゝ、時には親子三人で微笑み交しつゝ落ちついた食事を取つて居る。その樣子を見て、今までの吾輩の可厭な心持は一遍に何處かへ雲散霧消してしまつて實に愉快な氣持になり、終には、不躾にも暫らくは見惚れて居つた。

すると突然背後で雀の囀るやうな姦しい聲がした。振り返つて見ると、や、や、これは何うだ！吾輩が辟易且つ憤慨して退散した例のモダーン夫婦が此の食堂車へ進軍して來たではないか。吾輩はウンザリした。

彼等は遠慮會釋もなく、彼の英吉利人夫妻の隣りの食卓へ座を占めた。途端に勇敢なる二人の子供は忽ち得意の鼻を鳴し出した。

『ママ、妾、親子丼よ！』

『ママ、僕も！』

『此處は洋食ばかりよ。だから駄目よ』

『可厭だわ〳〵、ママ、妾、親子丼がいゝの』

『ママ、僕も！』

それを、やツとなだめすかして椅子につかせたモダーン夫人、如何にも洋食は喰べ馴れて居るといふ風で、悠然とナイフを取り上げた。然しおツと！　それは魚ナイフですよ！　だがそンな事は平氣だ。モダーン夫人、今度は突然無遠慮に怪し氣な英語で、彼の英吉利人夫妻に話しかけた。それは吾輩が居るので、

『何うです、妾は外國語が斯んなに上手に話せるンですよ』

といふ高慢を鼻の先へブラ下げての會話だ。然かも吾輩、頗る舊式な洋服を着て居るので、何うやら田舍ものとでも見たらしい。

『お早う！』

ところが意外！　モダーン夫人から無遠慮に話しかけられた英吉利夫人は、淑かに而かも立派な日本語でこれに應へたのだ！

『好いお天氣で御座いますね』

これにはモダーン夫人も面喰つたらしい。然しまだ懲りずに、一言二言話しかけた。此の間始終例の二人の子供は、

『ねえ、ママ！』

『ねえ、ママ！』

とモダーン夫人に鼻を鳴らして居た。すると先刻から此の二人の子供の様子を熟と見て居たのは金髪の可愛い女の子だ。

終には、耐り兼ねたと見えて、ヌツと立ち上りながら母親に訊ねた。但しこれも片言ではあるが日本語だ。

『此の子供の人、何處の國の人？』

父親が靜かに制した。これも日本語である。

『みンな日本のお孃さん、坊ちやん！』

すると、娘は世にも不思議さうな顔をした。

『でも先刻から、パパ、ママつて言ふのよ。日本の人なら、オトーサマ、オカーサマと言ふでせう?!』

而かも且つ此の時若き英吉利夫人は毅然として頷いて言ひ添へた。
『本當に日本のオトーサマ、オカーサマ、よい言葉ですね』
流石のモダーン夫人も火の出るやうに眞赤になつた。たゞ何にも知らぬ二人の子供が、食ひかけたパンの屑をお互ひに投げ合つて居た。
『二人とも何です！』
モダーン夫人の聲は甲走つた。
そして早々と濡鼠のやうに大しよげにしよげて、勘定を拂つて立ち去つたのだつた。
車窓は轉回して種々の戰蹟今尚殘る雪の近江路に深く這入つた。
そこは日本の持つ貴き誇り忠魂、義膽、孝心、俠氣——義人、烈婦の物語り多き羊腸の小徑、近江路に……。（挿繪——渡部審也）

女人國遊記

生方敏郎

○

昔から、女と貧乏人ほど煽動に乘り易いものはない。彼等は共に踏み付けられてゐる時、哀憐の情を催させるほど迄に從順だが、勢を得た時の彼等は宛で狂犬だ。

○

女は決して弱者ではない。貧乏人も決して弱者ではない。否共に强者なのである。たゞ彼等は弱めらる可き不利な地に久しく置かれたといふだけだ。殊にその理性的でなく感情的であるといふ點に於いて、女と貧乏人とはよく似てゐる。

○

賑かな街を、女を連れて散步などしてゐる男を見るのは、羨ましいものだ。併し、それは傍か

ら見た時の幸福にすぎない。自分で女を連れて歩いて見ると、それは案外、見かけ倒しの幸福であることに氣付くであらう。

○

足弱を連れて旅をするな、落人義經に辨慶が諫めて、靜御前と別れさせる。足弱で、携帯品が澤山で、氣が變り易くつて、見榮坊である女といふものを、一緒に連れて旅するほど心元ないものはない。籠で歩いた昔も汽車で行く今も――、そんな事に變りはない。

○

親が男の兒を教育する時、草花を培ふ心である、良い果實を結ばせようとするのだ。親が女の兒を美しく装ふ時、品物の風袋を化粧するつも

りである。そして價高く賣らうとするのだ。

○

ツルゲニエフの小説の中に、村の中でたゞ銀時計を持つ、といふだけのことに惚れて、其男と結婚した女があると書いてある。

○

白粉を塗りこくれば、大抵の女が男の眼には美人に見える。男は女の美に對する批評家ではなくして、玩賞家であるからだ。酒を飲むで、良い酒か惡い酒かを判斷する者よりは、酒を飲むで直ちに醉ふのが悧巧者である。

○

赤裸々、は青年の美徳である。猫を被ることは少女の藝術である。

○

何の關係も無い女が、嫁に行くのを見てすら、男は其日いちんち位は塞ぎ込んで暮す。それほど、男は浮氣つぽい。

○

電車の中の乘合の客に顏を時々見られてさへ、女はひそかに悦んでゐる。それほど、女は己惚れが強い。

○

男は、永久に女に對つて友人たらんことを希望する。けれども女は、男を主人にするか、然うでなければ奴隷にする。

○

女の涙は男を取りひしぐ。併し女の笑くぼは男を解放し活氣づけて、最後に彼女の最も忠實な僕にする。

○

後家さんに向つては、奥さんのやうに、奥さんに向つてはお孃さんのやうに話すことを忘れるな。これが近代婦人に對する社交術である。

○

美しい妹を持つ兄は、その妹が嫁に行く迄、友人の間に評判がいゝ。

○

金持の父と愚な母とは、子供の寶だ。賢い妻と美しい娘とは、父の寶だ。

○

女は、生涯男を理解するものでない。女は男を誤解するのだ。それ故、女は戀する時、常に秀才な男を戀せずして、秀才らしい男を戀し、深切な男の愛を承け容れずして、親切相な男の愛を承け容れる。

○

戀するやうに成ると、自分の兄弟や親友が、不思議にも自分を離れたかのやう

に疑はれる。戀愛が反逆である證據だ。

○

男は、何んな場合にも戀をする。女は——もし彼女が貧乏の苦痛を知つてゐたなら、貧しい男に向つて戀することは、決してない。

○

失戀も不幸であらう。けれども、それは結婚せねばならなく成つた戀愛程には不幸ではない。

○

獨身者は自分が獨占する異性を持たぬところに、不滿があり、夫婦者は自分を獨占する異性の存在するところに悲みがある。

○

優しくすれば付け上る細君は、手荒くすれば氣ちがひになる女である。

○

お妾の

やうな奥さんがある。女中のやうな奥さんがある。看守人のやうな奥さんがある。長良川の鵜飼ひのやうに、主人の取つて來た物を皆な搾取する奥さんがある。

○

誰に見しよとて紅かね付きよぞ、皆な主への心中だて。といふ唄がある。けれども、奥さんが外出する時おめかしをするのは、決して主人への心中だてゞはない。それは主人は留守居なし

てゐることが何よりの證據である。他所の多くの男に、美しく見られようとする心持が外に出せんとする奥さんをおめかしさせる。

○

今の奥さんは、お妾さんのやうに生活しようとし、今の娘は既婚者のやうに生活しようとし、今の女中は令嬢のやうに生活しようとしてゐる。

○

現代の處女は、既婚者の如くに振舞ひ、現代の奥さんは處女の如くに粧つてゐる。

○

婦人に選擧權の無いことを憂へなさるな。男子は婦人の厭がる人間なんかを下男にすら雇ひはしない。況んや、區會議員をや。況んや市會議員をや。何ぞ云はんや、國會議員をや。

○

兎角浮世は色と酒。と昔の人は言つた。今の世は、兎角色と飯、である、今の人々が禁酒會に這入つたわけではない。今の時勢が人々から酒を取り上げてしまつて、飯のことを眞劍に考へさせる迄に、切迫してゐるのだ。（挿繪――宍戸左行）

迷信

加藤咄堂

迷信と科學

大病との招きに驚いて醫師が驅けつけると、

『先生、暫らくお待ち下さい、只今、修驗者が參つて、御祈禱を致して居ります』

と云ふと、其の醫師大いに怒つて、

『御祈禱などで病氣が癒るものか、大病ならば一刻も早く診察せねばならぬ』

と云つたのが修驗者の耳に入り、其の修驗者も大いに怒つて、

『御祈禱の靈驗が藪醫者どもに解るものか、病は氣からといふ、御祈禱が一番ぢや』

醫師も負けて居ず、

『藪醫者とは何事ぢや、病を治すに醫藥の外はない、氣休めの御祈禱が何んになる？』

『なるかならぬか、貴樣達の知つたことぢやないわ』
『フフン、病氣が祈禱で癒れば、醫師は世に要らぬ筈ぢや』
『醫師で病が治れば、修驗者は要らぬ筈ぢや』
と、互に言ひ募つて水掛論にならうとするに、醫師は氣を利かして、
『左程云はるゝからは、定めて功能があらう。それでは一つ、どちらが利くか試して見よう。論より證據、どうぢや、一つ拙者を祈り殺して見られい』
『何を利いた風な、如何にも修驗者一流の荒祈禱、見事祈り殺すが大丈夫か』
『如何にも、併し玆に南蠻秘傳の毒藥が御座る。貴公が拙者を祈り殺す

が早いか、貴公が此の毒藥で死ぬのが早いか、今調劑致すから飲んで見られよ、祈禱と毒藥と、どちらが利くかな』とジロリと皮肉に睨まれて、修驗者は蒼白になつて逃出したといふ。これは昔話、然し何と云つても迷信は科學には勝てぬ。其の非科學的迷信が巾を利かす世の中、それも他に害を與へぬ程度ならば其の人の心任せだ。

鰯の頭も信心

利くと思へば利く、信の一念、調べて見れば飛んだ笑ひ話がある。さる處に非常に御祈禱の上手な婆さんがあつた。「大麥小麥一升五合」と云つて祈ると効驗があつたのを、或知識が、『それは大麥小麥ではあるまい、「金剛教」にある「應無所住而生其心」であらう』と教へたので、其の婆さん疑念を起し、それからは『應無所住……』とやり直したところが、もうさつぱり効驗がなくなつた。

大麥小麥でも疑はずにやつた時分はよかつたが、疑ひ出しては何の効もない。迷信とても其の人の心次第で、安心が出來ないことはない。

方除の護符

さる男、思案に餘つて、

『私共、どうも困難が續きます。老人達は家相が惡いのだと申しますから、折角老舖の店ですが、何處か方角のよい所へ引越さうかと存じます。どちらの方角がよいのでせうか』

と檀那寺の和尙に相談すると、和尙殿頭を振つて、

『いや〳〵、越すには及ばぬ、愚僧が方除けの護符を書いて上げる。これを家相の惡いといふ所に貼つて置きなさい。家運繁昌疑ひなしぢや』

と云はるゝまゝに貼つたら、それから成程商賣は次第に繁榮に向つて來た。

或時、其の男、その護符にどんな有難いことが書いてあるのだらうと、そつと開いて見ると、

迷ふが故に三界城　悟るが故に十方空
本來東西なし　何れの處にか南北あらん

と書いてあつた。（挿繪――宮尾しげを）

慙愧のまゝ眠れり

下村海南

本人は、生存中には負債者なりき。本人は、丁年以後に至るも、辛うじて其生活を維持するに止まりて、毫も其少年時代に於ける投資額に對して償却する處なかりき。本人は、實に支拂無能力者として死亡せり。而して永く慙愧のまゝに眠れり。

北米合衆國で、かつて二三の哲學者が、黑ん坊の人身賣買から連想して、白人が一人前に成るにどの位の費用がかゝるか調べて見たところが、

五歳までに一年五十弗宛
十五歳までに一年百弗宛
二十歳までに一年二百弗宛

之に酒、煙草、ボート、庭球野球、さては醫藥旅行などの諸雜費を加算して、先づ一人當り平均約五千弗といふ數字を得た。

ところが、其の五千弗の費用をかける途中で、バタ〳〵若死する者も少くはないが、五千弗の資本をかけて貰うてから、世の中へ泳ぎ出したとして、其五千弗の元利共と云ひたいが、元金だけでも返濟し切れずに、借金を背負つたまゝであの世に失敬するものが多い。前に掲げたのが、さうした連中の墓標に記さるべく撰文されたる墓碑銘である。

日本では、一人前になるまでに、平均如何程の資本が投じられてゐるかは知らぬが、最高の學府たる大學を出ても中々職を得られない。得ても、まだ何がしか親爺の脛をかじる連中が多い。コンナ墓碑銘を借用するとしたなら、それこそザラに建てずばなるまい。

殊に日本で嬉しくないのは、一人前になる迄に死亡する比率の多過ぎる事である。もともと日本は、其商

品の粗製濫造を以て全世界に名聲を馳せてゐる國であるから、釣合上人間の粗製濫造もやつてゐますと云へばそれ迄であるが、死亡率が、人口千人に付二十一人餘、正に出生率の三分の二強に當つてゐる。それも幼年青年の時代にあつては、歐米の先進國に比較して其死亡率は二倍甚しきは三倍の多きに上つてゐる。

一人前にならぬ内に死ぬといふ事は、死ぬ本人にとつても心殘りで浮ばれない譯だが、殘され

たる兩親の身になつても、逆さま事は悲慘の極である。又社會から見ても、借り倒しで死んでゆくといふ經濟問題の外に、既に若い者の死亡率の高きは、其生き殘される者の心身の弱き事を示す、つまり社會の分子の不健全なるを立證するものである。

現に日本人は、體質の强健ならざる上に、日本の文字や外國語習得の爲に、其準備時代たる學校生活に、比較的長い歲月を費す。しかも其敎育期間は長過ぎてゐるが實際離れをしてゐる。結局高等敎育を終了する者は少數であるが、世の中へ飛び出す其心持なり其知識なり、其れは獨り歩きの出來るやうに仕込まれて卒業するかといへば、中學へ入る爲の小學、高等又は專門の學校に入る爲の中學であつて、時ばかり餘分にかゝるが、實生活に入つては存外間に合はない。しかも壽命が短かくて老衰が早い。

先進諸國では殆んど根絶されて來た癩病、チブス、虎列剌などの病毒菌も、年が年中丹念に保存されてゐる程、衞生保健の上に無自覺なる日本では、體質の向上鈍く、壽命の延長しないに不思議がない。英佛米獨の諸國は、何れも一九〇〇年より一九一〇年の間に、平均餘命が五年以上延長されてゐる。米國の如きは、今日では又更に五年延長されて五十七年、日本人の四十四年に比して約十三年長生してゐる。

成程人間は一度生れて再び生れない。其人の一生も見方によれば盧生の一夢に過ぎない朝露の如き果敢なきものではあるが、見方によれば又随分と長い。中には五年位いゝぢやないか、負けつちまへ！ と云ふ、恐ろしく氣前のよいと云ふよりは無分別な自暴自棄的な詞も聞かぬではない。

越前の偉人景岳橋本左内先生は二十六歳で國事に斃れた。僕は其倍の五十二歳となつて居る。一寸考へると、既に橋本先生の倍だけ生きてる勘定である。

ところが之れが倍ではない。約二十歳までは所謂準備時代である。資本をつぎ込んでる時代である。橋本先生が社會に活動したのは二十六歳から二十歳引き去りて僅か六年である。僕は五十二歳から二十歳引き去りて既に三十有二年、正に五倍強だけ世の中に活動すべき時を持つて居た勘定である。只先生は僅か六年間位であれだけの研究努力をつゞけ、あれだけの活動をした。僕は五倍も生きて居て其研究努力足らず、活動甚だ鈍かつたのである。獨り橋本景岳と云はず、吉田松陰、高杉東行の諸名士は、皆三十歳に充たずして他界してる。もし借すに數十年の餘命を以てせば、如何に猶より偉大なる業績を殘されたか知れぬ。況んや龜の甲より年の功といふ。閲歴を重ぬるほど其人の社會的地位が進んで重く且つ大となる、其れだけ其人の活動の能率は年

と共に著しく擴大される譯である。

人間の壽命が五年や六年位負けとけといふ、五年六年どころか、一年が半歳でも三ヶ月でも一月でも、大事な〳〵生命である。人間の頭數計り毎年八十萬殖えたというても、其體質弱く、其平均餘命短かくして、大和民族の興隆發展などとは片腹痛い、をこがましい、チヤンチヤラ笑はせる。

人間の數は減少しては大變である。しかし眞の増加は强健に長命にして始めて期し得らるべきである。粗製濫造の商品は安からう惡からうである。眼を眩まして安い〳〵で賣れもしようが、それはほんの一時である。人間の粗製濫造も、結局は、近き將來の増加率の減退を、暗示ではなく明示するものである。

米國では、朝野を擧げて、其平均餘命を、更に二十年延長して七十七歳にする事を理想とし、先年エリザベス・ミルバンクス夫人は、一千萬弗の資金を生命延長研究費として寄附された。日本では、寄附するといふよりは、ヤレ機密費事件、ヤレ松島事件と手を出す方で忙がしい。所謂、國事として論議されてる問題が馬鹿に狹い、近い、短い、小さい、汚ない。

（挿繪——清水對岳坊）

輕衫と米

島木赤彦

先年、私の歌の友人が山形縣から上京した。彼は子供の時から山中で百姓生活をしてゐて、恐らく近縣へも出たことはあるまい。それが急に東京へ出ることになつたので、可なり億劫な思ひをして、やつと決心したらしい。そして、この旅行のために縞の輕衫を新調した。耕作や木樵に用ひる輕衫は紺無地であるが、改まつた他出には縞のを用ひる。その縞のも上京のためにわざわざ新調したのであるから、彼のためには誠に貴重な輕衫である。彼はその輕衫を穿いて、奥羽線の上の山驛から汽車に乘込み、翌朝東京の上野驛に着いた。東北地方の汽車の中でも、輕衫着用の乘客は稀である。況や東京の停車場や市中で輕衫を着用してゐる人を見出すことは恐らく絶無であらう。それゆゑ、彼は汽車に乘込んで以來、衆人注視の的となつたであらうけれども、彼はその注視に氣付くほど敏感な近代人ではない。上野驛へ着いて愈々東京の土を踏んでも、相

變らず山形縣山中の農人であつた。

この農人は東京に着いても、市内電車に乘つて麹町の私の家まで來る順序を知らなかつた。而倒である所から、いきなり目の前に停つた電車に飛乘つた。停留場毎に車掌がその名を呼ぶけれども、それは彼に取つては凡べて縁のない名前であつた。その内に『神保町』と呼ぶ車掌の聲が聞えた。彼はこれを聞くと直ちに電車から飛下りた。そして、通行の人に、この邊に『岩波書店』といふ本屋の有る無しを訊いた。そして、同書店が停留場のすぐ近くにあることを知つた。彼は、國にゐる時、私達とともに發行する雜誌『アララギ』の奥付に『發賣所岩波書店』と印刷されてあることを知つてゐた。そしてその雜誌の賣捌については、岩波書店の一方ならぬ厄介になつてゐることを聞いてゐた。そこで、彼は車掌の呼ぶ『神保町』といふ聲を聞くや否やすぐ岩波書店を想ひ起

し、想ひ起すと同時に、日頃厄介になつてゐる自分達の雜誌のために感謝の意を表せずにはゐられなくなつた。そして、彼の輕衫姿は間もなく同書店の店頭に現れ、次いでその主人の前に導かれた。その主人も可なりの木强漢ではあるが、目の前の彼の輕衫姿には少からず驚異の目を見張つたらしい。何者であるかが分らなかつたのである。

彼はそんなことには頓着せず、山形辯でずんずん自分の來意を告げた。自分は山形縣の山中の者であるが、自分等の雜誌の賣捌について非常に厚意を蒙つてゐるといふ話を聞いて、久しい間

感謝の意を持つてゐたが、今度始めて上京して、偶々電車の中で神保町の名を聞いたので、急いで飛下りてお禮を述べに來た旨を告げた。岩波書店の主人は非常に喜び、すぐ使を私の家によこし、

『今山形からこれこれの人が訪ねて來た。是非一緒に晝飯を食べたいからすぐ來てくれ』

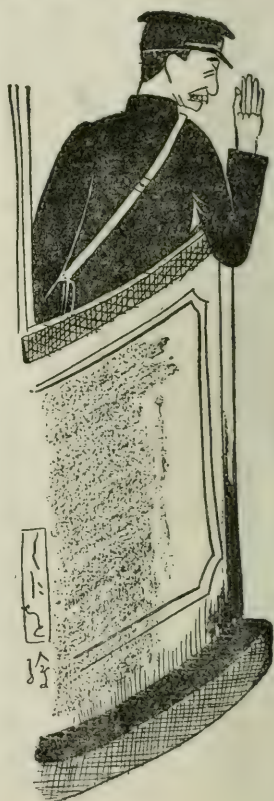
とのことであつた。そこで、私は同書店に行つて、その二階で彼と初面會をしたのであつた。

彼は私の家に數日間滯在した。菓子を出すと、それを掌の上に載せて、これは何錢ばかりの菓子かと訊く。如何にも勿體ないといふ樣子である。食べる時には、一旦額の邊まで上げて頂いてから食べる話をしながら時々羽織を氣にして手で撫でる。平福百穗畫伯が夕飯を共にするために私の家に來られ

た時、畫伯が紙を展べて、彼の肖像を描かうとされた。彼はいかにも恥かしさうにして坐つてゐる。畫伯が描終へて、それを彼に贈ると言はれても、なほ恥かしさうにしてゐる。菓子さへ頭上に頂いて食べる彼が、畫に對しては感謝の詞を述べない。あとで、私がこの肖像畫の非常に貴重であることを話すと、彼は大いに驚いて、

『明日お禮を言ひに畫伯の許に連れて行つて呉れ』といつた。

彼は私達歌仲間に於ける優秀な作者の一人である。そして、その優秀な歌は、實に右に述べたやうな素樸と眞情とから生れ出るのである。

今一人の友人もやはり信濃の山中に住む農人である。——今は他の職についてゐる。——その

友人が上京した時、私のために白米一斗を土産として背負つて來て呉れた。
『重かつたらう』といへば、
『汽車の中は無賃だから何ともなかつた』と答へる。
『電車に乘るのに困つたらう』といへば、
『米を負うてゐて乘らうとしたら、車掌が面倒なことをいつたから歩いて來た』
と答へる。私はその頃雜司ケ谷の龜原に住んでゐた。飯田町停車場から私の家までは一里ぐらゐある。その間を平氣で背負つて來たのである。
『偉大な土産を呉れたね』といへば、
『東京は米が高いといふから持つて來たのだ』
と答へる。彼は私の貧いのを憐んで、遙々信州から米一斗を持つて來て呉れたのである。忝いには忝いが、この米は甚だ玄くて不味い。厚意を感謝して、少しづつ他の米に混ぜて頂くことにした。
この友人の歌も甚だ優秀である。そして、その優秀な歌は、實に米一斗を信濃の山中から東京まで背負つて來る努力と眞情とから生れ出るのである。（挿繪――川原久仁於）

山の神

大町桂月

八百萬の神たち、高天原に神集ひに集ひ、神謀りに謀り給ひしは、神代の昔。そんじよそこらには、山の神たちが井戸端會議を開き給ふとかや。もとより九尺二間の神殿に住み給ふ御身體、眼孔の及ぶ所は、路地口の外に出でず、梅ちやんは鳶の生んだ鷹、身を藝者に賣つて、親は、おかげで左團扇、感心な子ぢやと人を羨み、それに引替へ、内の餓鬼は鼻たらし、親に似ぬ馬鹿者、何の役にも立てようも無しと愚痴を溢し、あの人はどうの、この人はかうの、べちや／＼、くちやくちや、しやべり合ひ、皮肉を云ひ合ひ、毎日同じやうな事を繰返して、井戸端會議は終に議決の付きたる例しなしと聞く。その山の神の一族、教育の普及すると共に、四方八方に蕃殖し、堊壁堂々たる校舍へも行燈袴穿きて渡御あらせられ、鐵門巍々たる洋館にも御輿を据ゑさせ給ふ。これらの山の神と、井戸端の山の神と異なる點は、唯文字を知るといふだけの事也。その文字を

取り去れば、いづれも同じ山の神、眼孔は矢張り一身の外に出でず。

猫にまたゝび、山の神に金の指輪、又馬の耳に念佛、山の神に仁義道德。『女子と小人とは養ひ難し』と、さすがに孔子は巧妙いことを言ひたるものかなとは、いづれ山の神の御利益に有り付けぬ者の減らず口なるべし。

『さはらぬ神に祟りなし』とは、消極的の諦め方也。苟くも山の神の御利益を得むと欲する者は、之を拜まざるべからず。神を拜まざるは禮に非ず。神は非禮を受けずと云へり。拜まざる者に、御利益をさづけ給ふことあらむや。山の神とても、神の字が付く以上は、矢張り神也。瘦せたる山の神に向つて、榮養不良など云ひては、神罰立ろに至る。裊々たる柳腰、古の趙飛燕も斯くやとでも云へば、必ず感應あるべし。肥れる山の神に向つて、臼に手足が付きたりなどと云へば、忽ち身の破滅也、豐艶牡丹の如し、古の楊貴妃も斯くやとでも云へば、必ず神慮に叶ふもの也、然し唯拜むのみにては御利益薄し、いづくの神社にも御賽錢箱あるに非ずや。山の神も、神と名の付く以上は、拜む前に先づ御賽錢を奉納せざるべからず。多ければ多き程、御利益多し。その御賽錢を所持せずして、山の神の御利益を强請るは、實に不料簡千萬也。

『色男、金と力は無かりけり』と自分免許の色男に成りすまして、髮結の亭主を氣取らむとする

は、男の中の屑也。山の神いかで愛想をつかさざらむや。

世にはまた、御賽錢さへ奉納すれば好しとのみ心得て、一向に之を拜まざるものあり。これでは一時御利益を得るも、永遠に得る能はず、必ずや終には見放さるべし。

『駿馬、癡漢を載せて走り、佳

人拙夫に作うて眠る』との語あるが、この拙夫は、必ずや多く御賽錢を奉納したる善男也。又同時に能く拜みたる善男也。

　山の神も、年若ければ金の指輪ぐらゐにて感應あらせらるれど、老ゆるに從つて、慾はますます深くなる。尤も今時の山の神は、年若くとも油斷ならず、教育の進步とともに、山の神的特質早く發揮せられて、人に嫁せずして、金に嫁するやうになれり。嫁して後も、ます〳〵御賽錢を欲しがり給ふ。論語にも『其の奧に媚びむよりは、寧ろ竈に媚びよ』との語ありて、玄關口よりは臺所口、螽斯の如く頭をさげて、御賽錢を奉納する參詣者の多き世の中、納受すべからざる御賽錢までも納受して、槿花一朝の虛榮、晴れの衣裳を着飾りて、芝居の特等席に御輿を卸し給ふ間に、良人には御用の聲かゝりて、この世ながらの地獄の苛責。罪の木は、山の神の御賽錢箱に在りと、後悔臍を噬むも、亦何ぞ及ばむや。

　それに付けても思ひ出さるゝは、板倉勝重の心掛け也。天正十四年九月、德川家康、駿府に移り、府下奉行を置かむと欲し、其の人を得難きに苦しむ。衆議、板倉勝重に決す。勝重は、人となり深沈にして偉度あり。ほゞ書史に涉る。家康の命を受くるに及び、固く辭す。許されず。

『さらば、妻と相議して後命を拜せむ』

といふ。家康笑つて之を許す。衆みな竊かに、『鼻の下の長き男かな』と嘲笑せり。勝重歸りて、妻に謂つて曰く『我が公、我れをして奉行とならしむ。われ固く辭すれども許されず。故に、妻と議して後命を拜せんと請へり。汝の意如何』と。

妻遽愕して曰く、『私事は夫妻相議することあれども、これ公事なり。拜すると拜せざるは、良人の心に在り。妾奚ぞ預り知らむ』といふ。これが普通の山の神なら、『一家の光榮、一門の面目、なぜ直ちに命を拜せぬぞ』と怒鳴るかも知れず。勝重徐ろに妻に謂つて曰く、

『いや〳〵、拜すると拜せざるとは、敢へて我が心にあらず、亦汝の心に在り。古より今に至る迄、和漢共に、重職に任じ、顯著に補せられて、家を滅ぼし、身を亡ぼす者少なからず。而して其の原因は、或は內寢に就き、或は苞苴に依り、災害多く婦女子に發す。若し我れ命を拜したる後は、たとひ親戚たりとも、汝は其の訟獄を拒むべきか、賄賂を卻くべきか。且つ我が身體言行に異怪の業ありとも發言するなきか。其の盟約を聞くにあらざれば我れ必ず命を拜せず。これ汝と相議する所以なり』

と。妻熟思して曰く、

『唯命これ從はむのみ』

と。勝重怡然として神に盟ひ、佛に盟ひ、登城せむとて、服を襲うて起つ。其の裳、逆になり居たり。妻遽かに之を告げて改めむとす。勝重色を作して曰く、

『前の盟ひは是れなり。何ぞ遺忘の速かなる。此の如くんば、我れ命を拜する能はず』

とて、將に服を脫せむとす。妻悔歎して謝す。さらばとて、出づ。家康曰く、

『婦何と謂ふ』曰く、『拜すべし』家康笑つて曰く、『可なり』と。かくて勝重は奉行の職に就きけるが、請謁を杜ぢ、苞苴を絕ち、法を奉じ、理に循ひ、境內翕然として、良吏の稱ありき。

世の所謂山の神に向つて、斯かる事を說きたればとて、何の效果もなかるべし。余は山の神ならぬ眞の淑女貴婦人に向つて、一考に供せむとするもの也。（挿繪――水島爾保布）

茶話七題

薄田泣菫

下腹で猫が啼く

むかし小野淺之丞といふ少年があつた。隣家の猫が度々大事な雛つ兒を盗むので、ある日築山のかげで、吹矢で猫を狙ひ討にした。猫は額を射られて、後ろ足で衝立ち上つて、二三度きりきり舞をしてゐたが、その儘ばたりと斃れて、辭世も何も詠まないで死んでしまつた。

氣の小さな淺之丞は、死樣のむごたらしさを甚く氣に病むでゐたが、その翌る日から、自分の腹のなかで猫の啼き聲がすると言ひ出した。ある時は胸元で、またある時は臍の邊で悲しさうな聲がするので、淺之丞は生きた氣持がしなかつた。

淺之丞には伯父が一人あつた。伯父といふものは借金を拵へたり、戀病に取つ憑れたり、猫

に祟られたりする動物にとつては、少くとも一人は無くてならない實用品なのである。伯父は言つた。

『士の兒が、猫に祟られて病死でもしたらいゝ恥晒しだ。いつそ切腹して果てたがよからう』

淺之丞は眼に涙を一杯溜めて伯父の顏を見た。下つ腹のあたりでまたしても猫が啼いたやうに思つた。下つ腹といへば、つい五六日前までは『武士道』と『孟子』との相住居をしてゐた大事な場所であつた。

淺之丞は伯父に勸められて切腹する事になつた。兩親にもなかの暇乞をして、やがて肌を脱いで、刀を手に取つた。介錯役に、側に突立つてゐた伯父は落ついた聲で呼びかけた。

『慌てるではないぞ。折角の切腹ぢや。猫の聲のする邊を目がけて、一思ひに腹に突立てるがいいぞ』

『はい』と淺之丞は下つ腹を撫でながら、じつと聽耳をすませた。腹の中では猫の啼き聲どころか、鼠一匹潜つてゐる容子も見えなかつた。

『今朝方までは確に啼いてゐましたつけが……』
淺之丞は臍のまはりを指先で押へてみた。
『今は一向聞えません』
『そんな筈はない、氣を落ちつけてよく聽いてみるがいゝ』
淺之丞は身體中を耳のやうにして聽き入つたが、何一つ聞えなかつた。
『一向に猫らしいものゝ啼き聲は致しません』
『猫め、それぢや逃げたかも知れんぞ』
伯父は聲を立てゝ、からからと笑つた。
『逃たものなら仕方がなからう、今更切腹にも及ぶまいて』
甥は手帛のやうに眞つ靑な顏をして、短刀を白木の鞘に納めた。猫の逃出した下つ腹では、いつの間にか『武士道』と『孟子』とが歸つて來て、蟇のやうに遠慮して、そつと溜息をついてゐた。

病氣必治法

詩人ゴオルドスミスは、文筆に從事する前に、醫者をしてゐた事があつた。何と言つてもゴオルドスミスの事だ、唯もう神樣のお力に縋るより外には、病人の持扱ひを知らなかつた程結構な醫者だつたに相違ない。

だが、醫者といふものは有難いもので、ゴオルドスミスが職業替をして詩人になつた後までも態々遠方から尋ねて來て、診察を頼むやうな病人も少くなかつた。そんな折には、お人好しの詩人は氣輕に起き上つて、

『どれ〳〵診て上げよう、どんな容體だな』と、仔細らしい手附で脈を取つたものだ。ゴオルドスミスは自分が拙い藪醫

者である事はよく知つてゐたが、それと同時に藪醫者でない醫者が、この世の中に住んで居ようとも思はなかつたから、別に遠慮する必要もなかつたのだ。

　ある時、見すぼらしい姿をした婦が一人駈け込んで來た。暢氣な詩人は其折書肆から届いた幾らかの原稿料を、机の上にばら撒きながら、これで『天國』を購ふには、何ういふ方法を取つたが一番便利だらうか、などと、そんなたわいもない事を考へてゐた。

婦は、泣聲で鼻を詰らせながら言つた。

『旦那樣、亭主が長の病ひで、食物さへ咽喉を通らなくなつて居ります。可哀さうだと思召して一度診てやつて下さいませ』

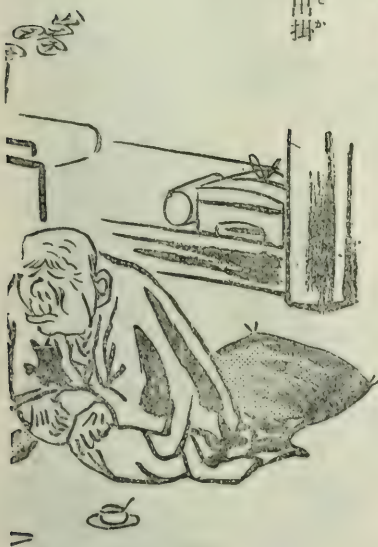
　お人好しの詩人は、夫を聞くと狼狽へ出した。婦人を引張るやうにして、その家へ駈けつけてみると、病人は乾魚のやうに痩せた身體を床の中に横へてゐる。詩人は脈を取つてみた。脈には

大して悪い徴候も見えなかつた。で、よく譯を訊いて見ると、食物が咽喉を通らないといふのは、實際通らないのではなく、通すべき食物が無いのだといふ事が判つた。詩人は念のため、あんぐり口を開けさせてみた。咽喉は、ジョンソン博士が大辭典を小脇に抱へたまゝ、素通りが出來る程廣く開いてゐた。

尊敬すべき醫者は仔細らしい顔をして言つた。

『いや、よく判つた。これには良藥が家にあるから、後から取りに來るがいゝ』

婦はあとから藥を貰ひに、詩人の許へ出掛けた。詩人は、

『飲み方など詳しい事は、中に書いてあるから』と言つて、藥の小箱を渡してくれた。箱は藥にしては少し重過ぎるやうに思はれたが、しかし輕過ぎるよりは氣持がよかつた。

婦は家へ歸つて、いそ〳〵箱を開けてみると、なかから轉り出したのは、薬では無くて金貨である。包紙には詩人の手で、

『必要な時。適宜分服の事』

と書いてあつたきりだ。醫者がほんとに病人を治す積りなら、方法は幾らもあるものだ。

筍問答

攝津の蘆屋に老人の夫婦者が住むでゐる。神戸に居る息子の仕送りで、氣樂に日を送つてゐるが、先日からふとした病氣で媼さんが床に就いた。

『お爺さん、わたい貴方を見送つてから死ぬのが順當やと、そない思うてましたんやけど……』

媼さんは枕許に坐つてゐる爺さんの手を取つて泣いた。手は何方も皺くちやだつた。

『もう迚もあきまへんよつて、お先きへ遣つて貰ひまつさ』

爺さんは水洟と一緒くたに涙を啜り込むだ。涙も水洟も淡水のやうに味がなかつた。

『そない短氣な事言はんと、矢張私を見送つてからにしといてえな』

爺さんは漸とこれだけの事を言つた。

媼さんは頭を掉つた。智慧の持合せの少かつたのを、六十年來使ひ減して來たので、頭の中では空壜を振るやうな音がした。

『あきまへん、迚もあきまへんよつて、お先きへ往かしてくなはれや。そしてお爺さんは後から緩くりおいなはれ』

一頻り病人の咳きあげるのを、爺さんは後方から背を撫でてやつたりした。

『そない言はんと、せめて秋まで延ばしなはらんかいな。そのうち千日へでも往て、おもしろい奇術を見てからにでもしたら何うや』

爺さんは自分が何よりも手品が好きだつたので、お名殘に媼さんと一緒に夫が見たかつたのだ。

媼さんは手をふつた。

『そない言うとくんなはるのは嬉しうおますけど、お爺さん。私やつぱり往きまつさ』

と、恰も他人に立聽でもされるのを氣遣ふやうに、干からびた口を爺さんの耳へ持つて往つた。

『この節は筍の出盛りやよつて、價が廉うおまつしやろ、お供養しなはるのに安上りに出來まんがな』

『成程筍が廉い。それもそやなあ』

と、爺さんはじつと胸算用をするらしかつたが、考へてみると、筍よりも矢張り媼さんの生命の方が高かつた。

『いやいや、やつぱり秋まで延ばしなはれ』

『筍が廉いから今のうちに死にたい』——

儉約な商人の媼さんを、これ程よく現はしてゐる言葉はまたと有るまい。それもその筈さ、媼さんといふ媼さんは、若い頃、

『絹物が廉くなつた。娘を嫁げるのは今のうちだ』

と言つて、年齢頃には頓着なく、衣裳の安いのを標準に嫁けられた大阪女だからである。

賣子娘

名高い紐育の百貨店ワナメエカアの手套部に、近く入つて來た賣子娘があつた。ある日の事、

婦人のお得意に手套を一つ賣つた後で、今度は直ぐ側に立つてゐる紳士のお客の方に振り向いた。

『入らつしやいまし。何か御入用のお品でも……』

『羊皮の手套を一つ』

賣子が取出した手套を受取りながら、紳士は言つた。

『こんな事を言つて、氣に障つて貰つては困りますが、先刻の婦人に對するあなたの應對振りはまだ十分とは言へなかつたやうですね。あの方は、此方の出やうによつては、もつとお需めになつたかも知れませんよ』

賣子娘は、酸つぱい物を嘗めさせられたやうな顔をしたが、それでも負けては居なかつた。

『あなたはお客扱ひがお上手でいらつしやるやうですね。何なら、こゝで暫くお手本を見せて戴けないでせうか』

『よろしい、承知しました』

客は斯う言つて、吃驚する娘には頓着なく、すつと帳場に入つて來た。そして身輕に外套と帽子とを脫ぎざま、今入つて來たばかりの婦人客の方へ愛嬌のある顏をふり向けた。

『毎度御贔屓に預りまして……今日は何か……』

『あたし洗濯の利く白手套が欲しいんですが……』

紳士は賣子娘に白手套のしまつてある棚を訊いた。そしてその中から一揃持ち出して來た。

『いかがでございませう、このお品では。それからお洗濯なさいます間、別のがお入用だと存じますが』

『さうね、ぢや二つ戴きませうよ』

と婦人客は白手套の二つを購ひ取つた。

『今一つこんなのを御覽に入れたいと存じますが』

紳士は先刻の棚から別の手套を持ち出して來た。

『御覽の通り、これは鼠色でございますが、お劇の晝興行やお寺詣にはこの方がお似合ひかと存じます。何ならこれも二揃ばかりお持ちになりましては』

婦人客は、その鼠色の手套をも、言ひなり通り二つ購はされた。たつた一つの手套が買ひたさに店に入つて來たものが、出る時には四つの手套を提げてゐた。それもほんの十分間の出來事に過ぎなかつた。お客が歸つてゆくと、賣子娘はすつかり感心したらしく言つた。

『まあ、お上手ですね。貴方、これまで屹度どこかの賣子だつたんでせう。そしてお店へ雇はれたくつて、今日いらつしたのでせう』

『さうかも知れません』

紳士は外套と帽子とを受取りながら言つた。そして紙入から自分の名刺を取出して娘に呉れてやつた。それを見ると、娘は仰天して酸漿のやうに眞紅になつた。紳士は擬ふ方もないワナメエカアの主人

だつた。

大食と少食

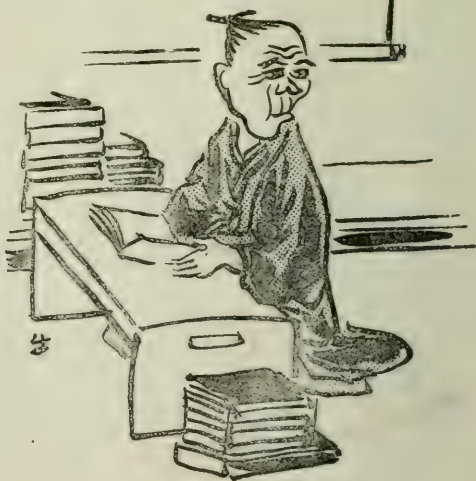
廣瀬淡窓は人も知つてゐる如く豐後日田の儒者であつた。ある時養子の青邨が淡窓に訊いた事があつた。

『父上、ちよつと伺ひますが、禮は何から始めたものでございませうな』

『禮か』淡窓はきちんと坐つた膝がしらを養子の方へ捻ぢ向けた。『禮は無遠慮から始めるのだね』

青邨は腹のなかで養父の語を味はつてみたが、はつきりと意味が解せなかつたので、今度は異つた事を訊いた。

『父上、今一つ伺ひますが、養生の極意はどこにございますでせう』

『養生の極意か』淡窓はすぐ返辭をした。『何よりも大喰ひをするんだな』

青邨はいくらか嘲弄はれたやうな氣味で下つて往つた。その後、青邨は廣瀨旭荘に出會つた。旭荘は淡窓の弟で、青邨にとつては義理のある叔父だつた。甥はまた同じ事を訊いた。

『叔父上、ちよつと伺ひますが、禮は何から始めたものでございませうな』

旭荘は直ぐ返辭をした。

『禮かい。禮なら先づ遠慮から始めるんだね』

青邨はいつだつたかの淡窓の答を思ひ出して、どうにも合點が往かないらしかつた。で、立續けに今一つの質問を投げ出した。

『叔父上、序でに伺ひますが、養生の極意はどこにございますでせう』

旭荘は譯もなく答へた。

『養生の極意は、食をひかへる事さ』

青邨はもう我慢が出來なかつた。一方が無遠慮だと言へば一方は遠慮だと答へるし、一方は大喰ひだと答へれば、一方は食をひかへるのだと言ふ。屹度親父と叔父貴とが馴れ合つて自分を嘲弄つてるのか、さもなければ、二人とも何にも知らない喰ひぬけの大馬鹿者に相違ないと思つた。で、幾らか冷かし氣味に理由を話して、訊いてみた。

『こんなわけでございますが、父上と叔父上と、どちらが眞實なのでございませう』

『どちらも眞實だ』

旭莊はきつと甥の顏を見つめて言つた。その言葉によると、兄の淡窓は身體が弱く、食が細いので、始終遠慮勝と少食の損を知つてゐる。それと打つて變つて、自分は健康で、いつも無遠慮と過食とから後悔する事が少くない。斯うして互に自分達の弱みを知つてゐるから、夫を汝に繰り返させまいとするからの事だといふのだ。

道德や人生は多くの場合胃に繋がつてゐるものだ。それが胃病だと、一層つよい。

人間の大小

歐洲戰爭で、聯合軍側の大立物は、なんといつても英國首相ロイド・ジョージ氏を第一に推さねばならない。

その大立物のロイド・ジョージ氏が、ウエールス生れの、身長の低い、やつと五尺そこ〳〵の小男だとは知らない人が多い。

戰爭中の或年の春だつた。ロイド・ジョージ氏が南ウエールスの或都市へ演説に出かけたこと

があつた。無論戰爭に關する演說で、自惚好きな英國人が、首相の口から直接ドイツ文明が安物のぼろつきれであることを聽くための催しだつた。

その演說會の司會者といふのは、大のロイド・ジョージ崇拜者で、この政治家の試みた演說は、どんな詰らないものでも、悉く新聞を切拔いて、手文庫にしまつておくといふ風の男だつた。

だが、これまで一度も、この自分の崇拜する人に出會つたことがなかつたので、その日は朝から胸をわく／＼させて待つてゐた。會場には聽衆がぎつしり詰つてゐた。當日の演說家を案內して會場へ入つて來た身長の高い司會者は、まづ起つて、この名高い政治家を聽衆に紹介したが、その中に、次のやうな言葉があつた。

『私は不斷から、この偉人を崇敬してゐましたが、正直に申しますと、身體のもつと大きい、見かけの堂々たるお方だとばかり思つてゐましたのに、今日初めてお目にかゝつて、實は驚いた

やうな始末で……』

次いで起つたロイド・ジョージ氏は小さいが、しかし胡桃のやうな、がつちりした身體を演壇に運んだ。

『唯今承りますと、今日の司會者は私にお會ひになつて、ひどく失望されたやうな御樣子で、まことにお氣の毒に堪へません』

と、首相は、背高な司會者の方へ皮肉な眼付を投げた。

『だが、今承つて始めて氣づいたのは、私どもの北ウエールスと此方とでは、人間を測る標準が違つてゐるといふことです。南ウエールスでは、人間を頤から下の大きさで測るらしいが、私どもの北ウエールスでは、反對に頤から上の大きさで大小を定めることになつてゐるのです』

かういつて、ロイド・ジョージ氏は、自慢の大きな頭を肩の上で振つて見せた。聽衆はわけもなく嬉しがつて、頤から下の馬鹿に大きい體を搖ぶつて喝采した。

梨

その日は日曜日だつた。C氏は、朝から一日宅にゐて、居間の疊に腹這ひになりながら、買ひたての西洋將棋の盤を前に、ひとりで詰手に夢中になつてゐた。C氏は大阪××株式會社の支配人であり、また人事課長でもあつた。

『もう二手で詰まる筈なのに、こんなところに僧正がぽかんとしてゐるものだから……』

C氏はひとり言をいひながら、詰手の邪魔になる僧正の駒を、いま〳〵しさうに指先きで輕く彈き飛した。

僧正は敵方の騎士と一緒になつて、ころ〳〵と盤を轉がり落ちた。

『旦那様、只今このお方がお見えになりまして……』

女中が大きな果物籠に名刺を持ち添へて入つて來た。ひつたくるやうにして名刺を受け取つたC氏は、

『雪山信作。――一向覺えがない。誰だつたかなあ。』

腹這ひになつたまゝ、頭の隅つこから記憶をふるひ出すやうに、兩手でもつて顳顬のあたりを輕く二つ三つ叩いた。すると、不思議に思ひ出された。雪山といふのは、二三日前會社で自分が委員長になつて學術試驗をした三十名ばかりの入社希望者の中の一人だつた。

『あの男から、こんなものを貰ふ譯はない。俺が往つて會はう』

C氏は、がばと跳ね起きて、はだけた着物の衿を合はせながら、廊下傳ひに玄關の方へ出て往つた。

『先日はいろ〳〵お世話になりました』

C氏は、自分の前に、鉛筆のやうに衝立つた背のひよろ高い男が、雀斑だらけの小さな顏を下げるのを見た。その男はW大學の制服を着てゐた。

『君かね、雪山君つてのは？』

C氏は、閾際に立ちはだかりながら言つた。

『何だつてこんなものを頂くんだね』

女中は果物籠を抱へて、主人の背後に立つてゐた。

『お門を通り合せたものですから、ちよつと御挨拶に……』

若い男は雀斑だらけの顏を赤らめた。

『門を通り合せたから、ちよつと……』

C氏は客の言葉をそのまゝ繰り返して言つた。そして顏の半分で氣味惡く笑つた。

『門を通り合せたからつて、ものを持つて來てくれたのは、實は君が初めてだよ』

『………』

若い男は何も言はないで、小さな頭を二三度小鳥のやうに氣忙はしさうに下げた。

そのとき、C氏の頭に、昨日會社で調べた入社希望者の答案のことが思ひ浮ばれた。

それはタイムス週報の記事の一節を課題に出したものだが、なかで一番出鱈目誤譯の多いのに確か雪山信作と署名がしてあつた。

誤譯の一つに Trade Union を商業會議所としてあつたのを、C氏は今も記憶してゐた。

『察するところ、君が果物籠をもつて來たのはそんな譯ぢやあるまい』

C氏は果物籠からはみ出してゐる梨の大きな尻と、若い男の小さな顏とを等分に見わけながら

言つた。

『こなひだの試驗で、君の英文和譯は實にまづかつた。正直に言ふと落第點だつた。それを何とかしてもらひたくてのことだらう』

『いえ、別にそんな譯ぢや……』

若い男は林檎のやうに眞つ赤になつてもじ〳〵した。

『ほかの課目は相當に出來てたから、實は僕も何とかしてあげたいと思つてゐたんだ。しかし、かうして君からものを貰つたんぢや、僕も、氣がとがめてさうは出來かねる。すれば、まづ九分九厘までは落第だね。』

『そこを何とかしていただけないものでせうか』

客は失望と恥がしさとに聲を震はせた。

『まあ出來ないね。ところで、君にしてみれば、ほぼ落第ときまつたものに果物籠をつかふ必要は少しもないんだ。僕も、この上君に損させるのは氣の毒だ。といつて、これをこのまゝ返へされたのでは、君も始末に困るだらうから、あらためて僕が買ひとることにしようぢやないか。買ひとることに……』

『いえ、折角持つて來たものですから、これはこのまゝどうぞ……』

主人の言葉があまり奇拔なので、客はすつかり度膽をぬかれたらしかつた。

その容子を冷たく見下しながら。叱りつけるやうにＣ氏は言つた。

『何をそんなに遠慮するんだ、君も商事會社の社員を志望して來た一人ぢやないか。もつと利害の觀念に目醒めなくつちや嘘だ。見す見す損する必要がどこにあるんだ。ところで、いくら拂つたかね、この籠……』

『はい、三圓五十錢拂ひました』
若い男は、眼をつむつて河を飛び越すやうな氣持で返事をした。
『なに、三圓五十錢？　いや、そんなにやすい筈がない』
　C氏はさつきから眼にとまつた梨のうまさうな大きな尻を氣にしながら言つた。
『この梨一つでも三十錢はする。これが七つ。ほかにオレンヂ、葡萄、バナナ、レモン、レモンが三つ……』
『旦那さま、失禮ですが、市場でも五圓はいたしますでせうよ』
　ふとつちよの女中が横合から口を出した。
『さうだらうな。ぢや、君。五圓にきめようぢやないか』
C氏は、一刻も早く値段をとりきめて、客を歸らせた後でゆつくり梨を食べたいらしかつた。
C氏は女中に吩咐けた。

『お前、奥へ往つて五圓貰つておいで』

女中が起つて奥へ入らうとすると、

『ちよつとお待ち下さい』若い男は呼びとめた。その聲には今までに見なかつた靜かな落ちつきがつた。『ほかに籠代としてもう五十錢拂ひました』

若い男は五圓五十錢を受けとつてC氏の玄關を立ち去るとき、丁寧に挨拶をした。

『今日は取引の途を教へていたゞいて大層ありがたう存じました』

それから二三日すると、若い男のもとにC氏から書留郵便がとどいた。なかには會社用の用箋に、美しい楷書で、

『自今社員とす』

と認めて、下に、大きな會社の印が押してあつた。

若い男は待ち設けぬ歡びに有頂天になつた。で、すぐにC氏を會社に訪問した。

C氏は若い男の雀斑だらけの顏をみると、上機嫌で笑ひながら言つた。

『君、こないだの取引は僕の方が損だつた。梨は三つばかり腐つてゐたよ』

古狐

大町桂月

　森林古くなれば古狐住む。人間の社會に於ても、大は廟堂より、小は學校のやうな處に至るまで、十年二十年とたつうちには、一種の古狐ひそむ。森の古狐は、化けて小僧となることあり、美人となることあり、大入道となることあり。

　人間の古狐は、化けて忠義者となることあり、律義者となることあり、所謂福の神となることあり、又となき相談相手となることあり。賢明なる人とても、往々之に化かさる。況して、眼の見えぬ人は猶更ら也。

　之を歴史に見るに、鎌倉幕府には、はじめに、梶原景時といふ古狐潜みたり。源頼朝の賢も、これには、化かされたり。之が爲に、弟を殺し、親戚を殺し、功臣を殺し、自から手をもぎ、足をそぎ、而して死するに至るまで自から悟らざりき。

豐臣秀吉の幕下にも、早く石田三成といふ古狐ひそみたり。秀吉の明も、これには、化かされたり。之が爲に、一時は子飼の正直者加藤淸正を斥けたり。終には、其の家を亡ぼさるゝやうになりたり。關ケ原合戰には、この古狐が、殊勝にも虎に向ひて戰を挑みたる也。その元氣は取るべけれども、狐は到底、虎の敵にはあらざる也。

この外、いつの世、いか

なる處にも、古狐あらざるはなけれども、化けの皮を露さずにすむもの多し。されど、その害毒の及ぶ所は深く、且廣し。人間の古狐は、さま〲化くれども、要するに、爲になる者と思ひ込ませる也。爲になると思ふ心の迷ひより、饅頭と思ひて馬の糞を食ふこともあれば、風呂と思ひて糞溜の中に入ることもあり。古狐の外面は、まめ〳〵しく、深切らしく、氣も利けば、働きもあり。口も達者、手も達者也。

正義が嫌ひなれば、忠臣、義士、仁人、君子を、けむたがりて、之を陷れ、同じ穴の貉を集めて、己れの勢力を扶植し、何の、かんのと、公益を圖る眞似して、ひそかに、己れの懐を肥やし、巧みに賄賂を取り、うまく、うは前をはね、上に媚びて、下に傲り、猫を被りて、爪牙を隠し、黒き腹を笑顔に紛らかす。

古狐の在る處、外面は如何にも綺麗也。されど、陰毒は次第々々に浸み渡る。情實内に纏綿し、

不平外に起る、事業が擧るやうにて擧らず。榮ゆるやうにて、腐敗し、墮落し、化かされたるもの、大にしては國を亡ぼし、小にしては身を亡ぼす。

恐ろしい哉古狐。國に多ければ國力伸びず、學校にあれば校風振はず。朝にあれば朝威落ち、野にあれば道義地を掃ふ。而して、古狐の本體は、容易に捕ふべからざる也。

さらば、如何にすれば、古狐に化かされざるを得るかといふに、そは唯々靈性の直覺に待つの外なし。好む所あれば、掩はれ、恐るゝ所あれば、つけこまる。森の古狐の化けたる美人にばかさるゝは色を好めば也。大入道におどかさるゝは恐るれば也。

恐るゝ所なく、好む所なくして、直覺茲に光を放つ、森の古狐も、人間の古狐も、之を如何ともする無し。一歩下りて、古狐の化けの皮をあらはさむには、他の古狐をして、かり出だしむるに若かず。眞の人間は、相和すれども、人の皮着る古狐、もしくは、その同類は、決して相和すること無し。げにや、じやの道は蛇知る。

森の狐は油揚に釣らる。人間の古狐も、利と色とを以て釣れば、必ず引かゝる也。

（挿繪——細木原青起）

身體に關する言廻し

芳賀矢一

『風を引いた』といふことを『アイ、ハブ、ドローン、ウインドー』といつたり『煙草を呑むな』といふことを『ドント、ドリンク、トバコ』といつたりして笑はれた事は、よく耳にする話である。日本では煙草を呑むといふが、支那流にいへば、喫烟で、たべるのであり、西洋流のスモークはくゆらす、ふかすの義である。かやうに國々それ〴〵の言廻し方が違ふ。外國語を學んで一番むづかしいのはこの言廻し、慣用を呑込む（呑込むも一種の日本の慣用句である）ことで、われ〴〵が平生何氣なく使つて居る言廻しの中にも、よく考へて見れば、隨分に面白いことが多い。まづ、自體に關したものを擧げて見よう。

頭と顔

『あの人は頭がいゝ』『頭がしつかりして居る』といふのは腦のよいことで、これは維新以後の

新しい言廻しである。西洋語を知つた人の使ひ始めた詞であらう。『つぶりを縦に振る』のは承知すること、『横に振る』のは不承知の事、『頭が高い』といふのは御辭儀の仕方の丁寧でない事、これらは實際の擧動を言現はしたのである。

『顏の廣い』といふ事は顏幅の廣いのでは無くて、世間の附合の廣いこと、附合が廣ければ方々へ顏を出すから、自然に其の顏が廣くなるのである。顏は個人の看板のやうなもので、お互同志識別するのも顏に依る。嬉しいことも、悲しいことも、嫌なことも、先づ第一に顏にあらはれる。喜怒色に現はれぬといふのは餘程の英雄であつて、恥かしい時には、誰でもパツと赤くなる。人の感情は顏にあらはれるやうに造られて居るのである。それ故恥かしい時には袖で顏を隱したり顏をそむけて人に見られぬやうにする。『顏が出されませぬ』とか『面目が無い』といふのは即ちそれで、古い國語では『おもて伏せ』といつた。『どの面下げて来やがつた』と罵られるのはかういふ時である。それでも平氣で居る

のを『面の皮が厚い』といひ、『鐵面皮』といふ。『面の皮千枚張』などといふ恐しい形容の語もある。それ故、人の言分を通し、其の人の意志を承認することを『顏を立てる』といふ。『おれの顏を立てゝ呉れ』といひ、『君の顏に免じてさうしよう』などと話が落着する。之に反して、承知せぬ時は、言ひ出した人の『顏が立たぬ』『顏が潰れる』。顏は元來立つて居るものでも無いが、潰れては大變だ。不名譽の事をすれば、自分の顏の潰れ

るのみでは無い。親、兄弟、朋友の『顔をよごす』所謂『面よごし』になつて、みんなの『顔に泥を塗る』のである。其の外『借りる時の地藏顔、返す時の閻魔顔』『知らぬ顔』『泣きッ面』など、顔の種類は數限りも無く多い。

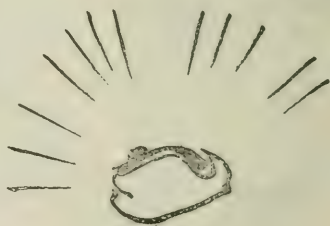
眼

顔には目や鼻や口がある。顔の表情は是等のものゝ助けが多い。人間の眼の瞳は、猫のやうに太くなつたり細くなつたりしないが、喜怒哀樂につれて、第一に變化を生ずるのはやはり目である。情の激しい時には涙といふも

のが目の中に湧いて來る。それが、悲しい時と可笑しい時の兩極端に出るのも不思議では無いか。眠る時には目を塞ぐ。これが人の最も安靜な時である。それ故『目を細くする』時は平和な時で『目を怒らす』『目に角を立てる』場合などは感情の激越した時である。『目を逆立てる』ことは實際むづかしからう。叱られる方では『大目玉を食ふ』と感ずる。驚いた時に『目を丸くする』のも有勝である。『目の色を變へる』のは兎に角非常の場合で、『目がすわる』とは醉つた人の形容、諺に曰く『目は口ほどに物をいふ』と

鼻

鼻は眼の中央に位して、顏の品位を作るのに與つて力がある。あぐらをかいた鼻は低くて上品でない。高いのが上等と思はれたから、自慢することを『鼻にかける』といひ、『鼻を高くする』といふ。

少し得意になれば『鼻をうごめかす』、威張る人は『鼻の先で人を扱ふ』ことがある。『この

私が』などと鼻を指すのを見ても、個人は或意味に於て鼻を以て代表されるのである。昔は、自分の事を『鼻樣』とも言つた。古い軍記物語で『鼻白』といふことは、ビックリすること。ビックリすれば鼻が白くなるといふのは、恥づかしい時に顏を赤くするのと正反對である。『鼻につく』『鼻つまみ』などは嗅覺の官能から出た言廻しである。

口

口は食物を容れる關門で、同時に言語を發する機關である。『口に合はぬ』『口が驕る』などは食物の方から言つた詞で、『口が惡い』『口が重い』などは、言語に附いての慣用句である。『口すぎ』は糊口といふのと同樣で、この語を聞くと、生きる爲に食ふのか、食ふ爲に生きるのか、何となく生活難の感を引起す。

之に反して、『口車』といふ一語は、如何にも詐僞の多い世の中を眼前に浮かばせる。『口は禍の門』といふことは、主として物いふ戒であらうが、暴飲暴食の戒にも應用が出來る。重寶なのも口、危いのも口、とかく『口を塞がす』としても、『人の口には戸は立てられぬ』ものである。

耳

『耳を傾ける』といふのは、漢語が本で、傾聽する容子。『耳を塞ぐ』は聞くを厭ふので、聞いて心に感動を與へる場合には、國語では『耳立つ』といふ。これは見る時にも同樣で、『目立つ』といふ語がある。『目安い』『耳安い』なども目耳に通じて用ひらる。『耳よりの話』といふのは望ましい事を聞いた時にいふ。

耳は顏の外に出て居るから、外氣に觸れ易い。隨つて外方から來る音聲は一番早くはひる。其の代り、寒い風などは最も強く感じる。それ故『耳を切るやうな寒さ』などといふ。『耳にたこの出來るほど聞いた』といふのも面白い形容である。

胸

顔は済んで胸に下る。『胸が痛い』『胸がつかへる』精神状態の苦悶は胸に来てあらはれる事が多い。『胸が開いた』『胸が透いた』はその平癒したのである。

胸の中には心臓がある。人の感情は忽ち心臓の鼓動に影響するから昔の人が之を精神作用の本源地と思つたのも無理はない。『胸算用』『胸勘定』などの語もある。

『胸が潰れる』のは驚きの時、『胸の火の燃える』のは怒の時である。

腹

腹の中には、食物を消化する胃腸がある。

『腹が減る』『腹がふくれる』は至當の事であるが、こゝも感情を表す處と見られて『腹が立つ』といふのは、考へれば面白い。『腹を据ゑかねる』から反對に立つのであらう。それが落付くのを『腹がゐる』といふ。

『腹いせ』といつて、日頃の無念を晴らすこともある。

膽力といつて、腹の中の膽から元氣が出ると考へたから、驚くのを『膽を潰す』といふ。

『腹黑』といひ『腹がきたない』といふに至つては、全く精神が腹の中に在ると考へたらしい。

『よく腹で味つて見ろ』といふのも、考へて見よといふことである。

笑ふ時に『腹筋をよせる』といふのは實際の情態である。又『腹の皮をよる』ともいふ。

それと同じ樣に『臍で茶を沸かす』といひ、又甚だしく嘲り笑ふことを『臍が西國する』ともいふ。

腰がすわらなければ武藝は出來ぬ。それ故卑怯な奴は『腰ぬけ武士』である。

まだ〳〵あるが、このくらゐで止める。（挿繪 ── 清水對岳坊）

海鼠腸

是ではこまる

中村進午

町人袋に左の一節がある、

『町人多く集まりて咄けるうちに、一人の云へるは、侍の侍臭く、學者の學者臭く、味噌汁のみそ臭きを悪しと云へば、一人の宿老のいへるは、まことに左樣にてはべり、さりながら、町人は町人くさきこそよく侍るものをといはれし、是も理なるかな』

如何にも尤である。

女が男らしく(モガの樣に)、男が女らしく(近頃一派の惰弱男子の樣に)、お孃樣が女給の樣に奥樣が藝者の樣に、婆さんが娘の樣に、小使が紳士の樣に、婚姻が廣告の樣に、葬式が懇親會の樣に、半ぺんが煎餅の樣ではこまります。

口上

田舍者が、或る堂々たる時めく人の邸へ使者に行つて口上を述べた。その邸の取次の者は、使者を馬鹿にして、
『今一度、口上を承りたい』
と云つた。使者は同じ事を繰返して述べた。取次はもつとからかつてやらうと思うて『どうもよく分りませんからもう一度御述べ下さい』と云つた。使者は三度目を繰返した。取次は暫くして奥から出て來て、主人の返事を傳へた、すると其使者曰く、
『御返事確かに承りましたが、私は何分田舍者で、間違ひでもあると相濟みませぬから、今一度承りたい』
取次は、再び同じ事を述べた、使者は更に、
『私は田舍者で、萬一間違つては困りますから、もう一度承りたい』
と云つて、三遍取次に言はせて戻つた。支那と日本との談判も斯様な風には行かぬものか。

御幣かつぎ

御幣かつぎ、迷信、何れの國も同樣である。嘗て余が乘りたる丹波丸と云ふ船は、金曜日に倫敦のローヤル・アルバードドックを發航して、テームス河の中で他の船と衝突した。外國人は、それを氣に病んで他の船に乘り替へたものが多數あつた。金曜日に出發したのが惡いと云ふのである。然らば金曜日は一切を休みにせねばならぬ譯であらう。自分は、その船に乘

る二ケ月前に、母から賜つたお守り様を、ストラスブルグの宿のストーブで盡くやき捨ててしまつた。

そして其衝突の瞬間になり『お守り』と思つた、人間は弱いものである、婚姻前の男女が一緒に寫眞にうつれば夫婦になれぬ、婚姻前の男女が同じ舟で渡しを渡れば添はれぬ、刄物を贈れば仲が惡くなる、などゝ云ふ日本では、十三と云ふの數をよき數として居つたが西洋かぶれ以後嫌ふ様になつた、宿屋で『十三番さん』と云つたら『爺さん婆さん』と聞き違ひして怒つたと云ふ話があるが、西洋にはホテルの室は十二から十四に飛び十三が省いてあるのも愛嬌である。或所では十二番の次が十二と二分

の一で次が十四番に移つてゐる、頗る考へたものだ。人相見、墨色見、巫女、東西一轍である。蠟で手、足、眼、腕を作つて、日本では佛前へ西洋では（舊敎では）キリストの像の前へ具へて其疾患の平癒を祈つて居る、キリストの像の前へ具へた御水で眼病者が眼を洗つてゐる所がある。印度から東西へ分れたので本は一つだと云ふ說があるが、さうかなとも思はれる。『マリヤ』と『摩耶』夫人とは同一人だと云ふのは、偶然にマリヤとマヤと似た音なるが爲なるべし。

化物の相談

化物の出る家あり『屛風の上から顏が出て、空中にぶらつき、躍つて舌を出す』ものもあり、『女の幽靈』になつて出るやつもあり、轆轤首もあり、其の家は夜になると大騷であるが、主人は大膽者で、少しも辟易せず泰然として云ふ、

『何だ、古くさい奴ばかりではないか、ちつとオリヂナリチーを出して御覽よ』

と、云へば化物も困つて、ひつそりかんとしてしまつた。主人は、化物の奴何處へ行つたかと思つて家中搜しまはつた所が、裏座敷の押入の暗がりの所で、化物共は車座になつてお化の種本を見て居つた。大正、昭和の學者先生如何ですか、圖書館の中は？（插繪 — 神保朋世）

マルコ・ポロから

吉村冬彦

マルコポロの名は、中學校の歴史以來馴染ではあつたが、その名高い紀行を自分で讀んだのは、つい近頃である。讀んで見るとやはり面白い。尤も、書いてある記事が、あまり當にならないといふ證據は、自分の、狹い知識の範圍内でも容易に列擧される位であるが、事實といふ事は別問題として、單に、昔の人の頭に描かれた觀念として見るだけでも、色々の意味で面白い事が澤山にある。

カラザンといふ土地には奇妙の風習があつた。異鄕の旅人が宿泊した時、その人が風采も立派で、勇氣があつて、優れた人物だと思ふと、夜中に不意を襲つて暗殺してしまふ。目的は金や持物ではなく、その旅人のもつて居る技能や、智慧や、勇氣が、魂魄と一緒に、永久にその家に止つて、そのお蔭で、その家が榮えるやうにとの希望からだといふ。

これは隨分蟲のよすぎる話である。然しよく考へて見ると、今の世でも多少これに似た事實がないでもない。例へば、有爲の青年を、金や、權勢や、義理合やで取つて抑へて、本人のあまり氣の進まぬ金持の養子にしたり、あまり適當でない地位に縛り付けたりする事があるとすれば、いくらかカラザン人の遣口に共通な處がありはしまいか。この惡習は、忽必烈が嚴禁してやつと止つたとある。

この地方の人は、始終毒を攜帶して居る。

もし、何か自分の惡事が見付かつて罰せられさうになると、大急でその毒を仰いで自決しようとする。

これは存外見

上げた考だ。處が困つた事には、さういふ罪人を捕へる爲政者の方でも、ちやんとそれを承知して居るから、豫め犬の糞を用意して居て、すぐにそれを食はせ、さうしてすつかり毒を吐き出させてしまふ。これでは折角の毒も何の役にも立たなくて、結局犬糞を食はされるだけが餘計な事になる譯である。それにも拘らず、このやうな事が繰り返されて居たとすれば、犬の糞の效力の及ばない場合が、相當に多かつたのかも知れない。

カ　ダンダンといふ地方の風俗の中に、男女共に黄金の薄い板を齒にかぶせて飾にするとある。この金の板の著せ方がよく分らないのであるが、とにかく現代の吾等の同胞の中にも、健全な齒に黄金の板をかぶせて裝飾として居る人が可なり多數にある。

又日本に關する記事の中に、こんな事がある。この國の人に、『何故そんな色々の形の神像を作

ゐるか』と聞くと、『これは先祖からのしきたりだ』と答へた。『吾々に先立つた人が、かういふ風にして吾々に殘した。それで、吾々もかうして子孫に傳へるのだ』といつたとある。その話のすぐ下には、日本人の間に食人の風習があるやうに書いてある位だから、上の話も當にはならない。しかし、創意を尊ばない國民性のやうなものが、この話の中に表れて居るのは不思議である。

　フエレチ王國の人々は、朝起きた時に一番先に眼に觸れたものを、その一日中崇拜するといふ事が書いてある。新輸入の思想の初物を崇拜する現代の多數の人達と、この昔の王國の人と、どこか似た處があるやうな氣がする。

　又債務者が負債を拂はないで、色々な口實を設けて始末のわるい場合がある。さういふ場合に、債權者は債務者の不意を襲うて、その身邊に圓を畫く。すると債務者は、その債務を果すまで、その圓以外に踏み出す事が出來ない。若し出れば死刑に處せられる。

　かういふ法律は、今日では贊成者が少さうに思はれる。債務者の方が多數だから――。

　以上皆餘り當にならない古い昔の異郷の奇習の物語ではあるが、一々現代の吾々の生活に、幽ながら或反響のやうなものを傳へるのが不思議と云へば不思議でもある。『天が下に新しいものはない』といふのは、かういふ事を指していふのかも知れない。（插繪――水島爾保布）

教訓漫畫

人生漫談

岡本一平

◇何故あの人を世話しないか

『あの人の強情さと來たら、一遍何か云ひ出したら、是が非でも動かない。まるで岩のやうになる。いかになんでも、あれではどうも堂々と人に世話はしにくい』

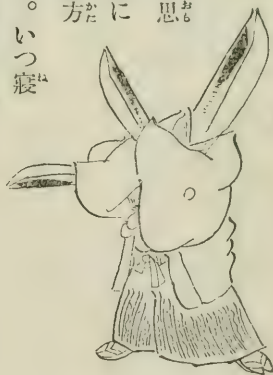
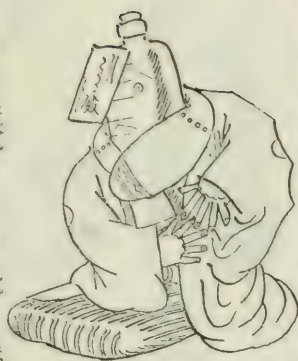
◇『あの人は、どうも理窟が多くていかぬ。議論ばかりで並の會話と云ふものが人と出來ぬ性質だ。大勢と相談の席では、何か一言必ず意見を述べねば承知せぬ一言居士だし、人と對談の時は辯論の太刀打ちする積りで立向ふ。その癖腕は一向口程にない。どうも人に世話はしにくい』

◇

『あの人は、しらふの時は仕事に勤勉で、綿密で、口數も利かず、人觸りも至つて穏やかで見上げた働き者だが、一旦酒を飲み出すとなるとガラリと人が變つて、十日も二十日も酒浸りで箸にも棒にもかゝらなくなる。まことに氣の毒だが、人には世話しにくい』

◇

『あの人は眼から鼻へ抜けるやうな機敏な男で實に驚くべき手腕家だが、節操が乏しいから、今迄敵に向つて居たかと思へば瞬く間に飜つて味方の方へ向く。いつ寝返り打つか判らぬ。惜しいものだが危くてしやうがない。先づ〳〵人に世話するのは差控へた方が無事だと思つてゐる』

◇

『彼は上品だが病氣ばかりしてゐる。藥瓶に着物着せたやうな人間だ。それも眞から弱いのなら同情もするが、彼のは不養生で神經質なのだ。一寸良くなれば亂暴な生活をし、一寸氣分が悪いとすぐ大げさに寝込む。これぢや日々定まつた勤めのあるところへは、世話が出來ないぢやないか………』

◇

『あの人は、細心で物事が綿密だが迚も陰氣だ。あの人と、ものゝ五分も對坐してゐると、お葬式にお通夜をしてゐるやうで、ずつと氣が沈んで來る。そしてあの人の聲迄が木魚を叩くやうだ。人の元氣を銷沈させる性分だ。この點で世話をするにも氣が進まない』

◇

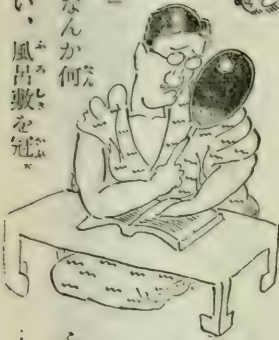
『あの人は働きものだが、女に對して癖がある。女と見ると無關心では居られない。からかつて見たり、氣を引いて見たり、お世辭を云つて見たり、兎に角引つかかる。そして甘い事を云はれると、直ぐ飴のやうにとろけ、すぐはまり込む。從つて女と一つ屋の棟の下に仕事する處へは、勿論お世話致しかねる』

◇

『彼は几帳面の性質だが、餘りに物事に功利的過ぎる。何でも働く事に就いては、一々算盤を執つて利益勘定をする。それも眼先の算盤だけだ。世の中の事は、今が今働いて直ぐ酬いられるといふ事ばかりではない。今は損をしても、後に何層倍かの得になつて酬いられるといふ大きな算盤を知らない。從つてどうも人に好感をもつてお世話しにくい』

夫婦

妻は蝿

妻を蝿のやうに五月蝿がる夫がある。用向も聞かぬうちに妻が傍へ来ると『ナング、また何か用か』『あなたがお出ましまでに何を着ていらつしやるか、着物を伺つ*つて行ける、うるさいて……』といふに……『着物なんか何でもいい、風呂敷を冠……』

鵜飼ひ女房

夫を鵜のやうに使ひこなす妻がある。獲物のあるところへ見當をつけさせ飛び込まして働かさして、夫が獲物を銜へると頸の環を締めて嚥下むのを防ぎ、獲物の一分を褒美に與へてあとはみんな取上げて置く。かうしないとこの鵜は獲物をもつてすぐ待合や料理屋へ駈つけてしまふからである。

二人三脚

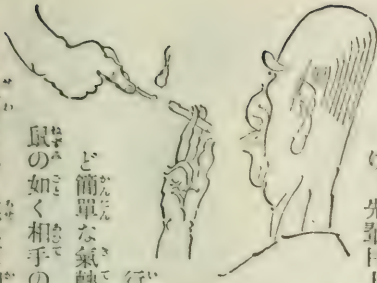
夫婦が、互ひに拘束もし、もたれ合ひもして人生の行路を行くのは、丁度二人三脚の競走に似てゐると思つてゐる人がある。夫婦の二人行脚だ。夫婦足拍子揃へて行く時に世渡りの進行は早い。二人の足並が、い、いちぐはぐになつたら、ひつくりかへること請合である。

尻に敷き方

むかしは鼻の下の長い亭主を單に女房の尻に敷かれると概評したが、現代心理の解剖から觀察すると、尻の敷き方にも敷かれ方にも多種多樣ある。尻に敷れながら妻の急所を押へてゐる夫。夫を尻に敷きながら夫を立てようとする矛盾に苦しむ妻。座蒲團のやうな敷き方。クツションのやうな敷方等いろ／＼ある。

外交術

氣轉を働かせる手

昔から『カーと云つたら痰壺、お手水にはお手拭』など云ひて氣轉を働かせる修養を奨勵せり。先輩目上が卷煙草を取出したらすぐマッチを摩り、外出先に空模様を氣にしてたら、直ぐ窓の所へ行つて雲行を見る、など簡單な氣轉を利かすべし。コマ鼠の如く相手の身の廻りを駈廻つて世話せんと焦れば却つてうるさがらる。

手紙をまめに出す

季節の問候、病氣見舞、無沙汰の詫は勿論なるが、其外始終心にかけ一寸旅に出ても繪葉書に一筆書いて出すやうにするなり。『唯今芳野は花の眞盛りです。お眼にかけたい程見事です』など、淡白なお世辭の文句を添へるがよろし。

逆に行く手

辭表を横面に叩きつけて其氣骨を愛されたなぞ云ふ外交術にも、柔道の所謂『逆の手』がある。これは明治時代には相當に効果を奏したが、綿密な事務家風を愛する現代には、可成危險性が伴ふ。若しやるにしてもエゴイズムでやらず、總て相手の爲を思つてやるがよい。

無駄をする手

幾ら無駄をしてもちつとも惡い顏をせず、根氣を押續けて行く時は、相手遂に云ふ儘になつてくれるなり。捨石といふ事あり、橋なき小川を渡るに、小石を水に拋り込み足場を作つて渡る。最初の三四個は底に沈み、無駄な骨折りをしたやうに見ゆるなり。然し其の捨石の上に更に石を重ねて行けば、遂に水面に積上り立派な足場となる。無駄の外交遂に無駄に終らずと知るべし。

世間相
田中比左良
家庭圓滿
あきらめ
『お前は、もう少し鼻が高いと申分のない美人だがナ』
『お氣の毒さまね。けれど、御註文通りだつたら、もつといゝ處へ嫁付いてゐるワ』
『おれも左樣思つてゐるから、苦情はないよ』
『それぢや、何でそんな事をおつしやるの』
『單に感想さ』
『私のも左樣よ。今更仕方がないワ』

嬉しい噓

良人が旅行するので、細君はトランクへ手廻りの品々を入れてゐる。

『何だい？　それは？』

『私の寫眞よ』

『さうかい、用意周到だね』

『一番下へ入れて置きますわ』

しかし、それからそれと、入れる物が殖えて、幾度も詰め直す中に、寫眞を入れ忘れてしまつて、良人が立つた後で氣がついた。

それでも、良人からの第一信には『お前の寫眞を時々出して見る。後二十日』とあつた。

細君は興味を催して『寫眞のこと、眞に〳〵有りがたく存じ上げまゐらせ候』と、尙ほ〳〵書きに認めて、良人が幾度噓をつくかを勘定し始めた。

妻君操縦

空巣覗ひ

外出好きの妻を矯正するために一計を案じた良人、妻が例の通り外出した間に、玄關脇に女持のハンケチを落しておく。客間には茶も菓出しておく。歸つて來た妻君、

『どなたがお出でなつたの?』

『以前一寸知り合つた女が偶然訪ねて來たのさ』

その次の日曜に又外出の留守の間に、女名刺を添へた菓子折を床の間におく。

『これは、どういふお方?』『これが、この前の日曜に來た女さ』

『何の用事で、さう度々お出でになるの、餘つ程何かでなければ、こんな使ひ物まで持つて來る筈があるもんですか』『迂散臭いね、近頃はホームの空巣覗もあるといふからな……』

釣つた魚

『寳石は、西洋人の俗惡な趣味を證明してゐる。唯高價いといふだけで貴いのさ。美術的の價値は些つともないんだよ』

『理窟は兎に角、買つて戴きたいワ』

『分らないね、お前は』

『貴郎は、結婚前には何でも買つてやると仰有つたぢやありませんか』

『あれはお前を釣る爲さ』

『釣られてあげたんですから買つて頂戴』

『釣つた魚に餌をやる馬鹿はないよ』

嫁と姑

同じ身嗜み

嫁いだ娘が滿艦飾に着飾つて里へお客に來た。

『マアその着物の柄の良いこと！ オヤまア大きなダイヤだネ』 お母さんは涙をこぼして喜んだ。一座は春のやうな陽氣さ、そこへ家の嫁が挨拶に出た。頗るシヤンで若い、身だしなみから仕度まで萬端整つてゐる。チラリと見たお母さんの心氣は急に一轉して、

『今は不景氣の絶頂ですから、餘り、いゝいゝ、なりふりばかりかまつてゐては困りますよ』

同じ身だしなみでも、娘ならば自慢で嫁ならば小言の種とは、お母さんの頭も餘ッ程都合よく出來てゐる。

外面如菩薩？

お嫁さんらしいのが、姑さんらしいお婆さんの手をとつて、シヤナリ／＼と椅子席へ案内して行く。これは劇場へ行くと折々見かける光景だ。嫁は如何にも優しい。姑は如何にも委せ切つてゐる。然し、これはホンの餘所行でなければよいが、家庭の日常は果してどうだらうと、そんな事迄考へさせられる程嫁と姑の間は六かしいのが天下の通り相場だ。

働く人

一、眞面目な働き人

口角泡を飛ばして、會社の仕事に就いて論じ合つても、それは單に仕事の上だ。濟んでしまへば光風霽月。

『オイ、どうだい』

『宜からう』

と相携へてカッフェへ行く。

二人とも、甲乙のない御面相で持てないから女給爭奪なんてこともない。小説の材料にはならないが、會社の仕事は、實は、斯ういふ連中が本氣でやつてゐるのだ。

二、意氣込み

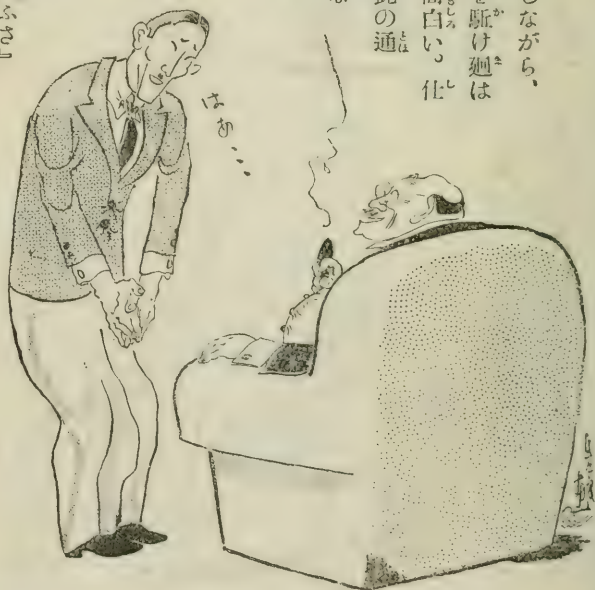
社長が、安樂椅子で葉卷を吹かしながら、

『俺を見給へ。五つも六つも會社を驅け廻はつてゐる。忙しければ忙しいほど面白い。仕事が俺の生命だ。働けば働くほど此の通り太つて、人相までが福德圓滿になる。人間は意氣込み一つさ』

と云ふ毎に社員は、

『はア』

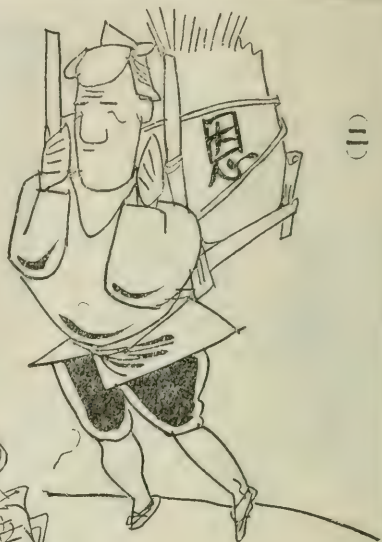
と恐れ入つてゐるが、腹の中では、

『そりやさうさ、僕等だつて、働くだけ金になるのなら、意氣込みが違ふさ』

今昔意地くらべ
（一）
昔の武士は、失敗つたときは直ちに腹をきつて責任を果したものだ。
處が今日では、女のやうに針箱を出して、
失敗のほころびの繕ひをするやうになつた。
和田邦坊
責任回避
失策

(二)
昔の人は、一旦受けた恩はどんなに重いものでも、恩はどこまでも恩として一生背負つて歩いたものだ。
處が、現代人は重い荷物はサツサと棄てゝ。自分のスタイルばかりを考へるやうになつた。
恩
恩
安固作

怠け者の空想

細木原青起

一

怠け者の男、道を歩きながら『此處に一萬圓の札束が落ちてゐて、警察に屆けると、報酬一割の一千圓が貰へるんだが……。オヤ拾つた〳〵、エイ畜生ツ、猫の死んだ奴を態々包んで捨ててやがる』

二

古道具屋で壺を買ひ、『ホホウ、色肌や燒工合を見ても確に天平時代の作だ。之れがたつた十五錢とは有難い。出る處に出し

あゝ幾ら安くとも三千圓だ』と恭々しく裏を返すと、はつきり『明治十三年作』と刻印。

三

歌舞伎座の前に來て『不景氣々々と云ひながら、特等十圓でも大入滿員か。俺は役者になつてもいゝ。

『馬鹿野郎！』と後から怒鳴られ、驚いて振返ると自動車の中に中村何右衛門が悠然と乘つてゐた。

四

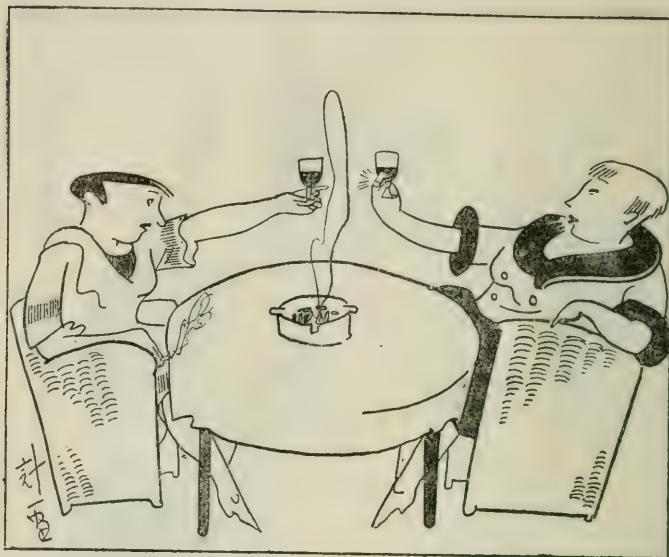
家を出る時蟇口に金五十錢入つて居たが、フト懷中に手を入れると『ヤヤツ、失敗つた。さては今、打つかつた奴が掏つたんだな。チエツ、矢張り夢見たいな事は考へずに、例へ五十錢でも眞劍に働いて儲けた方がいゝらしいテ』

彼等の哲學

須山計一

自然は酬いる

A『僕はいよ〱大學を出た。幸福と、希望と、名譽とが、君と別れた五年前の僕の總てだつた。だが今僕は一枚の卒業證書と、神經衰弱の藥とを持つて歸つて來た。僕は疲れてゐる。時に君は元氣だな。君の哲學は何といつたつけ』

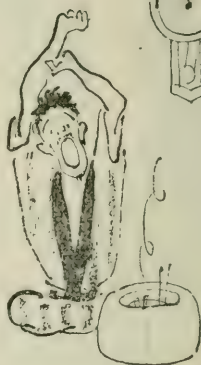
B『僕は何も知らない。たゞ、自然は人間の勞働に酬いることを忘れないといふことだけだ』

モダンガールに

モダンガールよ。君達は叫んだ。
『妾達は、男に、總ての自由と、總ての權利を奪はれてゐる。妾達はそれを取り戻さう！、少なくとも、それは現代女性としての使命だと思ふわ』

よろしい。そこで君達は、勇敢に大道を濶歩し、酒を飲み、煙草をふかし、ダンスにひたつてゐる。

そして君達は、勝利の乾盃に醉ふ。
だが、心の中でさゝやきはしないか？
『わたし達は、少し自由を取り戻しすぎたわネ』と――

川柳漫畫
谷脇素文
運勢を見てゐるうちに掏摸にあひ
（芝野浦人）
萬物の長といはれぬ時もあり
（段　三）
笑はれてゐるとはしらぬ馬鹿力
（亂蝶子）

冤罪を
まゝ着て今日も
事が済み
（信子）
十二時に
腹のへらない
なまけもの
（飴ン坊）
普請場で
薪を拾ふ
大旦那
（春雨）

花見から
歸れば家は
焼けてゐる
（劍花坊）
柳原
涙の痕や酒の汚染
（雉子郎）
嚴格に
過ぎて悲劇の
起る家
（劍花坊）

身代をこいつかつぶす緋縮緬
（紅太郎）
置きどころおらまし女房云つて出る
（古川柳）
學問をした百姓は落ちつかず
（濤明）

小咄漫畫
宮尾しげを
食べすぎ
宴會へ行つて、食べなくては損だと詰めこんだので、苦しくて、苦しくてたまらぬ、やつと歸途につくと、乞食
『もしお助け下されませ、實は昨日から何も食べず、ひもじくて堪りませぬ』と云へば、
『ア、それはうらやましい』

己惚
若い者大勢寄つて色んな話をしてゐるうち、
『どうだ今夜は蕎麥をたべようぢやないか』
『それはよい、何でも蕎麥をおごるなら、この中での色男におごらせようぢやないか』
と云へば、うぬぼれた男が頭を叩いて、
『それは迷惑だ』

意見

兄弟二人を呼んだ母親、

「兄は兎角人樣の持物を値ぶみするが惡い癖だ、又弟は洒落を場所もわきまへず云ふが惡い癖、二人とも氣をつけや」

と意見すれば、兄手を打つて「有難き御叱り身にしみます、昔より御意見五兩、堪忍十兩と申しますが、只今の御意見は安く見積つても三百兩が程は」

と云へば側から弟「兄さん三百とも、いけんの鐘か」

昭和四年四月十日印刷
昭和四年四月十五日發行

非賣品

修養全集
第六卷
滑稽諧謔教訓集

不許
複製

編纂兼發行者　野間清治
東京市本郷區駒込坂下町四十八番地

印刷者　渡邊一郎
東京市小石川區西古川町二十五番地

中外印刷株式會社

印刷所　常磐印刷所
東京市小石川區諏訪町五十六番地

發行所
東京市本郷區駒込坂下町四十八番地
大日本雄辯會講談社
振替口座東京三九三〇番
電話小石川(85)〇二二五、〇二二六、〇二二七、〇二六〇、一五一一、三五九六、五七九八、一七〇八、八四六五、〇一〇

村田製本所